鬼軍曹よ、永遠に！ ありがとう、山本小鉄さん!!

kamipro

紙のプロレス

MMA & PRO-WRESTLING MAG



enterbrain MOOK

2010

151

特別定価940yen

10th thanks! eb!



とにかく狂ってるっ!!（ヨダレ）
デビュー50周年記念ズンドコ大特集

猪木とは何か？ クレイジー編

小川直也
井上義啓
ユセフ・トルコ
猪木快守
永久電機の真実
玉ちゃんの変態座談会
マサ斎藤
青木真也
TRIPLE-P
澤田敦士
vs『週刊現代』の裏側

女子立ち技最強決定戦、2連覇！

19歳が格闘技界のセンターを奪取!!

マット界総選挙2010

RENA☆大当選!!

サンチアゴと歴史的死闘……!!
サムライの生き様、見たり！
三崎和雄

五味、青木、BJペン……
暴力柔術かく語りき！
ニック・ディアス

憧れのサスケに会える！
“飛ぶ教室”対談実現！
ザ・グレート・サスケ×ファイヤー原田

2010 No.151 CONTENTS
kamipro
表紙写真／吉場正和

©Essei Hara


迷わず読めよ、読めばわかるさ!

特集 猪木とは何か? クレイジー編

MMA & K-1

INOKI

kamipro Special

Columns



マット界に待望のニュースターが現われた。

その名はRENA。19歳の女子シュートボクサーだ。

スター誕生の舞台は8月29日、グランドプリンスホテル赤坂で行なわれたシュートボクシング女子世界トーナメント『GirlsS－cup 2010』。昨年シュートボクシング初の女子トーナメントとして行なわれた『GirlsS－cup 2009』に、今年は世界の強豪を加え世界女王決定戦として8人で争われた大会だ。

RENAはその前大会優勝者。今年は〝SB女子のエース〟として2連覇を半ば義務づけられ、大きなプレッシャーを背負いながらの闘いだったが、過酷なワンデートーナメントでその魅力を爆発させた。

1回戦の相手は〝格闘ジャンヌダルク〟渡辺久江。初代DEEP女子ライト級王者であり、04年にTBSで放映された「女子総合格闘技最強女王決定トーナメント」でも優勝をはたした、女子格闘技メジャー化の先駆者だ。

RENAはその渡辺をいきなり圧倒。ヒザ蹴りの連打で二度のダウンを奪ってのTKOで完勝し、文字どおり世代交代を達成すると、準決勝ではアメリカのケイト・マルチネス相手に身長差をものともせず攻め込み判定勝ち。決勝は同じシュートボクシングの高橋藍との対戦となった。

ワンデートーナメントということで、両者ともに3試合目。高橋は準決勝で延長戦まで行なっているなかでの闘い。それでも二人は1ラウンドから全力で相手を倒しにいった。

前に出ることしか知らない闘いは両者譲らず、本戦3ラウンドはドロー。延長戦に突入したが、これもまたドロー。そして運命の再延長戦、両者極限状態のなか、RENAと高橋はただひたすらにパンチ、キックを出し、ヒザ蹴りをボディに突き刺す。いつのまにか会場は総立ちだ。

そして最後まで両者一歩も引かぬままゴング。すべてを出しつくした闘いは、RENAのエースとしての気迫がほんの少しだけ高橋を上回り、判定勝ち。見事、公約どおり『GirlsS－cup』2連覇を達成した。

それにしても凄まじい闘いだった。赤いコスチュームのRENA、青いコスチュームの高橋藍。二人が己のすべてをぶつけ合うその姿は、80年代に一世を風靡したマット界史上最大のヒロイン、クラッシュギャルズを見るかのよう。

クラッシュギャルズは1984年8月25日、WWWA世界タッグ王座を奪取した試合をきっかけに大ブレイクしたが、この日のRENAは、そのときのクラッシュを彷彿とさせる鮮烈な輝きを放っていた。

また、男子の格闘技に置き換えるならば、2002年2月11日、代々木第二体育館で行なわれた『K－1 WORLD MAX』初の日本代表決定トーナメントで、魔裟斗が初優勝をはたしたときのような熱があった。

クラッシュと魔裟斗。どちらもマット界を代表し、マット界の枠を超えたスーパースター。その彼らがブレイクしたときと同質の熱情、新しいものが生まれるときのうねりのようなものがRENAから感じられたのだ。

断っておきたいのは、何も『GirlsS－cup』2連覇という実績をただ評価しているわけではないということ。「世界女王」といってもまだ女子格闘技というジャンル自体が発展途上であり、たとえば現在の完成された『K－1 WORLD MAX』優勝と同列に語ることはできないだろう。しかし、魔裟斗という存在が現われたことで、『K－1 WORLD MAX』が真の立ち技70キロ級世界最強を決める大会となっていったように、RENAという存在によって女子格闘技自体が真にメジャーとなる可能性があるということだ。

また、ただルックスがいいから、スターの要素を持っていると言っているのでもない。RENAの格闘技に対する一途な姿勢、試合中の表情、身体全体から発せられるエネルギーといったものが、持って生まれたルックスのよさを超越した輝きを放っているからこそのスター性だ。

『GirlsS－cup』に優勝し、チャンピオンベルトを腰に巻いたあと、「私が女子格闘技を背負っていきます」と宣言したRENA。彼女は今後、ジャンルを背負っていくだけでなく、クラッシュや魔裟斗のようなジャンルを超えた格闘家になる可能性すらおおいに持っている。

ただしフジテレビのゴールデンタイムで放映されたクラッシュの王座奪取、TBSで即日放送され深夜ながら好視聴率を記録した魔裟斗のK－1MAX日本のトーナメント初優勝と比べ、RENAの『GirlsS－cup』2連覇は地上波放送なし。スター誕生の目撃者は限られていることも確かだ。

しかし、それでも言いたい。『GirlsS－cup』で見せたRANAの輝きは、時代がそれを見逃さないだろう。

ジャンルを超えるスターは、世間にはある日突然現われる。

RENAまだ小さな希望でしかないかもしれないが、巨大な可能性を秘めた〝10年に一人の逸材〟。その光が世間に届いたとき、彼女は格闘技界の救世主となる。

2010年8月29日、RENA時代は間違いなく幕を開けたのだ。

クラッシュギャルズ以来のスーパーヒロイン
魔裟斗以来のジャンルを超えたスター誕生へ!

A時代到来!

文／堀江ガンツ　撮影／中原義史




RENA

入したが、これもまたドロー。そして運命の

同列に語ることはできないだろう。しかし、

違いなく幕を開けたのだ。

――RENA選手、昨日はおめでとうございます！



になってますけど（笑）。

――ハハハハ。でも、昨日はこの顔に

なったことに誇りを持てる一日だっ

RENA

女子立ち技最強決定戦『Girls S-cup』2連覇！
19歳の小さな王者が格闘技界に新風を巻き起こす!!

「立ち技だけやない女子格全部を背負いますよ」

格闘技界に新しい風が吹き荒れる！ 今号で巻頭を飾るRENAは8.29『Girls S-cup』で見事優勝を飾り、まさに格闘技界のセンターを強奪するような活躍を見せた。大会後「私が女子格を背負う!」と叫んだRENAだが、はたしてその心とは!? キュートすぎる笑顔に一部で"レナおじ"急増中!

聞き手／松下ミワ　撮影／吉場正和　試合写真／中原義史

――RENA選手、昨日はおめでとうございます！

RENA　ありがとうございます（笑）。

――激戦から一夜明けましたが、それにしても……凄い顔になってますねぇ。

RENA　ハハハハ。左側のほうが打たれたんですけど、右側のほうが腫れちゃって。

――あらら。それはまたどうしてですか？

RENA　昨日の夜、なんか鼻が気持ち悪いなと思っておもいっきり「フンッ！」てやったらムクムクって腫れあがって……。それで焦って「うわうわうわーっ！　鼻かんだらめっちゃ腫れてきた！」と先生に電話したら、「あかん！　試合後に鼻をかんだらあかんて、いつも言うてるやろ！」って怒られちゃいました。

――わかっているのにやっちゃった、と（笑）。

RENA　はい。昔言われたのは覚えてたんですけどね。試合後に鼻かんだり熱いお風呂に入ったりしちゃダメだって。あと大きい声を出したら、脳の液体？が下りてくるらしいんですよ。試合で頭を打たれてるから、ちっちゃい血管がいっぱい切れてて、大きい声出したり圧力をかけたら落ちてくるって。

――お、恐ろしいですねぇ……。その結果がいまの眼帯姿というわけですね。

RENA　ビックリしました！「えっ、何、何。やばいんちゃう？　死ねへんかな〜？」と思ってめっちゃ怖かったですね。結果、お岩さんみたいになってますけど（笑）。

――ハハハ。でも、昨日はこの顔になったことに誇りを持てる一日だったんじゃないですか？

RENA　やっぱり、一つ目のベルト（09年『Girls S-cup 2009』王座）と今回の二つ目のベルトとでは全然重さが違いますしね……（しみじみと）。いま考えたら一つ目のほうはアジアトーナメントだったのでまだそこまでじゃなかったんですけど、今回は世界戦でみんなめっちゃデカイ！

――凄い体格差でしたよね。

RENA　わかっていたとはいえビックリしました。

――それで1回戦の渡辺久江選手との試合は戦前からかなり注目されてました。でも、いざふたを開けてみるとRENA選手はやっぱり通過点としか考えてなかったような印象だったんですよ。

RENA　そうですね。そう考えてこのトーナメントに挑んでました。試合前まで渡辺選手とは激しい舌戦があったじゃないですか。それなのに「ここで負けたらかっこ悪いなぁ」とかそういう部分ではすっごい緊張してたんですけど、でも向こうのほう



『Girls S-cup』の大会翌日に行なわれた一夜明け会見で、RENAはなんと眼帯姿で登場。右目も赤く腫れ上がり、前日の試合がいかに激闘だったかを物語っていた。

がめっちゃ緊張してたんですよ。それが凄い伝わってきたんです。「あ、緊張してるんや」って。

――へえ〜。でも、相手の緊張がわかるなんて、けっこう余裕があったんですね。

RENA 最近の試合はけっこう気持ち的に落ち着いてるんですよ。昔はもう何も覚えてなくて、ただひたすらガムシャラに前に出るという感じだったんですけど、いまはだいぶ考えられるようになりましたね。いや、渡辺選手はやっぱり強かったですよ。でも、最前線にいる私が負けるわけにはいかないんです。

――そして2回戦はまた大きい選手と闘ってましたね。

RENA おっきかった（笑）。ケイト（・マルチネス）とは二回りぐらい違ったんじゃないかな。1回戦のサーサ（・ソー・アリー）との試合を観てビックリしましたもん。「サーサ、ボッコボコやん！」と思って。これはヤバいなあ〜と思いました。

――ビックリしたのは、RENA選手は臆することなくマルチネスの懐に飛び込むように闘ったことですよ。そしてあんな大きな相手から見事にダウンを奪って。

RENA もう、ちっちゃいから中に入るしかないんですよ。ホント、死ぬ気で突っ込みました！ でも、なんだろ。普段から男子選手と練習してるんで、それほどパワーは感じなかったです。先生も「あれは大丈夫。こうやって、こうすんねん」って細かく教えてくれたんで。

――でも、ダメージは相当ありましたよね？ 判定まで持つれ込んだわ

「もう左手折れてもええわー」って思って試合してました（笑）



けですし。

RENA ダメージは少し……いやけっこうありました（笑）。マルチネスのローキックがめっちゃ硬いんですよ。カットしたらスネが腫れるわ、内腿も蹴られて腫れるわで。避けにくいし。どんだけ脚長いねんって。触っただけでも痛かった。いまでも痛いわ（笑）。

――なかなか残酷なトーナメントだったわけですね（笑）。

RENA それとはべつにじつは試合前に左手をやっちゃってたんです。

――え!? まさか骨折ですか？

RENA いや、折れてはなかったんですけどね。前にやった箇所を練習でまた痛めてしまって。凄く腫れて「うわー、どうしよう」って。だからやっぱりガツンとは殴れなかったですよ。左では。

――でも、昨日はめっちゃ殴ってましたよね……。

RENA 「もう折れてもええわー」と思って。フフフ……。

――RENA選手、怖いです！

RENA 「腕の一本ぐらいええわー」と思いましたよ、ホンマに（キッパリ）。そのぐらいの気持ちで殴ったんですけど、やっぱり100パーセントの力では殴れないもんですねぇ。また今度殴ります。

――まさに死闘！ それでいよいよ決勝ですが、ただ決勝進出された高橋（藍）選手もかなりダメージがありました。高橋選手が決勝に上がってきたとき、どう思われました？

RENA 正直ちょっと予想外でしたよ。私の予想ではクリスティーナが上がってくると思ってたんでね。

それかオランダやろうなって。

――オランダって（笑）。サマンタ選手のことですね。

RENA でも藍ちゃんとV（一）さんが二人に勝って準決勝に上がったんで、けっこうおもしろかったんじゃないですか？

――その二人が削り合って、RENA選手と高橋選手の決勝戦はもっと凄いことになりました。再延長戦で10分間のあいだずっと殴り合っていたじゃないですか。

RENA もうホンマに殴り合いですよね。アハハハハ！

――いや、笑いごとじゃないですよ！ ああいう白熱した試合をしているときって、いったいどんなことを考えてるんですか？

RENA もう意地とプライドですよ。あっちもRENAみたいな年下には負けたくないじゃないですか。でもやっぱり最後は私の意地が勝ったという感じですかね。負けれませんでしたもん。

――聞くところによると、その高橋選手とはけっこう仲良しだとか。

RENA う〜ん……（複雑な表情で）。基本、私は誰とでも仲良くして、試合は試合っていう感覚なんですけどね。でも、最初の頃に比べたらだいぶ藍ちゃんとのそういう意味での距離は少し遠くなっちゃったかな。

――お互い意識している、と。

RENA いや、私はあんまし意識してなかったんですけど。ん〜、どうなんだろ。藍ちゃんはけっこうあるのかなあ。向こうからあんまりしゃべりかけることもないんで。……でも、なんかちょっとうれしかったん

一番キツかったこと？ 皆さんの期待を裏切ることですよ

ですよね。藍ちゃんが決勝に上がってきてくれて。

――と言いますと？

RENA いままで一人で踏んばってたというか、一人でシュートボクシングを背負ってる感覚だったから、なんか戦友ができたというか。一緒にシュートボクシングを盛り上げる仲間として、凄く認める部分はありますね。見違えるように強くなってたし。って、私が言うことじゃないんですけどね（笑）。

――ただ、あの試合って延長2ラウンドまでいったじゃないですか。「もう、いいかげんにしてくれ」と思わなかったですか？

RENA 思いますよ！（キッパリ）。でも、私は「絶対、再延長や」と思ったんですよ。本戦も延長1ラウンドも自分では勝ったと思ったんですけど、ジャッジがどこを評価してるかは判定が出てみないとわからないですから。でも再延長になったときにセコンドに戻ったら、みんなに「気持ちで負けんなよ！」「おまえ勝てよ！」とかって、凄い熱くなってたんですよ。仲間愛というか、絶対負けれないと思いました。私のセコンド見てたらめっちゃ楽しいですよ、熱くて（笑）。

――なるほど（笑）。それにしてもRENA選手は冷静ですよね。あんだけの試合をしていながら、ラウンドごとの勝った負けたの判断を冷静にしているというか。

RENA でも、冷静さも大事にしたいんですけど、いくときはもっとバンバンいかないとは思いますね。いまはまだ制御してる部分があるんで。

――そうなんですか？

RENA パワーに押されてバテるのが怖くって守りに入ってしまったんですよね。だから、あんまりポイント差がつかなかったのかもしれないです。昔は、何も考えずに飛ばしてバテてハァハァ言ってたんですけど、チャンピオンがそれをしてたらかっこ悪いじゃないですか。だからもっとシャープに頭を使って闘おうっていうのがあるんですよね。

――その闘い方の切り替えはいつ頃からだったんですか？

RENA 去年、チャンピオンになってからかなあ。やっぱり試合内容を問われるじゃないですか。そういう部分でちょっとビビったりはしますね。

――あの、試合後にリング上で涙ながらに「プレッシャーが凄かったんです」ということをお話しされてましたけど……。

RENA （さえぎって）もうプレッシャーも凄いし、練習キツイし、ホントにこれ報われんかったらヤバイで！ って。これで優勝逃したら悲しすぎるわと思ってたんで。



今年の『Girls S-cup』では、1回戦から渡辺久江戦という注目すべき対戦となったが、結果はRENAが意地のKO勝利。「女子格を背負う」というRENAの言葉は今大会の試合から痛いくらいに感じられた。

――それもやはり1年前からじりじりと湧いてきた恐怖心がホントにピークだったというか。

RENA もうホントに……。「これで負けたらしゃーないわ」って思えるぐらい練習しましたからね。もうこれで負けたら、相手をたたえようって。そのくらいキツかったですよ。

――何が一番キツかったですか？

RENA やっぱり、皆さんの期待を裏切るのが凄く怖いですよね。

――それは負けることに対してですか？ それともいい試合をしないと、という？

RENA 両方ですよ。勝ってなおかついい試合しないとダメなんで。だって、普通の人は勝ったら「おお、勝った。よかったね」ってほめられるじゃないですか。でも、いまのRENAはただ勝ってもあんまりほめられないですから。「ここはこうせなあかんよ。もっといかなあかん」って。やっぱりいろいろやらなあかんことが増えてるというか。

――周りもどんどん本気になってきて、この程度じゃほめられないぞ、と。

RENA 「頑張ったのに……」みたいなね。

――ハハハハ！ 「勝っても負けてもいい試合をしないといけない」というのは、どのくらいから思い始めたんですか？

RENA う～ん。やっぱり、それもこいつ（一つ目のベルトを触りながら）を獲るときじゃないですか。

――09年王者のベルトはすべてのターニングポイントになってますね。

RENA だって、やっぱりエースが点取りゲームやってちゃダメだと思うんですよ。盛り上がらないし。だから、緒形（健一）さんとか宍戸（大樹）さんとか、シュートボクシングのエースの人たちはやっぱり凄いプレッシャーだと思いますね。倒してあたりまえだと思われてるんで。

――そういうSB魂がRENA選手にも染みついてるんですね。

RENA でもですね、そういう責任に押し潰されそうになってイッライラしてしまうんですよ、試合前なんかは。

――イラッと？（笑）。たとえばどういう？

RENA 何もないけどイライラしてます。いつもだったら怒らないことにも、凄く怒ってしまいます。それもプレッシャーを感じてるからかもしれないですけど、ちょっとしたことでも、たとえば同じことを何回も聞き直されたりとかしたら「だ～か～ら～！（怒）」って八つ当たりしてしまうんですよ。

――ドスが効いてますねえ。

RENA 「お母さ～ん」って呼んでも、返事がないんですよ。だから「お母さ～ん！」ってめっちゃ叫んで。「何い？」「何回も呼んでるやんか！」「聞こえへんねん！」「じゃあ、もうええわ！」とか言ってケンカしたりとか、いろいろありましたねえ。

――ハハハハ！ お母さんも肝が据わってますね。

RENA やっぱり娘4人もいてたら、そうなるんじゃないですかね。

――じゃあ、試合終わったらお母さんも八つ当たりがなくなってホッとしたでしょうね。

RENA ホントですね（笑）。でも、ホントイライラしてたなあ。試合前はホントしんどかったんですよ。それはなんやろな、試合の決勝戦の前にも「これやったら休み」とか「これはめっちゃしんどいけどこれ越えたら優勝」って自分で言い聞かせながらやるんですけどね。「しんどいぞー、しんどいぞー」「でもこれが最後や、最後や」って。

――ちなみに、リング上のマイクはもう言うことを決めてたんですか？

RENA だいたいですけどね。とりあえず歴史が詰まったSBレディースのベルトがほしいんで。私、ホントは48キロとかでやりたいんですけど、女子は選手層の問題で階級にこだわりすぎたら対戦相手がいなくなってしまうんで……。

――じゃあ、その話はあらためてシーザー会長に？

RENA いやもうリング上だけですよ。そんなん私から直接なんか言えないです！ ああいう場を借りて

しか言えないので、もう突撃です！（笑）。

――実際は女子のベルトはどうなりそうですか？

RENA ……対戦相手がどうなるのかなあ～って感じですよねえ。

――リング上では「私が女子格を背負います」という発言もありましたけど、やはり女子はタイトルを作るにしても、まずは競技人口が少ないという問題がありそうですよね。

RENA いま少しずつ増えてきてるんですけどね。及川道場のジュニアにも中3で強くていい選手がいてるんですよ。でもその子はいまもタレント活動してる子なんで、将来的にはアイドルというか、芸能人になりたいらしいんですけど（笑）。まぁいろいろ育ってきてるので未来は明るいですよ。

――その点、RENA選手はどうなんですか？

RENA 私にアイドルとか芸能人は無理ですよお。今回もテレビ番組で密着取材をしていただいてたんですけど、毎日テレビカメラが一緒でプレッシャーに負けそうになりました。

――ああ、いまTBSのドキュメンタリー番組『バース・デイ』で密着取材されてるんですよね。

RENA 練習中もずーっとカメラが回ってるんですよ。1週間切ってたので相当つらかったです（涙）。

――イライラしてる時期に。

RENA ん～やっぱ密着はキツイ（笑）。気を休めることができないし、ずっと緊張してますからね。カメラをプチって切った瞬間にウダーってなりますから（笑）。だからね、本当の私を撮るなら切ったふりしててくれたほうがいいかもしれません。

――カメラマンも根気がいりますね（笑）。でもやっぱり、女子格を背負うというからには、そういう露出も必要になってきますよね。



いまはRENAの時代やから できるだけ出させていただきたい

RENA いろんなところに出たら、みんなに知っていただけるので凄い必要なことだと思います。

――本音はどうなんですか？

RENA やっぱりメディアにはいろいろ出たいですよ。時代は変わるし、RENAが必要なくなる時代はきますけど、いまはRENAの時代やからできるだけ出させていただきたいとは思ってます（笑）。シュートボクシングの名前も広めたいし。

――たとえば男子の大会だと試合自体が地上波で放送されたり、年末にも大きな大会がありますよね。

RENA そうですねえ。いずれは地上波で試合したいですね。

――年末の『Dynamite!!』なんかはある意味お祭りの大会なんで、RENA選手にも出場してほしいという声も急増中みたいなんですよ。

RENA へえ～、そうなんですか。凄くおもしろいけど、女子だけというのはまだ無理かもしれませんが、男子のなかに1～2試合ぐらい組んでいただけるのであれば視聴率の獲れる試合をする自信はありますよ。

森谷広報 （割り込んで）それはどこに出たいとかそういう話じゃないよね？（冷たく）。

RENA 違いますよ！ そういう意味じゃないです。単純に地上波で試合をしてみたいっていうことですよ（笑）。

森谷広報 なんか紛らわしい発言だなあ。

RENA 紛らわしくないですよ。シーザー会長が「行け」と言うなら、私はどこでも行って試合をしますけど、シュートボクシングが一番です。

――ワハハハハ！ 「刺しに行け」と言われたら行きますか！

RENA もちろん行きますよ！ 刺しにじゃなくて殴りに（笑）。

――そういう動きはやはりRENA選手が先陣を切って出ていくと、女子格の風景が変わっていいんじゃないと思うんですよ。

RENA でも、正直自分ではまだそこまで考えてないです。女子格もちょっと前に比べたら凄く盛り上がってると思いますけど、もっともっと頑張って実力をつけてからでないと。男子とはまた違った魅力があるし、女子にも注目してほしいですからね。

――もっと観てほしい、と。

RENA 頑張ってるのは女子も男子も変わらないと思うんですよ。だから、いっぺん女子にも注目してくださいよ、みたいなね。

――女子の注目度がまだそこまでいってないという意味でいうと、前号の『kamipro』はRENA選手が北斗晶さんに次ぐ二人目の女性表紙として撮らせていただいたわけですけど……、聞くところによると春麗のコスプレには相当抵抗があったという話ですよね。正直、怒ってまし

た……よねえ。

RENA ……イライラしてたから

ですかね（静かに）。あのー、なんや

マにありがたいなと思ってますし感

謝もしてます。ただ本物志向なんで

す。

RENA そう、でもあれ身内から

はけっこう非難されたんですよ……。

「あんなんしたら、あかんわ」って。や

界もいろんな考えの人がいて成り立

ってる世界だと思うので。好きでや

ってるならぜひやってくださいとい

上がってくんのやろって3人分対策

を考えるじゃないですか。でも、ワン

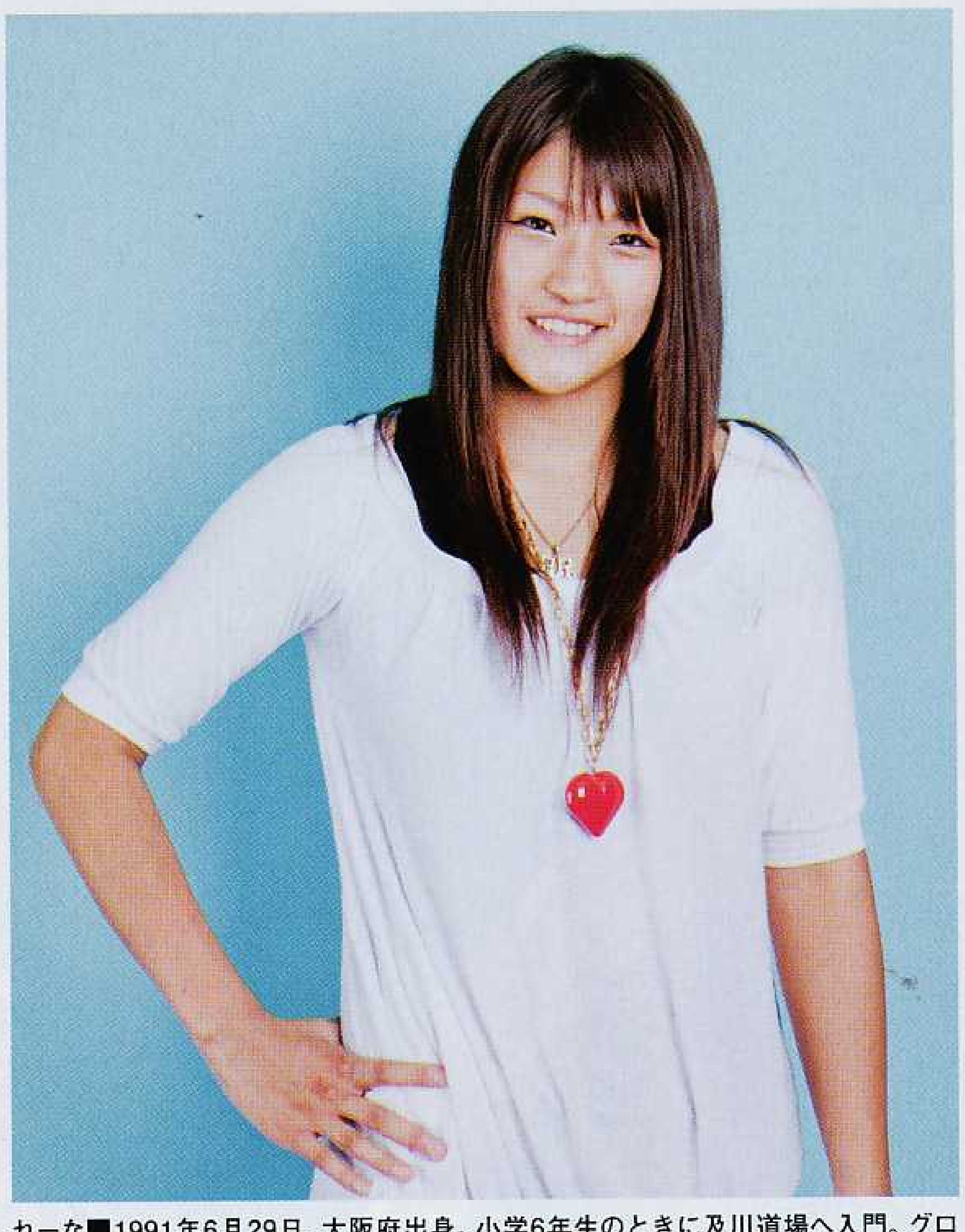
マッチは一人のことを考えたらいい

よ（笑）
森谷広報　なんか紛らわしい発言だ
闘のコスプレには相当抵抗があった
という話ですよね。正直、怒ってまし

シュートボクシングのベルトも含めて5～6本は獲りたいんです

た……よねえ。
RENA　……イライラしてたからですかね（静かに）。あのー、なんやろな、そういう春麗自体がわからなくて。でも話だけはどんどん進んじゃっててみたいな。だから「そんなん無理無理、無理無理無理」みたいな感じでしたね。
――それまでいろんなコスプレのオファーがあっても、すべて断ってたらしいですね。
RENA　はい。私は聞いてないけど、森谷さんのほうにけっこう来てるとかあるんじゃないですかね。
――そういうのを全部断ってたというのはどんな思いからですか？
RENA　やっぱり私は実力主義の本物志向なんですよ。コスプレしてたら「おまえも色モンかい」と思われるのが凄いイヤなんです。同じトップ選手から「こいつ何してんねん！」と思われるのが凄いイヤで。もうそれも含めて「この試合に勝って帳消しになるやろ」という思いもありました。
――『kamipro』のせいでそんな思いを……。もしかして、これもプレッシャーの一つだったんですか？
RENA　そうそうそう（笑）。
――すいませんでした！　イライラしてる試合前に「ふざけんな！」って感じですよねえ。
RENA　フフフ……。でも、表紙にしていただいたんは、ねえ。ホンマにありがたいなと思ってますし感謝もしてます。ただ本物志向なんです。
――じゃあ、今後こういうオファーが来ても……？
RENA　シャットアウト（笑）！　最初で最後でお願いします。
――ただ、テレビや雑誌の露出が増えると、こういうパターンも求められたりしてきますよね。
RENA　コスプレはなくても、水着とかはありそうですよねえ。
――そういえば以前、写真週刊誌『フライデー』で水着特集に出られてましたね。
RENA　そう、でもあれ身内からはけっこう非難されたんですよ……。「あんなんしたら、あかんわ」って。やっぱり身近な人はそういう気持ちやったみたいで。「こんなんしてほしくなかった」とか言われて。それに、最初に言われてた写真と違う写真を使われてたりしたので、ちょっと拒否反応が……。
――でも女子格闘家のなかではパフォーマンスとしてコスプレだったり露出の多い格好をして話題を作っている選手もいらっしゃいますよね？　それに対してはどう思いますか？
RENA　それはコスプレを売りにしてる方ですか？
――売りにしてるというか、そうやって盛り上げようとしているというか。
RENA　本人がイヤじゃなければ、いいんじゃないですか？　格闘技業界もいろんな考えの人がいて成り立ってる世界だと思うので。好きでやってるならぜひやってくださいという感じですよね。いろんなファンの方々のために。
――考え方としては理解はできるというわけですね。
RENA　やっぱりいま格闘技という枠の中だけだと規模がちっちゃいじゃないですか。いろんな方に知ってもらおうと思ったら、白演乙さんとかもアキバ系のファンとかをこっちの業界に引き込んでるじゃないですか。いろんな層を取り込むことも大事だと思うので。まあ、そうやって集まってくださったファンに「あの子、強くない？」ってRENAに興味を持ってもらうみたいな（笑）。
――でも難しいですよね。そこのファンサービスとリング上での闘いとの兼ね合いが。
RENA　でも私はもう用意された相手を、目の前にいる相手をぶっ倒すということだけですよ。それが私の一番のパフォーマンスですね。
――そうなってくるとやはり3連覇に期待がかかりますね。プレッシャーという意味では、また重くのしかかってくるんじゃないですか？
RENA　毎年毎年一日3試合もやっとったらアホにならないかな（笑）。男子の『S−cup』は2年に一度なんですけど女子は毎年ですからね。
――そのへんの苦情は森谷さんにお願いします。
RENA　そのあいだもシリーズ戦があるし。トーナメントは誰が勝ち上がってくんのやろって3人分対策を考えるじゃないですか。でも、ワンマッチは一人のことを考えたらいいんですけど、不思議なものでそれはそれで集中しすぎるからシンドインですよね。それがうまくできないと凄くイライラするし、トーナメントはトーナメントでイライラするし。
イライラしてばっかですね、ストレスを溜める器が小さいんかな。
――結局、両方苦痛なんですね（笑）。
RENA　いつも悩んでます。でも、私はシュートボクシングのベルトも含めて5～6本はベルトを獲りたいと思ってるんですよ。「シュートボクシングの選手としてよそに乗り込んでこんだけベルト獲ってきたで！」というのをやりたいんです。
――ああ、いいですね。
RENA　まあその前にもっと強くなってシュートボクシングを代表できる選手にならないと。だから3連覇も必至ですね。
――おお～、女子格のリーダーとしてこれからも期待しています！　でも……『kamipro』への不信感はまだ解消されてないのでしょうか？
RENA　不信感？　不信感はないですよ、べつに（笑）。
――いや、春麗でRENA選手をそれだけ苦しめたんで、大丈夫かな、と。
RENA　いやいや大丈夫です（笑）。それに、今号も表紙にしてもらえるって聞きましたしね！　こちらこそよろしくお願いします（ニヤリ）。
――ワハハハハ！　そういうことですか。RENA選手、さすがです（笑）。

【10年7月30日／都内・シュートボクシング事務所にて収録】


れーな■1991年6月29日、大阪府出身。小学6年生のときに及川道場へ入門。グローブ空手の大会で実績を積み、07年に『クボチューン・レーナM15』のリングネームでJ-GIRLSでプロデビュー。09年に『Girls S-cup』で優勝。今年の同イベントでもベルトをさらい、見事2連覇達成！ 160cm、52kg。

――『オール讀物』（文藝春秋）9月号に寄稿されたノンフィクション、『赤い水着、青い水着』～クラッシュ・

す。

――僕も「こんなにいい選手がいたんだ」ってこの大会で知ったくらい

か？

ャルズ伝説

プロレ
それ
うか。
った。



語ろう! マット界史上最大のヒロイン

クラッシュギャ

語り手

柳澤健

RENAを知るために クラッシュを知れ!

なぜ10代の女の子たちは女子プロレスに熱狂したのか?

80年代半ば、日本中の女子中高生を熱狂させたクラッシュギャルズ。空前絶後の女子プロレスブームを作りあげた、当時の長与千種とライオネス飛鳥の輝きとはなんだったのか? それを知ることが現在のスーパーヒロイン候補RENAを知るヒントになるのではないだろうか。そこで女子プロレスにも造詣が深い柳澤健氏にクラッシュとRENAについて語ってもらった。

聞き手/堀江ガンツ　撮影/中原義史　構成/佐藤篤(THE PEHLWANS)

――『オール讀物』(文藝春秋)9月号に寄稿されたノンフィクション、「『赤い水着、青い水着』~クラッシュ・ギャルズが輝いた時代~」を読ませていただきました!

柳澤　ありがとうございます。かつての全日本女子プロレスが好きだったガンツさんにとってはおもしろかったでしょ?(笑)。

――非常におもしろかったですね。

柳澤　あなたに「つまらない」って言われたら、どうしようかと思いましたよ(笑)。

――とくに、二人の生い立ちからクラッシュギャルズが誕生するまでの話に関しては、僕も知らないことがたくさんありましたので。

柳澤　本当ですか? あなたが知らなければ、みんなも知らないでしょう(笑)。

――勉強させていただきました(笑)。ということで、今回どうしてクラッシュについてのお話をあらためて柳澤さんにおうかがいすることになったかというと、8月29日に『Girls S-cup』というシュートボクシングの女子大会が行なわれて、RENAという選手が2連覇を達成したんですよ。

柳澤　先月号の表紙で春麗のコスプレをした、かわいい子ですね。

――そうです(笑)。で、その大会が本当に素晴らしくてですね、決勝戦ではシュートボクシング同門対決になりまして、再延長戦に突入する大激戦の末に、RENA選手が高橋藍選手を下して優勝したんですよ。

柳澤　RENA選手は知ってますけど、高橋選手の名前は初めて聞きます。

――僕も「こんなにいい選手がいたんだ」ってこの大会で知ったくらいで、だからこそ世間的にはノーマークだった高橋選手が決勝まで進んだのもまた劇的だったんですよね。

柳澤　なるほど。ということは、高橋選手もRENA選手と同じくその大会で一躍注目を浴びたわけですね。

――そうなんですよ。で、これはたまたまなんですが、RENA選手は赤を基調としたコスチュームで、高橋選手は青を基調としたコスチュームだったんですね。つまり、これは〝クラッシュ対決〟だろう、と(笑)。

柳澤　凄いですね(笑)。ちなみに最初に「RENA vs 高橋藍はクラッシュ対決だ!」って言いだしたのは誰なんですか?

――それは僕です(笑)。

柳澤　やっぱり(笑)。

――RENA選手はまだ19歳なんですが、長与千種がライオネス飛鳥とクラッシュギャルズを結成して、WWWA世界タッグ王座を獲得、世間的にも大ブレイクしたのが19歳のときだったんですよ。

柳澤　つまり、クラッシュを組んだときのようなエネルギーと輝きが、RENA選手と高橋選手の試合にはあった、ということなんですね。

――つまり、単にRENA選手が2連覇をしたということだけではなくて、RENA選手のようなエネルギーと輝きを持った選手が世に出てきたというのは、これはマット界にとって10年、20年に一度あるかないかのことではないか、と。

柳澤　そうなんだ。クラッシュが誕



語る!クラッシュギャルズ伝説

生したときもそうでしたよね。

——そこで、僕が「クラッシュ人気の再来だ!」と騒いだところで読者の方々に伝わらないなと思っていた矢先に、ちょうどタイミング良く、クラッシュについてよくわかる本が出たということで、柳澤さんにご登場いただいたんですよ(笑)。

柳澤 クラッシュと女子プロレスがこれほどよくわかるものはないと思います(笑)。

——そもそも柳澤さんは、当時のクラッシュに魅力を感じていて書かれたのですか?

柳澤 私はあなたみたいな変態じゃないから(笑)、クラッシュが現役の頃から中高生に混じって夢中になって観てたわけではないんですよ。

——つまり、取材をするようになってからクラッシュに興味を持たれたと?

柳澤 そうです。私の興味というのは、プロレスという仕事に対して彼女らがどういうスタンスで臨んで、どのようなことをやったか、というところにあるんです。それでいろいろ話を聞いていったときに、ライオネス飛鳥という人間はやっぱり強くて立派な人間なんですよ。そして長与千種という人間はつらい子ども時代を送って、多くの言葉を持っていた。

——さらに長与千種が凄いのは、19歳という若さでそれが爆発したことだ、と。

柳澤 長与千種は天才です。で、RENA選手に無理矢理くっつけるわけじゃないけど、ガンツさんがそれだけ肩入れする以上、RENA選手にもそれだけのオーラがあったんでしょう。『kamipro』が彼女にコスプレをさせて表紙にしたのも爆発する前でしょ? 爆発したあとに注目するのは簡単なんだけど、する前に光を当てるのは目利きじゃないと無理。あとになってから「凄い試合だった!」と報道するのは、どんなバカでもできること。そうなる前に光を当てることが大事であって、それこそが編集者だと思う。ということは『kamipro』は偉かったね、ということです。

——ありがとうございます(笑)。で、クラッシュ伝説の始まりというのは、先ほどの話にも出た1984年8月25日にWWWA世界タッグ王座を獲得したときですよね。さらに、ちょうどこの直前でシングル『炎の聖書』をリリースした、と。

柳澤 レコードデビューは王座獲得の4日前ですからね。WWWA世界タッグ王座獲得は既定路線だったでしょう。

——このときにはコアのファンというか、最初からクラッシュを好きになっていたファンはもう爆発しているんですよね。

柳澤 そうでしょうね。コアな人たちが爆発してるから「これはいける!」とレコード会社の人たちはレコードを出すし、フジテレビもゴールデンタイムに持ってくるわけですよ。そして、WWWA挑戦ロードが始まったんですよね。

——あのときの二人から出ている魅力、躍動感というのは、そのようなクリエイティブな仕事をしている人たちから見ても、「こいつらは来るぞ!」っていうのが直感的にわかったんでしょうね。

柳澤 でも、全日本女子プロレスはそこまで彼女らを上げるのに7ヵ月もかかってるんです。つまり、長与と飛鳥が1984年1月4日に後楽園ホールで全日本シングル王座を賭けて闘ってから、同年8月25日にクラッシュとしてブレイクするまでにはそれだけの時間がかかった。だから全女のフロントにそんなに鋭い目があるわけではなかったんですよ。たぶんこのときは、デビル雅美さんのような先輩レスラーや、周りのコアなファンの方が先に気がついていたんでしょうね。彼女たちにとっては、この7ヵ月間が一番おもしろかったんだろうと、私は思うんですよ。しかも、長与と飛鳥が全日本シングル王座戦で闘ったときというのは、長与がプロレスを辞めようと思っていたときで、最後に一回だけ〝長与千種のプロレスをやりたい〟ということで試合前夜に飛鳥に話をして、ちゃんと当てて、ちゃんと痛い試合をやりたい、と申し出た。



会場の雰囲気を一気に明るくする入場シーンでの笑顔と、リングに上がったあと相手を射抜くような鋭い眼差し。かつての長与千種がそうであったように、表情一つで観客を惹きつける天性の能力をRENAは持っている。

長与と飛鳥がクラッシュを組んだときの輝きとエネルギーがRENAと高橋藍にあった

——結果的には、この試合がスイングして、全女のフロントが二人にペアを組むよう命じたんですよね。

柳澤 ええ。クラッシュというのは、男子プロレスのテイストをたくさん入れて、それが女子プロレスファンとってに新鮮だったっていうところもあると思うんですけど、最初から長与にとってこの世界は演劇的なんですよ。彼女にとってはすべてが役割であって、その役割をどのように演じるかが人生の勝負だったんじゃないかな。競艇選手だった父親のもとで育てられた長与にとっては、人生は演劇であり、ギャンブルだった。

——子どもの頃から男として育てられたんですよね。

柳澤 「人生は勝負だ」という父親のもとで育てられて、自分が女なのか男なのか、アイデンティティというのもよくわからないままに弟が生まれると、跡継ぎ息子だと両親からちやほやされ、自分は無視される。普通なら理不尽だなって思いますよ。

——父親は自分の子どもを競艇選手にさせたかったから、女の子である千種も〝男〟として育てていたのが、弟が生まれたことで、家族のなかで自分が存在する意味がなくなったんですよね。

柳澤 そう。中学のときに入ったソフトボール部では、中性的な長与は後輩の女の子に熱烈に愛された。そういった経験を経て、「自分はなんで愛されているのか?」という理由が、長与は凄くわかっていたんだと思うんですよ。長与千種の男でもない女でもない部分が、女でしかない後輩たちからすれば凄く自由に見えるという構造です。だけど、後輩たちは長与のことを理解しようと思っているわけではなくて、ただ憧れのオブジェとして崇拝する。ここに深いものがあると思うんですよね。

——若い頃の長与千種の魅力として、中性的な部分がありながらも、じつは女の子としてかわいいんですよね。

柳澤 そう、かわいいんだよね。その

かわいさは多分に演出されたものではあると思うけど。
——それなのに、そのルックスの良さを男に向けて女を武器にしている感じがまったくない。
柳澤　女の子にとっては最高じゃないですか（笑）。
——で、RENA選手もじつはこのタイプだと思うんですよ。凄くルックスがいいんだけど、女の子にも好かれる、憧れられるムードを持っているというか。
柳澤　だから今後、RENA選手が試合をするとき、観客席に女性ファンがどんどん増えていって、ガンツさんみたいな男性ファンに向かって「帰れ！」と言うようになれば本物だと思うし、そこまでいってほしいよね（笑）。しかも、それがシュートボクシングから発生したところがおもしろいじゃないですか。ちなみに、RENA選手に女の子のファンはいるんですか？
——現時点では、それほど多いわけじゃないですけど、女の子のファンがつく要素は多分にあると思いますね。あとRENA選手に関して言えば、それこそコスプレや水着撮影でメディアに出るのを嫌がったりとか、凄く格闘技、シュートボクシングというものにストイックなんですよね。有名になりたいとか、スターになりたいということより、格闘技に取り組む克己心のほうが大きく上回っているのが見える。そこが魅力的なんだと思うんですよ。で、それって国民的スターになっていた頃のクラッシュもそうでしたよね？


女子中高生を中心に、そんじょそこらのアイドルをはるかに凌駕する人気を誇ったクラッシュ。しかし、どれだけ人気が出て芸能の仕事が増えようとも、リングでの闘いを最優先に考えていたその姿が魅力的だった。

柳澤　そうそう。クラッシュが大ブームになって、それこそそんじょそこらのアイドルよりはるかに人気があった時代のことを聞くと、長与も飛鳥も「芸能の仕事が忙しくて、練習できないのがつらかった」と言ってるんですよ。あの当時、彼女らは年間200試合くらいやっていたから、練習ができないと息も上がるし、いつも同じような試合しかできない。それが彼女らにとっては凄くつらいわけですよ。どうしてかといえば、自分たちはプロなんだから、リング上では新しい何かを見せていかないといけないという思いが、二人にはあるからなんですよ。
——スターになること、お金を稼ぐこと以上に、リングで自分たちの試合を見せることが最上位にあるんですよね。
柳澤　彼女らにとっては、プロレスのほうが100倍大事なんです。お金はもちろん芸能のほうから入ってくるんだけど、二人はプロレスラーであることの誇りを持っている。このリング上で何かをやって、観ている人の心を揺さぶらせてこそ私たちじゃないかって。
——ある意味、“プロレスしかない”人たちであり、その気持ちの迫力が観る者にも伝わっていた。
柳澤　だから、もしクラッシュがいなかったら、いや、長与千種がいなかったら、女子プロレスはとっくの昔に終わっていたと僕は思います。それは猪木さんがいなかったら日本のプロレスが終わっていたのと同じことですよね。もし猪木さんがいなかったら、プロレスは外国と同じように1970年で終わってたと思うんですよ。だって、アメリカ以外はみんな衰退しているから。日本がそうならなかったのは、猪木さんがいたからだと思う。そういう意味で、猪木さんと長与千種はやっぱり天才ですよ。
——なるほど。だから、長与千種という天才が出てきたのも、あらゆる意味で、彼女にはプロレスしかなかったっていうのが絶対にあると思うんですよね。
柳澤　『プロレス少女伝説』の著者である井田真木子さんが書いていたことなんですけど、女の子は12歳くらいで成人と同じような体格、力を持っている、と。だけど、男の子の12歳はそうはいかない。つまり、女の子というのは頭と身体のバランスが男の子とは違うから、身体を持て余すところがあるんですよ。でも、日本の場合は女の子におしとやかであることを求めるわけじゃないですか。おしとやかさを押しつけられてエネルギーの行き場所がなくなるから、中高生の女の子って太るんじゃないかな（笑）。
——そうなんですかね（笑）。
柳澤　たとえば、ピンク・レディーが股を開いて歌って踊るだけでも、当時はスキャンダルになってましたよね（笑）。これは要するに、女の子なら常にヒザを揃えていなければいけないということです。女の子がヒザを揃えないで暴れることは、そうそうないことですからね。だから、女子プロレスというのは、女の子の暴力衝動みたいなものなんですよ。
——女の子の暴力衝動ですか。
柳澤　男がキレるっていう暴力衝動はよく見ますけど、女に暴力衝動が存在しないわけではなくて、そういうものを発散させる装置として存在していたのが、当時の女子プロレス



『Girls S-cup2010』決勝で、ひたすらお互いの気持ちをぶつけ合うような試合を展開したRENAと高橋藍。赤いコスチュームのRENA、青いコスチュームの高橋藍、二人がリングで作り出す熱は、まさにかつての“クラッシュ対決”の熱と同質のものだった。

だったんですよ。リングに立てない子は、試合を観に行って、プロレスラーたちに代理で発散してもらっていた。その延長線上に芸能界があるというのが、80年代の少女たちの夢の世界なんでしょう（笑）。

——なるほど。で、いまの女子プロレスや女子格闘技を観て不思議に思うのは、どうして彼女らはこれをやろうと思うんだろうってことなんですよ。

柳澤　本当にそう思います（笑）。痛いし儲からないし有名にもなれない。

——なので、RENA選手はどうしてシュートボクシングをやってるのかなと思って経歴を調べてみたら、もともと彼女はひきこもりで、4人姉妹の末っ子だったんですよね。で、姉妹のなかで一番弱いから強くなるしかないということで通い始めたのが空手道場であり、シュートボクシングだったんですよね。自分にはシュートボクシングしかないと。だから、へんな婆婆っ気もないし、ヤマっ気もなし、スターになることへの〝スケベ心〟もない。

柳澤　いまは凄いアイドルブームで、アイドルになりたい子がいっぱいいるわけじゃないですか。ちょっとかわいい女の子は世の中を甘く見てる。ちょっと頭のいい誰かに仕掛けてもらえれば、自分に中身なんかなくても上に行けるでしょ、みたいな。そういうアイドルブームを私は凄く冷たい目で見てるわけですよ。仕掛け人の仕掛けにのめり込むことが正しいという風潮に（笑）。

——確かにそれはありますね（笑）。

柳澤　その人の内面から出てくるものでなければ表現というのは成り立たないと思うんですよ。その中でも女子プロレスというのは本当に特異なジャンルです。普通、ブスは存在してはいけないものじゃないですか。

——ブスは存在してはいけない（笑）。

柳澤　私は全然そんなこと思ってないけど、かわいくない女の子はそのことをひしひしと感じてるわけですよ。ブスとして生まれた女の子は、「私はブスで生きるしかない」と絶望しながら生きてる。だけど、女子プロレスというのは、どれほどブスであろうと、自分とは違う名前の人になって、周りを熱狂させることができるんですよ。これはなかなか凄いことだと思うんですよね。もちろん、かわいいに越したことはないですよ。でも、○○なんかはあきらかにブスじゃないですか（笑）。

——まあ、一般的に言う美人ではないですね（笑）。

柳澤　でも、○○には本名でデビューしたときから、メイクをするずっと前からファンがついているんですよ。だから、私にもよくわからないけど、○○の内面から出てくるサムシングみたいなものを周りが何か感じているんじゃないかな、と。

——たとえば表情だったりとか。

柳澤　声とか、身体の使い方とか、全体的な魅力ですね。だから、RENA選手もガンツさんが言うように、なるべくしてシュートボクサーになったのではないでしょうか。彼女のなかでは「どうしてもこれをやらないといけない」というのがあったんじゃないのかな。



見事に『Girls S-cup』で連覇をはたしたRENA。しかし、まだ19歳、これからもっともっと高みを目指していくことだろう。『Girls S-cup』を観られなかった人もいまなら間に合う、いまこそRENAを見よ！

——いままでの女子格闘家には、「自分には格闘技しかありません！」と言いきれる人が少なかった気がするんです。引退したMIKU選手をはじめ、一部はビンビン感じさせる選手がいたことはいたんですけど。その点、RENA選手は人生、あるいは人格がシュートボクサーという感じがするんですよ。

柳澤　それは応援したくなりますね。

——やっぱりリングにすべてをぶつけてる人は魅力的ですよ。それはクラッシュもそうだったし。

柳澤　つまり、人生を懸けてる人が出てこないと、観ている側としてはおもしろくないんですよね。損得ばかりを考えている人は、応援する気にならない。あとは、我々男が求める女性観というのはあるんですけど、女の子が求めるものは全然違う。基本的に女の子は女の子しか見ていない。男からどう見えるかっていうのを考えている女の子は確実にいるけど、じつはそっちのほうが特殊だと思うんですよ。

アイドルブームのような作られたものではない、内面から出てくる全体的な魅力がRENAにはある

——先ほどの話に戻りますが、長与さんは女の子の気持ちが凄くわかる人ですよね。

柳澤　ええ。男をどうにかしようっていう部分は長与のなかにはなかったと思うんですよ。自分のやってることはおもしろいんだから、男の客も観に来いよとは思っていたんだろうけど、結果的に観に来たのはガンツさんみたいな変態だけでしょう（笑）。

——感性の鋭い男性といってください（笑）。

柳澤　クラッシュの話をすると、どうしても長与の話になってしまうんですけど、私の書いた物語の主人公は最終的に飛鳥なんです。普通の感性を持つ飛鳥がキ○○イと紙一重の長与と出会って深く傷つく話（笑）。だからRENA選手と高橋選手の試合に関しても、好一対みたいなものがあるからこそ、わかりやすい構図になっていてドカンと爆発したのかな、と。

——好一対の関係ですね。

柳澤　高橋選手もどこかでRENA選手とは価値観が違うところがあったのではないかと思うんですよ。そう考えると、高橋選手にも興味が湧いてきますよね（笑）。作られた構図というのは所詮は作られたものであって、やはりその人の内面であったり、それ以外に生きられなかったというような人生の重みみたいなものがあるからこそ、リング上で花火のように一瞬で爆発しておもしろくなるんですよね。

——そういう意味でも、RENAみたいな選手が現れるというのは、いろんな偶然が重なった奇跡だから、いますぐ見始めたほうがいいですよ。いまならまだ間に合う！

柳澤　じゃあ、次にRENA選手の試合があるときはぜひ誘ってください（笑）。

【10年9月3日／都内・某喫茶店にて収録】


やなぎさわ・たけし■1960年3月25日、東京都出身。漫画専門誌『ぱふ』の編集を経て、文芸春秋に入社。『Number』などで活躍後、フリーとなり『1976年のアントニオ猪木』を出版。女子プロレスにも造詣が深く、本誌では『1993年の女子プロレス』を不定期連載中。

椎名基樹のサムライ二昧

第53回

『SBの美しきガラパゴス化』



シュートボクシングの"正装"であるロングスパッツ姿で激闘を展開したRENAと高橋藍。その闘いぶりは視覚的にも美しいものがあった。この独自性も相まって、一気にブレイクとなるか?

どの出場選手も美しすぎるぞ、シュートボクシングの『Girls S—cup』！

ちょっと聞くと、受験生の女子高生用の強壮剤かと、もしくは、とてつもない巨乳の少女たちがいるお店かと錯覚しそうなイベント名であるが、ところがどっこい、日本のRENAを筆頭に、ヨーロッパから、アメリカから、オーストラリアから、タイから、とにかく強くてかわいい女子格闘家が大集合した、萌えて燃えられる素晴らしい大会なのである。

それにしても、さまざまな企画を実現する個性的な人材を発掘する、シュートボクシングの底力には驚かされる。過去にも結局、魔裟斗の最大のライバルとなったアンディ・サワーを発掘したし、中国の散打の選手のナチュラルな強さと独特の技術にも驚かされた。オカマ・ムエタイ選手のパリンヤーなど、一時期ワイドショーに引っぱりだこだった。

だが、そうしたシュートボクシグが過去に発掘した話題性あふれる選手のなかでも、今回トーナメント二連覇を達成したRENAは世間にアピールする要素はピカイチではないだろうか？　なんと言っても正統的に強くて、正統的にかわいい。そして、彼女が元来持ち合わせている初々しさがたまらない。

こういったシュートボクシング特有の企画力、人材育成能力は、この団体特有のドメスティックぶりに起因していると思えてならない。つまりガラパゴスぶりだ。投げあり、立ち関節ありという、世界に一つであろう独自のルール。スタンディング・バーリ・トゥードを標榜し、この英語・ポルトガル語折衷の妙な売り文句も愛嬌があるというか、むしろシュートボクシグの逞しさ、しぶとさをよく表わしているように感じてしまう。

またシュートボクシング特有といえばロングスパッツの正装であるが、このファッション、じつは女子選手こそ最も似合うのではないかと、今回のトーナメントを観てつくづく思った。

とくに金髪の白人選手など、まるで、『バーチャ・ファイター』のサラのよう。おらあ、格ゲー・メスキャラならサラが一番好きだね（↑知らんがな）。ロングスパッツの正装を続けてきたことすら、『Girls S—cup』で活かされたように思えてしまう。

生き残るバイタリティの源となるドメスティックなルール。これぞ、ドメスティック・バイオレンス（↑前言撤回）。こんなガラパゴス化だったら、素晴らしい。ただ、このような良い例のガラパゴス化を支えているのは、格闘技としてルールや競技する環境を厳格に守る精神だと思うのだ。

話題を大会そのものの感想に移そう。女子選手の試合というのは、どれもどこか胸に迫るような思いに駆られる。本誌インタビューで「いまは自分だけを信じて頑張るしかない」と迫力のコメントしていたSRCの真騎士のように、あくまでハングリーに格闘技に臨む男子選手にも心を奪われるが、女子の闘う姿には、それとは別の共感を覚える。闘う理由がお金や有名になりたいといったことと別の、もっとずっと内向的な克己心や、自分自身を変えたいといった感情にあるように思える。それもまた、物理的な飢えと同等に切実に思える。そこにぐっとくる。もしかして、これが「萌え」ってやつ？　そうなの？

話題変わって、日本でもう一つ新興で立派なガラパゴス化を達成したというべき、尊敬すべき佐伯代表の団体DEEP。そのナンバー大会『DEEP49』で、福田力vs桜井隆多のミドル級タイトルマッチが行なわれた。これで3度目の対戦となるラバーマッチだ。これまでの対戦でお互いを認め合っている二人は、意地と意地がぶつかり合う、凄まじい試合をした。あの高山善廣vsドン・フライとまったく同じ、お互い片腕で相手の頭を抱えて殴り合う、クリンチ&パンチの応酬に。血まみれの壮絶さは、前者の闘い以上に思えた。

凄い。プロとしてあっぱれである。が、彼らがこういった試合をする必要があったのかとも正直思った。もちろん自然とああいった展開になってしまったのだろうが、もっと技術の攻防をしてもよかった。試合後の腫れ上がった目をした福田力を見て、さらにその思いが強くなる。これで網膜剥離など起こしたら、本人もファンも悔やみきれない。それぐらい壮絶な殴り合いであった。

そして、福田がレフェリーストップにより勝利した、この試合の終わり方がまたDEEPらしかった。福田のヒザ蹴りを食らった桜井が場外に吹き飛ばされてしまい、ダウンしたままリングに戻れなかったため、協議の末、件の裁定に落ち着いたのだ。その前にも、両者がロープ際でもつれたときに、桜井がリングサイドの机に落下。なんとその際、頭を机に置いてあったゴングで強打して試合がストップした。そのときも、もはやDEEP名物とも言っていい長い中断の末、なんとか試合が再開されたのだった。

このDEEP名物の長い中断は、ドント・ムーブをせずに、ブレイクするDEEP特有のルールにも起因しているように思えるが、それは一つ一つ分析したわけではないので、邪推といわれても仕方ない。ただ、今回のように場外に飛び出すような事態を見て、やはりMMAは金網でやるべきだなという思いを強くした。どんなルールを採用するにせよ、競技がスムースに行なわれない事態が続くならば、いずれにせよ対処を考える必要があるだろう。

のでなければ表現というのは成り立
選手もガンツさんが言うように、な
出てこないと、観ている側としては
な、と。

も造詣が深く、本誌では『1993年の女子プロレス』を不定期連載中。

高橋 （トビラをガチャッと開けて）あっ！ 遅くなって申し訳ありませんで

そういうわけですよね？

高橋 ……そうです。私、ホントにこれ誰

んですけど。

――妖怪を追って飛び回る（笑）。

――ワハハ！ ちなみになんの役を？

高橋 いやあ、それはホントに見せられな



『Girls S-cup2010』準優勝者は
なんと講談社グループの編集者だった！

あの敗戦でRENAちゃんにはライバル心が芽生えました

高橋 藍

8.29『Girls S-cup 2010』大爆発の陰に高橋藍の存在あり！ 今大会、惜しくも準優勝だった高橋だが、RENAとの死闘はまさに女子格の歴史に残る一戦に。今大会を経てRENAにライバル心を持ったという高橋、はたして二人の関係とは!?

聞き手／松下ミワ　試合写真／中原義史
写真協力／SHOOT BOXING

高橋　（トビラをガチャッと開けて）あっ！　遅くなって申し訳ありませんでした。
――あ、初めまして！　今日はお仕事の帰りだったんですよね。
高橋　ええ、そうなんですよ。一応、試合が終わってまた今日から働き始めたんですよね。
――お疲れさまです。高橋選手はたしか講談社の関連会社で編集のお仕事をされてるんですよね？
高橋　ええ、正社員ではないんですけどね。いまはコミック文庫なんかの編集をやってて、ウチってけっこうクラシックなコミックがあるじゃないですか。そのリメイク版を作っているんです。
――講談社だと『あしたのジョー』とかですか？
高橋　そうです、そうです。水木しげるさんの『ゲゲゲの鬼太郎』とかですね。
森谷広報　イヤ、本当はもっと凄い仕事をしてるんですよ、ここにいい写真があるんですよねえ。ほら！（といって、絡新婦［じょろうぐも］に扮した高橋の写真を見せる）。
――……えっ!?　これが高橋選手なんですか!?（笑）。
高橋　ギャー！　森谷さん、いたずらに見せびらかさないでくださいよぉ!!
森谷広報　いやいや、これはぜひ『kamipro』さんに見てもらわないと。
高橋　そんなこと言って、パンフに載せたり、どんどん悪用してるじゃないですか！
――え、ええっと、ちょっと整理させていただくと、これは講談社さんから出ている『日本妖怪大百科VOL・8』に高橋選手が絡新婦として登場している、と。



講談社から発売されている『日本妖怪大百科VOL.8』にて、なんと絡新婦に変身しているのは何を隠そう、正真正銘の高橋藍だ。「当時はまだ格闘技をやってない頃だったから、太ってますねえ」と語る高橋だったが、もはやそんなことは関係ない秘蔵のショットである。

「小豆洗い」とか「すねこすり」とかそういう意味のない妖怪が好きなんですよね

そういうわけですよね？
高橋　……そうです。私、ホントにこれ誰にも見せないようにしてたんですけど、ウチの上司がシュートボクシングの事務所に来たときにこの本を持参してたんですよね……。そのときに森谷さんの顔がニヤってしたのを凄く覚えてます。
――あの、これはどういう経緯で？（笑）。
高橋　これはいや、ウチの上司が水木しげる先生と昔から付き合いがあって、それで出そうってなったシリーズなんですけど、日本各地の妖怪を訪ね歩くというのをテーマに編集してる本なんですよ。それで私もいろんな妖怪を追って飛び回ってたんですけど。
――妖怪を追って飛び回る（笑）。
高橋　で、肝心の絡新婦のページはいつもモデルさんがやってたページだったんですけど……「今回モデルがいないからやって」って数日前に言われて。
――高橋選手が大抜擢された、と。
高橋　そうなんです。「いやいや、私、無理ですよ！」ってさんざん言ったんですけど、「モデル代浮かすと思ってやってよ」って会社に言われまして。で、じつはあまり大きな声じゃ言えないですけど、ほかの妖怪もやってたりするんですよ（小声で）。
――ワハハ！　ちなみになんの役を？
高橋　いやあ、それはホントに見せられないんで……。
――じゃあ、こっちで勝手に調査させていただきます！
高橋　勘弁してください～！　でもまあ、こういう妖怪役って人生においてそんなにやることないじゃないですか。
――まったくありません（笑）。
高橋　だからちょっとね、やってるときはおもしろかったんですよ。
――ワハハハ！　まんざらでもないじゃないですか。写真を見ると、メイクもかなり丁寧にされてますよね。
高橋　そうですね、だから妖怪役だったらまたやりたいですね。
――ぜひお願いします！
高橋　それに妖怪の取材ってけっこうおもしろかったんですよ。妖怪って基本的に人を怖がらせたり、何かしらの役割があるじゃないですか。たとえば絡新婦だったら蜘蛛の巣に男を引っかけて男を食べる妖怪なんですよ。でも、「小豆洗い」という妖怪がいるんですけど、ホントに小豆を洗ってるだけなんですよね。それってけっこう凄くないですか!?
――す、凄いです、たぶん。
高橋　私、そういう意味のない妖怪が好きなんですよね。「すねこすり」という妖怪もいるんですけど、ホワホワしたネズミみたいなヤツなんですよ。それで、すねをキュッキュ、キュッキュってやってるだけなんです。凄くないですか!?
――グイグイきますねえ（笑）。じゃあ今後、妖怪のことでわからないことがあったら高橋選手に聞けばわかるわけですね。
高橋　いやいや、妖怪の賢者からしたらもう足元にもおよばないんですよ。奥が深

い世界ですからね。ウフフフフ。

――そうですか（笑）。しかし、編集の仕事もかなり楽しんでやってるんですね。

高橋　そうですね、けっこう。でもこんな二足のわらじを履かせてもらってるので、なかなか1冊任せてもらえないですけど。

――そもそも格闘技と編集の仕事はどっちが先だったんですか？

高橋　編集です。だから本当はデビューするつもりなんてなかったんですよね。本格的にプロになるほど練習できる時間なんてないし。ただ、アマチュア大会に出させてもらってたんで、それで目をつけられちゃったんですよねぇ。そのときに「藍ちゃんの人生だから思うようにすればいいと思うけど、一生に一度のチャンスなんだよ」って、森谷さんに言われて。

――また、高橋選手の性格を知っていながら、汚ない手を使ってきたわけですね（笑）。

高橋　そうなんですよぉ。で、1週間時間をもらったんですけど、そこで上司に相談して。で、私が凄く神妙な顔をしてたらしくて。「じつはデビューが決まりそうなんです……」って言ったら、「はっ!?　……なーんだ！」って爆笑されたんですよ。どうやら私が結婚して退職すると思ってたらしいんですよね。でも、事情を話したら「そういう道を選んだなら選んだで、僕たちはホントに応援するから」って言ってくださったんですよ。

――さすが、器のデカい会社です。

高橋　会社の上司にそう言われるのはホントにありがたかったんで、恵まれてますよね。それでデビューが決まったというかたちなんです。だから試合前になると、仕事をバリバリやってたりしたら「高橋さん、ところで試合のほうは大丈夫なのかな？」って言われたりするんですよね。

――ハハハハ！　普通、真逆ですよ。

高橋　だからホント申し訳ないぐらいなんですけど。今回のトーナメントも観に来てくれたときにも、「あれを見せられちゃったらね、仕事に集中してなんて言えなくなっちゃったね」なんて言ってくださって。ありがたいです、ホントに。試合の翌日もお休みをいただいて。

――なるほど。でも、RENA選手とのあんな死闘をやっちゃうと、一日やそこらじゃそうそう興奮は収まらないんじゃないですか？

高橋　正直、まだ頭の切り替えが途中ですね。私にとっては「負け」という結果があるんですけど、周りの方々は「凄かったねえ」とか言っていただけるんで、そこも不思議な感じがしてて。

――いや、誰が見ても激闘でした。



8.29『Girls S-cup 2010』の決勝戦はRENAと高橋藍の死闘となり、二人ともボロボロになりながら、なんと再延長まで闘った。結果、RENAが判定で優勝を勝ち取ったが、本人も胸を張って言うとおり裏MVPは高橋で決まりである。

試合後のパーティでRENAちゃんとしゃべったんですけど……！

高橋　うーん、でも今回はスタミナ切れしないように練習してたんですけど、最後の最後でもう一歩前に出られなかったというのは、やっぱり無意識のうちに疲労があったのかなと思います。もうちょっとあのとき前に出ればよかったとか、そういうことを昨日は一日考えてました（笑）。

――実際、去年の『Girls S-cup』では石岡沙織選手に負けて1回戦敗退でしたが、それと比べると急成長です。

高橋　去年はホントにコスチュームに着替えても何をしても足元がフワフワして「ホントに闘うのかな」って感じだったんですよね。で、じつは自分の戦績で負けが唯一あの試合なんですよ。だからもうあんなことだけは二度としたくないと思って。その点では今回は腹をくくって出られました。

――それで今年はいきなり決勝までいっちゃったわけですか。

高橋　いや、でも自分は負けてしまったんでね。唯一の救いは「おもしろかった」って言ってもらえることですよ。もうホントいろんな人に「感動した」なんて言ってもらえて、いまはちょっと救われた気持ちになってるんですよね。

――ようやく達成感があったというか。

高橋　でもやっぱり勝たなきゃダメですね。勝ち負けは関係ないって言ってくださる方もいるんですけど、でもやっぱり応援に来てくれる人たちのこと考えると勝たなきゃ意味がないなぁと、なんかあらためて思いました。

――ちなみに、試合後RENA選手とはお話しされました？

高橋　ええっと打ち上げパーティのときにちょこっとしゃべりましたよ。

――どんなお話をされたんでしょうか？

高橋　うーん……何しゃべりましたっけ？……あ、たしか「また頑張ろうね」みたいな感じで健闘をたたえ合いました。でもそのあと上から目線で「藍ちゃん、チョー強くなってる」みたいなこと言われたんで、「あぁ!?（怒）」ってなりました。

――ワハハハハ！　イラっとしちゃいましたか。

高橋　さっき試合したばっかりですからね。「まぁ、どうも」みたいな感じで切り返しましたけど。

――ちょっとこれを言うとまた高橋選手を刺激しちゃうかもしれないですけど、ウチのインタビューでRENA選手は「藍ちゃんが上がってきてくれてうれしかった」って言ってたんですよね。

高橋　あ、ホントですか。いや、でもそれは上から目線というより全然うれしいですね。もちろん格闘技なので結果は重要なんですけど、やっぱ試合ってのは一人じゃできないし、RENAちゃんがいて私がいて二人が力を出し合ってその結果でああやって喜んでくれる人がいっぱいいたということなんでそれは単純にうれしいですね。

――よかったです（笑）。

高橋　でも振り返るともう課題も山ほどですし、試合に負けたとかそういう部分で

私もRENAちゃんには観客を満足させる試合を期待しているんです

の悔しさというのはもちろんあるんですけど。ただRENAちゃんが言ってくれたことは、私も同じ気持ちですね。同じ生粋のシュートボクサーである彼女とあそこで闘えて良かったです。

——で、じつは前号の『kamipro』の表紙撮影のときにRENA選手の髪をセットしてくださったのが高橋選手だったんですよね。

高橋 あ、そうです、そうです。ジムで練習してたら「団子できる?」って森谷さんに聞かれて。で、複雑なお団子だったらできるかわからないんで「団子ならなんでもいいんですか?」って言ったら「いいのいいの。いまRENA選手が春麗になるから早く」って。

——その件があったんで、RENA選手に「高橋選手と仲良しなんですね」って聞いたんですよ。そしたらRENA選手は「昔はそうだったけど……」というような返答だったんですよ。

高橋 ……ああ、なんか若干そういう部分が出てるのかな(ニヤリ)。

——ワハハハハ! なんですか、その意味深な発言は。

高橋 いや、ライバル心は普段はそこまでないと思ってたんです。あえて言うならば今回の『Girls S—cup』でライバル心が芽生えたんですよね。これまではRENAちゃんが強気な発言をしても「あ、そっか。RENAちゃんはやっぱりけっこう強気なんだな」という感じで、いつもそのまんまの意味で受け止めてただけでしたしピリピリした感じもなかったんですけどね。なんか出てるのかな。いまもそんなに前と変わったつもりはなかったんですけど。

——となると、RENA選手の勘違いなんですかね。

高橋 うーん、いやきっとRENAちゃんが言ってるのは、今回のトーナメントに向けた会見のときに「RENA選手をどう思いますか?」という質問がやっぱり来るじゃないですか。そのときに私が「正直に言わせてもらうと、09年の『Girls S—cup』のチャンピオンになる前の試合のほうが気持ちが前に出ておもしろかったです」みたいなことを言ったんですよ。そのことについてカチンと反応してるんじゃないかなって。



Ai Takahashi

たかはし・あい■1982年5月11日、千葉県出身。講談社の関連会社である講談社コミッククリエイトで働く編集者。アマチュア大会を経て09年の『Girls S-cup』に出場するも、石岡沙織に黒星を喫し1回戦敗退。しかし、10年の同大会では準優勝をはたし飛躍的な成長を遂げた。また、業界きっての妖怪通という顔も持つ。168cm、55kg。

——実際、そう思ってる、と?

高橋 でも一観客として見たらそうだと思うんですよ。最近の試合はいまいちピンとこないというのは、私だけが思ってることじゃないと思うんで。私もやっぱり自分が格闘技やってる人間として、RENAちゃんには観客の人に満足してもらえるような試合をしてほしいという期待があるんですよね。もちろん選手としてRENAちゃんより上にいきたいというのもあるんですけど、そのときは単に観客のストレスを代弁したというか。だから、たとえば私とやった試合がおもしろかったって周りの人に言ってもらえるのであれば、まぁ感謝してもらいたいなって(笑)。

——ワハハハハ! 我こそがMVP!

高橋 フフフ。きっとRENAちゃんもあのときは気持ちが前に出てたと思うんで。RENAちゃんの「絶対負けない」っていう気持ちと、私の「勝ちたい」という気持ちがお互いにぶつかった結果だって、そういうふうに感じてもらえるとうれしいです。だから今後私がもう一回再戦するかとか、RENAちゃんが誰と対戦するかとかわかんないですけど、やっぱりあのときみたいな試合をしてもらいたいなっていうのが一観客としてもホントにそういう気持ちです。

——でも、選手としてそういう考え方ができるというのは珍しいですね。

高橋 やっぱり自分がもともと格闘技ファンだっていうのもあると思うんですけど、RENAちゃんにはそういう試合を見せてほしいですよ。へんですかね、私。もちろん同じ選手として私も負けるわけにはいかないとは思ってますけどね。

——試合でも負けないし、コスプレでも負けない、と。

高橋 ウフフ。この前は一応負けましたけど、これからは負けませんよ〜。妖怪でもなんでもコスプレなんかノリノリで楽しんじゃえばいいだけですからね。

——高橋選手が言うと説得力があります(笑)。

高橋 あの撮影のときRENAちゃんは複雑な顔してましたもんね。それはRENAちゃんはきっと人に乗せられて、なんかこう自分じゃないふうになったりするのがおもしろくないのかなって思うんですけどね。格闘家としての自分に誇り持ってるから、それはそれでこだわりなのかなとは思ってたんですけど。でもごめんなさい、私だったらルンルンでやっちゃうかな(笑)。

——ワハハハハ! さすがです。

高橋 それに、私が結果を出して表紙で妖怪コスプレをやらせてもらうときには、RENAちゃんにもうしろで猫娘ぐらいのことはやってもらわないと。

——絡新婦のうしろに猫娘(笑)。どんな表紙なんですか! しかし、こうなったら高橋選手には妖怪コスプレで妖怪だけを語っていただくようなインタビューをさせていただきたいですね。

高橋 あっ、いいですねぇ〜。それじゃあ、ちょっとネタ仕込んでおきますよ!

——練習と仕事に差し支えない程度にお願いします(笑)。

【10年7月31日/都内・シュートボクシング事務所にて収録】



秒殺女王はお局様(?)

フジメグが、引退、女子格闘家のプロ意識
そしてマスコミについてぶっちゃける！

総合無敗の最強女帝

藤井恵

いまだ総合無敗を誇り、女子格の強さの象徴として君臨する藤井恵。現在は米国『ベラトールFC』に参戦、大和撫子の強さと美しさを発信中なのだ。そんなフジメグに本誌では初となるロングインタビューを敢行！女帝の含蓄あふれる発言に刮目せよ！あ、タイトルはシャレです、藤井さん(汗)。

聞き手／鈴木佑　撮影／金山フヒト

――『kamipro』では藤井さんのロングインタビューは初めてなんですよね。

――葛藤はなかったですか？

藤井　あの～、やっぱりやりたくはなかったですよね、フフフ。でも、

すけど、周りからはちょこちょこ言われますね。確かにこれまでを振り返ってみると、そうだったのかなと

どうなんでしょう？

藤井　う～ん、やっぱりどんどんハードルを上げられるというか……。

と契約していたので、スケジュールがうまく調整できず決まらなかったんですけど。

〝秒殺女王〟と呼ばれることにちょっと孤独を感じてました

――『kamipro』では藤井さんのロングインタビューは初めてなんですよね。

藤井　ああ、そうですね。

――ちなみに『kamipro』をご覧になったことは？

藤井　えーと……。

――あ、読んだことがない（笑）。

藤井　いやいや、そんなことないですよ。というか、そもそも雑誌自体をそんなには。自分が載ったのを送っていただいたときに読むくらいですかね。

――女子格の強さの象徴というイメージが強い藤井さんですけど、『kamipro』にはどんなイメージを持ってますか？

藤井　……まぁ、プロレスチックな感じかなって（笑）。

――でも、じつは藤井さんは総合デビューする前に、意外にもプロレスのリングに上がってるんですよね（03年5月に『アルシオン』に参戦）。

藤井　ああ、そうですね。当時、吉田万里子さんがAACCに出稽古に来られていて、そのときに「出てもらえない？」みたいな感じで誘われたんですよ。もちろん格闘技とは別モノだと思ってたし、最初は自分には無理だと思ってお断りしたんです。でも、吉田さんから「練習どおりの関節技の動きをやってもらえればいいから」って言われて。

――葛藤はなかったですか？

藤井　あの～、やっぱりやりたくはなかったですよね、フフフ。でも、食べず嫌いなのはよくないなと思って。ほら、実際に観るのとやってみるのって全然違ったりするじゃないですか？　それはアマチュア時代に、柔道からサンボに転向したときも凄く感じたんですよ。最初はサンボも柔道も似てるという感覚で始めたんですけど、やってみると動きもルールもまったく違って。

――なるほど。

藤井　それは柔術を始めたときもそう思ったし、レスリングやグラップリングをやったときも、常に新しく感じるものがあって。もちろん、新しいことに踏み出すのって楽ではないんですけど、そこから得るものってたくさんあるんですね。まぁ、そのなかでもプロレスは本番までにけっこう考えすぎちゃって、胃が痛くなったりもしたんですけど（笑）。

――ハハハハ。お話を聞いてると、藤井さんって好奇心旺盛なんですかね？

藤井　あの～、あんまりそういうふうに自覚したことはなかったんですけど、周りからはちょこちょこ言われますね。確かにこれまでを振り返ってみると、そうだったのかなとも思いますし。

――そんな藤井さんは女子格創成期から活躍されてたイメージがあるんですけど、プロデビュー自体は04年なんですね。

藤井　そうそう、そうなんですよ。30歳になってからなので。デビューが遅くなったのは、それまでに顔面ありでやったことがなかったのもあったし、あとは自分がやってる競技が納得いくまでできてなかったっていうのもあって。段階を踏んでいくなかで、その延長線上に総合があったという感じですね。



フジメグは8.12『ベラトール24』の女子トーナメント1回戦で、カーラ・エスパルザに一本勝ち！ そして9.30『ベラトール31』の2回戦ではリサ・ワードと対戦。じつは07年に1R一本勝ちしている相手だけに、次戦にも期待がかかる！

――その後は総合で負けなしですけど、周りから〝秒殺女王〟として見られることについて、本人的にはどうなんでしょう？

藤井　う～ん、やっぱりどんどんハードルを上げられるというか……。勝つことが最低ラインで、プラス内容も求められて、それも1ラウンドで極めなきゃいけないというのを要求されるんで、ちょっとしんどい時期はありましたね。普通に「すぐ極めちゃうんでしょ？」みたいな感じで言われるんですけど、そんな簡単なものじゃないですし（苦笑）。

――プレッシャーや孤独感はありましたか？

藤井　そうですね。総合を始めて間もない頃からそういうふうに言われてたので、ちょっと孤独は感じてましたね。

――観る側からすると藤井さんは幻想が湧きやすい存在だと思うんですよ。「この人はどこまでいくんだろう？」というか。辻結花さんとの最強対決も望まれてましたし。

藤井　あの～、どうなんですかね？　というのは、あのときも結局私は蚊帳の外で、最終的な辻さんとの話が来る前に、周りから「いつやるって聞いてるよ、頑張って」って勝手に話が進んでいて、意味がわかんなかったんですよ。こっちとしては単純に「話が来てないからわかんない」ってなるじゃないですか？

――イライラしたりしました？

藤井　そこまではないですけど、「順番が違うんじゃない？」っていう矛盾は凄く感じてましたね。で、辻さんとのお話をいただいたときも「やります」って話はしてたんです。でも、当時、私が海外の他団体と契約していたので、スケジュールがうまく調整できず決まらなかったんですけど。

――その辻さんですが、今年になって敗北を喫してしまいました。

藤井　うん……、やっぱり凄く喪失感というか、そのまま強いままでいてほしいというのはありましたね。あの、もともと私は彼女と仲良かったんですけど、さっき話したような周りの雑音もあって、全然連絡がとれないような状態になっちゃったんです。そういうのも正直寂しかったですね。試合以外では彼女にかぎらず、誰とでも普通の関係でいたいし。まぁ、プロである以上は難しいところはあるんですけど。

――プロという言葉が出ましたけど、藤井さんのインタビューを読むと〝プロ意識〟っていう単語がよく出てくるんですよね。そのもとになってるものってなんですかね？

藤井　たぶん、柔道時代に先生にいつも、「しっかり一本できれいに決めろ」ということを言われてたので、それが根底にあるのかもしれないですね。自分も一本取れたほうがスッキリしますし、観てる人にも楽しんでもらえると思いますし。

――なるほど。

藤井　あとは、修斗とか男子のなかで女子の試合があると、普通の試合展開じゃ誰も注目してくれないし、男子がしないような動きをしたりすることで、やっと同じスタートラインに立てるという感覚もありましたね。

――対男子というのは藤井さんの

なかでけっこう大きい要素だったりします？

藤井　それはありますね。卑屈にはなってはないんですけど、同じ競技でやっていても、やっぱり同じに観てもらえないというのは絶対にあると思うので。

――そういう意識を持ってる女子格の選手って、ほかにもいました？

藤井　う〜ん、あんまり感じないですね。もちろん、先輩方のなかにはプロとしての見せ方をされてた選手は何人かいらっしゃったと思うんですけど。でも、基本的にいまの女子格で、そういうラインで考えてる子がどのくらいいるのか、あまり伝わってこないかなというのはありますね。

――藤井さんが試合で一番見せたいものってなんですかね？

藤井　やっぱり一本や倒しにいく姿勢ですよね。最近、ゲーム感覚的なポイントの取り合いみたいな試合があるじゃないですか？　悪くはないと思うんですけど、私たちがやってる競技は、もっと普通の人が出せない気持ちとか感情とかを表現して闘わなきゃいけないものだと思うんですね。あとはプロとしてのオーラも漂わせないといけないと思うし。

――そういう意味では藤井さんのフィジカルって凄い武器ですよね！

藤井　ありがとうございます（ニッコリ）。もちろん、筋肉もただつけるだけじゃなく、動ける筋肉にしなきゃいけないんですけど、リングに立ったときに大きく見せたいっていう意識はありますね。

――失礼な話かもしれないですけど、そこに女性として葛藤は？（笑）。

藤井　ああ（笑）。いや、なんだろうな……もちろん選手としてやってるあいだは絶対に必要なものなんですけど、着たい服でもサイズ的に着れないものがあったり（笑）。

――ハハハハ。

藤井　肩がきつくなったり、短いスカートを穿きたかったりしても、太モモが気になったりとかはありますね（笑）。

――でも、藤井さんってオシャレですよね。

藤井　いえいえ、そんなことないですよ、フフフ。ただ、やっぱり普段から人に見られてるっていう部分はありますね。

――そのへんもプロ意識ですよね。さて、女子格の現状について聞きたいんですが、藤井さんも関わりのあるジュエルスが、小さい会場ながらも地熱を作ってきてます。今年は後楽園大会も予定されてますし、そういう盛り上がりは感じてますか？

藤井　そうですね。ジュエルスの立ち上げのときに、「へんに無理はせず、続けていくことをスタンスにやっていきたい」っていう方針を聞いたんですけど、それって凄く大切なことだと思うんですよ。いきなり無理してパンクしちゃうよりは、やっぱり長く続けることで選手の目標となる場所が残ってくれたほうがいいので。そうすることで選手も育ってきますしね。

――いま、注目されている選手は？

藤井　ジュエルスの同じ階級でいえば石岡（沙織）さんだったり、長野（美香）さん、能村（さくら）さん、同じAACCの浜崎（朱加）が若手のなかでは楽しみだなって思います。まだ私くらいの世代の選手も多いですけど、やっと若い選手たちも出てきてくれたなって。

――スマックガール時代はアマチュアに毛が生えた程度の選手と、アスリートとしての下地がある選手の差が激しかったですよね。

藤井　激しかったですね。でも、その差がジュエルスになって埋まってきてるんで、それが凄くおもしろいですね。

――いまジュエルスではライト級トーナメントが行なわれてますけど、藤井さんとの再戦を見据えてた石岡さんが1回戦で敗北しました。じつはあの日、大会後に会場の新宿FACEの下で、泣いてる石岡さんを優しく励ましてる藤井さんをお見かけしたんですよ。

藤井　あぁ……（笑）。あの、彼女は責任感が凄くある子なんで、ジュエルスの中心として女子格を盛り上げたいとか、自分自身も強くなりたいという思いでここまでやってきたと思うんですね。そのなかで今回は負けちゃいましたけど、そこから得るものって凄く大きいと思うし、ホントの勝負ってここからだと思うんですよ。だから「自信を持って、誇りを持って頑張ってほしい」みたいなことは言いましたね。

――アドバイスを送った、と。そういえば藤井さんって、本当は去年引退する予定だったとか？

藤井　そうそう、しようと思ってたんですよ。フフフ。なんかもう、ちょっと疲れちゃったのかもしれないですね。いろいろと若手の子たちも伸びてきてたし、もう引き継いでもいいかなって。

――やりきった感もあった、と？

藤井　はい、多少はあって。でもそういうときに、MIKUちゃんとの試合の話があったので、とりあえずそれが終わるまでは頑張らなきゃなと思ったんです。そうしたら、そのMIKUちゃんが引退ということになっちゃったんで。

――「え〜っ！」って感じでした？

藤井　そうですね（笑）。MIKUちゃんにはこれから女子格を背負っていってほしいなと思ってましたし。でも、引退を決断するのに彼女もホントに悩んだと思うんですよ。私、彼女のことはデビュー前から知ってて、強くなっていく過程もずっと見てたんです。だから、私にとっての彼女は本当に女子格の夢であり、希望だったので。

――そこまで思い入れがあったんですね。あの最後の引退エキシビションも実戦さながらの凄い迫力で。

藤井　ああ、MIKUちゃんが「おもいっきり殴りにいきますから」って言ってきたので、9・5割方は本気でやって（笑）。でもそのほうが彼女もスッキリするだろうし、いままでのいろんな思いをパンチや蹴りに込めたかったと思うんで、けっこう痛かったですね（笑）。

――ハハハハ。そしていま、藤井さんは新たな舞台としてベラトールFCの女子トーナメントに参戦をされてますが、それは海外に目を向けて、広い舞台でやりたいという意識で？

藤井　日本に相手がいないとかは全然思ってないんですけど、もともと昔から海外で試合することも多かったので。そういうなかで、言いたくはないですけど、いまはアメリカが総合の最先端なので、一番の国



09年7月にはジュエルスで石岡沙織と対戦。女子格新時代のエースをグラウンドパンチありの特別ルールで迎え撃ち、腕ひしぎ十字固めで貫禄の勝利。マンガの『BAKI』じゃないが、まさに国内では「敗北を知りたい」状態なのだ。

いまは最先端の米国で勝つことで日本をもう一度、一番にしたいです

なので、時間があれば海に行ったり山に行ったりとか。なんか不思議なんですけど、海とか山とか空とか見

んですけど。あとは、人をすぐに好きになっちゃうんですよね。

――ひ、人をすぐ好きになる？

習しないで試合に出るのと一緒なんで、「それはプロとしてどうなの？」って人はいますね……。たま

きゃいけないんですけど、リングに
たんですけど、それって凄く大切な
スリートとしての下地がある選手
試合の話があったので、とりあえず
カが総合の最先端なので、一番の国

いまは最先端の米国で勝つことで日本をもう一度、一番にしたいです

で試合をしたいなっていうのはありましたね。そこでしっかり勝つことによって日本をもう一度、一番にしたいというか。

——藤井さんは日本の女子格の未来は明るいと思います?

藤井 いまのような状態であと1年、2年続いてくれていれば、問題ないかなって思ってます。いまいる子たちももっとよくなってると思うし、それに続く子たちがまた上がってくると思うし。あとは格闘技ファンにだけじゃなく、もっと一般の人にも女子格を知ってもらえるような場所が増えれば理想ですよね。

——なるほど。

藤井 そのなかで私にできることは、選手として闘うことぐらいしかないと思ってるので、いつでもいい試合ができるような状態でいたいですね。今回みたいな大きなトーナメントで結果を出して、そこに若い選手たちがつながっていくようにしたいというか。

——道作りですね。

藤井 そうですね。……でも、なんか私、今年厄年らしいんですよ(笑)。

——あら、そうなんですか(笑)。

藤井 本厄だったんですよ、もうビックリして(笑)。つい最近終わったばっかりだと思ったら、女性は30代で2回あるみたいで……。でもまぁ、いまはとくにゴールは設定せず、あんまり先のことは考えずにのんびりいこうかなって。(ニッコリ)。

——とりあえず引退は全面撤回って感じですかね。

藤井 そうですね、はい。……フフフ(急に笑いだして)。

——ど、どうしたんですか?

藤井 いや、人間っておもしろいなって。なんか、身体とかじゃなくて結局は気持ちなんだなって、よく最近思うんですよ。そのときの気持ちでいくらでも頑張れるんだなって。だって、引退するって言ってたときよりもいまのほうが絶対に身体の調子は悪いのに、気持ちは凄く元気なんですよ。ホントに気持ち一つで景色が全部変わって見えるし、いまやれることを重箱の隅をつつくみたいに探してこなしてきているので、そういう意味では凄く充実してますね。

——そんな格闘技漬けの毎日のなかで、ストレスが溜まったときの解消法とかあるんですか?

藤井 私、自然が好きなんですね。なので、時間があれば海に行ったり山に行ったりとか。なんか不思議なんですけど、海とか山とか空とか見てると、それまでクヨクヨしてても「ホント自分はちっぽけだな、ちっぽけすぎて悩みにもなんないな」って思うんですよね。悩んでる暇があったら動けばいいっていう感覚にしてもらえるというか。車の音とか人の声が聞こえないところにいると、五感が鋭くなって人間本来の感覚、本能的なものを取り戻せる感じになりますね。



ふじい・めぐみ■1974年4月26日、岡山県出身。ADCC世界大会銅メダル2度、サンボ世界大会銀メダル4度など数々の実績を残し、総合では無敗を誇る秒殺の女王。現在はベラトールの女子115ポンド級トーナメントに参戦中。身長159cm、体重53kg。AACC所属。

——なるほど……、藤井さんってお話を聞いてると達人的というか、達観してる感じがしますね。トーンが落ち着いてるというか(笑)。

藤井 そうですか?(笑)。まぁ、基本的に喜怒哀楽とかは激しくはないですね。ただ、ヘコむとけっこう底まで落ちちゃうんですよ。まぁ、すぐポジティブになったりもするんですけど。あとは、人をすぐに好きになっちゃうんですよね。

——ひ、人をすぐ好きになる?

藤井 あ、あ、それはべつに男女とか関係なく、恋愛の好きとかじゃなくて、ちょっとでも話すると、その人に「頑張って」とか、そういう情が深くなりすぎちゃう部分があって(笑)。

——あ〜、それでその人が負けたりすると自分も落ちちゃうとか?

藤井 そうそう、そういうのは凄くあります。それはもうちょっと浅くてもいいのかなって思いますね。フフフ。

——あと聞きたかったのが、自分のブログでマスコミに苦言を呈してたことがあったじゃないですか?

藤井 ああ(笑)。いや、観てないことを観たかのように書く人がいたので、ちょっとそれは選手に対してリスペクトがないんじゃないかなと思って。試合を観て文句を言うなら全然いいんですよ、それはいろんな見方がありますし。ただ、観ないで書くのは、選手に置き換えれば練習しないで試合に出るのと一緒なんで、「それはプロとしてどうなの?」って人はいますね……。たまにですよ? たま〜に(笑)。

——肝に銘じます!(笑)。これからも『kamipro』は女子格を盛り上げていきたいので、ぜひ藤井さんには今後もご意見番として提言いただきたいですね。

藤井 いえいえ。なんかお局みたいになったりして、フフフ。(本誌前号の表紙を見ながら)RENAちゃん、かわいいですね。コスプレが似合ってて。

——どうですか、藤井さんもコスプレします?

藤井 いやぁ、私はもう……アハハハ!

——もしコスプレするならどんなのがいいですか?

藤井 う〜ん……ブルース・リーとか?(笑)。

——ダハハハ! やっぱり達人っぽいですね(笑)。今日はありがとうございました!

【10年9月3日/都内・某所にて収録】

——前回『ｋａｍｉｐｒｏ』で取材をさせていただきましたが、反響はいかがでしたか？

すけど、提案はいろいろもらうんですよお。

——たとえばどなたから？







撮り下ろし写真にもはやギブアップ!

7戦無敗！ヴァルキリーの女王がプロ魂とは何か？を語る！

21世紀のダッダーン! ボヨヨン! ボヨヨン! 再び!

中井りん

あの中井りんが『kamipro』に再び! 現在7連勝中、デビュー以来負けナシの中井りんは金網女子格イベント・ヴァルキリーで活躍中だが、その強さとともに注目すべきは素晴らしきファンサービス魂だ! いったいどんな思いで"ファンサービス"を行なっているのか、今回あらためて拝聴させていただいた。

聞き手／松下ミワ　撮影／吉場正和
写真協力／中井りん

——前回『kamipro』で取材をさせていただきましたが、反響はいかがでしたか？

中井　エヘヘへ。えっとですね、もう凄い反響だったんですよ。いろいろなところで「よかった！」と感想をいただきました。本が出たのは少し前だと思うんですけど、いまでもまだ言っていただいてるんですよ。

——いい反響ですねえ。中井選手のホームページの掲示板を見ても、恐縮ですが、けっこう『kamipro』に載ったことが書かれてましたよね。

中井　そうなんですよお。なんか「アメリカから取り寄せた」とか書いてる人がいて、ホントかなと思ってビックリしてるんですよ（笑）。

——「一冊まるまる中井りん」を作ってほしいという意見もありました。

中井　エヘヘへへ。ありがとうございます。実際、私も買えなかったぐらいだったんですよね。もう四国にはないかもしれないです。

——四国にない！　もう、中井選手には頭が上がりません！

中井　アハハハハハ。こちらこそ宣伝になり感謝しています。ありがとうございました。

——それで今回は電話取材ということで、お写真はホームページのギャラリーからお借りしようと思ってあらためて中井選手のお写真を見ていたんですが、これまた凄い写真ばかりです！

中井　そうですかあ？

——いや、誰がどう見ても凄い写真ばかりですよ。いったいこの衣装なんかはどなたがチョイスしてるんですか？

中井　衣装は自分が決めたりするんですけど、提案はいろいろもらうんですよお。

——たとえばどなたから？

中井　たとえばですか？　エヘへへ。館長とかあ、ジムの女の子とかあ、なんかコスプレとか考えられてるみたいで。

——館長というのは、中井選手のセコンドとしてもおなじみの修斗道場四国館長・WILD宇佐美さんのことですね。じゃあ、中井選手は館長さんたちのどんな提案にも、けっこう「なんでもこい」という感じなんですね。

中井　いやっ、ホントに私は恥ずかしくてたまらないんですよお！

——そうなんですか？　凄くノリノリでやってるのかなと思ってました。

中井　いやっ、ノリノリじゃない！　これでも恥ずかしいんですう。でも、ちょっとネタを考えないと、普通じゃダメかなとは思うんですよ。

——ちなみに、ホームページのギャラリーの中でオススメの写真はありますか？

中井　オススメの写真ですかあ？　うーん、どれもそのときどきの、自信を持ってじゃないんですけど、出しているものなので。でも、個人的にはY字バランスの写真かなあ。あれは気にいってるものの中に入りますね。それから……チャイナドレスの写真なんかも気に入ってるんですよ。エヘへへ。

——確かにこれは傑作中の傑作です。いったいこのチャイナドレスはどこで手に入れたんですか？

中井　チャイナドレスは、東京だったかなあ？　なんか中華街で買いました。かわいくて。私、私服なんかでもけっこう使うんですよ。

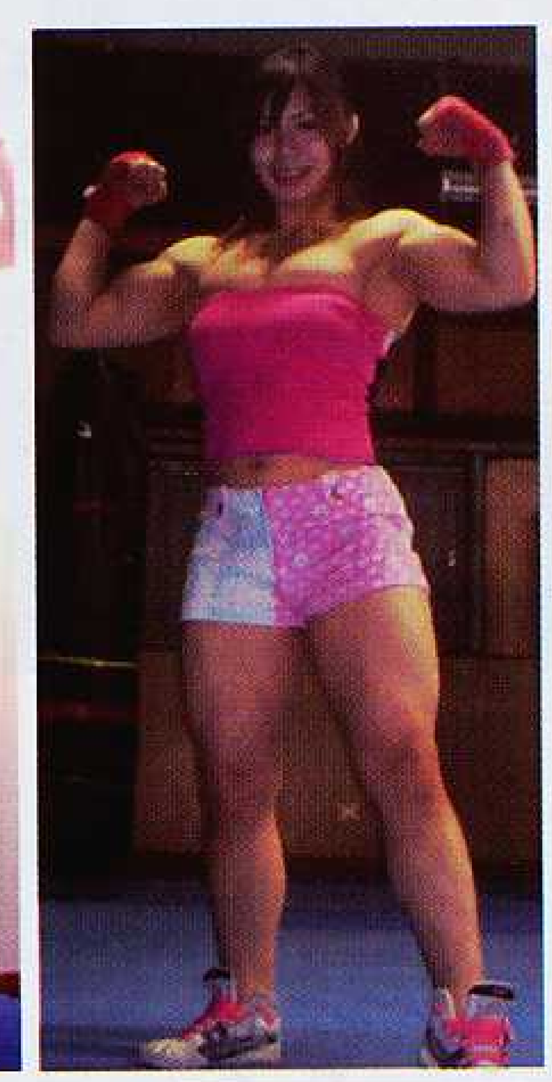
——えっ⁉　普段着としても着られてる

Rin Nakai

いやっ、ノリノリじゃない！ これでも恥ずかしいんですう













んですか?
中井　上にジージャンを羽織ったりしてもかわいいんですよ。もう見た瞬間かわいい～と思って。
――このカッコウで街に出たりとかもするわけですね!
中井　そうですね。たまにします。買ったときは、それで遊びに出かけたり。
――でも、これだけよく着こなしてると目立つでしょうね。
中井　そうですね。ただ身体がおっきいとかだけで注目されてるんで(笑)。でも、写真とかはアレですよ。もう凄く恥ずかしいんですけど、恥ずかしがってちゃダメだなとは思うんですよ。
――それはこういう格好をファンに見せることで、もっと喜んでもらおうということですね。
中井　そうです。いろんな分野というか、格闘技以外のところにもアピールするところにはアピールして、頑張ってファンサービスしてます。エヘヘへ。
――ファンサービスということで、もう楽しんでやっちゃおうと。
中井　やっぱり自分も楽しんでるところはありますよ。恥ずかしいのは恥ずかしいけど、もちろん自分も楽しんでやってます。でも恥ずかしいんですよお。
――たとえば中井選手は『kamipro』でコスプレしてくださいと言ったら、やっていただける感じなんですか?
中井　『kamipro』でコスプレぇ?そうですねえ。それはたぶん大丈夫だと思うんですけど。何になるのかっていうのはたぶん判断があると思います。
――ダメなコスプレもあるわけですね?
中井　ありますよお(笑)。コスプレってどんなのかな。メイドさんとか?
――ああ、そういうのもいいですね。
中井　うーん、メイドさんぐらいだったら全然オッケーだとは思いますけど。でも、それはこっちでもそのうちはやろうかと思ってたんですよ。
――あ、そうなんですか(笑)。それはぜひ見たいですね。
中井　エヘヘへ。のちのち、そういうのもいいかなあとは考えてます。
――ちなみに『kamipro』で春麗をやったんですが、春麗はいかがでしょう?
中井　でも、春麗ってRENA選手がやってるじゃないですかあ。だからダブるからダメです。フフフ。
――ダブるのはイヤなんですね。
中井　はい。やっぱりちょっと……。人がああいうふうに大々的にやってたら、やっぱ悪いので。そこは恐縮ですし、たぶん向こうもイヤじゃないですか。見る人も同じだとイヤじゃないですか。
――ああ、やっぱりファンに気を使って。
中井　比べられるのは、やっぱりみんなイヤかなあというか。
――でも、ほかのコスプレはやっていただけるわけですね。
中井　バニーちゃんとか、へんなのはダメですけど、メイドさんとか普通の範囲であればたぶん。
――じつはですね、RENA選手のコスプレですが、この撮影のときにRENA選手はけっこう抵抗があったそうなんですよ。本物志向だからもっとスポーツマンとして見てほしい、と。
中井　えー!　中井りんも本物志向なんですけどお……。私、かなり本格的ですよ!　試合を観てもらったらわかるように、こっちも本格的なんですけど。
――そこは誤解してほしくないということですね。

中井も本物志向なんですけどお……。私、かなり本物志向ですよ!

中井　はい。でも、撮影とかは別だとは思ってるんですよね。うーん、でもRENA選手がイヤがるのも、まあ人それぞれだと思うんですけど、考え方次第ですよね。
――中井選手はどういう考え方ですか?
中井　私としては、もうできる範囲でのファンサービスですね。
――その一方で、本物志向という部分は試合で観てもらえばいい、と。
中井　また別じゃないですかね。やっぱ、女の子だし。格闘の試合と、普段のそういう写真と。別だと思います。
――中井選手って、ファンの方から持たれたいイメージとかはありますか?
中井　えっ、どうかな?　あんまり、考えてなかったんですけどお。それはやっぱり格闘家なので一番は「強い」というイメージがあればいいんですけど。「30億分の1」を目指すように言われてますので。
――30億分の1、ですか。
中井　はい。これ最近、館長発で出てるんですけどね。エヘヘへ。人類は60億人いるので、その半分ぐらいは女性だろう、と。それで将来人類の女性の中で最強の30億分の1になれるようしようと。だからイメージはまず「中井りん、強いよね」というのがいいですよね。
――じゃあ、セクシーショットが出ることによって、本物志向のイメージが崩れるという心配はされてないんですね。
中井　うーん、「そんなことないのでは?」と思うんですけど。やっぱり強さは、負けないことであったり。だから、あまりそういう心配はしてませんよ。
――ただ、たとえばヴァルキリーの試合などはなかなかたくさんの人たちが観られる環境って、まだないじゃないですか。そういうなかで中井選手の強さというのはなかなかうまく伝わっていかない部分もあったりしますよね。
中井　それはもちろん地上波なんかで取り上げてもらえたらいいし、雑誌にも取り上げてほしいと思ってますよ。
――それはやっぱりセクシーショットよりも、そっちを見てほしい、と。
中井　試合のほうがメインだし本職だし。写真なんかは、やっぱりその次ですかね。でも、人間の半分は女性なので、もっと女性にも権利があっていいと思ってて、男性ばかりではなくて、もっと女性も取り上げてくれたらいいなと思うんですけど。
――もっと取り上げてもらうために、どんなことをしたらいいと思いますか?
中井　う～ん、やっぱり、いまも関係者の皆さまとかは凄く努力してくださってると思うんです。なので、凄いなあとは思うんですけど。
――その第一歩として、中井選手がこういういろんな格好で、ホームページに出たりとか、そういう思いもありますか?
中井　そうですねえ。取り上げてもらうために、どんなことをしたらいいか……ちょっと待ってください。ええっと……。
――ど、どうしたんですか、急に?
中井　えー、話題性として、やっぱり個性、私自身の個性を見てもらって、それで個性を伸ばすということです(一本調子で)。
――な、なるほど。なぜいま棒読みだったんでしょうか……。
中井　(間かずに)とにかく私自身は強くなって勝ち続けて、個性を見てもらう、フフフ(笑)。
――中井選手はずっとヴァルキリーに上がってらっしゃるじゃないですか。その

一方で、ジュエルスという団体がありますが、そこにはライバル意識はありますか?
中井　いや、ライバル意識なんかはまった





か?(笑)。
中井　アハハハハ。原稿でなんとかしてください(笑)。
――え、ええっと、では中井選手

一方で、ジュエルスという団体がありますが、そこにはライバル意識はありますか？

中井　いや、ライバル意識なんかはまったくないですね。そこは分けては考えてはいないですね、私個人として。

——同じ女子格として考えているわけですね。

中井　はい。だからどちらにも出ていいと思うし、どちらも盛り上がればいいと思っています。もっと女子格闘技を広めていって、私ももっと語っていきたいと思いますし。

——なるほど。

中井　女性男性にかかわらず、闘うということは本能的に持ち合わせていると思うし、動物的に大事なことだと思うので。だから、自然に身体を動かして、自然に闘うかなというような感じで、考えてもらえたらいいんです。

——ちょっといま格闘技界って元気がなかったりするじゃないですか。そこで女子格がもっと盛り上がるためのアイデアみたいなのはありますか？

中井　そうですね。どうしたら盛り上がるか……ええっと……「いまどうしたら盛り上がるか？」ですよね。その話は……基本、スポンサーの問題。

——ス、スポンサーの問題？　いきなりですね（笑）。

中井　はい。やっぱりスポンサーがつけば大々的に売り出していけると思うので。ちょっと待ってください……あとは、ほかの格闘技との連携も大事だと思います。

——ほほう。ほかの格闘技といいますと？

中井　キックボクシングや格闘技団体のです。その連携も大事だと思う（再び一本調子で）。

——と、突然棒読みになるのはなぜですか？（笑）。



Rin Nakai

なかい・りん■1986年10月22日、愛媛県出身。06年10月にパンクラスでプロデビュー。その後スマックガール→ヴァルキリーに参戦、WINDY智美や藪下めぐみを下し現在7連勝中と正真正銘本物志向のファイターである。このページで衝撃を受けた読者の方は、ぜひホームページ（http://rinnakai.sakura.ne.jp/）もご確認ください。156cm、61.2kg。

中井　アハハハハ。原稿でなんとかしてください（笑）。

——え、ええっと、では中井選手自身は、どうやったら盛り上がるのかなというふうに考えてらっしゃるんでしょう？

中井　やっぱりさっき言ったみたいに、個性を伸ばす。私の話題性として、露出していったり。フフフ。そして一番は強さを磨く、強さを身につけることです。

——試合でも魅せるし、コスプレもするし、と。

中井　コスプレは、フフフフ（笑）。でも、大丈夫ですかね。私のコスプレ。皆さんが言うほど自信ないんですけど。

——いやいや、見てるほうはもの凄く圧倒されますよ。

中井　でも、そうですね。どんどんアピールして、いろんなところに出られるようにやっていきたいですね。やっぱり、それが私ができることだと思うんで。

——じゃあ、メイドコスプレにも一層力が入りますね。

中井　エヘヘヘ。そうですね。また撮りたいです。あと、『kamipro』さんには最新作の写真も撮って送りますんで、ぜひ使ってください。

——ありがとうございます。刺激的なショットを期待してお待ちしております！

【10年9月2日／電話取材にて収録】

（※と言って、送っていただいたのが上の写真。「この写真は私が腹筋やブリッジなどトレーニングしているところなので、へんなこと考えないでください（笑）ハハハハズカシイヨ〜」というコメントつきだ。うーん、言葉の意味はよくわからんが、とにかく凄い写真だ！）。

マット界に求められる場面転換!!
新しいものはおもしろい！

女子格闘技を大晦日にやりた～い！

FEG代表 谷川貞治

未曾有の大不況によって興行力の低下に見舞われているFEGは、
投資銀行PUJIとの提携によって生き残りを図ろうとしている。
そのプロジェクトの行方はどうなっているのか？
そして迫り来る大晦日の隠し球はあるのか？　教えてサダハルンバ！

聞き手／ジャン斉藤　写真／吉場正和



——今月もいろいろと聞かせていただきます！

谷川　あんまり決まってないんですけ

谷川　投資候補の会社は5つくらい集まってますね。

——あら、凄いですね。

きてないんですけど。もう何をやってんだかわからないくらい忙しかったし。

——そんなに忙しいんですか（笑）。たとえば今日のスケジュールはどんな感

のファイナル16をやるんですけど、それを発表する前に日菜太選手サイドから「日菜太vsアンディ・サワーをSBでやることが決まりました」という連絡が来たんです

―今月もいろいろと聞かせていただきます！

谷川　あんまり決まってないんですけどね～。

―んあ～、ＰＵＪＩからの投資話もまだ何も決まってないんですか？

谷川　固まってなくはない。絶賛稼働中ですよ。

―でも、国内外で「ＰＵＪＩの話なんて、ホントはないんじゃないか？」みたいなネガティブな噂になってますけど。

谷川　んあ～！　そんなことはないよぉ!!

―ホントですか？

谷川　ホントホント。……みんなヒマだな～。

―ダッハッハッハッ。

谷川　ＰＵＪＩの関係者とは今日も会いますよ、夕方に。

―多くのファンはＰＵＪＩの動向を凄く気にしているんですよね。やっぱりこの投資話は日本格闘技界の浮沈がかかってますから。

谷川　マジメな話さ、発表して２ヵ月ぐらいで固めるって意味では、今月末くらいを目指してやっているんで、その頃には落ち着きますね。

―落ち着くってはどういうことですか？

谷川　要するに新しい体制ができてスタートが切れるということですね。

―ズバリ、肝心の投資家は集まってるんですか？

谷川　投資候補の会社は５つくらい集まってますね。

―あら、凄いですね。

谷川　うん。ホントホント。とりあえず今月中に一段落つきますね。

―やっとそこで谷川さんも肩の荷が降りるわけですか？

谷川　肩の荷がちょっと降りるね～。ここ１年くらいはずっと格闘技の仕事ができてないんですけど。もう何をやってんだかわからないくらい忙しかったし。

未払いの件はほとんど解決してるし 残りも解決するよ、すぐに



PUJIとFEGの提携には懐疑的な目を向ける関係者も多い。その効果がマット界に表われるのかはいつなのか。それ次第では日本格闘技界の行方は大きく違ってくる。なお、真ん中の関係者は上井駅長ではない。投資銀行PUJIのチェン氏であるよ。

―そんなに忙しいんですか（笑）。たとえば今日のスケジュールはどんな感じなんですか？

谷川　今日はこのあとＳＲＣの関係者とミーティング。

―してるじゃないですか、格闘技の仕事！（笑）。

谷川　いろいろとあるんだよぉ。そのあとＰＵＪＩのミーティングだね。

―今日のＰＵＪＩとのミーティングはどんな話をするんですか？

谷川　資料を出したりするの。いま契約をまとめている最中だから。

―手ごたえはあります？

谷川　手ごたえというか、もうＯＫはＯＫなんです。あとはホント細かい話をしてるんです。

―２ヵ月前に会見を開いたじゃないですか？　いまに至るまでに予想外のことってありましたか？

谷川　え～っと、時間がかかったくらいで悪い話はないですね。だからもう９月10月くらいまで待ってくれれば、またブイブイいわせますよ～！

―ブイブイって（笑）。

谷川　うん。朝青龍だろうが誰だろうが、ガンガンやるからね。

―でも、立ち技方面がけっこうドタバタしているじゃないですか？

谷川　ドタバタしてるよ、ホントに

―たとえば、シュートボクシングで実現する日菜太選手vsアンディ・サワーの件にしても。

谷川　また細かいこと聞いてくるねぇ。

―細かいですかね？（笑）。

谷川　あれはね、今度10月３日にＭＡＸのファイナル16をやるんですけど、それを発表する前に日菜太選手サイドから「日菜太vsアンディ・サワーをＳＢでやることが決まりました」という連絡が来たんですよ。ビックリしちゃってさ。じつを言うと、日菜太くんもアンディもベスト16に入れたかったから。で、向こうサイドからすれば「谷川さん、日程を含めてもうちょっと早く言ってくださいよ」って。それはそれで仕方ないわけですよ。ただ、ボクとしては事後報告はちょっとどうかなと思うんですけど、そういう行き違いがあったわけですよ。

―パワーバランス的なこと言っちゃうと、ＦＥＧの運営が揺らいでることでそういう動きが出てきているという実感はありますか？

谷川　実感というか、ボクがホントにね、あまりにコミュニケーションをとれていないのが問題だと思ってます。反省しています。

―それはＰＵＪＩの投資問題にかかりっきりで。

谷川　うん。だからコミュニケーションをとれていない。本当は10月のＭＡＸに日菜太くんを出すつもりだけど「今回はしようがないね」って。連絡していないボクが悪かった。でも11月には出しますよ。

―それと海外ファイターのファイトマネー未払いの問題も騒がれていますね。

谷川　まだ？　それはもうほとんど解決してるし、残りも解決するよ、すぐに。失なった信頼という点でも、そこは地道にやっていくしかないし、なんだかんだ言って、そのへんの部分でご迷惑かけた人たちで離れていく人ってホントに少ないんですよ。まったくいないとは言わないけどさ。

——そこは、FEGを信頼してくれってことですか？
谷川　そうですね。「とにかく頑張ってくれ！」って言ってくれてる選手や関係者も多いし。時間的なことで少し遅れていますけど9月、10月で解決できると前から言ってるし、もうちょっとであらゆることで解決できると思う。
——では、以前の運営力を取り戻せそうですか？
谷川　やっぱりご迷惑をかけた部分では、最近になって仕事をすることになった新しいファイターがいるじゃない？　そういう人たちはFEGに対しての信頼感を作っていかないとね。
——まだまだ信頼関係が浅いこともあったりしても。
谷川　そこはまだ関係が弱いところもあるので新しい選手はしょうがないと思ってるし、一件一件できるかぎりの対応はしているのだけど。ただ、思ったのはこういうときに性格が出るというか、人間性がよくわかるんだよね。
——というと？
谷川　もちろん悪いのはボクらなんだけど、腹が立つのはさ、あることないこと言って焚きつける部外者も多いんだよ。
——まあ、そういう業界ですから。
谷川　そして「おまえがボクらを助けてくれないと……」っていうヤツにかぎって、この期におよんでビックリする要求を言ってくる。でも、本当に助けてくれる人もいっぱいいますよ。たとえばKIDくんとか「大丈夫ですか？」って気を遣ってくれる。
——そこは腹が据わってるんでしょうね。
谷川　少し遅れてもKIDくんは意外と言わないんだよね。ただ、いまはケガしてるからなかなか試合のオファーは受けられないんだけど、KIDくんの存在は精神的に助かってます。あとバス・ブーンとかピーター・アーツとかアルバート・クラウスとかも「K—1あっての自分だから」って気を遣ってくれたり。苦しいときにフォローしてくれる人たちのためにも頑張りたいなって思うよね……（しみじみと）。
——土壇場で本心が出るってことですね。
谷川　いま弱ってるからって感じで強気に出たりする人もいるし。ホントに人が出るな、と。あとさぁ、△△もあることないこと言ってるんだよ？（唇を尖らせながら）。
——え、△△さんが？　ダハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！


今回のDREAM参戦は見送られたSRCフェザー級王者マルロン・サンドロ。活性化するフェザー級戦線には刺激的すぎる存在だ。誰と闘ってもおもしろい！

これからはK—1MAXにしても選手の入れ替えをしていきますから

谷川　笑いごとじゃな〜〜い！（怒）。
——さすが期待を裏切らないなあ。
谷川　いや、文句を言ってくれて全然いいんですよ。でも、なぜ△△に責められないといけないんだろうって思わないの？
——いい話だな〜（笑）。
谷川　全然よくないよ！　そういう話は一生覚えてるから。一生、根に持とうと思って!!
——怖い話だな〜（笑）。
谷川　まあ、そんな話はいいんだけど、これからどんどん挽回していくから！　MAXにしても選手の入れ替えをしていきます。アンディ・サワーは試合が決まっちゃって出られないっていう背景はあるんだけど、このままだとブアカーオやアンディ・サワー、ペトロシアン、キシェンコの争いになっちゃうじゃない。そうなると、ワールドグランプリの世代交代の失敗を繰り返すことになるから。
——それはお金の問題が絡んでるんじゃなくて？
谷川　MAXのお金の問題は全部終わってるんで、そこは関係ないんだけど。ペトロシアンは出すけどね、（昨年の）チャンピオンだから。
——そういう場面転換には大賛成です！
谷川　もうなんかね、ワールドグランプリは世代交代に失敗したから。マッチメイクにしてもいつまでも昔のスター選手にこだわりすぎてしまった。
——他人事のように言ってますけど、谷川さん、あなたがプロデューサーだったんですけども（笑）。
谷川　ゴメンゴメ〜ン。プロデューサーとしてのボクの失敗は、昔の選手を引っぱりすぎてしまった。アーツみたいな選手は一人いてもいいけど、ほかの選手たちにもいいマッチメイクというかチャンスを与えすぎたかなって。だからホントに苦しいかもしれいけれど、これからは新しい選手にチャンスを与えたいですね。
——ブアカーオは63キロに転向する話があるんでしたっけ？
谷川　え〜っと、いまそういうオファーをかけてます。
——いわゆる魔裟斗時代の70キロの選手は全員チェンジしたい？
谷川　……くらいの気持ちはあります。なぜかというと「クラウスと闘いたい」っていう選手が多いから。あとわかりやすしね、ファイトスタイルが。
——確かにそうですね。
谷川　いまのメンツのまま競わせても、ホントね、わかりづらいんですよ。彼らは強さで競うんじゃなくて、うまさで競い合っちゃってるから。だからあきらかに相手のほうが強いんだけど、ブアカーオのうまさにやられちゃうんだよね。だったら元気のいいタイ人を出したりしたほうが活性化するでしょう。だってさ、決勝戦がキシェンコ、ペトロシアン、クラウス、佐藤くんになったら「何を観ればいいの？」って思わない？
——まあ、魔裟斗がいないだけだなって。



石井選手にオファーしました。今回は条件が合わなかったですけど

谷川貞治

谷川　しかももの凄く僅差の判定になると思うの。どっちの手数が多いかとか。それだと新しいファンもつかないと思うし。あらゆる意味で、ワールドグランプリもMAXもDREAMもそうかもしれないけれど、我慢時ですね、いまは。

――ところでSRCとの関係はどうなってるんですか？　DREAMへの選手派遣の話は崩れてしまったみたいで。

谷川　もともとはSRCとのほうから「出場できないか」ってお願いされたんですよ。で、泉（浩）選手に関してはミノワマンかサクちゃんを考えてて。でも、サクちゃんが「メイヘムとやりたい」ってことだったんでミノワマンにして。マルロン・サンドロに関しては「ウイッキーはどうですか？」って話をしたの。

――宇野薫vsマルロン・サンドロの噂もありましたよね。

谷川　それは調整がつかなくて。でも、SRCさんのほうから「泉vs桜庭、ビビアーノvsサンドロにできないか」っていう返事がきたんです。でもサクちゃんはメイヘムとやるし、ビビアーノは出場すら危ういから。そこで調整がつかないから今回は見送ったんだよね。

――マッチメイクの問題だったんですね。

谷川　でも、まだ一緒に何かをやりましょってことでね、10月31日のSRC両国大会に、たとえばマッハとか石田くん、メルヴィン・マヌーフを派遣するって話もあるんですね。でもさ、それ以前の問題として、ボクとしてはビビアーノとできなくても、サンドロvsウィッキーはおもしろいと思うんだよなあ。たとえばサンドロはウイッキーや所くんに勝ったりして知名度を上げてから、ビビアーノとやっても遅くはないと思うし。泉選手もミノワマンとやればテレビ中継されるでしょ。絶対に選手やプロモーターにとってもいいマッチメイクだと思うんだけどなあ。

――ビビアーノが出られないのは海外等で報道されている未払いの問題があるからですか？

谷川　いや、お金の問題は終わってますよ。だけど、なんかビビアーノの育ての親が危篤なんでブラジルに帰ってるんです。どのみちに出られないんですよ。

――SRCから真騎士の出場計画もあったようですけど。

谷川　あった。SRCさんの希望としては「川尻達也か菊野克紀」だったんだけど、川尻くんはケガして大晦日すらもどうなるかわからないし、菊野選手は10月にDEEPに出るでしょ。難しいオファーでしたよね。

――でも、交流戦に関しては前向きに検討するんですね。

谷川　オファーされればボクは前向きに検討しますし。ただ、10月の両国に「KID、青木、川尻を出せないか」って希望がきてるんだけど。

――また手負いの川尻！　しかもKIDと青木の出場って、また難しい注文ですねぇ（笑）。

谷川　二人ともこっちの柱だから簡単にできる話じゃないよね。それに選手って〝モノ〟じゃないからね。「なぜSRCに出たほうがいいのか」っていう説明からしなきゃなんないじゃん。そこはお金の問題じゃないから凄くデリケートなんだよ。

――しかし、去年の年末からSRCは川尻達也が好きですね。よっぽど首がほしいのか（笑）。

谷川　というか無理だから。川尻くんがケガしてるって知らないのかな～。まあ、今日提案しようと思ってるのは、マッハとか石田とくんかメルヴィンとか、場合によってはゲガール・ムサシも出せると思うんだけど。

――あと今回のDREAM名古屋大会に石井慧選手が出るって噂もありましたけど？

谷川　オファーしました！

――へぇ～、ホントですか？

谷川　オファーしましたけど。ちょっと条件が合わずに。

SRCさんが大晦日のイベント？ ファン層はバッティングしませんから

――石井選手はSRC側と契約はないんですか？

谷川　あります、あります

――それは問題ないんですか？

谷川　SRCに断ってというか。でも、条件が合わなかったというか、SRCさんも10月の両国大会に出す動きがあったので、今回はボクらが引いたかたちですね。

――なるほど。そこはSRCサイドの了解があればDREAMに出られるんですね。

谷川　もちろん。あとは条件が合えばの話ですけどね。

――でも、SRCも大晦日に興行をやるみたいな話がありますけど。

谷川　いいんじゃないですか。ウチとファン層はバッティングしないですし。SRCさんが自主的にやられることに関してはとくに感想はないですね。

――ちょっと先の話ですけど、今年の大晦日はどういうテーマを打ち出したいですか？

谷川　大物を引っぱりたいですね。他ジャンルの！　それはやりたいなと思っています！

――ドスコ～イ！　なんか一人しかいないような気がするんだけど（笑）。

谷川　いまちょっと格闘技界がみんなに心配されてるから、元気に見せられたらな、と。なんか大きなことをやりたいなと思ってます。

――そこでオススメしたいのは、最近RENAという選手に存在感あるんですけど。

谷川　人気あるんだってね！　女子格闘技はやりたいなあ。

――女子ってどのジャンルでも間口になるところってあるじゃないですか。RENAは非常にルックスもいいし、試合もアグレッシブでおもしろいんですよ。

谷川　女子格闘技の可能性は凄くありますね。こないだツイッターで「RENAって知ってますか？」ってファンの人に聞かれてさ、ボクはブラジルの選手かと思って「知らない」って書いちゃったんだけど。RENA選手は知ってますよ！　女子格闘技は今年の大晦日か来年からくらいやりたいですね～。



魔裟斗引退により新風景へのスイッチを余儀なくされたK-1MAXにかぎらず、MMAも同様にテン年代における新しい格闘技のあり方が問われてくる。はずだろ～（菊地成孔調）。

谷川貞治

――いままで女子格闘技をやらなかった理由はあるんですか？

谷川　単純に手が回らなかっただけかな。あと、考え方が古いのかもしれないけれど、女子格闘技に対する抵抗感はあるのかもしれないです。ボクはとくにMMAはダメだな～。パワーがないから打撃でなかなか決着がつかないし、関節が柔らかすぎてギブアップしないから観てて「ウワ～ッ！」って目を背けちゃうんだよね。男だったら絶対に極まってるのにタップしないから、あれはレフェリングも難しいと思うよ。そういうこともあって、どっかで抵抗感があるのかも。

――では、やるんだったら立ち技ですか？

谷川　立ち技からだと思いますよ。RENAさん、いいですね。韓国のイム・スジョンっていう女の子も人気あるし。ただ、このまま男子に混ぜるっていのもどうかって考えもあるし、ルール等を含めてそこはちゃんと考えないとね。

――男子と混ぜると比較されちゃいますし、女子のカラーが薄まっちゃうかもしれないですね。

谷川　そう、薄まっちゃうから。そこは難しい。女子に関しては、ボクシングの金平会長が女子ボクシングを大々的に進めていきたいって気持ちがあって。その中でキック志望の人たちもいるから「K―1のほうでどうですか？」っていう話をさせてもらっていたこともあるんですよ。だから、さっき言ったように、女子格闘技に対する抵抗感ってテレビ局の中にもあるんだよね。

――テレビ局にも感じますか。

谷川　うん。それはね、前に女子格闘技をテレビ局にプレゼンしたことがあるんだけど、そのときに感じた。やっぱりどっかでちょっと抵抗感ありましたね。女子の殴り合いは地上波にちょっと受け入れがたいのかなあ。

――谷川さんは女子格闘技にはどんな魅力を感じますか？

谷川　K―1甲子園じゃないけれども、女の子がここまでやれるんだっていう驚きがまずあるのかもしれない。それはプロと比べたときのレベルじゃなくて、高校生は高校生の、女子には女子のひたむきさだろうね。なぜこういう時代に女の子が格闘技目指すんだ？　というテーマはけっこう深いし、おもしろいんじゃないかなって思いますけど。

――ドラマが見えやすい、と。

谷川　やりたいね、AKB48にみたいな感じで！

――FEG48（笑）。

谷川　なんかそういうのユニット作りたいな～！　秋元（康）さんに負けてたまるか、と！

――あ～ぁ、また高いハードルを掲げましたねぇ（笑）。

谷川　来年で大晦日開催10周年だから、勢いをつけるためにも新しいことをどんどんやっていきたいよね。大和哲也くんみたいな若い子にどんどんチャンスを与えたいと思う。

――なるほど。つまり谷川さんのけだし名言である「中途半端バブル野郎」は飛んでしまえ！と（笑）。

谷川　中途半端バブル野郎は消えてなくなれ～！　ボクは消えないぞ～ぉ!!

【10年9月某日／都内・某所にて収録】

アントニオ猪木デビュー50周年記念特集

猪木とは何か?

クレイジー編



人間とは本当に驚いたとき
腹を抱えて笑いだす――
猪木の魔性を笑え!!

猪木は狂っていた! そして我々はその猪木に狂わされた!! アントニオ猪木デビュー50周年記念企画『猪木とは何か? クレイジー編』は、ズバリ言って猪木の狂気に狂わされた周囲の人間たちの証言を中心にお届けする次第である。ンムフフフ!

©Essei Hara

ガンツ 今回はアントニオ猪木デビュー50周年ということで「俺たちの

たんだけど、いまは会社は会社、プライベートはプライベートのご時世だからな。


って感じで（笑）。

玉袋 でもよ、この頃ってまだ新日が旗揚げして10年経ってねえわけだ

もんね（笑）。

玉袋 屋根がトタンだもん。そりゃ暑いよ。

曹〟だったんだよ。俺たちプロレスファンは戦争は知らないけど、山本小鉄という〝鬼軍曹〟はよく知ってた



浅草キッドの玉ちゃんと語る！

俺たちのアントニオ猪木変態座談会

TPG（たけしプロレス軍団）の真実がついにあきらかに！

アントニオ猪木デビュー50周年ということで、今回のテーマはもちろん「猪木」！ 物心をついたときからプロレスファンで、猪木のことばかりを考えて生きてきた変態メンバーは、はたして猪木の何を語るのか？ さらに今回はたけし軍団の一員である玉ちゃんが、あのTPG（たけしプロレス軍団）の真実をついに語る！ 読めばわかるさ！

構成／堀江ガンツ　撮影／原 悦生

小鉄さんと焼肉屋に行ったら注文は全部20人前だったよ！

ガンツ　今回はアントニオ猪木デビュー50周年ということで「俺たちのアントニオ猪木変態座談会」として行なおうと思うんですけど、その前に、まずは山本小鉄さんに献杯しないといけないかな、と。
玉袋　そうだな。とりあえず献杯。とりあえず1000回だよ！
椎名　小鉄はスクワットが「とりあえず1000回」だもんね（笑）。
ガンツ　では、我らが鬼軍曹、山本小鉄さんに献杯！
一同　献杯！
玉袋　俺はよ、今日は絶対に小鉄さんの話になると思って本を持ってきたから。
椎名　『山本小鉄　鬼軍曹のプロレス一代記』、いいですね〜！（笑）。
玉袋　この本に載ってる写真がいいんだよ。見てみい、この写真！
ガンツ　おお！これは70年代末ぐらいの新日本プロレス全選手が参加した野球大会の集合写真ですね。
玉袋　こんないい集合写真ないよ！猪木を中心に坂口、小鉄、藤波が脇を固めて、長州、前田、ジョージ、平田、みんないるよ！
椎名　もちろんドン荒川もいて（笑）。なんかアットホームでいいですよね。こういう雰囲気の会社っていま一般社会にもない。
玉袋　ないよ。昔は社内で親善ソフトボール大会やったりよ、としまえんのビアガーデン行ったりとかあったんだけど、いまは会社は会社、プライベートはプライベートのご時世だからな。
椎名　新日本プロレス合宿所にプライベートなんてないですもんね（笑）。
玉袋　ねえよ！　鬼軍曹・山本小鉄が親代わりの大家族だもん。毎日が大家族スペシャルだぜ。
ガンツ　それにしてもこの写真、野球大会なのに、みんな上半身裸なのがいいですよね（笑）。
玉袋　いいんだよ〜。リアル・アパッチ野球軍だもん。
椎名　「俺たちゃ裸がユニフォーム」って感じで（笑）。
玉袋　でもよ、この頃ってまだ新日が旗揚げして10年経ってねえわけだろ。みんな夢に向かってピュアだったと思うよ。アントニオ猪木っていう大エースがいて、小鉄さんみたいな番頭がいるって最高だよ。道場は任せとけばいいし、それでどんどん若手が育っていったんだもんな。



椎名基樹
1968年4月11日、静岡県出身の42歳。本誌の好評長寿連載コラム『サムライ三昧』でもおなじみ、変態座談会癒しの重鎮。構成作家、放送作家。少年時代は静岡で夕方放送だった新日中継に夢中。

玉袋筋太郎
1967年6月22日、東京都出身の43歳。子どもの頃から蔵前国技館に通った変態プロレスエリート。あの第2回IWGP決勝後の蔵前大暴動も体験。今回はたけし軍団の一員として、TPGの真実を語る！

堀江ガンツ
1973年9月14日、栃木県出身の37歳。変態座談会主宰者。ちっちゃい頃から変態的プロレス&格闘技ファンとして鳴らし、UWF研究家を自称。第2回IWGP会場で「ひまわりナッツ」購入経験あり。

椎名　やっぱり何が新日本プロレスという世界でも特殊なプロレスを作ったかっていったら、やっぱり道場だもんね。
玉袋　だから、野毛の練習は相当凄かったんだろうな。誇張もあったんだろうけど、道場の中はホントに気温50度あったと思うよ。
椎名　子ども向けのプロレス入門とか漫画にかならず書いてありましたもんね（笑）。
玉袋　屋根がトタンだもん。そりゃ暑いよ。
ガンツ　でも、いまはトタンじゃなくなってるんですよね。
椎名　そうなんだ。ソーラーパネルとか貼ってあるの？
ガンツ　そんな〝エコ新日〟にはなってません（笑）。
玉袋　エコ新日は嫌だな〜。オール電化の新日なんて見たくねえだろ。IHでちゃんこ作ってほしくねえよ！
ガンツ　やっぱり、みんな上半身裸でちゃんこ10杯、メシ10杯とか食ってほしいですよね。
玉袋　俺なんかもさ、小鉄さんとは何度か番組でご一緒させてもらってさ。新日ドーム大会に招待してもらったこともあって、浅草キッドと江頭2：50、早坂好恵ちゃんに高田文夫先生ってメンバーで観に行ったんだよな。で、試合後は小鉄さんを交えて焼肉屋に行っちゃってさ、そんとき小鉄さんが注文してくれたんだけど「カルビ20人前、ロース20人前」とか、全部20人前なんだよ！
ガンツ　単位が20人前から（笑）。
玉袋　しかも、そんときは払いもすべて小鉄さんだから。
椎名　プロレスラーですねえ！
玉袋　それで俺たちが「もう食べられません」とか言うと、「若いのにこれだけしか食べられないの？　ウチの若い衆連れてきたら、店の肉全部食っちゃうよ」なんて言ってな。
ガンツ　かつての新日はハッタリが効くし、そのハッタリが嘘に聞こえないリアリティがありましたよね。
玉袋　そのリアリティの要が〝鬼軍曹〟だったんだよ。俺たちプロレスファンは戦争は知らないけど、山本小鉄という〝鬼軍曹〟はよく知ってたからね。
椎名　そうですよ。〝鬼軍曹〟といえば、小鉄とサージェント・スローターだもん（笑）。
玉袋　くだらねえな（笑）。でも、やっぱり鬼軍曹がいた新日本プロレス道場っていうのは、俺たちの憧れだよ。
ガンツ　では、小鉄さんがいたからこそ、新日本プロレス、アントニオ猪木が光ったということで、猪木さんの話に移りましょうか。
玉袋　そうだな。小鉄さんに合掌して、猪木さんの話題に移ろう！
椎名　猪木ってデビュー50周年なんでしょ？　50年って凄いですよね。
玉袋　すげえよ。半世紀だぜ。いまよ、ガンツが36歳で椎名42歳、俺が43歳だけどよ。俺たちは物心ついて「猪木」ってもんを認識してから、ずっ〜と猪木のこと考えてるんだもんな。
椎名　確かに。最近は考えないけど、PRIDEの頃まではガンガン考えてましたよね（笑）。
玉袋　だから、これは勃起だな、と。朝起きたら自然と朝立ちしてるように、自然と猪木のこと考えてるんだよ。でも、40歳すぎて朝立ちが少なくなってきたように、自然と猪木のことを考えなくなってきてるのは、ちょっと寂しいよな。
ガンツ　ち○ぽの勃起率と猪木への勃起率はリンクしてますか（笑）。
玉袋　してるね〜。どっちもビンビンにしてほしいんだよ！
椎名　でも、いまでも猪木のこと思い出すことありますよ。たとえば、

俺たちのアントニオ猪木変態座談会

前回の変態座談会みたいに大遅刻したときなんかは、「ピンチになったとき開き直れることが私の精神力の強さ」っていう、猪木の言葉を噛みしめるから(笑)。

ガンツ 椎名さんの座右の銘(笑)。

玉袋 俺たちだって「スキャンダルを経営に結びつける」ってことばかりやってきてたからな。だから、なんだっていいんだよ!

ガンツ 思えば猪木こそピンチだらけの人生ですしね(笑)。

椎名 借金だらけの人生だもんね。

ガンツ 僕なんて小学校低学年でプロレスを見始めた頃、ちょうど猪木さんはアントン・ハイセルで首が回らない時期ですからね。

玉袋 あの頃、子どもたちのお小遣い、子どもたちの夢が、すべてハイセルという見果てぬ夢につぎ込まれてたんだよ。あれを思えば、円天の会長のスケールなんか小さい小さい!

ガンツ だから当時のプロレス雑誌はちびっ子ファンもたくさん読んでたのに、モノクロ巻頭とかは「横領」「借金」「クーデター」とか物騒な言葉ばかりが踊ってるんですよ(笑)。

玉袋 ガンツの時期はそうだろうな。俺なんかはまだハイセルが「夢の事業」って言われてる頃から見てるからね。

椎名 ハイセルって最初は凄くポジティブに報道されてましたよね。

玉袋 そりゃそうだよ。世界の食料危機を救う事業だもん。親父のプロレス八百長論に対抗するために「猪木さんは素晴らしいことをやろうとしてるんだ!」とか言ってたからな。

ガンツ アントン・ハイセルって、いまで言えばエコですもんね。

玉袋 エコエコ! だってよ、サトウキビから石油に代わる燃料を作り、その搾りかすを家畜飼料にするんだぜ。究極のエコだよ! 猪木はなんでも早すぎるんだよ。TPGから何から全部早すぎ。

ガンツ 世が世ならハイセルに助成金が出てるかもしれない(笑)。

玉袋 ハイセル減税だよ。こんな夢みたいなエコないんだから。

椎名 そういう夢みたいな話にすぐだまされちゃいますよね(笑)。

玉袋 そのぶん、自分もだましてるんだろうけどな。だって商売がだます商売なんだから。俺たちは「だまされた」じゃなくて「いい夢見させてもらった」って感謝しかないけどな。俺だってよ、2003年の『猪木祭り』さえなきゃ、いまでも猪木にビンビンの勃起状態だったと思うよ。

椎名 確かにPRIDEだって、まだ健在だったでしょうね。

玉袋 そう考えると罪なことしてくれたとも思うけど、いろんなものを破壊するのも猪木なんだろうな。

椎名 起業家としてはともかく、プロレスラー猪木の話で言うと、猪木って「技」の人だと思うんですよ。技がいちいち美しいんですよね。

玉袋 美しいよ!

ガンツ あれほど技のかたちが絵になる人もいないですよね。

椎名 日プロ時代とか写真でしか知らないけど、アントニオドライバーとか超カッコいい!

ガンツ 背筋力だけで投げるフロントネックチャンスリードロップですよね。

椎名 そういう美しい技って、猪木からだと思うんですよ。それまでは空手チョップの世界だったわけじゃん。だからタイガーマスクが出てきたような衝撃っていうのを、昭和40年代前半には猪木に感じてたんじゃないかなって。それまでジャーマンなんて、ほとんどなかったじゃん。

玉袋 ストロング小林戦のジャーマンなんて最高だもんな。

ガンツ 美しいんですよね。卍固めも猪木さん以外の人がやるとサマにならないし、延髄斬りだって、冷静に考えればどうってことない技じゃないですか。

椎名 単なるジャンピングハイキックだもんね(笑)。

ガンツ でも、猪木の延髄斬りはフォームが超カッコいいから、フィニッシュになりえるんですよね。猪木、前田、佐山って、みんな蹴り技のフォームが飛び抜けて美しいんですよ。延髄斬り、ニールキック、ローリングソバットって、いろんな人が使うけど、いまだにその3人より美しく蹴れる人が現われない。

玉袋 そこが木村健悟の稲妻レッグラリアートとの違いだよな。

ガンツ あれは技自体使う人がほとんどいませんからね(笑)。

玉袋 猪木は蹴り技だけじゃなく、ニードロップだってカッコよかったじゃん。

ガンツ ニードロップは飛ぶ前がいいんですよね。コーナーの上で獲物を狙ってる感じで。

玉袋 ガンツ、いいとこ見てるよ! 猪木はリング上で360度、ガンツみたいな変態に見られてるわけだろ、だからうしろ姿ですら魅せてたんだよ。

アントン・ハイセルはいまなら究極のエコって言われてたよ!

ガンツ タッグマッチでコーナーにいても猪木を見ちゃいますもんね。

玉袋 カメラが抜いてるわけじゃないのに、見ちゃうんだよな。入場から何から素晴らしかったよ。これは古舘(伊知郎)さんが言ってたんだけど、猪木はリングに上がる階段で3段まではパパッと素早く上がって、一瞬、間を置いてからサッとリングに入る、あれがいいんだよ〜。

ガンツ 緩急のつけ方ですよね。

玉袋 その横には若手時代のジョージ高野とか、前田日明が直立不動で立ってガウンを受け取ってな。

椎名 荒川がロープを開けてね(笑)。

ガンツ それもテレビマッチのときだけ(笑)。

玉袋 荒川がすぐテレビに映ろうとするんだよ! 新日本は猪木の脇を固めるレスラーも名優揃いだったよ。でも、名優は名優でも〝ハリウッドスター〟じゃねえ、そこがまたいいんだよ。

椎名 〝ミル・マスカラス〟じゃないんですよね。

玉袋 そう。ちょっと陰があるゲイリー・オールドマンみてえなのばっかりなんだよ。

ガンツ ローラン・ボックなんて、絶対に全日本のメインに登場しないですよね(笑)。

玉袋 居場所ねえよ! でも、新日本にはボックの指定席があるんだよ。

椎名 ボックとか、そういうヨーロッパの流れがいいんですよ。

ガンツ アメリカンプロレスとは違う、暗い感じ。ゴシックな感じが新日に合ってるんですよね。

玉袋 その一方で、釣り具の「がまかつ」、コマツのフォークリフトのCMもなぜか相性ピッタリなんだよな。ヨーロッパと新日とクリンビューがどうつながるか知らねえけど。

椎名 クリンビュー。「油膜のギラギラ危険です」だよね(笑)。

玉袋 あのへんの『ワールドプロレスリング』でしか見ねえCMもなんだか合ってるんだよな。

椎名 話は全然変わっちゃうんだけど、せっかく猪木がテーマだったら、玉ちゃんにTPG(たけしプロレス軍団)の話を聞かせてほしいんですよ。

玉袋 TPGか〜、あれは大変だったぞ!

ガンツ あのとき玉ちゃんはもうたけし軍団の一員ですか?

玉袋 もう軍団入ってる。まだ軍団の兄さん方のボウヤ(付き人)だけどね。

椎名 あのTPGって、猪木史でもビートたけし史でも一番謎でしょう。なんでそうなるのって(笑)。

ガンツ あんなのが実現するって奇跡ですよね。どういういきさつで始まったんですか?

玉袋 あれはよ、当時、殿(ビートた

ガンツ　アントン・ハイセルって、……よね。

……みたいな変態に見られてるわけだ

玉袋　居場所ねえよ！　でも、新日本

玉袋　あれはよ、当時、殿（ビートた

延髄斬りも卍固めも猪木以外のレスラーじゃサマにならない！

けし）がやってた『ビートたけしのスポーツ大将』って番組が、『ワールドプロレスリング』と同じテレビ朝日系だったんだよ。それで新日と『スポーツ大将』が連動するかたちでよ、何かできねえかってことで、ある人があいだに入って、猪木と殿が全日空ホテルで待ち合わせだよ。

ガンツ　猪木−たけし会談って凄いですね！

玉袋　そこに連れていかれたのが、なぜかハガキ職人のベン村さ来だったんだけどな（笑）。

椎名　なぜだ（笑）。まだ放送作家になる前のハガキ職人の時代ですか？

玉袋　そう。ベン村さ来に殿が「今度、猪木と会うからよ。おまえプロレス好きなんだから、来い！」って言ってさ。「たけしの刺客として出すマスクマンのアイデアを考えろ」ってことだったんだけど。で、殿と猪木が会談して、そのときベンちゃんが出したレスラーのアイデアが「カワカムリン」っていう包茎マスクなんだけどね。

一同　ダハハハハ！

椎名　猪木とビートたけしの前で、包茎マスクのアイデアを出すって、凄い勇気ですね（笑）。

玉袋　あとはマスク・ド・メロンとか、そんなのしかなかったんだけどよ。もう、殿と猪木が会うってことは、テレビの企画としてかなり動きだしちゃってるってことだから、『スポーツ大将』でもプロレスの企画やってさ、俺なんてマスク・ド・メロンのマスク被って試合してるからね。

椎名　へえ〜、プロレスやってるの？

玉袋　やったよ。学生プロレスみてえなもんを。そっから「たけしプロレス軍団（TPG）」が動き出したんだよ。でも、殿は「あとは適当にやっとけよ」って直接触んなくなっちまったからさ、ダンカンさんと（ガダルカナル・）タカさんをTPGの窓口にしてね。でも、二人ともプロレスそんなに知らないんだよ。俺たち浅草キッドは当時から猪木信者だからさ、兄さん方の出すアイデアを聞くたびに「そんなことやったら絶対にまずいですよ」って言ってたんだけど、やらざるをえないんだよ。

ガンツ　玉ちゃんは新日ファンのファン気質がわかってたわけですね。

玉袋　わかってるよ。こっちは第2回IWGP決勝で蔵前（国技館）の暴動に参加してんだから。で、TPGが動きだしたあとは、毎週月曜か火曜に中野坂上の居酒屋にダンカンさん、『東スポ』芸能部の安藤さん、そして俺たち浅草キッドが集まって作戦会議をやってたんだよ。

ガンツ　TPGの裏で動いてましたか！　プロレス史に名を残してるんじゃないですか（笑）。

玉袋　じつは密かにそうなんだよな。で、TPGが動きだしたのはいいけど、事務所がねえって話になってよ。結局、（水道橋）博士の家がTPG事務所ってことになったからな。

椎名　博士の家がTPG本部（笑）。

玉袋　しかも当時、博士は東大プロレス研究会の田中さんって人の家に居候してさ、自分ちですらないんだよ。だから、正確には田中さんの家の留守番電話がTPG事務所の電話番号だから。

椎名　くだらね〜（笑）。

玉袋　くだらないよ。だってTPGも一応役職をつけたんだけど、社長が井手らっきょだもん。

ガンツ　ガハハハハ！　たけし軍団の猪木だから（笑）。

椎名　計画が荒いですね（笑）。

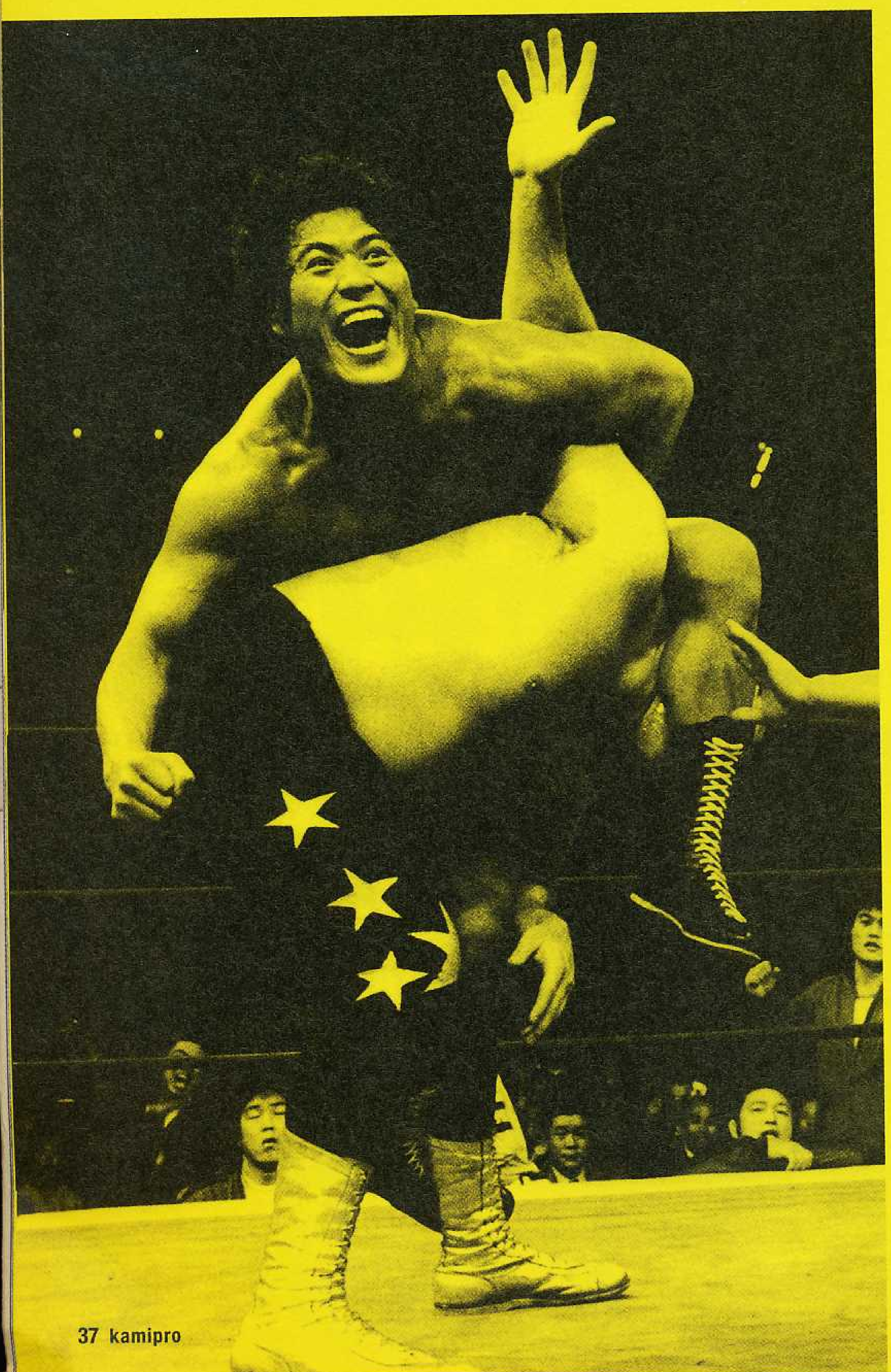
玉袋　荒いよ！『東スポ』とダンカンさんと村さ来と俺たちしか考えてねえんだもん。だいたい当初、TPGにはレスラーが一人もいないんだから。それで『オールナイトニッポン』とも連携してやってたからさ、ラジオでプロレスラーオーディションを募ってよ、そこに応募してきたのが、いまのスペル・デルフィンと邪道、外道。

椎名　でも、さすがにその3人を猪木と闘わせられないですよね。

玉袋　そりゃそうだよ。だってちょっと前まで単なるプロレスファンなんだから。まだベイダーが用意できてなかったときだからな。で、ちょうどその頃、大相撲九重部屋を辞めた大富士っていう相撲取りが「たけし軍団に入りたい」って来たんだよ。そしたら殿が「TPGに入れちまえ」って言って、『東スポ』が「TPGからの刺客はこいつだ！」って大富士さんのうしろ姿載せたりしてよ。でも、大富士さんは『風雲！たけし城』に出たいだけで、全然プロレスやるつもりねえんだもん。

ガンツ　TPGのスカウト失敗（笑）。

玉袋　結局、レスラーが決まらないまま、12月頭の両国（国技館）にダンカンさんとタカさんが挑戦状を持っていってね。でも、丸腰で行ってもおもしろくねえってことで、その週の『たけし城』で使った発泡スチロールでできたこん棒と、鬼が持ってる武器を持っていったんだよ。



椎名　ダハハハハ！　殺傷能力ゼロの武器を（笑）。

玉袋　それで両国に行ったらよ、「てめえら、何しに来た！」って新日ファンに囲まれちゃってさ。翌日、『東スポ』には「たけし軍団、凶器を持って乱入！　猪木ファンと小競り合い」とか載ってな。

椎名　発泡スチロールのこん棒なのに（笑）。

玉袋　それで一応、俺たちもボウヤとしてくっついていったんだけど、リングには上がれねえから、客席からファンと一緒になって「コノヤロー！タカ、ダンカン、死ね～～～！」とか叫んでたよ。

ガンツ　ここぞとばかりに日頃のうっぷんを晴らして（笑）。

玉袋　結局、TPGのレスラー問題は、そのあとマサ斎藤さんがレオン・ホワイトを連れてきて、そいつをベイダーにしてなんとか間に合ったんだよ。

椎名　そこに連れてきたのがレオン・ホワイトだったのが凄いよね。ベイダーって歴史に残るレスラーですもん。日本に来たガイジンレスラーで3本の指に入るでしょう。

ガンツ　おそらく新日史上最強のガイジンレスラーですよね。

椎名　それが、たけしプロレス軍団として登場してるのがいいよ（笑）。

玉袋　で、ベイダーの中に入るレスラーも決まって、いよいよ年末の『イヤーエンド・イン・国技館』を迎えるわけだけどよ、殿は「行きたくねえ、行きたくねえ」って言ってたんだよな。

椎名　そりゃ行きたくないよね。狂信的なプロレスファンが1万人以上待ち構えてるんだもん。1万人のキ〇〇イを相手にするようなもんでしょ（笑）。

玉袋　だから何かあっちゃいけねえってことで、軍団は全員集められたし、さらに殿の私設SPを8人くらい雇ったからね。それで厳重警備のなか会場入りして、裏の通路にいたら藤原組長に睨まれたりしてさ。当時、素人はバックステージに入れないっていうのがあったじゃない。

ガンツ　そういう時代でしたよね。

TPGの事務所は（水道橋）博士が居候していた家だったんだよ！



ビートたけしとマサ斎藤が並び、横にはビッグバン・ベイダー。うしろにはたけし軍団が控えるという、ありえない図。テレビ朝日、ニッポン放送を巻き込んで、最終的には大暴動というのだから、凄まじい奇跡だ。

俺たちのアントニオ猪木変態座談会

玉袋　だから、ホントに敵地に乗り込んだって状況なんだよ。

椎名　〝スペシャルゲスト〟じゃないのが凄いよね。

玉袋　だから殿はよ、ギリギリに来て自分の出番だけ済ませてすぐ帰るために、コートを着たままリングに上がったからね。

椎名　あのコート姿が凄い印象的。

ガンツ　あれだけ大騒ぎになってるなか、無表情で黙ってるんですよね。

玉袋　それで猪木が「受けてやるか、コノヤロー！」「お客さん、どーですかーーッ！」って叫んで猪木vsベイダーが決まったあと、殿はお役御免でそのまま会場をあとにしたからね。

椎名　だから、あのあと大暴動になったけど、そこにはたけしさんとか軍団の人は誰もいなかったんだよね（笑）。

玉袋　いや、じつはね。殿や軍団の兄さん方はみんな帰ったんだけど、俺たち浅草キッドは会場に残ってたんだよ。で、通路でメインが終わるまで試合観てよ、結局、最後はファンと一緒になって俺たちも暴動に参加しちゃってるんだよ。

ガンツ　蔵前暴動に続き、両国の暴動にも参加してましたか！（笑）。

玉袋　結局、そうなっちゃったんだよ。で、その次の日の『東スポ』一面の見出しは「猪木が悪い」。『東スポ』がさんざん煽ったくせに「猪木が悪い」だからね。まあ、それがいい落としどころになったんだけどさ。それ以降、もう何年も殿の前でプロレスの「プ」の字も言えなかったからね。

ガンツ　あんな経験はないですもんね。人気絶頂のビートたけしが1万人の「帰れコール」と罵声を浴びるという。

玉袋　でも、最初の全日空ホテルでの会談のとき、殿は猪木さんからプロレスの仕組みを全部教わったって言ってたよ。「プロレスはこういうもので、観客を怒らせ、喜ばせるものだから、ぜひお願いします」って。だから、これがハマってたら凄いものになってたかもしれない。

ガンツ　あれだけ観客が怒ることなんてないですもんね。それは逆に凄いですよ。

椎名　でも、あらためて猪木とたけしが一緒にリングに上がったって、プロレス史で一番わけがわからない空間だよ。

玉袋　俺も弟子ながらわけがわからない。なんで実現しちゃったんだろうって。もうこんなことねえんだろうけどよ、猪木にはもう一度、なんかすげえことやってほしいよな。

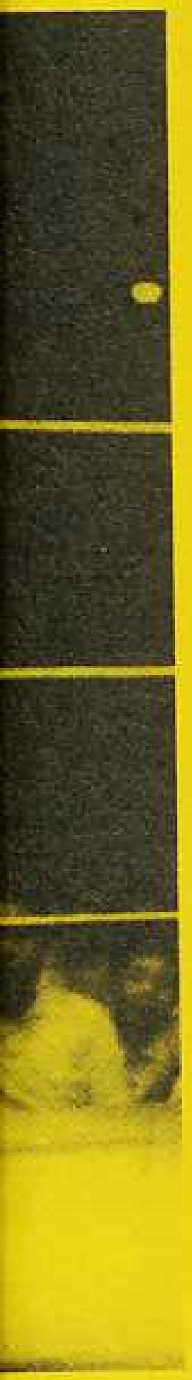
【10年9月2日／都内・『加賀屋』中野坂上店にて収録】



居候していた家だったんだよ！

ガンツ　そういう時代でしたよね。


――トルコさん、今日はめでたくデビュー50周年を迎える猪木さんについてお話



トルコ だから、もともと猪木はスポーツなんて何もやってなかったんだから。

――マス大山はインチキのインチキ？

トルコ だからこのスポーツ界で空手の名前を広めたのは力道山なんだから。



祝！アントニオ猪木デビュー50周年記念!!

それでもやっぱり

猪木を殺すまで私は死ねない

当年とって80歳! おヘソの下は40歳!!
燃え盛るオスマントルコ魂、ふたたび!

ユセフ・トルコ

「元気ですか～!」と言われるまでもないほど、世界一元気な80歳が登場!
かねてから「猪木を半殺しにしないと気が済まない!」と殺気立つ、
日本プロレス界の生き証人であるユセフ・トルコが、
今回もアントンに対してべらんめえ口調でまくし立てる! ユーも耳の穴をかっぽじって聞くのだ～!!

聞き手／鈴木佑

猪木の50周年なんかめでたくないよ！アイツはプロレス界のガンだよ、ガン！

――トルコさん、今日はめでたくデビュー50周年を迎える猪木さんについてお話を聞きたいんですよ。

トルコ　何、猪木が50周年？　そんなもの、めでたくもなんともないよ！　あのな、今日はザ・デストロイヤーのパーティだったんだよ。でも猪木のヤツは来なくてさ、「この野郎！」って思ったよな。

――あいわらずトルコさんは猪木さんに敵対心満々ですね～。

トルコ　猪木の野郎、デストロイヤーに花だけよこして祝い金は贈ってないんだから。半殺しもんだよ、アイツは！　ホント、プロレス界のガンだよ、ガン。で、ほら、猪木のモノマネするヤツいるだろ？　アイツもパーティに呼ばれてたんだけど、「トルコさん、何か私にご不満があるようで、すいません」って謝ってきたよ。これはいい猪木だよな。だからそいつに『私だけ許されました』って、悪いほうの猪木に伝えとけ」って言っといたんだけどな。

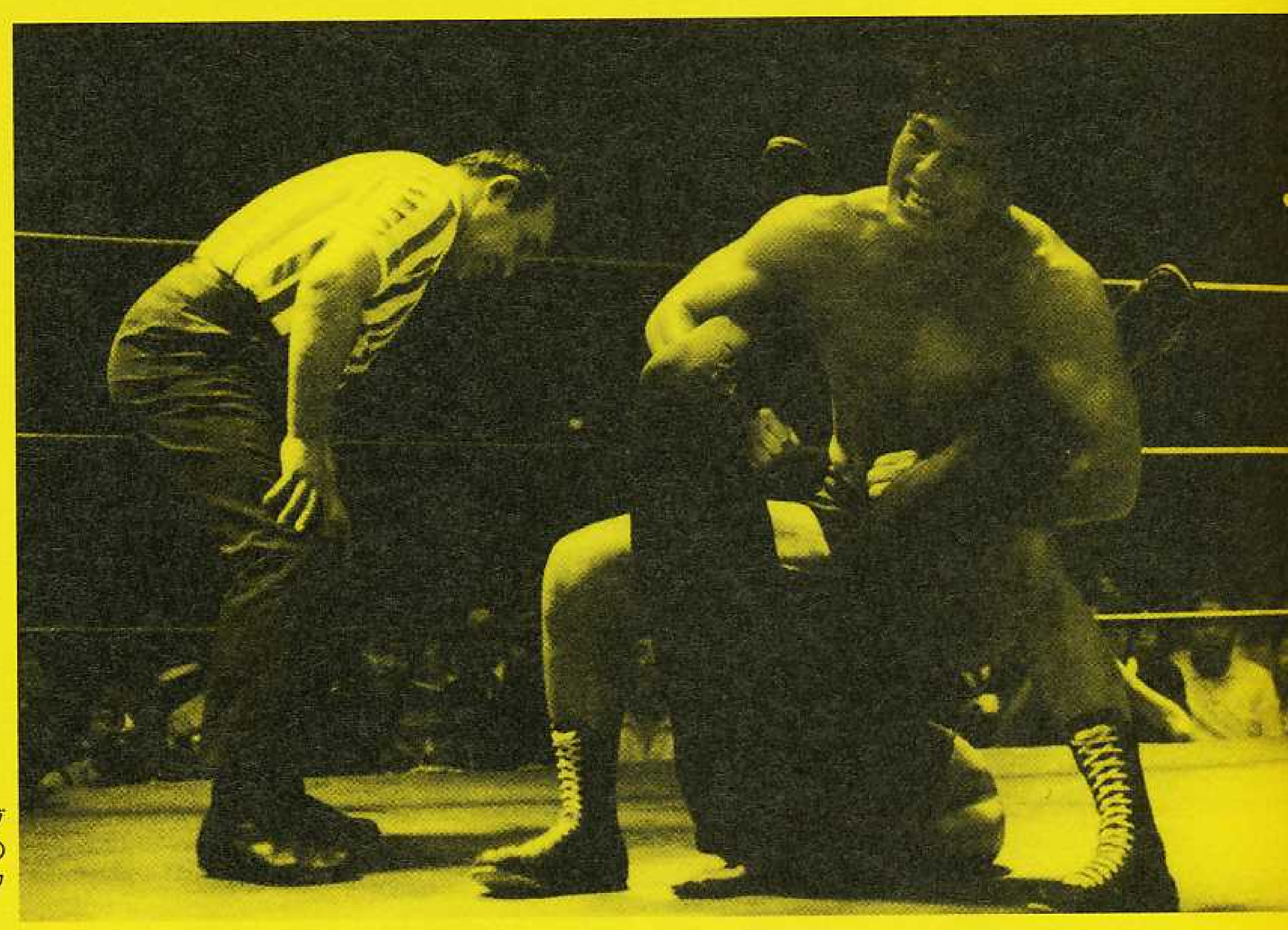
――悪いほうの猪木（笑）。そもそも、トルコさんがそこまで猪木さんを許せない発端は何なんですか？

トルコ　発端も何もおかしいんだよ！　そんなの歴史を見たらわかるじゃねえか。猪木がどこから来て、何をしてきたかって、どうしてユーたちはアイツにそこまでツッコまないのよ？

――えーと、まず日本プロレスでデビューして……。

トルコ　（さえぎるように）誰にも相手にされない猪木を、力道山がブラジルから拾ってきたんだよ！　顔もあんなだし、目立ったんだろ？　それを力道山がおもしろがって連れてきてな。で、リキさんがブラジルから連れてきたんだけど、たしか日本に来る前にアイツをロサンゼルスで降ろしたんだよな。で、そこに遠藤幸吉がいて、ボディビルで身体を鍛えさせてから日本へ入ってきたんだよ。

――そういう経緯だったんですね。



我らがアントンの試合をレフェリングするトルコ氏。あの梶原一騎先生の盟友として、アントンvsウィリー・ウィリアムス戦を裁いたこともある。

トルコ　だから、もともと猪木はスポーツなんて何もやってなかったんだから。

――あれ、砲丸投げの選手だったって話が有名ですけど？

トルコ　そんなのとんでもないよ！　あんな内股じゃ踏ん張りきかないだろ、砲丸投げなんかできるかっていうの。そういうウソを俺の前で言ったらダメだっていうんだよ。それに引きかえ、俺は柔道の木村政彦たちと柔拳ってのをやってたからな。柔拳はな、そりゃあもう本物だからな。こうやってバーン、ズババーンって殴って……（柔拳時代の話を延々とするがスペースの都合で割愛）。で、なんの話だっけ？

――猪木さんの話です（笑）。若い頃の猪木さんの印象はどうでした？

トルコ　印象？　そんなの全然ない！（キッパリ）。

――全然ない！（笑）。

トルコ　とにかくアイツがペーペーの頃は、毎日毎日稽古ばっかりだったからな。もう、当時の稽古はハンパじゃないんだから。ユーたちが見たら「ウワーっ」てなるよ。もうドア開けた瞬間に汗の臭いがブワーだからな。ウワーで、ブワーだよ！

――ウワーで、ブワーですか（笑）。

トルコ　だからさ、いまのレスラーはその頃のプロレスをもう一回見習えっていうんだよ。道場に力道山の写真を飾んなきゃダメなんだよ。力道山あってのプロレスであり、空手でしょうが。

――日本中にプロレスブームを巻き起こした空手チョップですね！

トルコ　そうだよ！　あのな、大山バイタツ（倍達）ってのはインチキなんだよ。あんなのはもうインチキのインチキなんだから、バイタツは。

――マス大山はインチキのインチキ？

トルコ　だからこのスポーツ界で空手の名前を広めたのは力道山なんだから。ホント、素晴らしい男だよ。視聴率だって60何パーセントも獲ってたんだろ？

――それこそデストロイヤー戦はそうだったらしいですね。

トルコ　だからいまのプロレスはホント寂しいよな。ユーも今日は猪木のことを聞きに来たけど、プロレス界をおかしくしちゃったのはその猪木が原因なんだからさ。

――どこでおかしくしちゃったんですかね？

トルコ　あのな、だから結局な、それを突き詰めると俺が悪いんだよ（ションボリと）。

――え、どういうことですか？

トルコ　俺がアイツを助けたのがよくなかったんだから。

――あぁ、トルコさんは猪木さんが日本プロレスを追放処分になるときに、猪木さんサイドについたんですよね。

トルコ　そうそう。あのときも追放するかどうかは日本プロレスの役員だけの投票で決めるはずだったんだよ。それを豊登が猪木を追い出したいもんだから、自分の相撲あがりの部下の選手にも投票させるって言いだしてな。

――そのあとにもトルコさんは、猪木さんの新日本プロレス旗揚げをサポートして。

トルコ　そうだよ。もう、猪木も含めて周りがみんな、俺に泣きついてきたんだから。ほら、女房の倍賞美津子な。そのお父さんも来たよ。それで俺の世田谷のウチに来て土下座して、「助けてくれー」ってさ。で、俺の後援者のパン屋の社長にこの

話をしたんだよ。そうしたら「お金出すから、やれ、やれ」ってなってな。それで俺もバカだからポーッとなっちゃって「いっちょ、やるか」ってなった、と。で、いざ始めようと思って社長のとこに行ったんだけど、今度は急に「金は出さない」って言うんだよ。

――あれ、心変わりしちゃったんですかね。

トルコ そのときは俺も怒ったよ、話が全然違うから！ でも、もう「やる」って言った以上は俺も男だから、あっちこっちの知り合いに頼んで、猪木が興行打てるように協力してな。そうしたらさ、猪木がよりによって、あのどうしょうもない豊登の野郎を引っぱってきただろ？

――旗揚げ戦に豊登さんが来場して、猪木さんと握手したんですよね。

トルコ そうだよ！ あんな博打しか知らないヤツとくっつきやがってさ。それを俺に内緒でやってたんだから、そりゃもう頭にきたよな！ あと、猪木はいろんな国にも行ったろ、イラクとか。あれも全部俺が面倒みてやったんだから。

――たしか、90年の湾岸危機のイラクで『平和の祭典』を開催したときは、日本政府がこの計画に反対で、当初予定していた航空会社にフライトをキャンセルされたんですよね。それでトルコさんが仲介役になって、トルコ航空のチャーター便でなんとかイラク入りして。

トルコ そうだよ！ 俺がトルコ政府とかにいろいろ頼んでやったんだから。あのときに猪木は佐川急便から1億くらいの金を出してもらってたんだよ。でも、それでアイツが俺に渡したのはたったの20万だよ、20万！ アイツは何千万も自分のポケットに入れやがってさ！

――それはひどい話ですね～。

トルコ わかる？ 俺はずっとあとでそれがわかったんだもん。だからいつもあの野郎を半殺しにしたいって言ってるんだよ。

――なるほど。



前列左がおヘソの下がバリバリだった頃のトルコ氏。その右隣には犬猿の仲である故・豊登（前列中央）の姿が。そのほかにも故・芳の里、故・大木金太郎、故・吉村道明の姿も見られる。錚々たるメンツが集合した昭和44～45年のスナップだ。

グレート東郷をブン殴ったみたいに腰でも蹴ったら猪木なんか一発KOだ！

トルコ それにな、アイツは身体がゴッツでいびつだから、そもそもがレスラーの身体じゃないんだよ。メチャクチャに無理矢理作った身体だから。俺が紹介してやった病院のレントゲンを見たんだけど、そりゃもうヒドイもんよ。先生も本人には言わないで、俺にだけ「ビックリした」って言ってたんだから。で、アイツ、このあいだ入院してたんだろ？

――腰を痛めて入院してたらしいですね。

トルコ 歩く姿勢だってアイツは悪いだろ？ 骨が異常に悪いんだよな。だからもう、あれは俺が腰でも蹴ったら一発KOだよ！（キッパリ）。

――そんな物騒なことを考えてるんですか！

トルコ もう俺は弁護士に聞いて調べてるんだから。俺が80歳で、あいつが60いくつとかだろ？ もしやり合ったとしても、どう見たってどっちが悪いかわかるってもんだよ。こっちのほうがおじいさんなんだから。

――歳は関係ないと思いますけど（笑）。

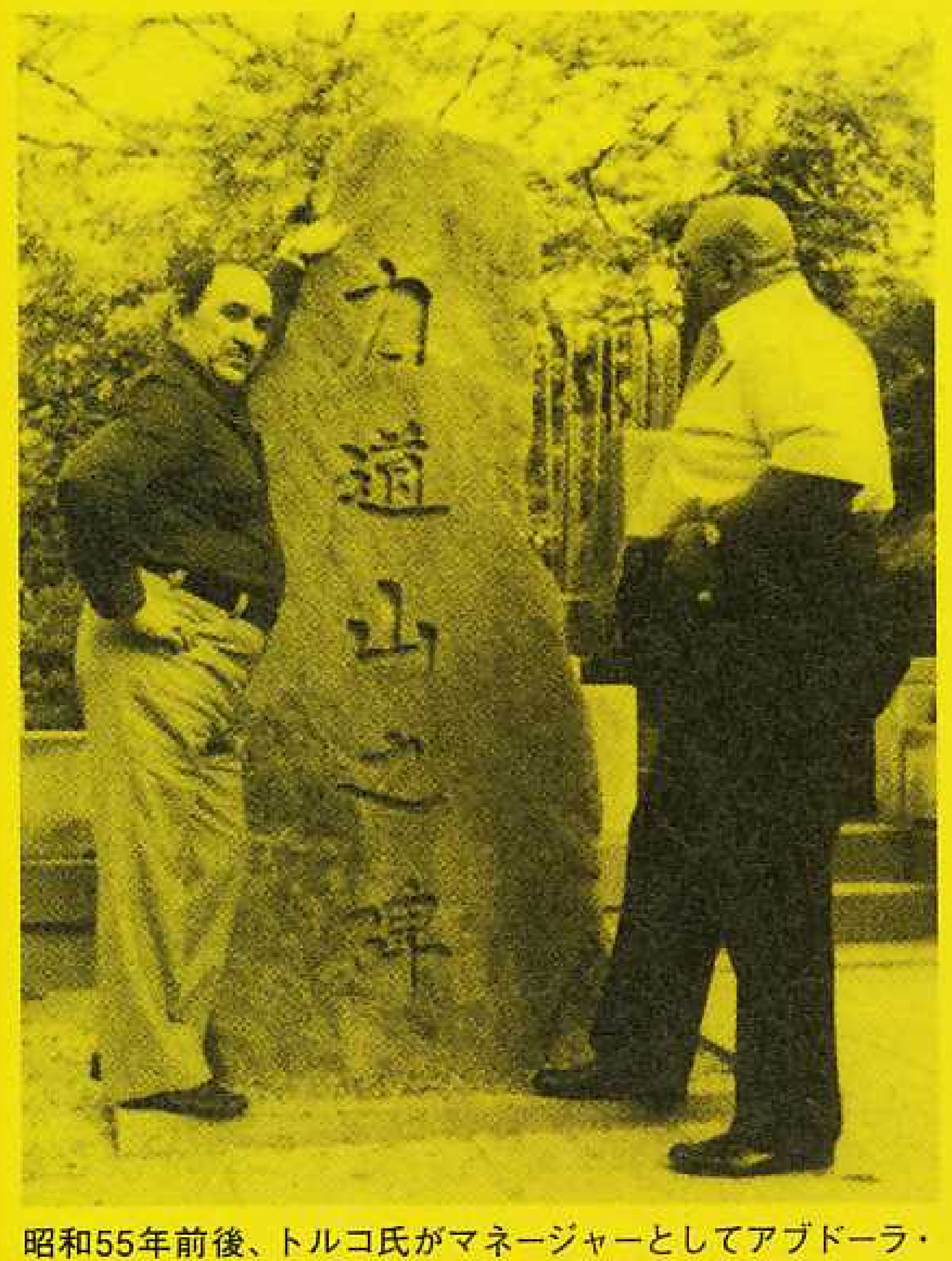
トルコ （無視して）俺がグレート東郷をブン殴ったのと一緒だよ、一緒！

――おぉ、日本のプロレス界を乗っ取ろうとしたグレート東郷を、トルコさんがホテルの一室に乗り込んでKOしたっていう有名なエピソードですね！

トルコ そうそう、そうですよ！ ほら、ユー、寿司食いねえ（笑）。あれはさ、TBSのプロデューサーが周りに「レスラーがレフェリーにやられた」って言っちゃったんだよな。東郷は恥ずかしいから言わないよ、そんなこと。で、警察から逮捕状が出てな。

――それでトルコさんはケガしてないのはまずいってことで、自分で自分を殴って傷を作ってから警察に行ったんですよね。

トルコ そうよ。駿河海に「殴れ」って言っても殴らないから、自分の拳骨でバーン、ゴチーン、ビャーンってな。そしたらおまわりさんから「喧嘩両成敗だね。リングでやってください」ってなってお咎めなしよ。あのときはたしか東郷は試合ができなくなって、2週間後にアメリカに帰っちゃったんだよな。それから1年く



昭和55年前後、トルコ氏がマネージャーとしてアブドーラ・ザ・ブッチャーと蜜月関係だった頃、力道山の墓参りに行ったときのスナップ。

らいしてアイツは死んじゃったから、「あれはトルコの殴りどころが悪かった」って周りは言ってたよ。だからそれと同じように猪木の野郎も処分してやろうかと思ってさ。

―いまだにそんなこと思ってるんですか！（笑）

トルコ そうよ、50周年なんてとんでもない話よ！ あのな、猪木なんか強かないんだよ。真剣勝負でやったら馬場のほうが強いんだから、ずっと上なんだから。

―え、馬場さんのほうが強いんですか？

トルコ 俺は二人に稽古つけてやってたけど、馬場のほうが利口だし、迫力もあるし、猪木より断然強いよ！（キッパリ）。アイツはプロ野球からプロレスに来て、一生懸命練習して強くなったんだから。もう行くところがなくてプロレスに拾われたんだから、そりゃあ気合いも稽古の仕方も違うよ。やっぱり野球やってたから手の力とかもあったしな。

―はぁ、なるほど……。

トルコ それに比べて猪木なんて「燃える闘魂」とか言ってるけど、アイツはただの詐欺師だよ、詐欺師！ スポーツ界の詐欺師！ 赤いタオル巻いてカッコつけて「ダー、ダー」言ってな。ほら、だんだんアゴが長くなってるもん。

―ダハハハ！ ウソついて鼻が伸びるピノキオじゃないんですから（笑）。

トルコ ホントホント！ 歯医者が言ってたんだから、「アゴが伸びてるよ、切らなきゃダメだ」って。これは事実だからな、ちゃんと書かなきゃダメだよ！ まぁ、とにもかくにも俺は猪木をこの手で始末しないかぎりは死ぬに死ねないんだよ！（キッパリ）。俺も80だろ、もうあと何年も生きられないよ、3年も生きたらいいほうだろうに。

―見た感じは、お元気そのものですけどね。

おい、猪木を今度取材するときは俺も連れてってくれよ！



ゆせふ・とるこ■1930年5月23日、樺太出身。本名ユセフ・オマー。日本プロレス旗揚げ前から柔拳などで活躍したプロレス創成期の数少ない生き証人。プロレスラー&レフェリーとして活躍した。エノケンや由利徹などの舞台でも活躍。一方で、日本プロレスを裏切って国際プロレスのブッカーになったグレート東郷を鉄拳制裁するなど、武闘派でもある。

ユセフ・トルコ

トルコ いいや、こういうのが一番危ないんだよ。腹上死っていうのがあるからな。「ウー」ってイク前に逝っちゃうんだよ。さよなら、さよならって。

―ダハハハ！ ちなみにまだあっちのほうは現役なんですか？

トルコ なんだって？ カー、もうヤだね！ あたりまえだよ、そんなのは。ちょっと塩持ってきてよ！（笑）。

―これは失礼しました（笑）。

トルコ あのな、俺は死ぬときに点滴とかにつながったまま、ポックリ逝くのはイヤなんだよ。だから女房には「俺が倒れたら絶対に救急車は呼ぶな、しばらく1時間はおとなしくしてろ。そしたらポッポ～ッと逝っちゃうから」って伝えてあるんだけどな。

―ポッポ～ですか（笑）。

トルコ そもそも日本の医者はおかしいんだよ。意識のない年寄りでも管をいっぱい通して無理矢理生きさせるだろ？ 話もできない、何もできないのに。そりゃあ医者は金もらうからいいさ。でも、たいへんなのは家族だろ？ スーっと逝っちゃったほうがいいんだよ、葬式屋も火葬場も喜ぶんだしな。俺はそういうスタイルだから……。で、なんの話だっけ？

―猪木さんの話です（笑）。

トルコ まぁとにかくな、猪木みたいなのがいまだに振り回してるからプロレス界はおかしいんだよ。もし猪木が俺に土下座するならわかるよ。頭を下げて「すいませんでした」っていうなら俺は許す。

―許しますか！

トルコ うん、坊主にして「ごめんなさい」って言うんならわかる。それをあの野郎は陰でエバってばっかりで、ふざけんなって言うんだよ！ こうやってユーたちも50周年とかなんとか持ち上げるから、アイツもその気になっちゃうんだよ。だって武藤とかあっちは、みんな猪木に反対してるだろ？ 猪木についてるのはあれぐらいだろ、ブタで太ったタイガーマスク。

―ブタで太ったタイガーマスク（笑）。

トルコ タイガーマスクと、それから長州と藤波か。そんなもんだな。みんなポンコツがついてるだけだよ。まぁ、タイガーマスクもいまは「武道、武道」って言ってるけど、何が武道だっていうんだよな！ ブドウだったら山梨に行けばいくらでもあるだろ！

―それはブドウ違いですね（笑）。

トルコ あのな、タイガーマスクっていうのはやっぱりババーンと飛んでズバーンと動くからタイガーなんだよ。あんなに太ってんだからとっとと引退しなさいって話だよな、みっともない。じゃあ、俺がレスラーをやるって言ったってみっともないだろ？

―ここで現役復帰したらそれはそれで驚きですけど。

トルコ 俺の現役はこれだけだよ（腰をふりながら）。ユセフ・トルコ、当年とって80歳、おヘソの下は40歳！

―ダハハハ！ 最後に出ましたね、伝説の名フレーズ（笑）。

トルコ この歳でもな、これがあるから元気でいられるんだから。これがなくなったらもうおしまい！ こっちが現役のウチに猪木の野郎をやってやらないとな。それまでは俺も死ねないよ。おい、今度猪木を取材するときは俺も連れてってくれよな、ババーンのバ～ンってやってやるから！

【10年8月24日／都内・某ホテルにて収録】

1993年――、『週刊現代』の報
道により“猪木政界スキャンダル”

すよ。山口日昇っていうなかなか才
能があるヤツがいるんですよ、と。

名なエピソードですけど、大学時代
に自転車で全国縦断旅行している途

ていってくれて……。それがあった
ことで挫折しないで縦断をやり遂げ

に会うことになったんですよ。
――川村会長が仲介というのも凄い
話ですねぇ。



“17年ぶりに猪木を殺った男”が登場!!

猪木政界スキャンダル

闘魂 愛の告発

講談社宣伝企画部担当部長

仙波久幸

参院議員猪木寛至の政治家生命に大打撃を与えるきっかけとなった『週刊現代』の告発キャンペーン。その仕掛人は猪木の番記者であり猪木信者であった。いったいのあの告発のウラにはどんなドラマがあったのか?

聞き手/ジャン斉藤　© Essei Hara

1993年――、『週刊現代』の報道により〝猪木政界スキャンダル〟の火の手はあがった。追及されたスポーツ平和党猪木寛至参議院議員の疑惑はさまざま。その告発キャンペーンによれば、税金滞納、偽造領収書、架空寄付金による還付金不正取得、秘書給与流用、都知事選出馬撤回による裏金問題……等。今回登場する仙波久幸氏は当時『週刊現代』の編集部員でこの猪木告発の仕掛け人。そして猪木信者であった。仙波氏は愛憎を胸に、猪木の首を狙っていたのであるが、『紙のプロレス』特別ムック『猪木とは何か?』以来17年ぶりに当時の心境を語ってもらった!　♪愛があるから～ぁ……（倍賞美津子調）。

猪木信者は「これが猪木だったら?」と自分に置き換えて考える

仙波　編集長、今日はなんの話をすればいいの?

――仙波さんが仕掛けた猪木スキャンダルを振り返っていただきたいな、と。

仙波　仕掛けたって……。

――あ、違いますか（笑）。

仙波　まあ猪木スキャンダルを大々的に、当時の『週刊現代』が記事にして、そこからワイドショーも一斉に報道するようになり騒ぎは良きも悪きも拡大したのは事実ですよ。で、そのときにTBS『スーパーワイド』の司会をやっていた亀和田（武）さんが自分にある人物を紹介してきたんですよ。山口日昇っていうなかなかオ能があるヤツがいるんですよ、と。

――ほほう（笑）。

仙波　それで「ナンシー関と猪木座談会をやらない?」って亀和田さんが仲介してきたの。

――『猪木とは何か?』に収録された座談会。おもしろかったですね。

仙波　そのあと「座談会のゲラができました」って山口氏と柳沢（忠之）氏と斉藤雄一氏の3人がウチの会社の近くにやってきたわけですよ。で、おもに山口氏と柳沢氏にぺらぺらと、いわゆる雑談というかさ……。

――雑談というかアントニオ猪木論。

仙波　そうそう。そうしたらさ、「じつはいま録音を取っていた。いまの話も一緒に載せちゃおう」って。それも一緒に載っちゃった（苦笑）。

――だまし討ちだ（笑）。

仙波　ホントにそう!　柳沢氏とはその後、縁はないけど、山口氏とはずっと〝腐れ縁〟続きでいまに至る、と。

――何年前の話ですか?

仙波　あれは1993年だから17年前。

――最近の読者からすれば、「誰だ、このオッサンは?」みたいな感じかもしれないけど、仙波さんは大の猪木ファンだったじゃないですか。有名なエピソードですけど、大学時代に自転車で全国縦断旅行している途中、熊本で猪木さんから激励を受けたんでしたっけ?

仙波　自分の青春時代の記念碑である日本列島徒歩縦断、鹿児島→北海道宗谷岬3000キロ……。

――自転車じゃないんですね。失礼しました（笑）。

仙波　手前味噌ながら、それまでの記録は植村直己さんの52日間で、自分が51日間で当時の日本記録ということになってNHKのニュースでも流れました。そんなことはどうでもいいか。



1984年5月15日、熊本体育館にて。日本列島徒歩縦断中、猪木に激励を受ける若かりし頃の仙波氏。

――どうでもよくないですよ。ちゃんと載せますよ、文字を大きくして!

仙波　（無視して）そのときに熊本で新日本プロレスが興行をやってまして。プロモーターの方が控室に連れていってくれて……。それがあったことで挫折しないで縦断をやり遂げたというかね。

――猪木さんのおかげでもあるわけですね。

仙波　はい。猪木信者はね、逆境に追い込まれたとき、悲しいときとか、つらいときに「これがアントニオ猪木だったらどうするだろう?」って、自分の人生に置き換えていろいろと考えたりする。

――自分が猪木だったらどうするだろう?　と。

仙波　そうして「やるしかない。猪木ならやるしかない‼」って立ち上がるわけ!（ドン）。

――熱いですねぇ。

仙波　自分の少年時代はそんな感じでした。で、個人的に猪木さんに面識を持ったのは会社に入ってからです。

――講談社に入社して。

仙波　はい。入社時の配属先が『フライデー』で、最初は事件と芸能系の張り込み取材ばかりで自由な時間がほとんどない。そんなときに当時の田辺エージェンシー副社長だった川村（龍夫）さんに……。

――ケイダッシュの川村会長ですね。芸能界の実力者。『LEGEND』をやられたり石井慧を獲得したり。

仙波　で、たまたま川村会長の先輩にあたる人と知り合いまして「そこまでアントニオ猪木が好きなんだったら、川村を紹介するから挨拶に行きなさい。三度の飯よりアントニオ猪木が好きな男だから」ってことで川村会長に会いに行ったら「そこまで好きなら猪木さんに会わしてやるよ」と。それがきっかけで猪木さんに会うことになったんですよ。

――川村会長が仲介というのも凄い話ですねぇ。

仙波　のちに猪木スキャンダルが起きたときに、スポーツ平和党の幹事会が京王プラザであったんですけど、京プラのロビーに川村会長がいたんです。川村会長はスポーツ平和党の幹部でしたから。

――なんだか凄い時代ですねぇ。

仙波　そこで知らんふりできないんで「ご無沙汰しています」と挨拶をしたら、川村会長は「おまえも男として仕事でやったんだろうけど、自分の目の黒いうちは一生許さないからな」と。そこには非常にわかる部分があって、なぜかというと仕事でやるにせよ、やはり猪木さんを個人的にも仕事的にも紹介していただいた手前ね、『週刊現代』として仕事でやるなら事前に挨拶、説明をするのが筋だろう、と。

――そこは仁義の部分ですね。

仙波　それをしないでなんとなくうしろ向きになってしまいまして。男



1993年8月、特別ムック『猪木とは何か?』で実現した座談会。左から亀和田氏、仙波氏、ナンセー関、そして山口日昇さんは。若いなあ。『ハッスル』の社長になるとは夢にも思うまい。



の筋道を通さなかったことを指摘されました。あとは「会社に電話したのに居留守を使っただろう」とかね。それもご指摘のとおりだった部分がありまして……。
―うわっ、川村会長に居留守ですか！（笑）。
仙波 というかですね、当時、いろんな電話が編集部に……。
―ああ、脅迫電話。当時、猪木信者は多かったですからね。
仙波 そういうのも含めてあったもんですから、なるべく自分宛ての電話は取りつがないことになってまして。その後……、いまから4年前、自分が『フライデー』の編集次長だった際に、川村会長の直属の部下の方から「自分が話を通すから会ってみたら？」っていうことで、一緒に食事をしまして……。許していただけるかはさておいて、お詫びをしました。という経緯があります。
―しかし、それくらい猪木さんが


（17） 平成5年（1993年）7月2日（金曜日） 東京スポ
猪木議員机叩いて『週刊現代』記者と激突
一か月の沈黙破り波乱の反論会見
「担当記者は佐藤と何度も密会している」
机を叩く猪木議員（写真左）と『週刊現代』の仙波久幸記者（写真右中）は身を乗り出して対決

スポーツ平和党党首辞任会見の模様を伝えるスポーツ紙。右写真中央には猪木に身を乗り出して詰め寄るラッシャー仙波氏の姿が!!

大好きなのに、またどうして猪木スキャンダルを仕掛けることに……。
仙波 だからそれまではね、『フライデー』や『週刊現代』といういわゆる一般マスコミの一員として、少しでも猪木さんの記事を載せたいという思いがあったんですよ。で、先ほどの川村会長の援護もあったりして、たとえば、あるとき『週刊現代』でアントニオ猪木対タモリの対談が実現して。
―なんてビッグ対談！
仙波 その司会進行役は川村会長ですよ。
―え～～～～ぇ？ ど、どういうことですか、それ。
仙波 雑誌には司会者としては登場してないですけどね。川村会長自ら双方のスケジュールを調整して、ちゃんと現場を仕切っていただいて。
―はぁ～、それくらい川村会長は猪木さんが好きだったわけですね。日本一の猪木信者は川村会長かもしれませんね。
仙波 そうやって いいかたちで記事にさせてもらったりしましたよね。だからこそ、怒られて当然なんですけど。
―怒りますよね、そりゃ（笑）。
仙波 あとはイラク紛争があったときに、日本企業の人質になっちゃった奥さんが集まって結成した『あやめの会』っていうのがあったんだけど。そこで中心になってやっている奥さん方を議員会館に連れていって、猪木さんと会わせたんです。で、のちにイラクで猪木さんが『平和の祭典』をやりましたよね。
―人質解放につながったイベントですね。
仙波 手前味噌ながら、あれってそのときの面会がきっかけなんです。話をしているうちに「みんなでイラクに行きましょう！」って意気投合して。
―なるほど、仙波さんは猪木番として頑張っていたんですね。
仙波 だから猪木さんが議員会館にいて、秘書から「たまたま時間が空きそうだ」なんて聞くと、世間話をしにちょくちょくすっ飛んでいきましたよ（笑）。
―猪木さんって人の名前を覚えてないじゃないですか。仙波さんの名前は覚えてたんですか？

仙波久幸

仙波 いわゆる一連の猪木騒動になった際、スポーツ平和党党首辞任の記者会見をやっているときに、記者席を指さして「そこにおられる仙波さんが～」って猪木さんが言いだして。「信者的には感無量！」っていう気持ちはありましたね。
―ククククク。
仙波 この会見っていうのが、始まって30分くらいは一取材者として話を聞いていただけなんですよ。おもに質問をするのはテレビのリポーター。で、猪木さんが突然自分を名指しして「そこにおられる仙波さんが（アントニオ猪木を告発した）佐藤久美子氏と何度も密会しているという

あるとき猪木さんとタモリの対談が『週刊現代』で実現して……

噂を聞いております」なんて言うもんだからジワジワと怒りがね。ボクはスロースターター的というかラッシャー木村的っていうかさ。
―は？ 何を言ってるんですか。
仙波 いや、ラッシャー木村じゃなくて、スロースターター的なストロング小林かな。
―どっちでもいいですよ。ストロング仙波さん（笑）。
仙波 で、ボクと猪木さんの一問一答みたいな感じで会見が続いちゃったら、司会に「挙手してお願いします、名前を名乗ってください」ってなっちゃったわけですよ。そのときに「仙波です。猪木さん、おひさしぶりです」と。「おひさしぶりです発言」をしているんですよねぇ。
―そこはラッシャー仙波的だ（笑）。仙波さんも猪木さんも火がついちゃったわけですねぇ。
仙波 （カバンからゴソゴソ資料を取り出して）この写真ですよ。机をドンと叩く猪木さん。机を「ドン！」と叩いて……。それがハイライト！
―仙波さんの人生の中で。
仙波 違う違う。あの会見のハイライト！
―え～、仙波さんの猪木信者的人生のハイライトでしょ（笑）。
仙波 う～ん、確かにねぇ。あのときにどう思ったかっていうと、感動、感激、迷い!!（ドン）。
―ダッハッハッハッ！ そもそも記事を仕掛けるときに猪木信者としての葛藤はなかったんですか？
仙波 記憶が薄れている部分がありますが、あの頃のスポーツ平和党には新間（寿）さんもそうだし、公設秘書の佐藤女史もそうだし、快守氏もいましたし、みんなと仲良くさせてもらっていた。で、あるときに佐藤女史から連絡がきて、「私も新間さんも神の声、天の声があって辞めてくれと言われた。ついてはアントニオ猪木の告発的な作業に協力してくれないか」ときたわけですよ。自分としては「3日間待ってくれ、ちょっと考えさせてくれ」と。佐藤女史は「『週刊現代』でやらないんだったら、『週刊文春』とかほかでやってもらうことにするから」ってことだったんです。そのときに話の中身は聞いていなかったけど、ほかの雑誌がこの件を確実に取り上げるのに、自分が直接的に何も関われなかったり、後追い程度で関わるのはどうなんだろうと思って「これは自分自身でやるしかない！」と。
―悩みませんでした？
仙波 そこは微妙ですね。微妙、微妙。一方でプロレスファンであり、猪木信者である自分がいるわけで。仕事は仕事とはいえ、「どっちが大事よ？」ってなったときにやっぱり猪木信者でいることも大事なわけですよ。物心がついたときから猪木ファンなわけですから。何かことあった

びに、ジャイアント馬場と比較されてね。馬場はNWAの本流にいる、
ちろんしましたけど、彼女には彼女の考えがある。そのあたりから意思
―ボクは高校2年生くらい。『週刊現代』が取り上げていたっていう
猪木のPKO、それはパンパン・コイコイ・オ〇ン〇〇やろう」を生放送で
凄かったのかって、いまの読者にはいまいちピンときてないかもしれない

猪木さんの党首辞任会見は民放全局で生中継されたんです

びに、ジャイアント馬場と比較されてね。馬場はNWAの本流にいる、なんで俺の猪木が、アメリカのプロモーターから無視されて下の扱いを受けるのか？　と。自分の人生にもかかわっちゃうくらい悔しい思いをしてきてね！　猪木さんの人生イコール自分の人生。猪木さんになぞらえるっていうの？　とくにアントニオ猪木のファンっていうのは、そういう人たちが多いですからね。

——記事が出ることによって、猪木さんの議員生命、レスラー生命、社会的地位のことは考えました？

仙波　あのとき佐藤女史が東京地検特捜部に告発状を提出して記者会見をやりました。それでそのあと猪木さんもワイドショーのスタジオに生出演だったり、ワイドショーにかなり出るに至ったんです。で、ボクがある番組を観たときに、スタジオ生出演しているアントニオ猪木が涙を流した……。リング上の涙とは違う涙だからショックでしたねぇ。あの姿を観たときは思うところはありました。でも、惑わされちゃいけない！　と。

——仕事として。

仙波　ただね、『週刊現代』の告発連載は計8回続いたわけですよ。5回までは独占的に記事を掲載して、それ以降っていうのは『週刊現代』の独占ではなくなったわけですよ。それでこの件に関しては自分の仕事的には一段落。その後のテイクケアはもちろんしましたけど、彼女には彼女の考えがある。そのあたりから意思の疎通が合わなくなったりする（苦笑）。いわゆる仲たがいとはいかないけれど、佐藤女史との距離ができたっていうか、すぐ二言目には「今度こういうことがやれないかな」とか無理難題を求めてくる……。いろんな思いが彼女の中であったんでしょうけど、自分が一週間くらい連絡をバックれていたら、彼女サイドが『週刊文春』のほうに移ったというか。

——鞍替えしたんですね。

仙波　ええ。それでジョージ土門さんっていうロス在住で、いろんなレスラーがお世話になっていた方の拳銃密輸疑惑。それは『週刊文春』の記事ですし。

——猪木さんに頼まれて拳銃密輸したって疑惑ですね。あと『東スポ』では「紙に書いた千円札」騒動もありましたよね。猪木さんが「はい、お金！」ってその紙を渡したという（笑）。

仙波　それは笑い話のような実話だと思いますよ。

——あ、そうなんですか（笑）。

仙波　あれはね、猪木さんは空港の文房具屋やカバン屋を見るのが好きみたいで。で、猪木さんが持ち合わせがなくて「あとで秘書が払いますから、すみません」ってその紙を渡したとか……。そんなオチャラケ話ですよ。あの騒動のとき斉藤氏はいくつなの？

——ボクは高校2年生くらい。『週刊現代』が取り上げていたっていうのはよく知らなかったですね、田舎の高校生だったんで。あとで『猪木とは何か？』を読んで事件の全容はわかりました。

仙波　当時もなかなか理解してもらえなかったんですけど、時を同じくして、佐藤女史と新間さんがスポーツ平和党を辞めたわけなんだけれど、猪木さんへの思いっていうのはそれぞれ別なんですよ。佐藤女史は佐藤女史の思い、新間さんは新間さんの思い、別個なんです。「佐藤女史の裏に新間氏がいる」とさんざん言われてましたけど。ボクは両方とも付き合っていたからよくわかる。一緒に話し合うこともあったけど、この計画においては、二人の思惑は別物でした。

——結果的に告発するという行為では一致したけど、別の意図を持って行動していた、と。

仙波　だって、二人が一緒に記者会見をやったわけじゃないし。佐藤女史が『週刊現代』で連載し、東京地検に告発し、ワイドショーにバカバカ出始めても、新間さんは取材でしゃべることが多少あったにしても、テレビに出るまでのことは控えていたし。ひと騒動終わってですからね、新間さんのPKO会見は。あれも単独でやりましたからね。

——ああ、「女性の方は耳をふさいでください。アントニオ猪木のPKO、それはパンパン・コイコイ・オ○ン○○やろう」を生放送で言い放った伝説の会見ですね！　あの印象が凄く強いから、新間さんも年がら年中テレビに出ていたイメージがあるんですけど。

仙波　いま思えば、あの会見に亡くなられた梨元（勝）さんがいましたね。梨元さんは当時、猪木側ですから。猪木氏のインタビューを梨元氏がやって放送していましたから。

——猪木スキャンダルがどれくらい凄かったのかって、いまの読者にはいまいちピンときてないかもしれないですけど。ちょっと前に『週刊現代』でPRIDE告発記事があったじゃないですか。あれより凄かったですよね。

仙波　世の中を騒がせたということで言ったら、比べものにはならないと思う。PRIDEの記事っていうのはあくまで格闘技界の内々的な話だったと思うんだけど。例の一件は対世間、全国的に異常なくらい波及したし……。猪木さんの党首辞任会見なんて、生中継で、4、6、8、10（チャンネル）全局で流された。

——その波及効果たるや……。

仙波　（さえぎって）当時レンタルビデオ屋の会員になろうとして身分証明書の免許証出すでしょ？　店員が「あれ？」って顔をするんですよ。

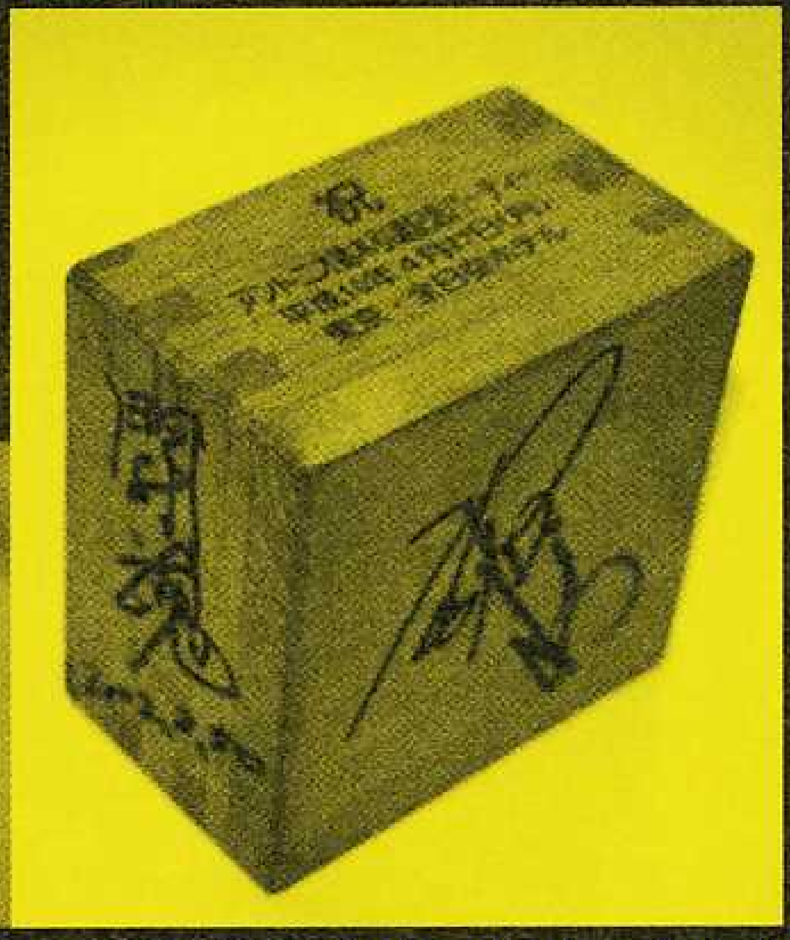
——どんな波及効果だ（笑）。

仙波　（カバンからゴソゴソ取り出して）それ以降プロレス会場に行きづらくなる中なか、もちろん猪木さんの引退試合にも行く。猪木さんが花道を歩くこの写真、自分で撮ったんです。さすがにサインを自分でもらいに行けないので、プロレスファンの後輩に「写真にサインもらってきてくれ」って。そしたら猪木さんはサインをしながら「ムフフ、いい写真だね」って言ってくれたそうですよ。あとね……（カバンからゴソゴソ取り出して）

——まだあるのか。17年経っても芸風は変わってないですね（笑）。

仙波　この枡もプロレスファンの後輩に「サインをもらってこい」ってお願いして。でも「闘魂」って書いても





仙波氏のカバンから次から次に取り出された猪木グッズ。参院選の際に配ったお宝ステッカーなどがある。『猪木とは何か?』を読んだ方ならおわかりだが、17年前から1ミリたりとも仙波氏は変わっていないのである。枡は自ら写真撮影!

萩原健一氏と倍賞美津子さんの取材は本当につらかった……

らってないから、もう一度サインをもらいに行かせましたよ！

——それくらい「闘魂」の二文字は重要である、と（笑）。

仙波 たまに気分が落ち込んだり、上向きのときに、ちょっとこれで飲んでますよ。

——とことん猪木ファンだ（笑）。

仙波 猪木ファンっていうのは、そう簡単にやめられるものではない。猪木ファンというか、猪木信者というものは洗脳を受けているわけじゃないけど、これだけの存在っていうのは、これ政治家だろうが、芸能人だろうが、いろんなジャンルに偉人はたくさんいるでしょうけど、ここまで憧れ続けられるっていうのはアントニオ猪木だけなんですよっ！ あとはね……（またまたカバンからゴソゴソ取り出して）。

——まだある！ まさしくアントン四次元ポケットだ（笑）。

仙波 『猪木ボンバイエ』のレコード。B面は倍賞美津子が歌ってるんだよ。

——『猪木ボンバイエ』に合わせて歌ってる曲ですね。「♪いつも〜ぉ、一緒なの〜ぉ」。

仙波 「♪愛があるから〜ぁ」。……いつか山口（日昇）氏たちと「『猪木とは何か？』とは何か？」を作りたいなあ。

——猪木論どころじゃないっていう感じですけどね、いまは。

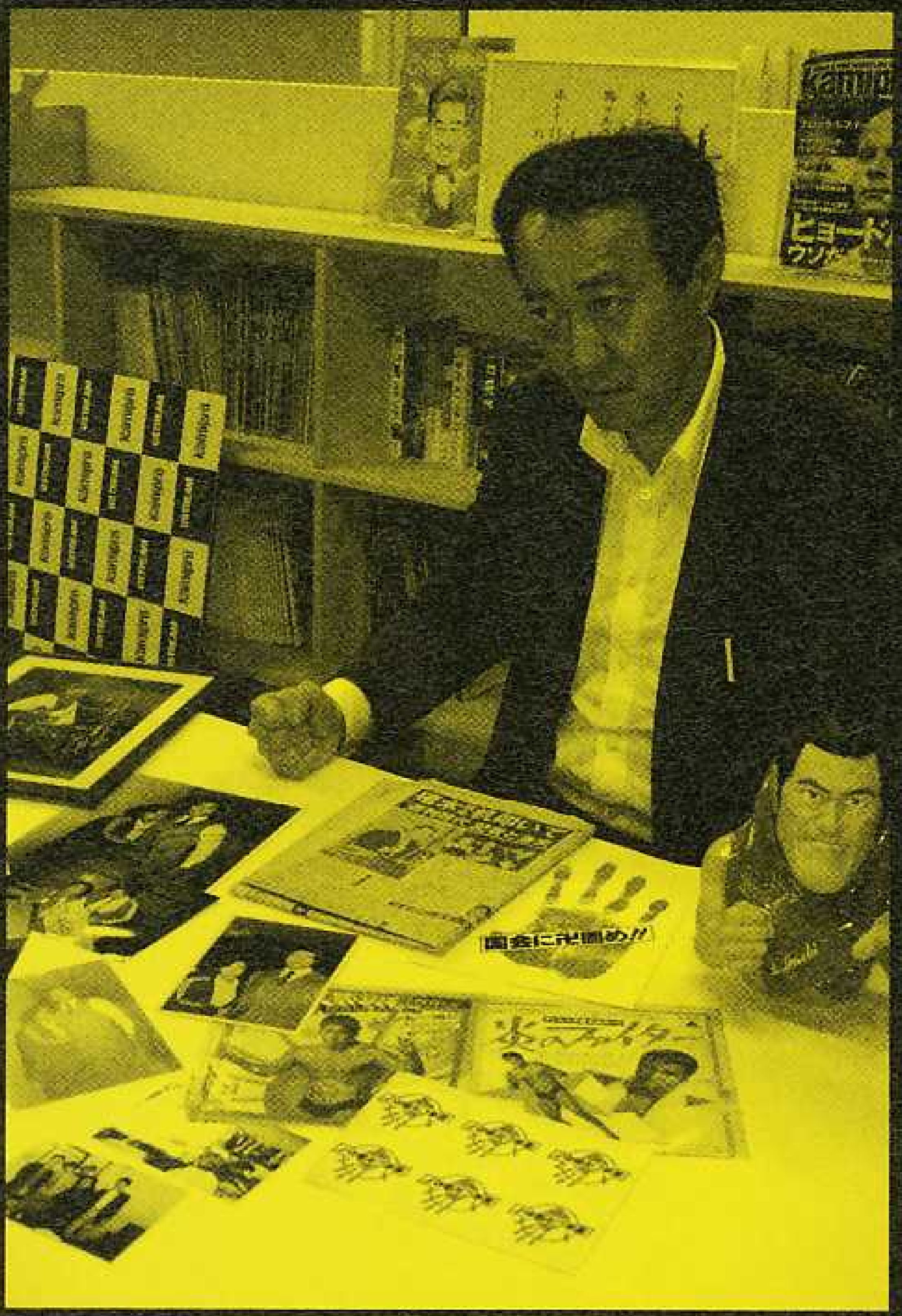
仙波 山口氏は知ってとおりの『ハッスル』の経営が……、一方の柳沢氏も経営者ではないけれど、K−1が大変なことになっている、と。でもね、猪木さんはあるとき世界の人口より借金が増えちゃったときがあったの。アントン・ハイセルやら事業で作った大借金、これは世界の人口を超えちゃった、と本人が言ってました。それに比べれば、K−1も『ハッスル』もたいしたことねぇよ！ と。

——ククククク。

仙波 よく猪木さんも「どうってことねぇよ」って当時から言ってましたけど、「どーってことねぇよ」っていう言葉を……。

——二人に送りたい！ と（笑）。

仙波 猪木信者ならそう叫んでほしい！



せんば・ひさゆき■講談社宣伝企画部担当部長。元『フライデー』編集長。写真週刊誌の名物記者として活躍。猪木が国会議事堂をバックにガウン姿でスポーツ平和党の看板を抱えている写真パネルは、かつて猪木事務所に飾られてあったが、なぜかいまは仙波氏の自宅に。なお写真は机を叩く猪木のモノマネです。

仙波久幸

——山口さんの場合、債権者に「どーってことねぇよ」って言いそうですからねぇ。で、仙波さんは騒動後、猪木さんとお会いしたことはあるんですか？

仙波 自分が『フライデー』の編集長になったのは2008年の4月。その頃にある関係者から携帯に電話があって出たら「元気ですかーーっ！」って本物の猪木さんの生声が……。

——え〜ぇ？

仙波 思わず電話を切っちゃってさ。なんで「猪木さん、おひさしぶりです。仙波です」って切り返せなかったんだろう……と自己嫌悪に陥って（苦笑）。そんなことが2回あった。

——2回も（笑）。

仙波 その関係者が気を利かせてくれたんだろうけど。しかし、猪木さんの心は大きいですよねぇ。

——「許せばいいじゃないか！」という人ですからね。

仙波 そんなチンケなことはもうどうでもいいよ！ と。だからこそいまでも憧れられるんだろうけど……。もちろんいまでもIGFの試合を観に行ったりしていますし。あるパーティ会場で猪木さんがお客さんで来ていて、場内が暗くなったときに、なんとなく半径3メートル以内に近寄ったりして。

——何をやってるんですか（笑）。

仙波 そこで「おひさしぶりです。仙波です！」なんてことは言えないんだよねぇ……。猪木信者の人って死ぬまで猪木信者を続ける。青春、アントニオ猪木が自分の青春だってことは永遠に続くわけですよ。アントニオ猪木という存在。いまは「ダーー！」をやるただのおじさんにしか若い人が思っていないって言われたら、寂しい気もしますけど。

——いまの若いファンにストロングスタイルの文脈から語っても全然ピンとこないでしょうよ。

仙波 ただ考えてみれば、いまのプロレスの環境とか状況を見るにつけ、ここまで世の中を引っぱれるのは現プロレスラーでもいないわけだし、世界一のプロレスラーなんじゃないの？

——ですね。そしてこのプロレスラーっぷりは猪木さん一代かぎりでしょうね。

仙波 プロレスのリングで試合ができなくなっても、アントニオ猪木もプロレスラーであり続けるっていうことじゃないですかね。最後にもう一つ！ 昔ね、『フライデー』の新入社員として配属されたときに、たけし事件の前にショーケン事件っていうのがあった。

——萩原健一が写真週刊誌記者に暴行を働いた事件ですね。

仙波 当事者が自分なわけですよ。

——みたいですねぇ。

仙波 で、自分は好きな女優、憧れの女の人は倍賞美津子でしたから。

——そのときの報道ってショーケンと美津子さんの交際が……

仙波 （苦渋の表情になりながら）自分は子どもの頃から尊敬する人はアントニオ猪木、好きな女優は倍賞美津子でしたから。このときの取材は本当につらい思いをした。萩原氏に話を聞こうとしたらスゴい興奮状態。そのとき萩原氏と一緒いた倍賞さんが「私がこの人たちに話をしてみる」って言いだして。

——う、うわ……。

仙波 倍賞さんは「私には夫もいれば、娘もいるのよ」ってボクに言うわけですよ。で、ボクは心の中で「知ってますよ、夫はアントニオ猪木じゃないですか！」って叫んでるわけですよぉ！ で、そのとき使っていた手帳の中にはアントニオ猪木と撮った記念写真が入ってるわけです……。

——す、す、凄いシチュエーションだなあ（笑）。


仙波 猪木さんとのツーショットはいつも持ち歩いていましたから。その写真を持っている自分に「夫も娘もいるのよ」って言われるつらさたるや……ねぇ。

——「憧れの女性はあなたなんですよ」とも言えずに。

仙波 あの取材が一番つらかったかも……。♪いつも〜、一緒なの〜ぉ♪（涙）。

——♪愛があるから〜！ 今日はお疲れさまでした!!

【10年9月某日／『kami-pro』編集部にて収録】



言うちゃ悪いけど
I編集長節ここに復活！

キラー猪木とは何か？

“プロレスマスコミの哲人”
I編集長の
喫茶店トークラウンド

I編集長とは？
井上義啓。元『週刊ファイト』編集長。「活字プロレス」の創始者であり、その影響を受けたプロレス者の数は計り知れない。06年に73歳で亡くなったあとも、“I編集長”を懐かしむ人は多い。

「猪木特集」をやるなら、この人を外すわけにいかないでしょう！ 生涯、猪木のことを考え、猪木本人以上に「猪木」という文字を書いた我らがI編集長、井上義啓さんが亡くなる半年前、猪木について語ったインタビューをここに再録。いまも色褪せないI編集長節は驚きですよ、アンタ！

聞き手／堀江ガンツ　撮影／原 悦生

取材は本当につらかった……

うでもいいよ！　と。だからこそい

行を働いた事件ですね。

【10年9月某日／『kamipro』編集部にて収録】

――さて、井上さん。今日はですね、アントニオ猪木の復活はあるのか？というテーマでお話しいただけたらと思います。

井上　まー、これはね、猪木の復活というのはありますよ。ただ問題はね、アントニオ猪木にしたってハッキリ言ってしゃべりすぎなんだよな！　猪木がしゃべったらそれが記事になるんだからねぇ。ちゃんと自分の話すことを事前に決めて、脚本を用意してしゃべらんと。あの人はひらめきの人だから、ポーンとその場で大きなことを言ってトチることになる。

――それで失言連発になってしまう、と（笑）。

井上　だから、インタビューにしてもプロレスにしても、事前の打ち合せというのは、必要なんですよ。

――事前の打ち合せが必要！（笑）。

井上　あと猪木に言いたいのは実現しそうにないことは言わないこと！

――たしかに猪木さんは夢のある大きな話が多いんですけど、ことごとく実現しないんですよね（笑）。

井上　「タイソンが来ます！」「永久電機が実現しました！」と言うんだけれども実現したためしがないじゃないか！　そうすると「猪木はホラ吹きだ」となるんだけれども、それは違うんだよな。実際にそういう動きはあったんだけれども、計画の初期段階で、まだ実現するかどうかわからないときに猪木がしゃべっちゃう。

――どうしてもフライングしちゃうわけですね（笑）。

井上　ホントならチラッと匂わせておく程度でいいんだよ。そうしたら、もし実現しなかったとしてもべつに「ホラ吹きだ！」とは言われないし、実現したら「さすが猪木。あのとき言ってたことは、これだったのか」となるわけですよ。

――そのほうがリスクが少ないですよね。

井上　そういったテクニックが、どうも猪木を見ているとないんだな。ハッキリ言って黙っとったらね、猪木のイメージというのは上がっていくんですよ。やっぱりまだまだカリスマ性を持ってますから、あの人は。

――数年前はＰＲＩＤＥでも、会場人気は猪木さんが一番だった時代がありましたもんね。

猪木は人に見られるということを常に意識しとった。これがプロですよ、アンタ！

井上　だからＰＲＩＤＥなんかも、フジテレビが撤退したいまこそ猪木のカリスマ性やネームバリューを必要とするときですよ！　ＰＲＩＤＥも猪木も「世界戦略」という同じ志を持っとるんだから、榊原社長と会談してドカーンと「ベガスでやります」と発表するとかね。猪木が再びＰＲＩＤＥと手を組んだら、マスコミだって助かるぜぇ。

――バンバン見出しが取れそうですよね。

井上　猪木が榊原社長と会談したなんてことになったら、マスコミが飛びつくネタですよ。しかも、そこからいろんなことが推測できるというか、妄想できるからねぇ！

――〝井上小説〟にはかっこうの材料ですよね（笑）。

井上　だからね、いまのマスコミの何がダメかと言うたら、起こったことをそのまま書いてるだけだからダメなんだよ！　ハッキリ言って、この〝大阪のバカ〟が言ってるような発展性がないんだよな！（ドンッ）。

――いまのマスコミは妄想が足りませんか（笑）。

井上　全然足りない！　足りないというより、ちっとも考えとらんだろう。妄想というのはね、これはハッキリ言って必要ですよ！　そういったことの中から格闘技の発展につながる話が出てくるんだから。マスコミがどんどん妄想を働かせて原稿を書いていって、ＰＲＩＤＥやＫ―１がその中からアイデアを見つけて引っぱっていく、と。そうしないと、全然おもしろい展開にならない。

――ちゃんと〝Ｉ提言〟を参考にしろ、と（笑）。

井上　何も俺は口からでまかせで言ってるのとは違うんだからね。じっくり考えて、根拠がちゃんとあるから言うとるんだから。チェ・ホンマンにしたって、俺は「飛びヒザ蹴りをやれ！」と前から言っとるんだから。あの大男が、グワーッと走ってきて、ボーンとヒザ蹴りやってごらんよ。こりゃどうしようもないですよ。防ぎようがない。だから、それをやれと俺は言っとるんだよ！　それが、いままでのようにノソノソ～っと出てきて、ボクサースタイルで構えてやね、なんなんだよあれは！

――ダハハハハ！　あの大男がこぢんまりとしてたらダメだ、と（笑）。

井上　あんなの見た目も悪いし、ＫＯにはつながらんしな。だからハッキリ言って、チェ・ホンマンにしても見た目が優しすぎる！　ヒゲを生やして全身に刺青をしろとは言わんけどな、身体中ペインティングして、角でも生やすぐらいじゃなきゃダメですよ。

――それじゃ、チェ・ホンマンがＣＭでやってる青鬼そのまんまですよ！（笑）。

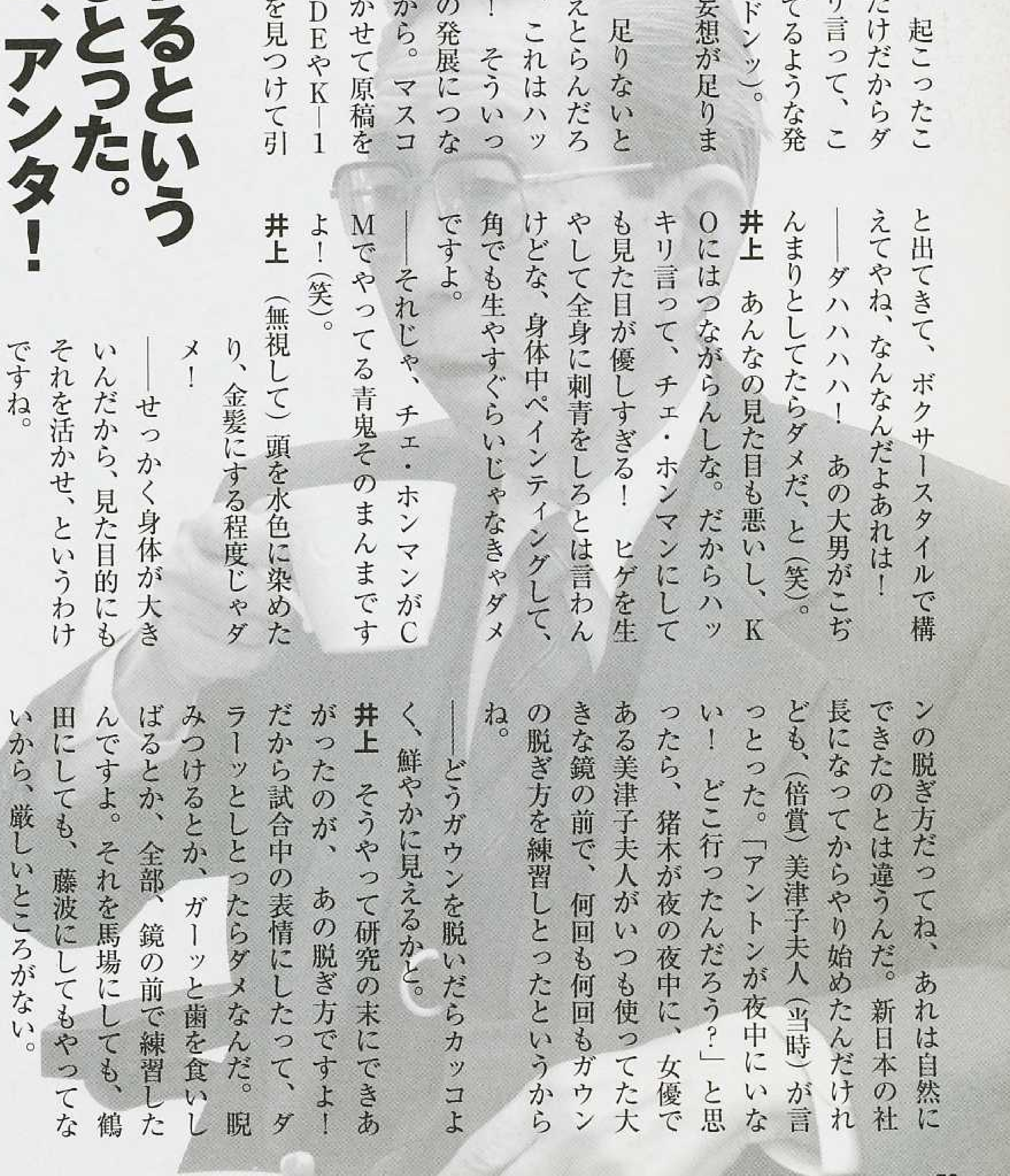
井上　（無視して）頭を水色に染めたり、金髪にする程度じゃダメ！

――せっかく身体が大きいんだから、見た目的にもそれを活かせ、というわけですね。

井上　そう。その点、猪木は〝人に見られている〟ということを常に意識しとったからね。それがプロですよ。猪木はマスコミに対しても「こういった目つきでしゃべらないといけない」というものがあったし、試合のときも必ず視線は上向きで、５メートル先を見ろ、と。テレビで観たとき、それが一番見栄えがいいということを、とことん研究したんですよ。

――猪木さんのあの鋭い眼光は、そこまで考えられたものだった、と。

井上　そりゃそうですよ！　何も考えんでできることじゃないからねぇ。試合前に「アントニオ～、猪木～！」ってコールされるときのガウンの脱ぎ方だってね、あれは自然にできたのとは違うんだ。新日本の社長になってからやり始めたんだけれども、（倍賞）美津子夫人（当時）が言っとった。「アントンが夜中にいない！　どこ行ったんだろう？」と思ったら、猪木が夜の夜中に、女優である美津子夫人がいつも使ってた大きな鏡の前で、何回も何回もガウンの脱ぎ方を練習しとったというからね。



――どうガウンを脱いだらカッコよく、鮮やかに見えるかと。

井上　そうやって研究の末にできあがったのが、あの脱ぎ方ですよ！　だから試合中の表情にしたって、ダラーッとしとったらダメなんだ。睨みつけるとか、ガーッと歯を食いしばるとか、全部、鏡の前で練習したんですよ。それを馬場にしても、鶴田にしても、藤波にしてもやってないから、厳しいところがない。

――ジャンボはやられたときの痙攣の練習はしてたかもしれませんけどね（笑）。

井上　（無視して）だから猪木から得られるものというのは、いまでもたくさんあるはずなんだ。それをみんな見習ってない。中邑（真輔）にしたって「おまえ、それでも新日本プロレスの選手か！」って言いたいよ！

――ダハハハハ！　中邑の見た目はダメですか。

井上　「おまえは猪木の試合をテレビでも観とらんかったのか」って。プロの選手だったら、なんでそれを自分の血として、肉として取り入れないんだって。あんなブスッとして花道を歩いていたらダメですよ。

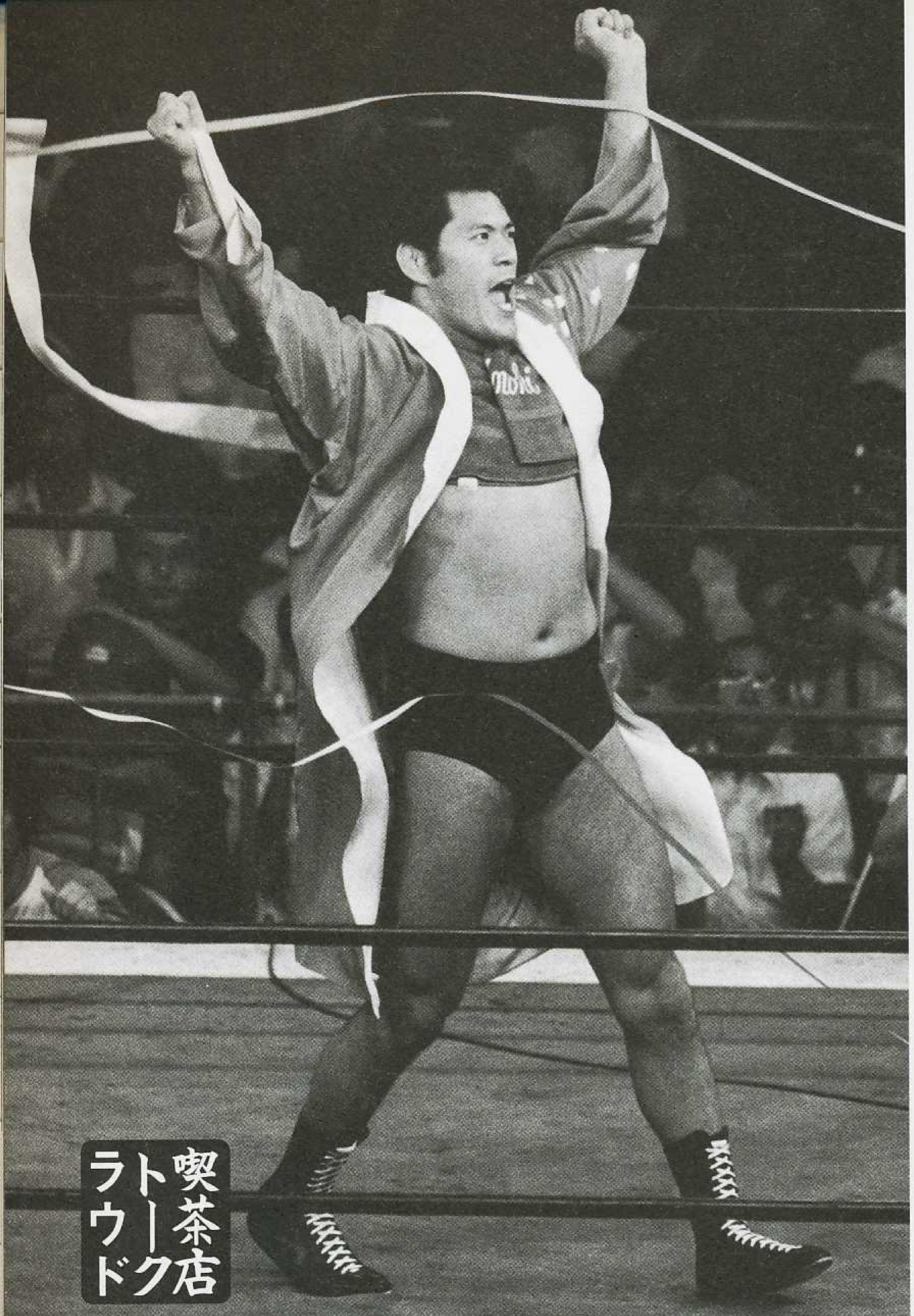
おく程度でいいんだよ。そうしたら、

井上　だからね、いまのマスコミの

が、いままでのようにノソノソ〜っ

〜！」ってコールされるときのガウ

道を歩いてたらダメですよ。



――あんな伏し目がちじゃダメだ、と(笑)。

井上　あんな猫背で出てきても、ぜ〜んぜん迫力がない。俺だったら、マスクを被って、ガウンをひるがえして、ダーッと花道を走ってきますよ。そしてトップロープをポーンと飛び越えて、マスクを客席に投げてやね、「いのうえ〜、よし〜ひろ〜！」ってコールされたら、ガウンをバッと脱ぎ捨てて一回転しますよ！

――ダハハハ！　井上さんの入場シーンはメチャクチャ観たいですよ！(笑)。

井上　それを中邑のように、ブスッとして歩いてきたんじゃ、コンビニの前にもそんな兄ちゃんおるよ！　闘う男なんだからね。日頃は優しくてもいい。しかしリングにいったん顔を出したら、生まれ変わった男にならんとダメ。

――もう目つきから何から、普段の自分を捨てろ、と。

井上　そしてね、我々記者というのは、そうやって作り上げたプラス面を書いてあげないといかんわけだ。人間、誰しもマイナスもあればプラスもあるんだから。ダメなところはただ批判するだけじゃなくて、悪いところをハッキリ書いたうえで、「こうしたらいいんじゃないか」という提言、提案をしなさい、と。

――批判だけでなく、建設的な意見も書け、と。

井上　だから俺が〝キラー猪木論〟というものを出したのは、それなんですよ。ターザン(山本)なんかが、ちょっと前に言いだした〝キラー猪木〟とは全然違うんだ。

――ドーム大会で、チョークスリーパーしてるのが〝キラー猪木〟じゃない(笑)。

井上　俺が「猪木は〝キラー猪木〟になれ」と書いたのは、ハッキリ言うたら猪木の体力が落ちたからですよ。昔の猪木はハンセンなんかにやられて、ロープに逆さ吊りにされても、自分でぶら下がってハンセンの攻撃を受ける余裕があった。そして自分で落っこちて、「このヤロー！」って向かっていったんですよ。ところがね、途中から、ぶら下がってられなくなったのよ。

――ハンセンの猛攻を受けきれなくなったわけですか。

井上　受けきれないもんだから、ごまかすような試合をするようになったんだよ。それを観て、残念ながら猪木は力が落ちたな、と。でも、力が落ちたら落ちたなりの闘い方があるんじゃないかと俺は思ったんだ。もう外国人レスラーの技を受ける力はないんだから、なにもやられてから最後に「このヤロー！」と反撃するんじゃなくて、先にメチャクチャやってやっつけろ、と。反則負けになってもいいから、試合前半の体力があるうちに場外乱闘でガンガンやっつけてね、「ざまあみやがれ！」と去っていく。これは純然たるヒーロー像とは違うわけよ。

――やられて、やられて、耐えて、耐えて、最後に反撃して勝つというのが、力道山時代からのヒーローのパターンですよね。

井上　でも、耐えられる力がないんだったら、最初からいきなりイスを持って殴りつけろ、と。たとえば、シンなんかとやる場合は、どっちみちイスなんか必ず持ち出す展開になるんだから。

――もうわかってんだから、と(笑)。

井上　そう。わかってるんだから、一発やられて「よくもやったな。俺もやってやる！」じゃなしに、最初からイスでシンをめった打ちにして、反則負けになって、シンはリング外でのびとるわけだ。それで猪木は「ざまあみやがれ！」と言って、悠々と帰っていく。これはもう、ヒーローでもなければ、ヒロインでもないわけですよ！

――確実にヒロインじゃありませんよね(笑)。

井上　(無視して)ヒーローじゃなかったら、じゃあ何か？　と。そこで俺はじーっと考えたんだ。「これはキラーだな」と。キラーにもいろいろあるんだけれども、ヒールのキラーではなく、〝殺し〟を持ったベビーフェイスということで、俺は〝キラー猪木論〟というものを打ち出したんだよ。

――なるほど。プロレス特有の〝受け〟ができないなら、いっそのことキラーになれ、と。

井上　それをあのとき猪木がやってくれたら、晩年のイメージダウンはなかったと思うんだよ。それが最後まで、相手の技を受けて、へなへなと倒れ込むような弱い姿を見せてしまった。だいたい引退試合でもあんなことやる必要ないのよ。

――ドン・フライ戦なんてやらなくていい。

井上　だいたい引退する60歳近い猪木がドン・フライと真剣勝負ができるわけがないんだから！(ドンッ)。

――そりゃそうですよね(笑)。

井上　だから引退試合というのは5分一本勝負でいいとこだけ見せて、そのあとは背広に着替えて、ビジョンで昔の映像を流しながら、猪木が昔話をしたりね。そういったことをやるのが、俺は引退記念試合だと思う。それをまともな試合をやってね、

猪木vsゴッチは純然たる真剣勝負でなくとも〝ホンマモン〟ですよ！

「ハイ、これでアントニオ猪木健在です」って、アホか！ と。

──ダハハハハ！

井上 引退するのは力がないから引退するんじゃないか！ だからそういった意味で、猪木の最後というのはちょっと誤ったかな、と。

──では、これからのアントニオ猪木に期待することはなんですか？

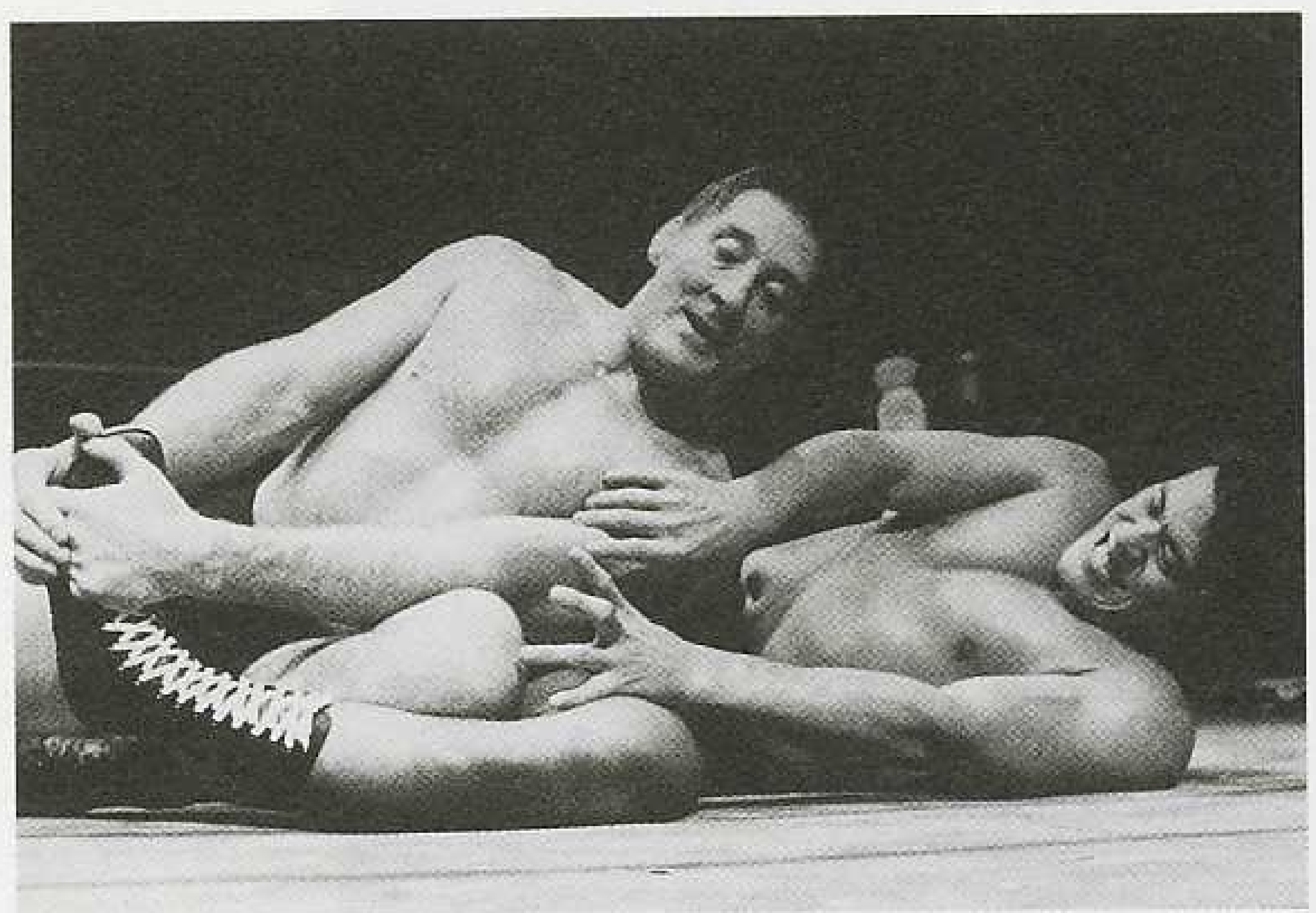
井上 やっぱり前田あたりと一緒になって、格闘技界全体のボスになってほしいな。いまこそコミッショナー制度をちゃんと作って、そこから中立なレフェリーを派遣するということをやらんとね。団体がレフェリーを抱えてるから、くだらないことやるんだよ！

──ダハハハハ！ 確かに、団体の意向に沿ったように感じるレフェリングというのは、格闘技でもたびたび見受けられますからね。

井上 これがちゃんとコミッションがあったらね、レフェリーはそこから派遣されるんだから、なにも片一方を勝たせるためにカウント2で止める必要なんかないんだよ。ポンポンポンポーンと3つ入れればいいんだから。猪木とゴッチが（1972年）10月10日に大阪府立でやったときもそうだった。

──新日本プロレスが旗揚げしたばかりの頃の試合ですね。

井上 あれは猪木がカウント3取られたんだけど、ホントはワン、ツーで止めなきゃいけないはずだったんだ。猪木も当然止めるだろうと思っとったら、スリー入ってしまったんでキョトンとしとったよ。あのときのレフェリーはルー・テーズだったんだが、試合後にテーズは「私はトップのレスラーだ。レフェリーとしてもトップでなければならない。その私がツーで止めるようないいかげんなレフェリングをすると思うかね？」と言ったもんな。



新日本プロレス旗揚げ直後に行なわれたカール・ゴッチ戦。特別レフェリーとして鉄人ルー・テーズを招いて行なわれたこの一戦は、猪木のフォール負けであったが、これがI編集長心のベストバウトなのだ。

──プロレスの展開としたらツーで止めるところだけど、厳格にちゃんとスリー入れた、と。

井上 それを聞いたとき「しめた！」と思ったな～、あのときは！

──かっこうのネタだ、と（笑）。

井上 だからあの試合はね、猪木が負けるような脚本のあった試合とは違うんだ。あくまで脚本上は猪木の勝ちだったんやけれどもね、テーズがしっかり裁いてポーンと入れた。それがあとになったら名勝負になったんですよ

──この猪木vsゴッチを、井上さんは猪木の生涯ベストバウトに挙げてますよね？

井上 そう！ それはね、純然たる真剣勝負では確かにないけれども、ホンマモンの勝負だったんですよ。だから俺は買うんだよ。ゴッチも凄かった。そしてレフェリーのテーズも凄かった。三者すべてが凄かった。

──すべてが一流だったわけですね。

井上 だから俺は結果も含めて、あの勝負を猪木のナンバーワンと言っとるわけ。猪木のナンバーワンというより、俺の好きな試合の第一位だな。だから俺が言いたいのはね、「プロレスというのはいいかげんで八百長だ」なんて言ってくれるな！（机を叩きながら）。あの凄さを見ろ！ と。あれがプロレスなんだよ！ だから長州がね、「お前らは一から十まで八百長だと思ってんだろ！」とある記者に怒鳴ったのはね、わかるんだよ。そうじゃないぞ、と。真剣勝負とは言わんけどね、結果はそれに近いことをやってる。だから大ケガもするし、脚本にない展開になったりもする。だからそういったところをジーッと見なくちゃいけない。

──そして我々マスコミは、そういうところを伝えなきゃいけないわけですね。

井上 そういうことですよ！

──わかりました。では、今日も長々とお話しいただきましたが……。

井上 （さえぎって）おいおい、もう終わりでいいのか？

──いや、もう1時間以上お話しいただいてるんで充分なんですけど……短いですかね？（笑）。

井上 そんなもん、キミィ。俺とプロ格者がトークしたら、2時間や3時間はザラだからねぇ！

──3時間の喫茶店トーク！

井上 ひどいときは喫茶店を2、3軒ハシゴするわけですよ。なぜ、俺がそこまで話をするかと言うと、話し好きということもあるんだけど、短い時間じゃ理解してもらえないんだよな。たとえば、君にしても今日の話を100パーセントは理解してないと思うよ。

──井上さんのお話を100パーセント理解するには、ボクはまだまだ修行が足りないというか（笑）。

井上 やっぱりこのインタビュー原稿にしても、俺のことをちゃんと理解したうえで書いてほしいからね。そうじゃないと、「大阪のバカがまたくだらんことを言ってる」ということになりかねないから。こっちは考えに考え抜いたことを話してるんだから。ちょっと身体を悪くしたから、いまは嵐山にはあんまり行かんけどね、自分の部屋でとことん考えてますよ。

──昔は嵐山で川面を眺めながら、プロレスのことをいつも考えていたわけですよね？

井上 そう。考えているうちに気がついたら寝てしまってね、星がまたたいていたこともありましたよ。

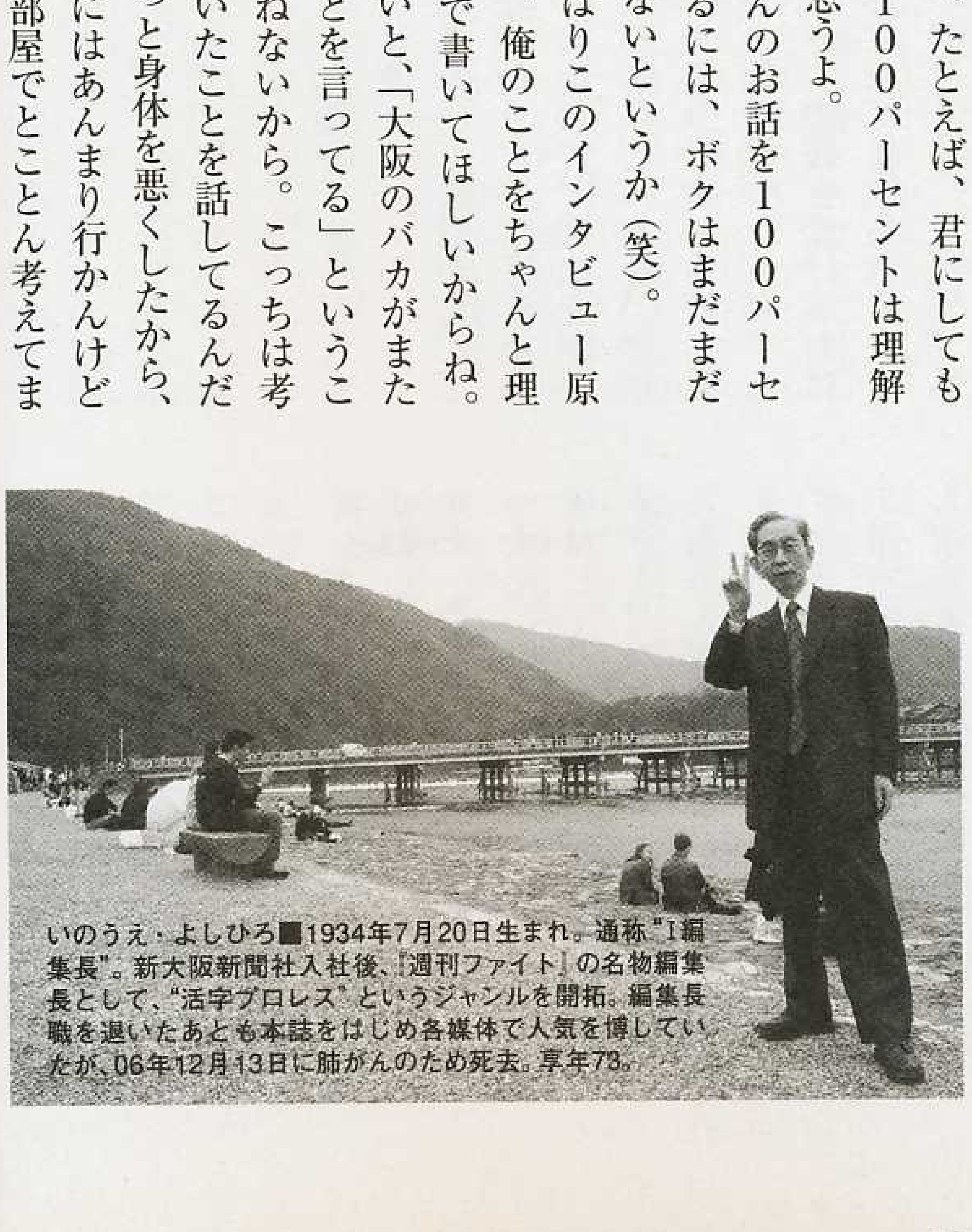
──ダハハハハ！

井上 アチャー！ 言うてね（笑）。それで終電間近だからあわてて駅に駆け込んだこともあった。やっぱりそこまで考えんとダメなんですよ。ええかげんな思いつきで、パッと活字にしたりね、インタビューでしゃべったりしたらいかん！

──いやぁ、ターザン山本さんに、ぜひ聞かせたい台詞ですね（笑）。では、またいろいろとお話を聞かせていただけたらと思います。ありがとうございました！

井上 あいあい。

【06年6月5日／大阪府・新阪急ホテルにて収録】



いのうえ・よしひろ■1934年7月20日生まれ。通称"I編集長"。新大阪新聞社入社後、『週刊ファイト』の名物編集長として、"活字プロレス"というジャンルを開拓。編集長職を退いたあとも本誌をはじめ各媒体で人気を博していたが、06年12月13日に肺がんのため死去。享年73。



PRIDE 崩壊の元凶

検証『猪木祭り2003』

俺たちのPRIDEが崩壊するきっかけとなった2003年大晦日三派分裂騒動——!!
このページでは『猪木祭り』のニュース報道をまとめたものである。このズンドコぶりと引き換えにPRIDEはなくなった!!

構成/大晦日研究委員会

始まりは03年11月11日——、猪木が「スキャンダルの船に乗って出向します!」と、03年の大晦日『猪木祭り』はTBSではなく日本テレビで中継することを宣言。ミルコ・クロコップの出場も発表した。ミルコはクロアチア現地のスポーツ紙で「猪木祭りには出ない。大晦日はPRIDEに出たい」とコメントするも、『猪木祭り』陣営はそれを黙殺(?)するかたちで高山善廣戦を発表。また永久電機の始動発表会を予定していることもあきらかになった。

12月に入り、猪木は会見で関係者に言われるがまま「村上和成vsレイ・セフォー」を発表するが、「村上和成vsステファン・レコ」の大間違いであり、関係者が会見後にあわてて訂正に奔走する。

そして12月5日に大爆弾投下! PRIDEヘビー級王者ヒョードルの参戦を電撃発表。ロシアン・トップチームからレッドデビルに移籍することでPRIDEとの契約はなんら問題のないことを主張。一方、PRIDE側はヒョードルのサイン入り契約書を公開。また同じく独占契約を結ぶシュルトの『猪木祭り』出場も認めないという声明を出した。ミルコも公式ホームページで『猪木祭り』の不出場を発表。一連の事態に猪木は「俺に持ってこられても困るというか!」と、さわってねえ節をついに炸裂させたのだ。12月15日、大会まで2週間前のことである——。

18日、ヒョードル&ミルコ問題が解決の兆しが見えないなか、猪木が藤波辰爾に『猪木祭り』での引退式をのんきに呼びかける。それを受けて藤波は対戦相手に猪木を指名。「もし対決を受けてくれるならリングシューズとコスチュームを持っていく」とやる気満々。こうして周囲が馬鹿負けするなか、我らが永田さんがヒョードル戦に意欲。一部の好事家が騒ぎ始める。

21日、『猪木祭り』側が不出場を宣言したミルコについて「負傷のため現状での出場は不明」と発表し、あらためて「PRIDEはヒョードルと独占契約を結んでいない」ことを主張。なお、出席するはずだった猪木は姿を現わさず、会見は1時間も遅延したうえに3分で終了した。

そして翌日、『猪木祭り』側が「PRIDEとヒョードルの契約書を読んだら問題点がクリアされてなかった」と前言を翻して皇帝欠場を発表。会見に遅れて姿を現わした猪木は髪の毛が乱れたまま「○○!どこに行った!」と猪木事務所関係者 を怒鳴りつけ、「俺も怒ってるんですよ! 皆さんもそうでしょ? ね? ね?」と同意を求めたかと思えば、いきなりトイレに駆け込み髪の毛をセットし始めるという狂乱劇場を展開!

そのズンドコは翌23日にも続き、『週刊ゴング』誌上で永田vsノゲイラが決定カードとして報道されるが、ノゲイラと独占契約を結ぶPRIDE側は即座に否定。また03年の春頃よりブラジル各地で勝手に「『猪木祭り』に出ないか?」と勧誘活動に励んでいた〝闘魂ストーカー〟イズマイウが、選手&関係者とのトラブルにより来日しない公算が高まったのだ。

大会が目前に迫った25日、猪木は「もうミルコが出ようと出まいと関係ねえや!」と聖なるクリスマスなのに開き直り、「ウチは31日までが勝負!」と大会当日までの持久戦を宣言。翌日にはミルコの不出場がようやくアナウンスされ、『Dynamite!!』に出場する中邑真輔に「ダブルヘッダーもおもしろい」などと『猪木祭り』参戦を唐突に呼びかけた(実現せず。あたりまえ)。

また、大仁田厚が「猪木さんを助けられるのは俺しかいない」と、当時毎年恒例だった『猪木祭り』殴り込みを宣言。あまりのドタバタに業界では日本テレビは『猪木祭り』放映を断念し、ラーメン特番に差し替えるという噂が流れ出す。

大会3日前の28日、ヒョードルが関西空港に極秘来日をはたす。ノゲイラの参戦について猪木は「当日までわからねぇって言ってるじゃねえか!」と逆ギレ。対戦相手が決定していない永田さんは「明日、神戸に向かう。そこで提示される相手によって、出るかどうか決める」と、ほとんど人柱状態であることが発覚。かわいそうな永田さん……。

29日、猪木が再びヒョードル参戦を電撃発表! するも、PRIDE側もまた反論(PRIDEサイドと交渉の末、内定したが、この発表自体はフライング説あり)。藤田和之の対戦相手レイ・マーサーが「飛行機に乗る寸前、ルールのことでトラブルになり、急きょそのまま引き返した」ことが発覚。

30日、PRIDEがヒョードル参戦を許可。大会前日に当時世界最強の男と闘うことになった永田さんは臆することなく「なんて馬鹿なという非常識な闘い方をする。チャンスがあればナガタロックⅡを仕掛ける!」と驚ガクのコメント。

そして運命の大晦日、手配していたゴングが到着しないため大会開始が遅れる。結局、大阪在住の三島☆ド根性ノ助がジムのゴングを持ってきて無事に大会スタート。しかし、年越しセレモニーとなった百八つビンタでは進行の不手際により観客がリングに雪崩れ込み、暴徒と化すハプニングが発生!! オチを含めて歴史に残る大晦日となった。

なお、『猪木祭り』の平均視聴率は5・2パーセント。瞬間最低視聴率は藤田和之の試合VTR放送時、0・2パーセントだった……アリガトーッ!!

闘魂の黒歴史

猪木と事業

アントン・ハイセルから永久電機まで



「猪木は事業に手を出してる場合じゃない！」

かつてよく目にしたこんな猪木批判。ズバリ、もっともな話だけど、そんなつまらない正論は聞きたくない。だいたい猪木はいまも昔も事業まっしぐらな人間なのに、何をいまさら大騒ぎしてるんだろうか。人並み外れて旺盛すぎるその事業欲は、今日に始まったことではなく、彼のプロレス人生と絡みつくかたちでドラマチックに展開されてきた。事業に走れば走るほど猪木の魔性ぶりは浮き上がり、ある種のエンターテインメントとして、プロレス史を彩ってきたのだ。

古くは昭和・新日本時代にさかのぼる猪木の事業投資は、ブラジルの物産販売を目的とする「アントン・トレーディング」の設立から始まった。マテ茶やアントンナッツ（ひまわりのタネ）、タバスコの輸入、六本木のスペアリブレストラン「アントン・リブ」を取り扱っているぶんにはまだよかったが、いずれ国家規模のプロジェクトに着手することになる。ここ数年のあいだで、その事業スピリットが最大限に爆発したのは、いわずと知れた永久電機だろう。

成功すれば、わずかな磁力で半永久的にエネルギーを生み出すというこの発明。科学の理論上、100パーセント不可能と言われているが、中世ヨーロッパの時代から多くの人間がこの発明の魔力にとりつかれ、猪木もあり余る情熱と、億単位の金を注ぎ込んでいた。

「この発明によって科学の理論が覆り、学校の教科書を書き換えることになる」（猪木）

彼の側近ですら、いぶかしげに眺めていた永久電機が、いつの日か動くと信じてやまないのであった。

もともとこの大発明は、大阪のある人間がこの計画を破壊王こと橋本真也に持ちかけたものだったという（破壊王も事業欲が旺盛だった。冬木薫さんと健康器具販売会社を作ろうとした話を耳にしたが、破壊王にこそ健康管理をしてほしかった）。しかし、どういうわけか話は猪木のもとへと転がり込むことになった。

そして、2002年3月12日――ホテルオークラで、いまや伝説の永久電機記者会見が行なわれる。その席で公開された永久電機の名称は「Inoki Natural power-VI」。一般マスコミが取り囲む会見冒頭で「エネルギーの常識にないことが起こりました！」と誇らしげに挨拶する猪木だったが、いざ起動スイッチを押しても、永久電機の力で点灯するはずの電光板は、一瞬たりとも反応を示さなかった。ざわつく報道陣、顔を見合わせる企業家たち……。

関係者があわただしく電機内部を点検すると、内部で最も重要となる磁石装置の止め金が外れていた！

じつは、この日の午前中に行なわれた世界各国大使向けの会見ではちゃんと起動したそうだが、「俺が開発者に完成を急がせてしまった」（猪木）せいか、金具にトラブル発生。驚くことに彼らは外れた金具を接着剤で補強して公開記者会見に臨んだ。世紀の発明を接着剤でフォローしたというのだ。

その後、金具が外れたまま猪木が起動を試みるという無茶なチャレンジも施されたが、電機は不気味な沈黙も保ったまま。いや、動かないのも無理もない。そもそもこの開発に携わったT技研所長K先生からして、「なぜ永久エネルギーを生み出すのかわからない。早稲田大学の教授に相談している」という他人事すぎる発言をしていたほどだから。

「午前中は動いていたんですけどね。ボルトをピシッと締めればこういうことにはなんない。一週間ぐらい日を調整しまして、それで動かないようであれば終わりだな！ ダハハハ！」（猪木）

猪木は豪快に笑い飛ばしたが、ボルトをピシッと締め直しての会見は行なわれることなく、しばらくしてT技研のK先生はこの事業から姿を消した。その後、開発者は入れ替わり、「アメリカの巨大資本が妨害しかねない」（猪木）という陰謀史観的な理由のために、秘密裏で開発が進められたそうだが、結局は路線変更。

元・日立製作所の技術者を迎えてアントン・バイオテック（旧アントン・ハイセル）社長の猪木実弟・啓介氏らの手により、効率の良いモーター「闘魂パワー」（開発はINP技術研究として日の目を見ることになる。夢

「過去、政木氏の周りには通常では考えられないことが数多く発生して

父親は石炭業を営んでいた。エネルギー事業に挑むのは猪木の血

の大発明の着地先は、相当現実的なモーターだったわけだ。

事実上の永久電機失敗を機に、猪木の事業熱が冷めたという話を耳にしたが、どうなのか。そもそもあり余る事業欲が芽生えたきっかけは、ゴルフ場やサウナなどの多角経営で鳴らした力道山のもとで青年期をすごした影響もあったのだろう。

さらに猪木が5歳の頃に若死にした父親は石炭業を営んでいた。エネルギー事業に挑むのは猪木家の血でもあった。その石炭業は石油時代の到来とともに、あえなく破綻。行き詰まった猪木家は、ブラジルへの集団移民の道を選択する。しかし、その新天地は日本で聞かされていた楽園像からは、ほど遠いものだった。

「朝5時になると鐘が鳴って一時間かけて農園まで歩いていくんだけど、作業中は現場監督がムチとピストルを持って見回りにくる」(快守氏)

電気も水道もない。過酷な奴隷同然の移民生活。家族総出で働いても働いても、逆に借金がかさんでいく(農園主に騙されていたのだ)。猪木が言い続けてきた「発展途上国に灯りを点したい」という言葉の原点や、エネルギーへの関心は、ブラジル移民時代に養われていたのだった。

のちに巨大な負債を背負うことのなるアントン・ハイセル事業も、ブラジル政府のエネルギー政策がヒントになっている。このサトウキビからアルコールを絞り出したときに排出されるアルコール廃液、絞りカスを家畜飼料にするプロジェクトへの資金投入によって、黄金期を迎えていた新日本プロレスは疲弊して山本小鉄らによるクーデターに発展した。

また、環境面の事業でいえば、地球上の酸素活性化をもくろむサンゴの養殖事業もあるが、なかでも耳を疑ってしまうのが、地球に優しい〝絵の暖房〟ビジネスだ。

ある日、ペンキを塗りたくった絵が何点か飾られ、暖房が効いた部屋に、猪木は作家で友人の加治将一氏を招いた。そしてペンキ絵を見渡しながら、自信満々に胸を張ってこう言ったそうだ。

「この絵から暖房が出ているんだ!」

加治氏が絶句したのは言うまでもあるまい(猪木最大のタニマチであり理解者だった佐川急便の佐川清氏も、さすがに困惑したそうだ)。

猪木はその加治氏に「北朝鮮海域でのフグの漁業権を独占できるかもしれない」(『アントニオ猪木の謎』加治将一・著)とも語っていたらしく、これがのちに〝拉致問題〟の時節柄、不謹慎すぎるということで街宣車まで出動する騒ぎになった2004年の「北朝鮮〜ふぐ松茸食べ放題ツアー〜」につながると思えば非常に興味深い。

こうして周囲の目や街宣車すらも気にせずに、恋は盲目ならぬ事業は盲目とばかりに突き進む原動力は、「プロレスに対するコンプレックスにもあった」という証言が関係者の多数一致するところだ。

「レスリングしかやれないのだからおとなしくレスリングをやっていなさいと、裏で薄笑いを浮かべているのだ。逆に私は、よし、絶対にやってやると、燃えた。見せてやる、俺の可能性を!!」(『苦しみの中から立ち上がれ』アントニオ猪木・著)

だからこそ、新日本プロレス名誉顧問で元・首相の福田赳夫氏(故人)に「ブラジルという国は非常にインフレ率の高い国」だから、アントン・ハイセルに「投資することには反対なんだ」(『苦しみの中から立ち上がれ』)という適切なアドバイスを送られても、猪木がまったく耳を貸さなかったのもうなずける話。「永久電機をバカにした人間を見返してやろうと、(発明に)のめり込むばかり」(『週刊現代』草間政一氏インタビュー)だった。しかし、そこには常軌を逸する信念、やけにポジティブな特攻精神があるからこそ、猪木は愛すべき存在なのだ。

どれくらい猪木がポジティブかといえば、かつて本誌が猪木事務所の固いガードをかいくぐって、当時の電機担当者だった啓介氏の取材をしたときのこと。啓介氏から永久電機の現況を聞いて、誌面にしたところ大問題に発展! 猪木周辺の関係者から事情聴取されたことがあった。

しかし当の猪木はというと、その記事を一読して、こう言い放ったそうだ。

「……いい宣伝になるんじゃねえか。ンムフフフ!」

人間としての器が違う! さらにさらに、なぜ猪木が懲りもせず怪しい計画に札を置くかといえば——

「人前でしゃべったことの10個にひとつは実現させなさい。自分の言葉の10個にひとつだけは責任を持てる形を作ってみなさい。そうすれば虚言癖とは言えなくなる」(アントニオ猪木人生相談『風車の如く』)

そう、10回に一度だけの成功でオッケーなのだ。こんなポジティブな信条を携えているから、なんの疑いもせずアントン・ハイセルに当時で「37億円」(啓介氏・談)という莫大な金額を投資できたのかもしれない。

結局、石の上にも3年というか、永久電機は高効率モーターの完成へ、ハイセルは岡山の林原生物化学研究所の協力を経てアガリクスの開発につながるわけだが、じつはこの化学研究所に、猪木の事業欲、そして精神面に多大な影響を及ぼした人物がいた。

その名は政木和三(まさき・かずみ、故人)。生涯に1000件以上の発明品に携わり、なんと自動炊飯器、自動ドア、格安テレビ、エレキギターを〝インスピレーション〟で発明した……と本人は主張する。そのうえアトランティス語をしゃべる。そんな政木先生のホームページからの引用文で、彼が驚愕の偉人であることを理解してほしい。

「過去、政木氏の周りには通常では考えられないことが数多く発生している。口の中から真珠が出てきたり、数日にして庭の三つ葉が四つ葉のクローバーに変わってしまう。遠方に忘れてきたはずの鍵や資料が手元に発生する。さらに極めつけは、下記に掲載した空間から突如として発生した仏像群である。

これらの多くの減少には物的証拠がある。それも生き証人が必ず同伴しているのだ。そして、これらの仏像は今も現存するのである」※出典

こんな大人物に猪木は心酔。月に一度は会いに行っていた(同伴した倍賞美津子・前夫人が〝頭の良くなる機械〟の実験台になったという記述もあり)。政木氏は薬事法違反の容疑で一部週刊誌誌上を賑わせたこともあったが、猪木に〝インスピレーション〟を与えたことは疑いようの余地もない。

しかし、永久電機の挫折以降、猪木からの威勢の良い話が飛び出さないのが少し気がかりだ。

かつて、永久電機に燃えていた当時の猪木はこんなことを言っていた。

「人はウソをつくけど、電機はウソをつかないからな」(アントニオ猪木人生相談『風車の如く』)

確かに電気はウソをつかず、科学の法則どおり、永久電機は成功しなかった。ウソをつかれたほうが幸せだったのか。あたりまえすぎる現実を見てしまった猪木。その魔性ぶりが再び浮き上がることはあるのだろうか……。

洋泉社『プロレス・格闘技 超〝異人〟伝』掲載文を再構成/ジャン斉藤

実兄・快守氏から考える

猪木の血とは何か？

〜あるいは伝説の熱海市市長選〜

アントニオ猪木の実兄、猪木快守氏は、猪木ゲノムを語るうえで決して外せない人物なのである——。58ページから始まる快守氏のインタビューを楽しむ前に、ここでは弟に勝るとも劣らないゲノムっぷりを紹介しようじゃないか！

快守氏といえば、テノール歌手「パブロ猪木」という顔を持っているが、ブラジル移民時代にフリーメイソンとの関わり合いを持ち、アントン・ハイセル事業で奔走し、〝神のお告げ〟で五大宗教の統一に目覚め、そしてスポーツ平和党にも参画。はてにはキューバのカストロ議長から島をプレゼントされた超大物だ。

あの永久電機事業にも携わるかたわら、全国都道府県の闘魂神社設立、国際連合承認プロレスイベント〝国連ボンバイエ〟の開催や、全国パチンコ店の駐車場の照明を闘魂モーターで灯すという、320億円ビジネスプロジェクトもプランニング（1万6000店舗×モーター10機×一機20万円という快守計算）。

そしてなによりも話題となったのは、06年8月の熱海市市長選出馬劇である。それに先だって熱海市内のホテルで行なわれた熱海市市長選出馬表明会見が本当に神がかっていたのである。

まずホテルのロビーに足を踏み入れると、「猪木快守・熱海市長選出馬表明会見」と並んで「パブロ猪木コンサート」の案内板が並ぶという異次元ワールドぶり！

会見場所は宴会場と思わしき畳部屋。その中は静岡県内の新聞記者たちの姿ばかりで、どうやらプロレス関係者は本誌だけ。テレビカメラが何台か向けられるなか、快守氏が市長選出馬の意気込みを語る。赤字財政のためについ先日倒産した北海道夕張市の問題を、そのまま熱海市の財政状況へと転じる快守氏がいた。

「（夕張市の問題は）みのもんたさんがテレビで『これでいいのか？』と力説しておりました」

「今日も怒っていた！」

「ボクはですね、みのもんたさんと古舘伊知郎さんに相談しております。熱海市をテーマに取り上げてほしい！　と」

「みのもんた候補者の応援演説？」と受け取られかねなくもない内容だが、快守氏の燃える闘魂はヒートアップ！

「記者の皆さんにもお聞きしたいです！　このままでいいんでしょうか？　と。いいという人は、おそらく媚薬を効かされているか、甘い汁を吸っているか？」

市政改革への決起を促す快守氏！　だが、ある意味で挑発的なこの発言が、記者たちに火をつけることになるとは……。とりあえず快守氏の出馬表明演説はひと段落し、質疑応答へ。

——熱海市の支援組織はあるんですか？

「いくつかございます。『新生熱海の会』です。立ち上げたばかりで人数（会員）は少ないですが」

——各党から支援や推薦は求めているんですか？

「お話はさせていただいています。じつはね、池田大作先生がブラジルに入られたときに、ボクが骨を折ったんですよ。そんな関係で何度か食事をご一緒してますし、（出馬の件で）お手紙を書きました」

池田大(輔)ちゃんじゃなくて？　いきなり仰天エピソードを公開する快守氏！　しかし、記者たちは冷静に同内容の質問を繰り返す。

——だから、支援や推薦を求めてるんですか？

「自民も民主も公明もトップにお会いしました」

——だから無所属でやるのか、それとも支援や推薦をもらいたいのか？

「え〜、あくまでも無所属ですが、向こうが推薦を出すというのであれば、ありがたく受け取るつもりです」

どうしても猪木家の血はサービス精神が旺盛なのか、微妙に本題から脱線してしまう。アントン・マニアにはたまらない展開も、記者陣からすれば要領を得ず、イライラは徐々につのっていく。

「もっとわかりやすく言ってくださいよ！」

語気を荒らげて快守氏に要求する記者も現われ、ヒリヒリした空気が会見場を覆いつくす。そもそも、快守氏の故郷は熱海でもなければ、長らく在住しているわけでもない。そこで突然の出馬表明である。記者たちが疑念を持って接するのは当然なのかもしれない。

なぜ熱海の市長選に出馬したのか？　快守氏は会見の席で、数ヵ月前に熱海市議会の人間から相談を受けたという旨の発言を残していた。しかし熱海市議会議員・村山憲三氏のブログによれば、「〝アントニオ猪木〟さんに、猪木さんのように、グローバルな活躍をし、参議院議員を2期の経験と人脈を持っている方に、熱海市長に名乗りを上げて頂いて、熱海の再生を託したいものですねーと、笑い話としてお茶漬け程度に話した事が、猪木氏の背中を押すことになったのでは」（本文ママ）

……え？　声をかけていたのは快守氏じゃなくてアントンのほう？　しかも笑い話のお茶漬け程度だったなんて！（村山氏のブログにはほかにもアントン・マニアにはたまらない衝撃的記述が多数あり→http://www.murayama-kenzo.com/）。

でも、快守氏は鉄の意志と熱意を持っているからなんの問題ないのである。

なにしろ **「（出馬することが決まって）正直、命を狙われております。ハッキリ申しますが、脅しが3件ぐらい入っております（笑）。市長選とはそんなもんかなと身に染みて感じております」** と、まるで『猪木祭り』関係者ばりに命懸けの姿勢！

ズバリ市長選とはそんなもんであっちゃ困るが、快守氏の決意は脅しに屈せぬほど強くて揺るぎないものであり、じつはもともと熱海に移住計画も進めていたそうだ。

「ボクはね、熱海市じゃなかったら立候補してなかったんですよ。昔、熱海に親父の別荘があったこともあって、晩年は絶対に熱海に住もうと決めてたもんですから。4年前から家を探してて、梅園の隣の6000坪の土地を買うつもりだったんですよ。安かったんで」

ろ、6000坪って、余生をすごすためにはいささか広すぎる気もするが、しかしこのドリームプロジェクトにピンときたアントン・マニアも多いことだろう。

初めに触れたように快守氏は、『闘
魂神社』の各都道府県設置戦略を目

て」と、池田大作、みのもんた、古舘
伊知郎らに続く、夢の人脈を披露！

を出しているという事実ですね。こ
れは事実でしょ」

た範囲で書いてます。だから都の選
管も静岡の選管にも差し支えござい

ルの女将がさっきから焦った表情で
ウロウロしていた。部屋貸し出しの

熱海と初島の4キロのあいだを海底水族館、海底道路を作るという大計画がある

初めに触れたように快守氏は、『闘魂神社』の各都道府県設置戦略を目論んでいるが、その一環として、日本のある土地に**「有名なお城を再現して建てて、そこに宿場町も作ろうと思ってる」**と、かつて力説していた。あまりのドリーム・プロジェクトぶりに自分は絶句したものだが、この土地買収説話とその野望をすり合わせれば、〝日本のある土地〟とは、この熱海だったことに間違いない。

残念ながら**「おかしな問題が起きてその土地は買わなかった」**ということでご破算になったが、前出の村山氏「熱海闘魂神社総本山」誘致計画という、シビれる話も持ち込んでいる。本気も本気だった。そして、走り出したら止まらない猪木家の血を持つ快守氏の恐るべき野望が次々にこぼれだす！

「一つ大きなプロジェクトを抱えております。熱海と初島の4キロのあいだに海底水族館、海底道路を作るという何千億円の計画です！」

「ボクは浅草サンバカーニバルの仕掛人なんですけど。ふるいつきたくなるようなサンビストをブラジルから呼んでコンテストを三日三晩やれば、泊まり客も増えるし、町の活性化になると思います」

サンバのダンサーを「サンビスト」と呼ぶそのセンスは決して見逃せないが、まさか快守氏が浅草サンバカーニバルの仕掛人だったとは！

また、**「熱海に若者を呼ぶために、表参道みたいな町作りをしたい。熱海ファッションがあってもいいと思うんです。ボク、山本寛斎と親しいですから、彼に音頭をとってもらって」**と、池田大作、みのもんた、古舘伊知郎らに続く、夢の人脈を披露！ あと〝熱海ファッション〟というバッチグーなネーミングセンスも、〝大正デモクラシー〟クラスのレボリューションを感じるのである。

ところが、記者陣はこれらのスーパープロジェクトには、あたりまえのように関心を示さず、より具体的な市政改革に話をふっていく。

——熱海市財政のどこが問題なんですか？

「いま、みのもんたさんの番組でやってるとおり！ あれを見ていただければ一目瞭然、市の放漫経営。ハコモノばっかり作って何百億投資して。最後は国が肩代わりして」

——それは夕張市の話で、熱海でどうするのか？ という話なんですけど。

「でも、赤字財政の市49のワースト10に入ってるんですよ、熱海」

——それは違うと思うけどなあ。

「それじゃ、みのもんたさんがウソを言ってることですから！ 今日、ボク、みのもんたさんに電話しますから。みのもんたさんに熱海を取り上げてもらおうと思ってますから！」

……議論の焦点は、いつのまにか、どういうわけか、みのもんたへ！

——どういうものを指して赤字財政と言ってるんですか？

「いま熱海市が毎年40億という赤字を出しているという事実ですね。これは事実でしょ」

——いや、わかりませんけど。交付税交付金のことを言ってるんですか？ 何を指してるんですか？ 要するに熱海市が赤字だという以上、具体的にどこがどう赤字なのか？ ほとんどわかってらっしゃらないと思うんですけど。

「これは確かな数字なんですが、内容は市長にならないと言えない。だって市長が公表しないんだから。それを公表してくださいと言ってるわけですよ」

——もう一回聞きますが、熱海市は交付税交付金の交付団体なのか、非交付団体なのかご存知ですか？「赤字、赤字」とおっしゃってるんですから、あえて聞いてるんですが、全国の自治体のなかで、いま各自治体に入ってる交付税、あれをもらってる基本的に赤字団体で、もらってないところは赤字じゃないと断りをされてるわけなんですけど。

「これはですね、私が言っておりますが、そこまで会計に関してはですね、中身がボク、なんつったってわからないですから」

——わからないのに（配布した資料に）書いてるんですか!?

「だって公開をしてないわけだから。でも、これは市議の人から聞いた範囲で書いてます。だから都の選管も静岡の選管にも差し支えございませんということで、許可をもらってます」

——税金のことをちょっと勉強してもらわないと。間違えるとヤバイかなあと。

「そうですね。そこはちょっと言いすぎてる部分があると思います。非は非として認めますし、ボクもね、皆さんに勉強させていただかないといけない部分があると思うんですよ」

——猪木さん！ 市長選に出るんだったらさ、キチッとそういう……。

「（さえぎって）だから、ボクは市長さんにお会いしに行ったんです！ こういうことも書くから、ぜひお会いしたい。でも逃げちゃって会ってくれない！」

——そういう問題じゃない！（怒）。市の財政がどうなっているかということについてキチっと……。

「いや、市長さんしか知らない問題がある。市長が公開しないんだから……」

——（さえぎって）もうちょっと勉強してくださいよ!!

一触即発、大激論!! 快守氏、首の皮一枚の大ピ～～～ンチ!!……とクライマックスに達したところで残念ながらタイムオーバー！ ホテルの女将がさっきから焦った表情でウロウロしていた。部屋貸し出しの時間はとっくの昔にすぎていたのだろう。こうして快守氏はアントン・ゲノムあふれる以下の台詞で、一時間半にもおよぶ出馬表明記者会見を締めくくった。

「このあとコンサートがあるものですから、声がかれると歌が歌えなくなりますので、これにて失礼させていただきます（ニッコリ）」

……これまで多くのアントン絡みの会見やイベントに立ち会ってきたが、ここまでアントン・ゲノムが炸裂したのは、伝説の永久電機公開記者会見以来だと思う。いろいろ勉強不足の面は多いながらも前のめりに突き進む、〝迷わず行けよ、行けばわかるさ〟のスピリット。男すぎるぜ、猪木快守！

記者から集中砲火を浴びてしまい、残念ながら翌日の新聞報道なんかでは辛らつな記事を書かれてしまったが、自分は全面支持！ 理由はとくにないが、いつから理由がないからって応援しちゃいけなくなったんだ？ 迷わず行けよ、行けばわかるさ。快守氏には、理由もなくただただ賭けてみたい果てしなきロマンを感じたのである。

最後に選挙結果を書いておくと、斉藤栄氏が7261票で当選、次点の川口市雄氏は7154票……。最下位ながら771票獲得の快守氏が、熱海の何かを動かしたことは言うまでもあるまい——。

猪木が熱海を変えた!!

文／ジャン斉藤（本誌102号掲載分を再構成）

アントン猪木・実兄

猪木快守

アントン・ハイセルから財宝船まで語る!!

この兄にしてこの弟あり

聞き手／ジャン斉藤



猪木快守氏、沈黙を破る——！　06年の熱海市長選以来、本誌編集部と連絡が途絶えていた猪木快守氏だが、ひょんなきっかけから接触に成功！　アントニオ猪木デビュー50周年記念特集に花を添えることになったわけだが……、気になるのは快守氏に指定された取材場所なのである。癌研センターって、まさか……!?

その理由は本文中で触れているが、驚くことなかれ、快守氏は病をおしてほっぺをつねりたくなる夢を語ってくれたのだ！　これぞ猪木の血だ!!

——快守さん、ずいぶんおひさしぶりです！

快守　ひさしぶりだね〜。今日はどういう取材なの？

——快守さんの弟さんであるアントニオ猪木さんが今年の9月30日でデビュー50周年を迎えるのでいろいろとお話をうかがいたいな、と。

快守　なるほどねぇ。

——しかし、取材場所が癌研センターってちょっとビックリしてるんですが……。

快守　じつはね、ボクは胃がんなんだよ。

——そうだったんですか……。

快守　治療の経過がよくてまあまあ大丈夫なんだけど、いまは週に一回、ここの病院に通っててさ。入院してるときにアントニオがお見舞いに来てくれてね。彼は今度、上海に進出するでしょ？　もういまから15年くらい前かな……、ハルビンで新日本プロレスが興行をやったんだよね。あれはボクが仕切ったんだけど。

——あ、そうだったんですか。

快守　うん、とっかかりはボク。本当はね、中国政府が許可しなかったの。だけど、たまたま中国政府人事部のお偉い方の甥っ子さんがハルビンでいろんな活動をやっていて。その方にいろいろと頼んで目をつむってくれた。

ロスチャイルド家の秘書に技術を売り込むために2000万円使った

——しかし、快守さんは顔が広いですね。

快守　ボクは顔だけは広いからね（苦笑）。

——かつてはロスチャイルド家と猪木さんをくっつけようしたじゃないですか。全世界のフリーメイソンの会員の前で猪木さんに講演をさせようとして。

快守　あれはね、ロスチャイルド家の秘書の方が科学技術に対して投資をしていたわけ。そんでたまたま日本に来たとき、あるコネから「イノキ、日本でいい技術があったらいろいろ紹介してくれ」ってことでホテルオークラで会談を持ったんだよ。それでこれはいい技術だってものを7つくらい集めてさ。なかにはドクター中松も売りこんできて。

——あのドクター中松さんも！　そういえば以前、快守さんの紹介で一緒にごはんを食べた記憶がありますけど。

快守　で、ロスチャイルド家の秘書に売り込むために使ったお金は1000万。

——い、い、1000万円ですか！

快守　そのほかにホテル代だのなんだのかんだのって結局2000万くらいかかったかな〜。そんで、その技術をホテルオークラの部屋を借りてデモンストレーションしたの。

——なんだか永久電機のお披露目会みたいな感じですね（笑）。

快守　そうしたらその秘書の方が黙って見てて「使える技術は一つもない」って。ドクター中松は絶対に自分の技術を売り込みたいから、赤坂にある彼の事務所に連れていかれてさ。

——なるほど。しかしさすが快守さん、ビッグスケールですねぇ。

快守　で、今度また中国で仕事をやろうと計画中なんだよ。

——身体のほうは大丈夫なんですか？

快守　大丈夫！　ボクはね、意外と根が強いの。それにボクはいろいろ仕事をやりかけているし、上海の崇明島で有機農法をやってくれって中国政府から頼まれてるし。

——中国政府から！

快守　うん。中国でコーヒー栽培をやるっていうんでね。20年ほど前に北京の大学で農業指導したことがあって。ほら、ボクはキューバのカストロさんのとこで農業指導してたでしょ。

——そのお礼にカストロ議長からキューバの小島をもらったんですよね。それで「イスラ・アミーゴ・デ・イノキ」という名前をつけて。

快守　そうそうそう。友人猪木島という意味なんだけど。

——そういえば、ちょっと前に猪木さんが財宝船を引き上げたって話がありましたけど、それって快守さんが進めてた財宝船計画と同じものなんですか？

快守　いや、そっちはボクは絡んでない。

——ああ、別の財宝船の話ですか（笑）。「イスラ・アミーゴ・デ・イノキ」にも財宝が眠ってるんですよね。

カストロさんにもらったキューバの小島には1000億円の銀貨が眠っている

快守　あの財宝には歴史があってね、キューバ革命が始まる前の1948年に、スペインの財宝船がたまたま水補給のために寄ったんだよ。日本円で約1000億くらいの銀貨を積んで。

——い、い、い、1000億円！

快守　乗組員は13人。そんときはちょうど季節風が吹く季節なんですよ。で、悪天候で沈没しかねないから、ボクの島に財宝をいったん降ろしてスペインに帰ったんですよ。

——1000億円の財宝を！　ちょっと迂闊すぎますよ（笑）。

快守　で、その直後にキューバ革命が起こってしまって、スペイン船もボクの島に戻れなくなってしまった。財宝を取り戻せなくなってしまった！

——あちゃー！　なんてドジなんでしょうねぇ。

快守　で、数十年後、その島がボクのものになったあとに、そんときの船員がキューバ政府に申し出たわけです。「島に銀貨を埋めた。あの財宝を掘る権利を与えてください」と。そうしたらキューバ政府は「あれは猪木にあげた島だから猪木に許可をもらえ」ってことで、ボクのところにその船員の一人が訪ねてきたの。

——実際に会ってるんですか！

快守　ボクは「いいよ」って言ったの！　そんで資料やら、そんとき財宝を積んだボートとかも見せてもらって。ボクの島には港がないからボートに乗せるしかないから。で、財宝をどうしたらいいかって話をしていたら、日本で弟の政治スキャンダルが起きてさ。そんで話が飛んだりなんだりしているあいだに、ボクもべつにあわててやることないな、と。

——財宝に足が生えて逃げるわけでもないですし。

快守　そんなことしているあいだにテレビ局が乗るとかなんだかんだと言い始めて。まあ、これはボクが弟に提供した島だから、ボクのってことではないですよ。だけども、もらったのはボクですから。誰が財宝を探そうがかまわないですけど。

——ぜひチャレンジしてほしいです！

快守　ボクがその気になればやれますよ！　だけど、ボクはあんまり動かないから、乗らないっていうか！　来年は中国方面で忙しいんでね。

——財宝よりコーヒーですか。

快守　ボクの専門はそっちだから。キューバにいたときは有機農法指導を半年くらいしたかな。それがきっかけでいまやキューバはね、農業世界一になっちゃって。

——あら、快守さんのおかげで（笑）。



快守氏に教えてもらった友人猪木島の位置。この島に1000億円の銀貨が眠っているらしいが、ここまで財宝話が公になってるのに探せないとは……きっと発掘困難な場所に埋まっているに違いないのである。糸井重里でも無理。

快守　まあ、ボクのおかげってわけじゃないと思うけど。カストロさんがね、ボクが指導したとおりにやったから。まあ、その噂を中国政府が聞きつけてね、ボクにお願いできないかって話なんですよ。じつはね、ここだけの話、もともと23年前にも中国でコーヒープロジェクトがあったんですよ。

——ここだけの話、そんなプロジェクトがありましたか！

快守　中国の人たちがみんなコーヒー飲みだしたら、コーヒーの量が足りなくなる。世界中のコーヒーが足りなくなるって！

——それは大変な事態になりますねぇ。

快守　そのために中国にコーヒー農園を作ろうとしたんだけど、途絶えちゃって。で、今回たまたま上海政府から崇明島で有機農法をできないかってことでね。で、「ボクのシステムでやったらできる」って答えたら向こうが乗り気になっちゃってね！

——はあ〜、またまたビッグプロジェクトですねぇ。

快守　うん。もしやるんだったら土地を提供するからなんとかって。去年からその件で動いててね、今年中には上海に行こうと思ってるんだけど。ちょうど12月4日に上海で興行があるでしょ、アントニオの。

——みたいですね。

快守　そんときにアントニオを崇明島に連れていこうとは思うんですけど。あと弟の啓介がいるでしょ？

——アントン・ハイセルの責任者でいまでは永久電機に関わっている啓介さん。

快守　そうそう、いま機械のほうをやってて、凄いお金を注ぎ込んじゃって。彼自身、機械のことは知らないのにね。

——そもそも永久電機って担当者や開発者がコロコロと変わって、最初に猪木さんに話を持ち込んだ方はいらっしゃらないそうですよね。

快守　啓介もアントニオがそういうものに手を出したもんだから、彼もなんとなくね。

——あの永久電機って、もともとは橋本（真也）さんに持ちかけられた計画だったって聞きましたけど。

快守　そこのいきさつはよくわからないのだけれど、アントニオが乗っちゃって！　彼はすぐ乗っちゃうほうなんだけどね、いまはもうなかなか乗らないねぇ。

——ダハハハハ！　トラウマになってますか。

快守　アントニオは用心深くなったねぇ〜。あんだけ騙されていればね！　正直、騙されてもいました!!

——あれだけ騙された、と（笑）。いまだに電機はやられてるんですか？

快守　いまだにやってるよ。

——それでもやってますか！

快守　ほら、途中から闘魂モーターのほうに軌道修正したでしょ。

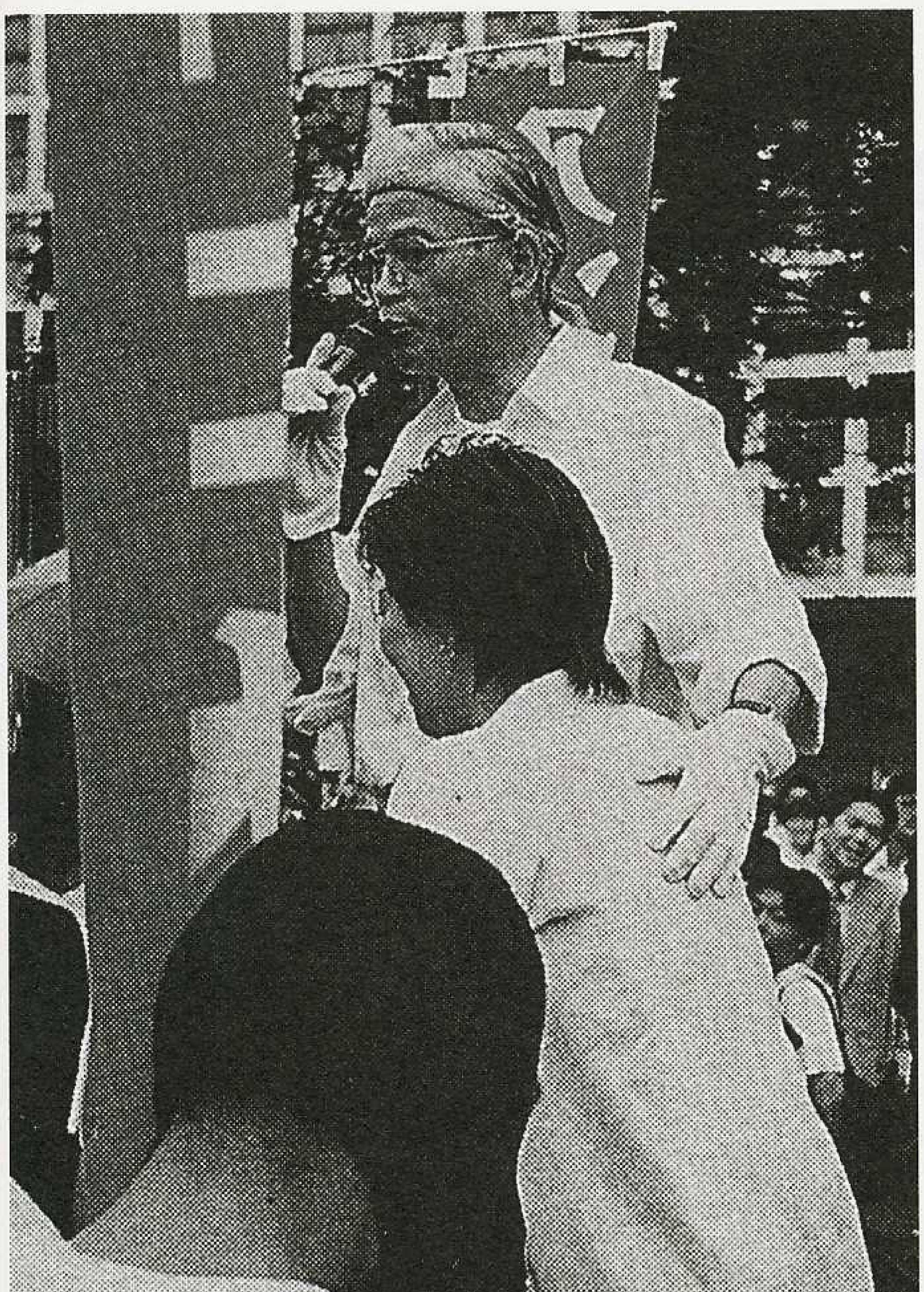
——現実的なモーターにシフトチェンジして。それで全国1万6000店舗のパチンコ屋駐車場の照明用のモーターとして導入を目指して、一台20万円×一店舗10台導入×1万6000店舗で320億円ビジネスを目論んだという。

快守　ボクは「もうやめろ！」って言ってるんだけどね。それよりコーヒーのほうがいいですよ。

——方向性は全然違いますけど（笑）。

快守　そういうなかでね、なかなか現金収入がないもんだから、代々木駅のすぐ脇なんですけど、80坪くらいの駐車場み

たいな空き地があって。そこでビアガーデンやろうっていう話があってさ。
——あ、前に有吉弘行がプロデュースしてた「インチキビアガーデン ダメ横」をやってた場所ですか？
快守 そうそう。そのインチキ居酒屋が月にウン千万もあげたらしくて。今度はボクの友だちがやるっていうんで、この話は数日中に決まります。
——今度は『インチキビアガーデン イノキ』を期待してます！ しかし、あいかわらず精力的に動いているんですね。
快守 まあ、精力的っていうか、なんかいつも夢に向かっているというか、夢追い人間です。
——熱海の市長選以来、お会いしてなかったのでどうされてるかと。
快守 市長選のときは来たの？
——選挙活動のときは取材させていただきました。
快守 アントニオはボクが選挙に出たことが気に食わなかったみたい。「負け戦しちゃダメだ！」って言ってて。
——選挙活動のときもえらく冷たい感じでしたね。
快守 そういうこともあってアントニオとはしばらく遠ざかってたの。で、こないだひさしぶりに手紙を書いてね、「俺もそんな長い命じゃないから、一度会いたい」って送ったら二度ほど続けて飛んできてね。やっぱり一番仲のいい弟だったから。でも、ボクが彼に近寄ると、みんなが煙たがるのよ。やっぱり兄弟で仲良いし、彼もボクの言うことをよく聞くからおもしろくない人がいっぱいいるみたいで。まあ、どうにか身体が回復したら中国のコーヒー栽培が始めようとは思ってるけどさ。
——猪木さんもそうですけど、非常に農業関係のお仕事に積極的ですよね。アントン・ハイセルとか含めて。
快守 もともとはそこから始まってるの。で、ちょっとまだ発表できない段階なんだけれど、機械は機械でもモーター関係じゃなくて、大豆を粉末にする機械をやってる人がいて。ダイエーとかハウス食品に卸している会社なんですけど、そこがぜひ一緒にやりたい、と。弟たちの大きな工場がブラジルにあるじゃない？
——アントン・ハイセルの工場ですか？
快守 そうそう、20〜30億円くらい注ぎ込んでそのまんまにしてる工場があるじゃない。泥棒が入って電線を盗んだり、ほったらかしている。
——いまはそんな状態なんですね（笑）。
快守 ちょっとそこを利用してね、ブラジル政府と絡めて大々的にやろうって。
——まさにアントン・ハイセルの逆襲！


参議院選に出馬した快守氏は渋谷駅前で街頭演説。「私はやれと言われれば、この場で脱いでもいいです。見たいのであればオチンチンを出してもかまいません」と言い出し、観客から「脱げ〜！」とリクエストを受けると「おまえらホモか！」となぜか反撃！ とにかく最高なのであった。

アントン・ハイセルの工場を使って ブラジル政府と大々的にやろう！と

快守 12億くらいお金はかかるけど、資本家が興味を持ってるから。明後日くらいに中国の資本家と話をするんですけど。
——そのアントン・ハイセル・リターンズには猪木さんも参加されるんですか？
快守 うん、これからボクが誘うかと思って！（アントン・ハイセルには）せっかくいままで何十億も注ぎ込んだから、少しものにしたいな、と。
——そうなったら永久電機のほうはどうするんですか？
快守 まあ、やめざるをえない。ちょっと中途半端になっちゃうけど、このまま続けたらお金だけどんどんどん使っちゃうことになるから。「早いうちに手を引けよ！」って。見切り千両じゃないけど
——それよりは大豆のほうにいったほうがいいんじゃないかと？
快守 ボクやアントニオはもともと農業の土壌改良というか、やっぱり食糧問題に対して非常に関心深いので。もともとブラジルに移民したときにいろいろと苦労しましたから。
——猪木さんがエネルギー事業にこだわるのは、移民時代のライフラインで大変な思いをされたことがきっかけですよね。
快守 でも、おもしろいもんね、人生って。失敗は失敗じゃなくて、失敗はかならず身になってるよね。だから夢って絶対に持ち続けて諦めてはいけないなって。ところで斉藤くん、今度上海に行かない？
——ぜひとも行きますよ（笑）。
快守 12月4日まで身体の調子を見ながらね。公には第一回目のプロレス興行。テレビ局とうまくやれば爆発的に人気が出るんじゃないか、と。あと中国のスター選手が一人でも生まれればねぇ。まあ、中国だったらプロレスのニーズはあるだろうね。
——猪木さんはプロレス興行に興味あるんですかね？
快守 いや、もう彼自身は「休みたいよ」って言ってるよ。
——猪木さんはプロレスより事業欲のほうが強そうですもんね。
快守 強いねぇ。彼は強いよね。やっぱりお爺さんの影響が強いから「なんでも世

アントニオはもっと世界に羽ばたける。ボクが横にいるならけしかけるのに

界一になれ！」ってことが口癖だったからさ。絶対に他人の二の次はやるなって。ボクなんかからすると、感覚が少しおかしかったけれど、アントニオもそういうなんかを持っているんだろうね。

──快守さんでさえもとらえがたい感性！（笑）。

快守　ブラジルの移民時代、アントニオは夢も希望もなくなるわけよ。一族でおっきな借金をしたのね。ボクだってあの頃は学生で19歳くらいでしょ？　社会経験は一切ないし、そんな借金を背負ってお先真っ暗。アントニオはもう夜逃げしたいくらいの心境だったと思いますよ。実際アントニオはパラグアイに逃げようとしてましたから。

──ブラジルからパラグアイへ！　そうなったら時代は変わってましたね。

快守　まあボクが止めたんだけどねぇ。

──実際、ブラジルでは奴隷同然の生活だったそうですよね。

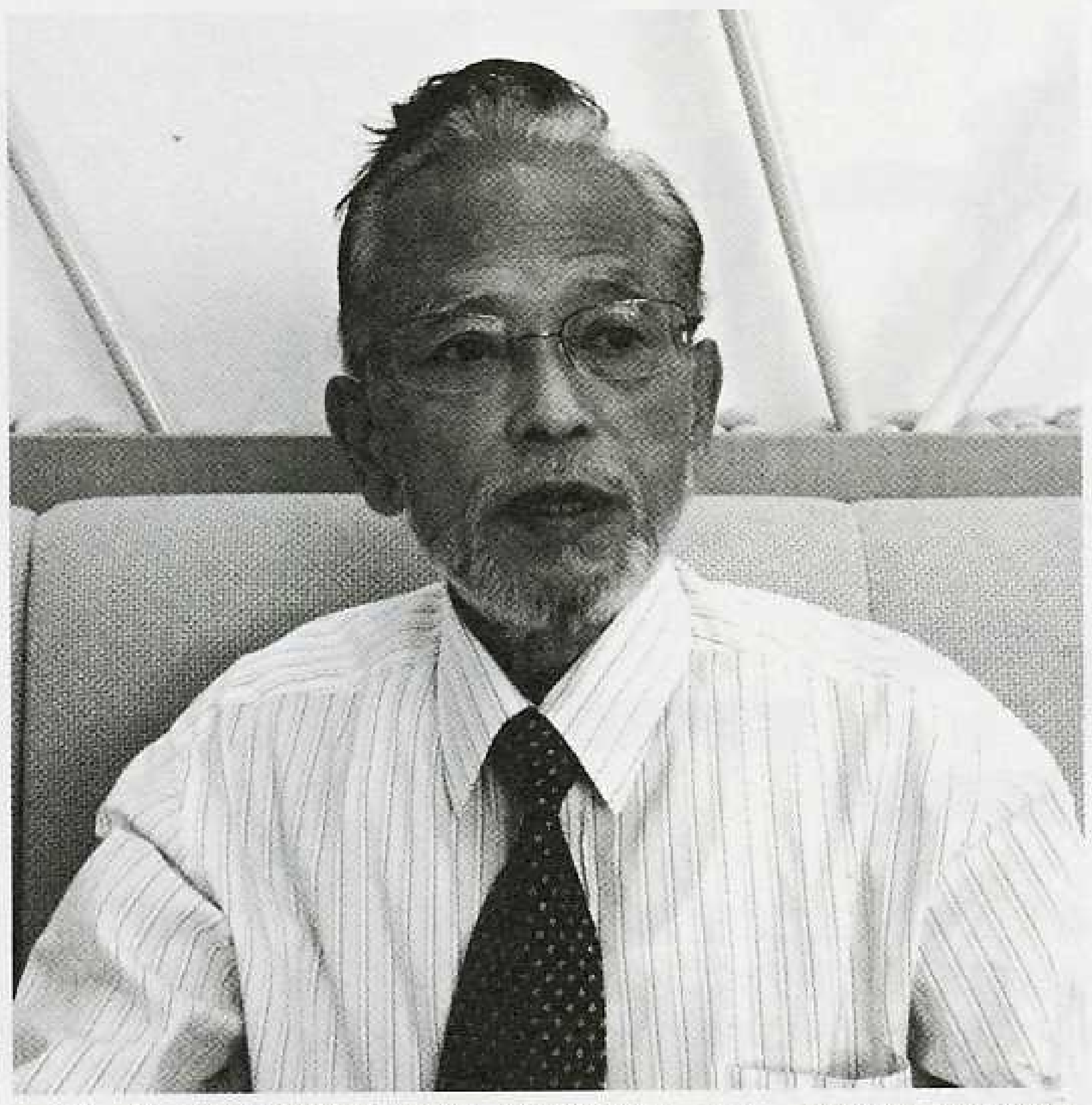
快守　そうそう、奴隷みたいなもんよね。農園の現場監督が朝5時に回ってきて、ボクたちに畑へ連れていくわけ。ムチとピストルを持って見回りにくるわけ！

──地獄のような農園ですね……。

快守　こっちも成績を出さないと食べていけないから必死に働きましたよ。もう大変だったですよ、雑草はバンバン育つしねぇ……。けど、いま思うとあんな苦しい思いをもう一回やってみたいなと思うね。人間って過ぎ去るとどんな苦しい思いも、なんというか、楽しい思い出に変わるというか。アントニオの考えもそういう考え方。

──そういう生活してたら、いろんなチャンスがあったらなんでもトライしてやろうっていう姿勢になりますよね。

快守　そうね。やっぱりなんていうか、彼はボクなんかより凄く緻密だし用心深い。彼、用心深いですよ、ちゃんと計算する。一見、凄く無茶なことやるようでちゃんと計算する。勝つとか勝てるとかそういう保証がないと彼は動かない。



いのき・よしもり■1938年8月6日、横浜市出身。テノール歌手としてはパブロ猪木という名前で活動。かつてはスポーツ平和党の党首を務め、参議院選や熱海市市長選にも出馬。72歳のいまなお、はてしなき夢を追いかけ続けている。

猪木快守

──だから熱海市長選のときも反対されたんですね。応援演説なのに「オレは関係ないんですが～」みたいな感じで全然応援しないという（笑）。

快守　だけどボクは、バーッと走ってしまう。勝つ負ける関係なく、熱海の人たちの意見を聞いて男気に出しちゃって。そういう性格の違いってのがありますね。だけど、一緒に夢だけは作っていきたいな、と。

──快守さんがいま一番やりたいことってなんですか？

快守　ボクはやっぱり農業ですね。たとえば静岡はお茶の産地ですけども、一年中、新茶がとれるシステムも考えてるわけ。

──一年中新茶計画!!

快守　こないだ富士市の講演会でその話をしたわけ。そしたらお茶を栽培している人が「そんなことできるわけがない！」って言ってたけど、でも、ボクは絶対できると思ってる。ボクの方式でやればね。

──ところで、もう政治のほうには興味ないんですか？

快守　政治はちょっとね、弟が嫌がるものだから。ボクは好きなのだけれども。あの鳩山（由紀夫）さんなんかとも凄く親しくしていたんだけど。

──あ、そうなんですか？

快守　それで鳩山さんが総理大臣を辞める前にボクは手紙を書いたりしたんだよ。「鳩山さん、総理の期間は時間じゃない。何をやったか。いままで50年間誰もやったことなかったことやったじゃないか」って。それを3つくらい箇条書きにして「もうこれで充分じゃないか」って送ったら、その3日後くらいにお辞めになって。

──すると、快守さんの手紙が鳩山さんの背中を押したと？

快守　いやいや、それがきっかけになったかはわからないですけど。鳩山さんは政治家は向いてませんでしたから。

──猪木さんはどうでした？　政治家に向いてました？

快守　アントニオは勉強熱心でしたよ。あと、彼には大きな話が似合うから。

──そうですね（笑）。

快守　いまはさ、彼の理想とはかけ離れてることをやらされてるというか、現実的なことばっかりでかわいそうよね。アントニオはもっともっと世界に羽ばたける、ボクが横についていたらもっとおっきいことをけしかけたと思う。

──もっともっとけしかけますか（笑）。

快守　もっともっと大きいことをやらせたいよねぇ。

──アントン・ハイセルとかは大きい話じゃないんですか？

快守　いや、あんなのは全然ちっちゃいですよ！

──そうなんだ（笑）。

快守　たとえばアントニオの中国進出はね、これは何百億の世界でしょうね。ボク、だいたい中国の状況わかるから。これは金を生みます。

──猪木さんならやれるはずだ、と。

快守　彼ならやるでしょうね。そういう星の下に生まれてる。ボクたちがどうあがいても彼のマネはできないし、なれない。天は二物は与えないっていうけど、彼は二物も産物も与えてもらっているから。猪木家からああいう人間が出たっていうのは凄く誇りに思っているしね。希望としては、俺がもっともっと元気であれば、けしかけたい。けしかけたいね。もっともっと！

──アントン・ハイセル・リターンズ、期待してます！

快守　そんな程度でいいの？　アントニオの現役時代のエピソードとかは？

──充分です！　今日はありがとうございました！

【10年9月某日／都内・有明癌研センターにて収録】

アントンの姪が語る
猪木事務所と
ジャングルファイト
の"真実"

「猪木一族に悪い人はいないんです!」





ファニー猪木

猪木一族の素顔に迫る!　ということでご登場いただいたのがアントンの弟・猪木啓介氏の娘であるファニー猪木である。日本にいた頃のリョートのお世話やジャングルファイトにも関わっていた彼女に、アントン周辺のいろんな謎をぶつけてみた!

聞き手／ジャン斉藤

――えー、今日はファニー猪木さんから見た猪木家についていろいろとお話を聞かせていただこうと思うんですが、ファンからすると猪木一族って、言葉はアレなんですけど破天荒な方が多いというか。

ファニー　はい。みんな変わっていると思います（キッパリ）。

――ワハハハ!　そうですよね。

ファニー　姪っ子、甥っ子はみんな普通なんですけど、やっぱり父（猪木啓介）の兄弟はちょっと変わっていると思いますね。「猪木」と名のつく人のなかでは、たぶん私が一番まともなんじゃないですかねぇ（笑）。

――それは安心しました（笑）。

ファニー　でも凄く兄弟仲はいいんですよ……って言っておきます（笑）。それは移民して、つらい時代を一緒にすごしてきているから団結力が人一倍あるんだと思うんですよね。

――しかも皆さん何事にもビックリするくらい意欲的じゃないですか。

ファニー　確かに寛至おじちゃんも、快守おじちゃんもそうですね。

――か、寛至おじちゃん!　新鮮な響きです（笑）。

ファニー　あと寿一おじちゃん（相良寿一・松涛流空手道師範）も昔「砂金がうんたらかんたら～」って言ってましたし。

――砂金ですか!（笑）。そういう非日常的な会話はやっぱり普段から飛び出してたんですか?

ファニー　うーん、基本的にみんな他人に喜んでもらいたい人たちばかりなんですよ。

――サービス精神が旺盛というか。

ファニー　そうなんです（笑）。寛至おじちゃんも「みんなを驚かせたい!」みたいなこと言ってましたし。いろいろとやりたがるんですよね（笑）。

――なるほど。そういえば、ファニーさんは「ウニアンドスアマドリース」の一員として浅草サンバカーニバルに参加されてたそうですね。

ファニー　はい。

――かって快守さんが「熱海でサンバカーニバルをやりたい」と言っていたんですけど、それってファニーさんの関係なのかなって思ったんですけど。

ファニー　ああ、全然違いますよ。たぶん、浅草サンバカーニバルの歴史も30年ぐらいなんですけど、最初のほうにちょっと「ブラジルから来ているから」ってことで快守おじちゃんが関わったから、そういう思いがあったんじゃないですかね、たぶん。

――ようやく謎が解けました!　そもそもファニーさん自身はブラジルにはいつまでいたんでしょう?

ファニー　19歳です。10歳から20歳になるちょっと前くらいまでブラジルにいました。

――当初、ブラジルへはどういう理由で行かれたんですか?

ファニー　大きい理由としては父と母が離婚したんですよね。で、私は母に引き取られたんですけど、母が日系三世なのでブラジルに戻ったんですよ。でも、離婚したにもかかわらず、なぜか父もブラジルに一緒に来たんですよね。

――ふ、不思議な関係ですね。

ファニー　あの事業もあったから父はブラジルに来たんだと思います。でも、アントン・ハイセルの工場があるところって、のどかな田舎で牧場みたいなところなんですよ。

――アントン・ハイセルの工場ってまだ


© Josh Hedges（UFC）

デビュー以降、連勝街道をひた走り、09年5月にはUFCライトヘビー級王座を戴冠したリョート。その姿を母親のように喜ぶファニーだが、まさか吉野家の朝定を活力に闘っていた時期があったなんて……。

あるんですか？

ファニー　あります、あります。本当に周りに何もないところに工場はあるんですけど。土も赤土で。

――あ、猪木さんとハイセル工場に訪れた村松（友視）さんもそんなこと言ってましたね。

ファニー　そこにはちょっとした山があって、山の一番上のところに小さいイエス・キリスト像があるんですよね。たぶんグーグルマップみたいなので見れると思いますよ、そのキリスト像。

――ホントですか！　じゃあアントン・ハイセルの工場も確認できる、と（笑）。

ファニー　ええ。サンパウロ州レーメというところなんですけど、それを見ると工場の建物がわかりますよ。

――帰ってすぐ調査します！　それでファニーさんが日本に戻ってこられたのはどういう理由で？

ファニー　もう、どうしても日本に戻りたくて！（必死に）。なんですかねぇ。田舎じゃないですけど何か凄い不便さを感じて。だから大学進学という理由を作って「日本に帰らせて」ってお願いして。

――なるほど。その後、けっこうマット界に関わるお仕事をされてますよね？

ファニー　ちょこっとですけどね。最初はリョートが日本に来たときに、ポルトガル語を話せて身動きがとれる人間がいなかったので手伝ったというか。いまリョートはUFCのチャンピオンになって凄くうれしいですよねぇ……。凄くよかったなあと思いますね、猪木事務所を離れて！（キッパリ）。

――ダハハハハ！

ファニー　だって大変だったんですよ、いろいろと。あまり日本だと試合する機会もなくて。もうPRIDEもK―1も下火になってきたときですよね。こんなこと言っていいのかわからないですけど……リョートって試合するたびに借金が増えるみたいな感じになってたんですよ、勝っているのに。

――えぇ？　それはトレーニング費用とかマネジメント料がファイトマネーから引かれる感じですか。

ファニー　そうなんです！

――なんか近隣アジアから日本に来てヒドい目に遭ったホステスみたいな話になってますねぇ。

ファニー　トレーニング料とかそういう名目を出してくるんですけど「それこんなにかかる？」みたいな。だから私たちもリョートのためになんとかしたくて、弁護士やリョートのおじさんとかに相談してたんですよ。

――僕が聞いたのは、本当に食べるもんがなくてカップヌードルを主食にしてリッチ・フランクリンを倒したっていう話なんですけど（笑）。

ファニー　そうそう。毎日吉野家の朝定みたいなのを食べさせてて。

――吉野家の朝定！

ファニー　ヒドくないですか⁉　ああもう、これ書いてください！　本当にヒドかったんで！（怒）。

――了解しました。ぜひ載せましょう！

ファニー　よかったですよ、UFCで成功して。リョートは本当に前向きないい子で「いまはつらいけど頑張るよ。将来は家と犬と小さな庭があって、奥さんと一緒に仲良く暮らせればいいんだ」って言ってて。

――なんだか泣けますねぇ……。

ファニー　だから本当に猪木事務所がなくなってよかったなって思いますよ！　なくならなかったら本当に法的措置をとって事務所から辞めさせようという動きをしていたので。

――ただ、やっぱり猪木さんってお金を生み出す看板が大きいから、いろんな方々が群がってきますよね。

ファニー　ええ。私も想像がつかないくらいいろんな人が寄ってきてたと思いますよ。なんかいろいろ言いたい人が凄く周りにたくさんいて、本当におかしいですもん。だから「大人ってイヤだな」って小さい頃とかもずっと思ってましたよ。

――そりゃ思いますよねぇ。

ファニー　そう思ってずっと育ってきたんですよね。だから人を信用できるようになったのは日本に戻ってきてからですよ。たぶん25歳以降の友だちに出会って「あ、信用できる人がいるんだな」ってやっと思えたというか。

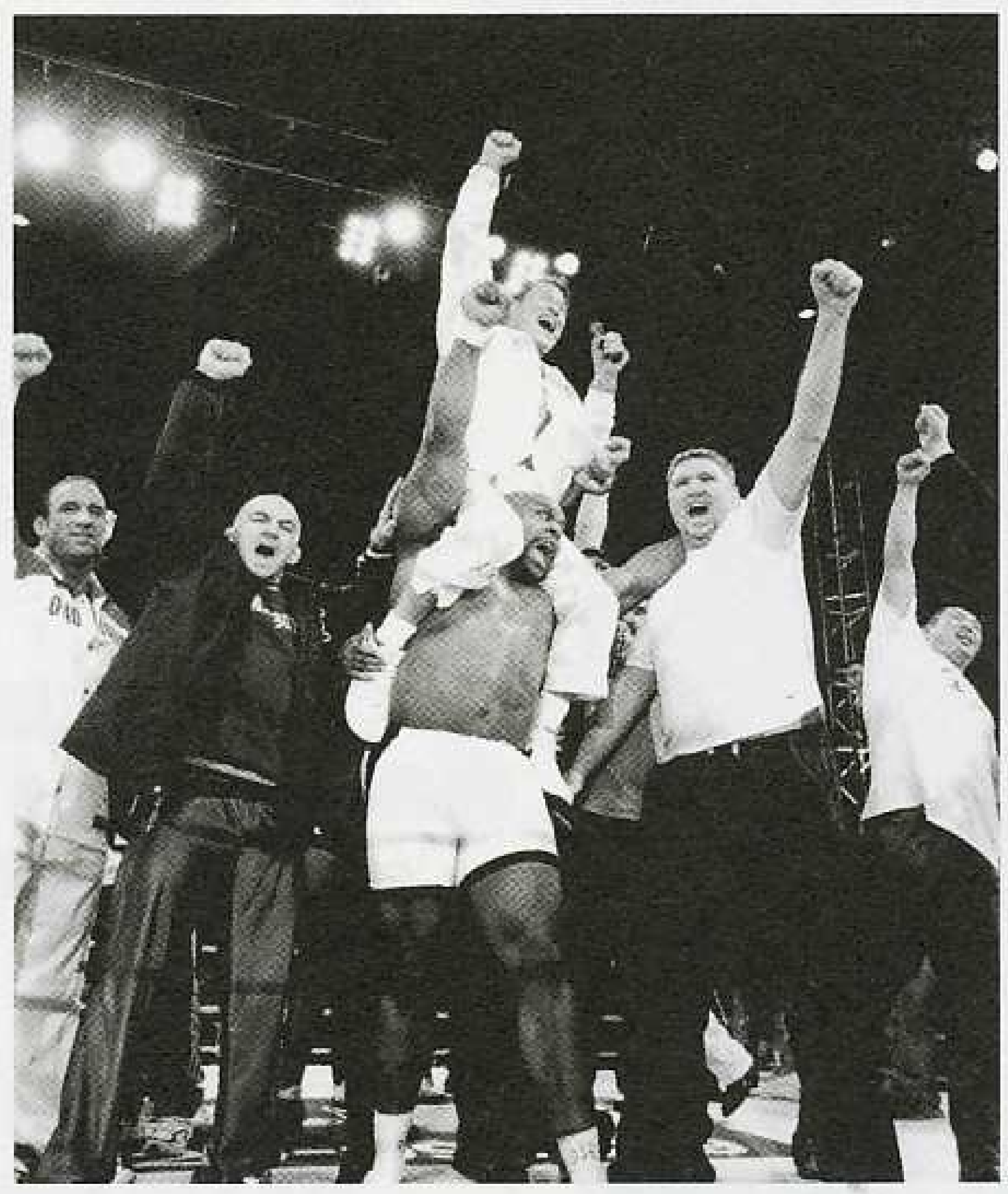
――ファニーさんもたいへんな人生ですね（笑）。それで、ファニーさんといえば、ジャングルファイトにも関わってましたよね？

ファニー　はい、私は事務局的なことを少し。最初、ジャングルファイト事務局というのがあって……って、私しかいないんですけどね（笑）。

――一人ジャングルファイト（笑）。

だから「大人ってイヤだな」って小さい頃からずっと思ってました

ファニー　ブラジルの州知事やテレビ局とかも協力してやってましたね。
――州知事まで巻き込んでましたか（笑）。ジャングルファイトの大会の方向性とかは誰が決めてたんですか？
ファニー　マッチメイクとか選手とかを全部やっていたのはイズマイウです。
――〝闘魂ストーカー〟イズマイウ！（笑）。
ファニー　イズマウイはブラジルのテレビ局に掛け合ったりしてましたね。イズマイウはいろいろと言われてますけど、イズマイウはいい人でしたよ。他人のために何かをやってあげたいという気持ちが強くて。
――そこが猪木さんと波長が合ったのかもしれないですね。ボクも日本にイズマイウが来てると聞いて都内のあらゆるホテルを探索して部屋に押しかけたら、イヤな顔を一つせず出迎えてくれましたから（笑）。
ファニー　そんなことがあったんですか（笑）。ジャングルファイトはイズマイウがとても頑張ってやっていました。当時、新日にいた山中さんもロケハンに行ったりしてましたね。本番は現社長の菅林さんもいろいろと忙しく飛び回っていました！
――あのとき、ブラジルの原生林を守るための募金を呼びかけてましたけど、けっこうな金額だった記憶がありますね。
ファニー　ああ、200万とか300万とかでしたっけ？
――とんでもない金額です！（笑）。それで苗を買ってジャングルに植えるということだったと思うんですけど、あれは夢があるイベントでしたよね。
ファニー　会場も凄く素敵だったんですよ。ジャングルタワーというホテルがあって、アマゾン川の上に特設で会場を作って。リングもジャングルのなかでやっているような感じで、葉っぱとかを敷き詰めてステキでしたよね。その会場へは小船じゃないと行けないんですけど、降り立つと凄いエネルギーがあるような場所なんですよね。



“闘魂ストーカー”イズマイクは、ファニーさんいわく「他人のために何かをやってあげたいという気持ちが強い人」とのこと。ここはある意味、猪木一族と近い感覚の持ち主だったのだろう。

――そのとき猪木さんがアマゾン川を泳いだんですよね？
ファニー　ああ、寛至おじちゃんが飛び込んで、泳いで会場入りしたんですよね。
――猪木さんらしいですねぇ。アマゾン川って泳げるもんなんですか？
ファニー　いや、学生時代のサンバサークルのメンバーでアマゾンに行った先輩が、ピラニアに食いつかれて親指の下の肉が危うくちぎれそうになったのを見せられたんで、大丈夫かなと思いましたけどね。ピラニア以外にも、カンジルーというどじょうみたいな魚が穴という穴に入っていって内臓を食いちぎるらしいんです。雨季のアマゾンには行かないほうがいいって言われてるんですよ。以上、新間さんに聞いた話なんですけど（笑）。
――猪木さんがご無事で何よりです（笑）。
ファニー　いまはわからないですけど、それ以降のジャングルファイトはイズマイウがやっていたみたいです。当時はテレビの視聴率も凄くよかったそうです。
――あのあと日本でジャングルファイトをやるって話を聞いたことがあるんですけど……。
ファニー　あ、ありましたねぇ！　そんな話。
――なんか開催場所が名古屋で……その時点でまったくジャングルファイトじゃないんですけど（笑）。
ファニー　わたしが関わったのは一回目だけなので、その後はどうなったかはわからないんですよねぇ。たぶん猪木家がなんだかんだ関わるとみんなよく思わないので。たぶん新日本プロレスとかもそうだと思うんですけど、父のせいじゃないのに父がお金を持ち出したって思われて。
――でも、啓介さんと猪木さんってまたいろいろと一緒にやられてますよね。
ファニー　（呆れて）んもう、そろそろうちのお父さんを解放してほしいんですよねっ！
――ワハハハハ！
ファニー　父が言ってたのが「俺は兄貴をサポートするために生まれてきたんだ」って。なんて健気なんだと思って。たぶん父は自分のやりたいと思ったことってほとんどやれてないんじゃないかなと思うんですよ。
――僕も猪木さんの周りの方々にインタビューしてきましたけど、啓介さんは一番まじめな方ですよね。
ファニー　そうですよお。快守おじちゃんも凄くいい人なんですけど、天然ですしねぇ。とくに悪気はないんですよ。
――……て、天然！　そうか、猪木一族は天然だったんですね（笑）。
ファニー　まあでも、やっぱりブラジルでどん底の生活を経験してきているので、その影響はあるとは思いますけど。ハエが群がったコップで水を飲んだり、あんまり細かいことを気にしないというか……いや、もともとみんなそういう素養はあったのかなあ。
――今度は大豆を粉末にする計画があるみたいですけど。アントン・ハイセルの工場を使って。
ファニー　……あるみたいですねぇ。
――ダハハハハハ。
ファニー　早く父を解放してほしいですねぇ（しみじみと）。

【10年9月3日／都内・某所にて収録】


ふぁにー・いのき■アントニオ猪木の姪。猪木啓介氏の娘。19歳で日本に戻り、その後はリョート・マチダのお世話役や、ジャングルファイト事務局、シュートボクセジャパンなどでの通訳などマット界に携わる。最近はシンガーとしても活躍している。

んもう、そろそろうちのお父さんを解放してほしいんですよね！

9・25 IGF JCBホール
アントニオ猪木デビュー50周年
記念大会出場を辞退

小川直也よどこへ行く





――小川さん、ご無沙汰しております！

小川　『kamipro』もひさしぶりだよね。まあ、前回はこっちがお断りしちゃって、申し訳なかったけど。

――いえいえ。読者の方はもちろん知らないと思いますが、『kamipro』は前号が150号で、その記念として、ひさしぶりに小川さんにインタビューをお願いしてたんですよね。

小川　先月はホントにスケジュールが合わなくてね。「次に機会があったら」と思ってたんだけど、翌月にすぐまたオファーがあるとは思わなかった（笑）。

――で、今回は「猪木特集」ということで、あらためて愛弟子である小川さんにオファーさせていただいた次第なんですけど、二日前に小川さんのブログを見たら「9・25IGF JCBホール大会出場を辞退しました」と書いてあって驚きましたよ！　いったい何があったんですか？

小川　いや、断るんなら早めに断っておいたほうがいいと思ったからさ。これまでIGFとは「協力関係」ということで、俺も猪木さんの考えがわかってるから、スタッフにいろんなアドバイスをしたり、ただの参加選手以上の関わり方をしてきたんだけど。結局、慣れてきちゃうと「あれもやってくれ、これもやってくれ」ってなってくるじゃない。

――ある種、所属選手的なかたちで、契約外のことも要求されるようになったということですか？

小川　所属選手というか「あれもやってくれ、これもやってくれ」というのを「仕方ないからやるか」ってやってきたのが、だんだん甘えになってきちゃって。これ以上いくと、プロレスラーとしていいものが提供できなくなるだろうなって思って。

さまよえる暴走柔道王
猪木、ZERO1、ハッスル、石井慧を語る

「大晦日に石井慧戦？俺のギャラ払えるのかよ!?」

9.25JCBホール「アントニオ猪木デビュー50周年記念大会」を前に小川直也が突如、IGF不参加を宣言。その理由を小川はブログ上で「故・橋本真也を追い出したZERO1勢との対戦を打診されたため」と説明した。いったい小川はいま何を考え、これからどうしようとしているのか。本誌は約4年ぶりにインタビューを申請し、小川にその真意を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／吉場正和　試合写真／平工幸雄

だから一回リセットしたんだよね。俺もプロとしてフリーでここまでやってきて、団体のことを優先して考えちゃうと、どうしても自分自身のパフォーマンスが出せないしね。あとはやっぱり〝最後の注文〟が俺にとってはキツかったな。

――〝最後の注文〟というのが、ZERO1勢との対戦プランだったわけですか？

小川　そうだね。ZERO1との交渉が耳に入った時点で「まいったな」と思ったし、それが俺には一番キツかったね。IGFのスタッフは何も知らずに俺に話を持ってきたんだろうけど、ZERO1との話を聞いたとき、真っ先に思い浮かんだのが破壊王（故・橋本真也）の死に顔だから。俺は破壊王が亡くなる前、借金だなんだで苦しんでいるとき、いまのZERO1の人間たちがクーデターを起こし、それで亡くなったあとは「橋本さんを慕ってました」なんて言ってるわけだから。

――あの橋本さんが亡くなる直前にあったことを全部見てる人間として、納得できなかった、と。

小川　借金背負った破壊王をみんなで追い出したんだから。破壊王はZERO―ONE末期のそういう人間関係のゴタゴタからストレスが溜まっちゃって、それが原因の一つとなって他界したんだからね。しかも、他界したあとは「（ZERO―ONEの）権利は俺だ」みたいなことが始まっちゃって、人間の凄く嫌な部分を見せられたんだよ。

――でも、橋本さんの長男である大地くんがそのZERO1でプロレスラーとしてデビューすることが発表されましたけど、それも違うって感じですか？

小川　彼や家族があのときのことを知っててやってるのか、俺はわからないけどね。知らないはずはないんだけど、知ってたらZERO1だけは選ばないだろって思うよね。だって自分のお父さんを追い出した人間の下で働くっていうんだからさ。言いたくはないけど「やるなよ」って言いたくなる。破壊王が生まれ育った新日本でレスラーになるならわかるんだけど。

――今回、小川さんのブログを受けて、ZERO1を運営するファースト・オン・ステージの中村祥之さんが即反応していたのはご存知ですか？

小川　あ、そうなの？　全然知らない。なんて書いてあったの？


――ブログとツイッターなんですけど「小川さんはすべての事実を知らない」と。

小川　一番知ってるよ！　当時、破壊王から個人的にも相談受けていたし、クーデター起こされたときは「反乱起こしやがって」って言ってたからね。事実を知らないんじゃなくて、少なくとも破壊王は反乱起こされたと思っていたわけだから。向こうは「クーデターが起こるまでのいきさつを知らない」と言いたいのかもしれないけど、一致団結して追放したのは事実だからね。俺はそこしか言ってないし。

――あと中村さんは「IGFから正式なオファーが来てるわけじゃない。小川さんがIGF不参加を正当化するためにZERO1の名前を出した」とも書いてますが。

小川　正式なオファーが来てないって「こういう構想はどうですか？」という段階で俺が断ってるんだから、あたりまえでしょ？　でも、IGFとZERO1がそういう話をしていたのは事実であり、俺はそれなら（出場を）やめたほうがいいなっていうだけだから。まあ、俺のブログにそれだけ反応するってことは、よっぽど核心突いちゃったのかなって思うよね。

小川直也



提供できなくなるだろうなって思って。

てやってるのか、俺はわからないけど

ちゃったのかなって思うよね

――小川さん自身は、今回のIGFとの交渉で、自分はZERO1勢との対戦ではなく、違うカードで出場するという選択肢はなかったんですか?

小川 選択肢としてはあるかもしれないけど、団体側も妥協して、こっちも妥協して、「仕方ないからこのカードで」みたいなことになったら、どちらにとってもよくないからね。いまのプロレス界はどこもみんな結局は馴れ合いになってるわけじゃない。俺はそれが嫌だからフリーでやってるわけで、今回IGFに出場しないのも、べつに師匠から離れるわけじゃなくて、いいものを提供するために関係をリセットするだけだから。

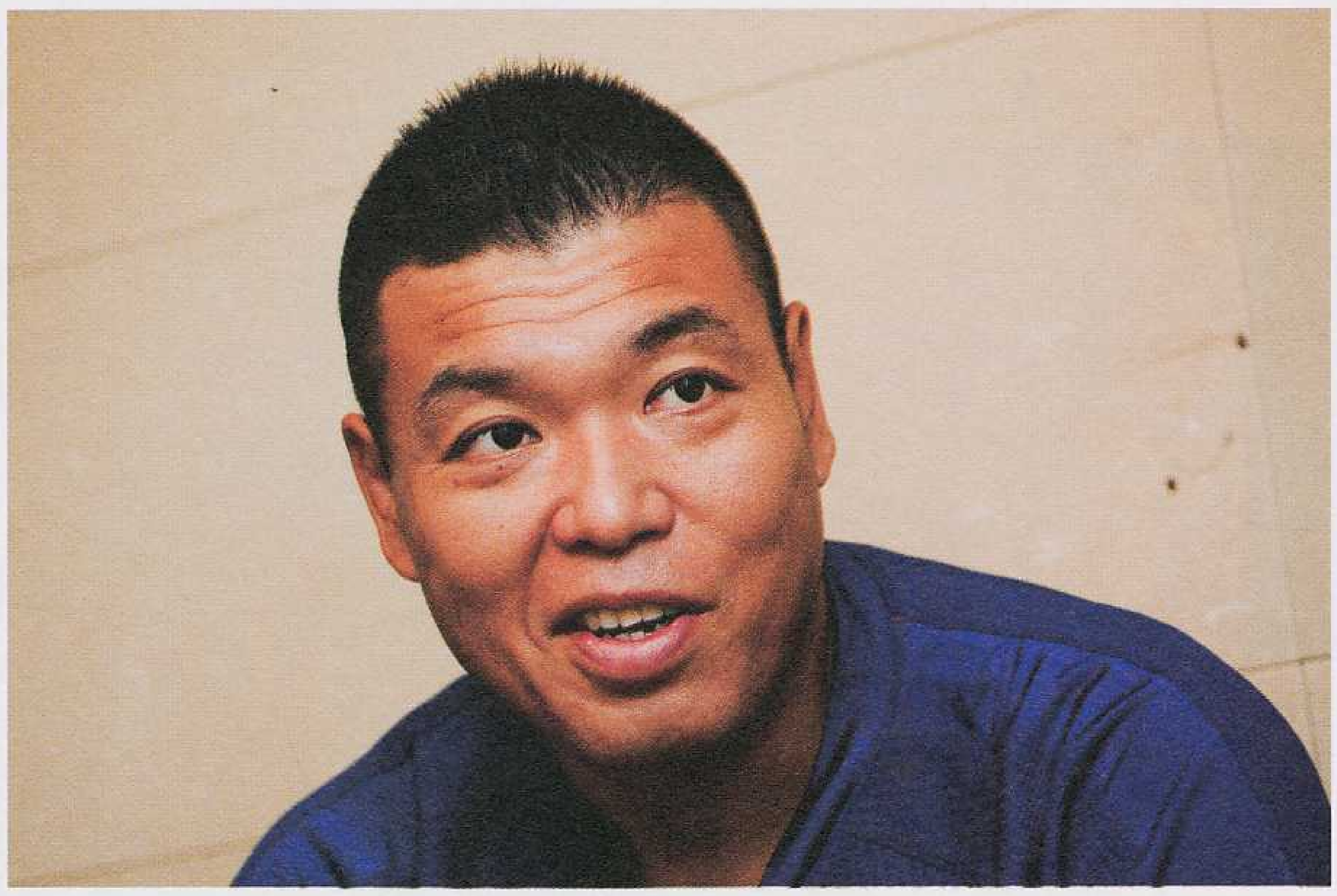
――でも、猪木さんのデビュー50周年記念大会で、エース格である小川さんが出場しないというのは、IGFにとっても非常に困ることだと思いますけど。

小川 いや、俺はIGFがヤバくなって逃げ出すわけじゃないんだからさ。旗揚げから3年経ってちゃんと利益も出てるし、株式として成り立ってる会社になったんだから、そろそろ俺も考えさせてもらってもいい時期なんじゃないの? 俺は3年間、猪木さんのIGFのためにやってきたから。ぶっちゃけて言うと、猪木さんの弟子でもIGFに協力してないヤツもいるなかでさ、俺は3年間やってきたんだから、そこはわかってほしいなって。

――小川さん自身は今後どうするつもりなんですか?

小川 さっきから言ってるとおり俺はフリーだからね、IGFも含めて、どこからオファーが来ても自分が「いいな」って思う仕事は受けるし、「これは違うな」っていう仕事ならキッパリ断る。〝小川直也本来の姿〟に戻すべきだと思ってるから。オファーが来た仕事で自分がどれだけの力を発揮できるか、また「ここだったら自分の力を発揮したい」というところでやるのが、もともと小川直也スタイルだからね。

――では逆に、この3年間IGFに上がっているあいだというのは、小川直也を殺してる部分がけっこうあったわけですか?



小川 だいぶあったよね。やっぱりできたばかりの団体を軌道に乗せるためには、自分を殺さなきゃいけない部分はどうしてもあるから。

――だからか、IGFでの小川さんは気分的にノッてる感じが全然しなかったんですよ。

小川 俺自身、全然だったもん。

――そうですか(笑)。なんでそのIGFに上がってたんですか?

小川 そりゃ、もともとは師匠に頭を下げられたということにつきるよね。当時はまだハッスルに上がっていたから、IGFの関係者とは「ハッスルの契約が終わったあとに話しましょう」というかたちにしててね。契約満了後に猪木さん関係の人から「猪木さんの最後の団体だから、弟子として一肌脱いでくれ」と言われたし。猪木さん本人からも「頼む」って頭を下げられたらさ、「わかりました。喜んでやらせていただきます」って言うよね。それだけだよ。

――ハッスルから離れたのも、それが理由ですか?

小川 離れたっていうか、師匠にそう言われたら「やります」って言うしかないじゃない。

――でも、あれだけハッスルに力と気持ちを注いでいた小川さんが、ハッスルを離脱して、またストロングスタイルのIGFで闘い始めたのが凄く意外だったんですよ。

小川 やっぱり猪木さんあってのプロレスラー小川直也だからね。プロレス界に入ってから3年間ずっと一緒にいさせてもらって、「プロレスのイロハ」を教えてくれたのも猪木さんだし。その人が困って「助けてくれ」と言ってるんだから、火中のクリを拾うくらいの気持ちで飛び込んでいったよ。

――ではハッスルから離れたのは、ハッスルと揉めたわけではない?

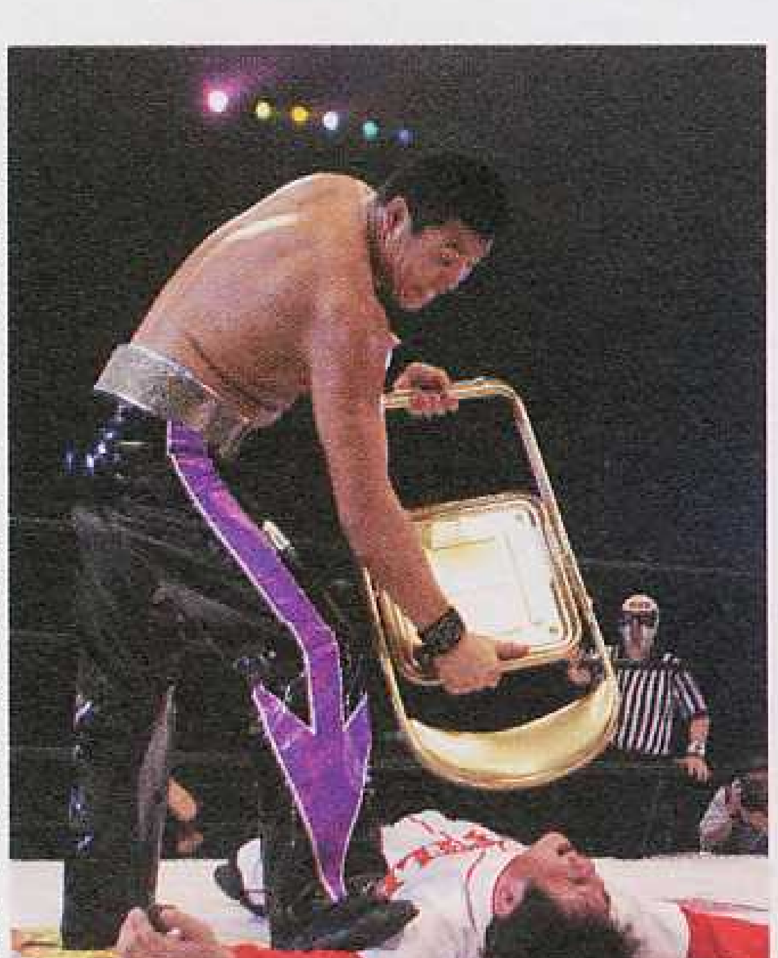
小川 全然揉めてないよ。当時のハッスルの人たちには「猪木さんのところに行く」とは言わなかったけど、「どうしても離れないといけない理由がある」って言ってね。のちのちわかってくれるとは思ってたけど、ケンカ別れしたわけじゃ全然ないから。

――ハッスル末期はかなりゴタゴタがありましたけど、小川さんにもギャラの遅配があったりはしなかったんですか?

小川 俺がいた頃は、一切そういうことはなかった。ただ「次のエースは坂田(亘)でいく」って聞いたとき「大丈夫かよ?」とは思ったけどね。だったら俺は猪木さんの話を待ってもらってる身だったし、俺は契約満了を待って離れて、そのあとは坂田のハッスルでやっていけばいいやって思ってたから。

――〝キャプテン・ハッスル〟として、ハッスル旗揚げからエースでやってきた小川さんとしては、「これから坂田をエースにしてやっていく」って聞いて、かなり冷めた部分はあったんじゃないですか?

小川 全然冷めてないですよ。みんながそれでいいと思って決めたのなら、それでいけばいいし。でも、坂田をエースにして成功しなかったら、ハッスルは終わるんだろうなって気持ちはあったけどね。ただ、



ハッスル離脱前、オーちゃんは伝説の〝セレブ小川〟に変身し、ヒールに転向。パイプ椅子で中村カントクをいたぶるその姿は、いま見るとじつにシュール。突然降って湧いた今回のZERO1との舌戦は今後につながることはあるのか?

その時点で俺はもうIGFに話を待ってもらってて、ハッスルとは違う道に行くっ

――OH砲を結成していた頃のZERO―ONEの地方大会は、本当に盛り上がっ

小川 あれだってインリンというキャラクターを作るためには、誰かがやられない

――そういう意味で、デビュー当時の小川さんは素直でしたよね?

坂田をエースにして成功しなかったらハッスルは終わるんだろうなと思ってた

その時点で俺はもうIGFに話を待ってもらってて、ハッスルとは違う道に行くって決めてたからね、微妙な立場ではあったんだけど。

――へんな話、ハッスルが事実上崩壊し、いまはかたちを変えてZERO1内の一部門として、その坂田選手をエースにして再スタートしてるじゃないですか。それってどんな感じですか？

小川　俺にとっては、かつてのハッスルとは別物だよね。前のハッスルが終わる前に、当時の山口社長から「キャプテン、助けてください」なんて電話が入ったけどさ、俺が出ていったところでどうなるわけでもないじゃん。それでハッスルが助かるなら助けてもよかったけど、もはやどうにもならない状況だったからね。結果的に立て直せなかったのは残念だけど。

――やっぱり小川さんにとって一番思い入れがあった団体はハッスルですか？

小川　一番充実していて楽しかったのは、ZERO-ONEだね。橋本真也が新日本から追い出されて、俺がそれについていって。それまで俺は地方巡業ってやったことがなかったんだけど、橋本真也が「地方巡業のプロレス」というものを一から十まで教えてくれた。「ここのお客さんは熱しやすいからこうしろ」とか「ここは熱が上がるのが遅いから、最初から飛ばしていけ」とか。地方はリング上からお客さんと対話ができるとか、そういうことを全国各地で試合後に飲みながらメシ食いながら教えてもらいましたよ。いい兄貴だったよね。

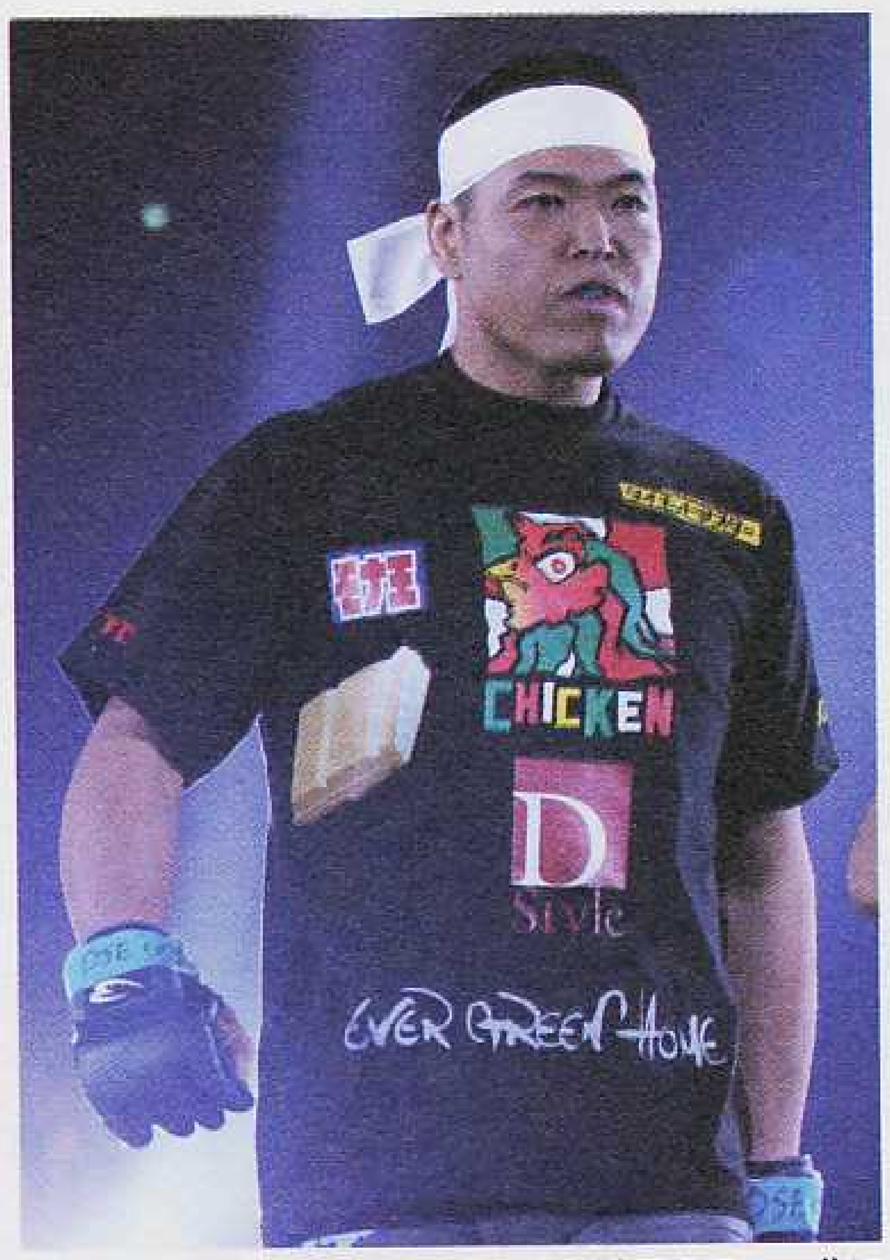
――OH砲を結成していた頃のZERO-ONEの地方大会は、本当に盛り上がってましたもんね。

小川　お客さんも入ってたしね、俺自身楽しかった。だから俺にとって最初にプロレスを教えてもらったのが猪木さんで、そのあと地方での闘い方だったりとか、瞬時にアドリブで対応してやっていくというプロレスを教わったのが橋本真也であり、ZERO-ONEだったな。あれがあったから、完全に作り込んだハッスルというものも理解できたし。

――ZERO-ONEを通過せず、猪木さんの教えだけだったら、ハッスルには行ってなかったでしょうね。

小川　で、「これからプロレスを残していくには、この方向しかないんじゃないか」ってハッスルをやってね。みんな嫌な役をやりたがらないからさ、俺が自分を殺してやってたんだけど。

――インリン様にフォール負けしたり。



05年の大晦日、小川は亡くなった破壊王のテーマ曲に乗って、因縁の吉田秀彦戦に出陣した小川。このときの『男祭り』はPRIDE史上最高の視聴率を記録した。

小川直也

小川　あれだってインリンというキャラクターを作るためには、誰かがやられないとダメだったんだから。そういうことを当時は誰もやりたがらなかったけど、俺はやってきたし。髙田さんが最初、PRIDEとハッスル両方に出るためにどうしようってなったとき、「双子だったって設定にすればいいんじゃないか？」って俺がアイデア出して、そこから〝髙田本部長の古くからの友人〟髙田総統が生まれたんだからさ。

――ハッスル初期の設定やストーリーのアイデア出しに、小川さんもけっこう関わってたんですよね？

小川　ほとんど関わってましたよ。でも、成功していくにつれていろんなヤツが出てくるし、権力闘争にもなるし。結局、「次のエースを作る」みたいな話になって、俺は猪木さんから「手伝ってくれ」って言われてたし「坂田がエースをやるなら、俺はいいや」ってハッスルを離れたんだけどね。

――では、そもそもの話に戻りますけど、小川さんは猪木さんの弟子としてプロレスラーになってよかったと思いますか？

小川　もちろん、よかったと思ってますよ。俺はデビュー当時、猪木さんにいろいろ言われて、その指示どおりに動いて、プロレスラー小川直也っていうキャラクターができあがったわけだし。

――減量したのもそうですよね？

小川　そうそう。やっぱりプロは見た目も大事だし、話すことも大事。何より猪木さんはプロレスの第一人者なんだから、これから自分がプロでやっていくうえで、そういう人の言うことはまず聞かないと。でも、たいがいの人は猪木さんに言われたことにためらっちゃうんだよね。なんでためらうのかわかんないけど。

――そういう意味で、デビュー当時の小川さんは素直でしたよね？

小川　成功者の言うことを聞くっていうのは、その道で成功するために大事なことだからね。柔道もそうだし、俺にとってはあたりまえのことなんだけどね。

――でも、小川さんって一般的には扱いにくいように思われてるじゃないですか？

小川　それは俺が扱いづらいんじゃなくて、プロレス界に扱う器がないんだよ。俺は曖昧って好きじゃないから、プロである以上、金銭面でもなんでも決められたことをキッチリするのが大事なんで。それを言われるのが嫌なんじゃない？　逆に総合格闘技なんかはそのへんがキッチリした世界だからさ、そういう面では俺に合ってたよね。

――ちゃんと何をやるべきかが契約で明確になっているのが合っていた、と。

小川　この試合数で、ファイトマネーはこの額で、これとこれをやってくれっていうのがハッキリしてたからね。プロにおける信頼っていうのは、イコールお金のやりとりだから。榊原社長時代のPRIDEはその点の信頼が一番あったよね。PRIDEも初期は信頼も何もなかったけどさ（笑）。

――小川さんとPRIDEは歯車がガッチリと合いましたよね？

小川　やっぱりPRIDEが波に乗ったのは、俺が出たヘビー級GPだと思うから。PRIDEも世間にアピールできたし、俺自身は金銭面でも満足いくものがもらえたし。非常にいい時代をすごさせてもらったと思ってますよ。

――去年、プロデビューした石井慧選手は小川さんにとってのPRIDEのような団体や、猪木さん的存在がいないのが問

小川直也

いまの石井はパチンコの〝出ない台〟に一生懸命突っ込んでる状況だから

題だったりしますか？

小川　だから俺は石井に対して最初からいろいろアドバイスしてたんだよ。「いまは俺がやってた頃と違って格闘技界はいい時期じゃないんだから、いま格闘技界に来る必要はない。柔道を続けろ」って言ったんだけどね。それを振り切ってプロになって、「団体やジムはどこに入ってやるんだ？」って聞いたら、「自分でやる」って言うんだもん。これは何を言ってもダメだなって思ったよ。

――紆余曲折あって、いきなりフリーとして海外に行っちゃいましたからね。

小川　猪木さんに頼んで預かってもらおうかとも思ったんだけどさ、とにかく自分の力で周りに感化されずにやりたいんだって。石井自身も、自分一人でやっていけるような世界じゃないのはわかってると思うんだけど、どうしても一人でやりたかったみたいなんだよね。

――もともと柔道界のしがらみから自由になるためにプロになった部分がありますからね。

小川　しがらみから離れるのはいいんだけど、プロになるなら一回、「プロになる」ということを教わらないとダメだと思うんだよ。それを教わらずにきちゃったから、しゃべることも素人だし、やってることも素人、試合内容だって素人だったし。しゃべりは俺のマネをしてるんだろうけど、核心を突くような内容はなかったから。もうちょっと、プロというものに対して練習や修行が必要だったと思うんだよな。俺だってプロレスの世界で修行したから、格闘技界でもお客を呼ぶことができたんだから。そういう勉強をしないでただ試合をしても、お客さんは来ないよ。

――プロの先輩として、たとえば今年の大晦日に小川さんが石井慧選手に胸を貸すなんてことはありえませんか？

小川　やる・やらない以前に組めないでしょ。石井のギャラも俺のギャラも出せないと思うよ。二人でいくらかかると思う？

――まあ、かなりの額になるんでしょうねえ（笑）。



おがわ・なおや■1968年3月31日、東京都出身。全日本柔道選手権7度優勝、バルセロナオリンピック銀メダリスト。97年にプロレスデビュー。04年にはPRIDEヘビー級GPに出場。ハッスルボーズのブームを起こす。ここ3年はIGFを主戦場にしていた。193cm、115kg。

小川　やっぱり俺がPRIDEに出たときに提示してもらった額っていうのは、プロとして名誉だと思うし、それだけのギャラを出してくれた人への恩があるから、安い金額で乗りたくないしね。だから「石井に胸を貸してやってもらえますか？」って言われたら、「いいですよ。でも、払えますか？」っていうのが答え。

――ちゃんとした額でのオファーがなければありえない、と。

小川　そうじゃないと、俺はPRIDEに出て長者番付に載るくらいのものを提示してもらったのに、そのあと安売りしてたら笑い話になっちゃうしさ。PRIDE・GPや『男祭り』をやってたのに、最後はこれかよ？　なんてことになったら、それこそ漫画になっちゃうから。

――いまは団体にそこまでの力はないし、そもそもお金がないですからね（笑）。

小川　だから石井もね、PRIDEがあった時代ならもっといろんなことができたと思うよ。でも、物事にはなんでも時期ってもんがあるじゃない。とくにプロはそこに乗れるか乗れないかってことが非常に重要だからね。パチンコでもそうじゃん。出る台と出ない台があって、出ない台にいくら突っ込んでも出ませんよって。石井はいま〝出ない台〟に一生懸命突っ込んでる状態だから。

――日本の格闘技界全体が〝出ない台〟になってますもんね。

小川　だから石井はしょうがないけど、かわいそうだよね。いまの時期にプロでやっていくのは正直、厳しいかなって。

――小川さんはそういう意味で、PRIDEに出たのは最高のタイミングでしたよね。

小川　俺はUFOとしてやっていた頃から、猪木さんに「そういう（格闘技の）時代が来るから準備しておけよ」って言われていて、それを信用して準備していただけの話だからね。やっぱり猪木さんは先が読めてたんだよ。いろいろ当たりハズレはあるけど、猪木さんのプロレスに関する予想はほとんど当たりでしたよ。

――今後、石井選手はどうしたらいいと思いますか？

小川　俺は柔道に戻るしか道はないと思うよ。

――柔道界復帰ですか！

小川　このまま格闘技をやってたって状況は厳しいし、アメリカに行ったところでUFCチャンピオンになるのは難しいだろうしさ。それに、あいつが格闘技で誰と対戦しようが、「石井、柔道界復帰」以上のインパクトはないだろう。

――確かにそうですね。

小川　世間の話題になることがプロであるなら、へんな話、アマに復帰して大きな話題を生むのもいいんじゃないかな。だいたいいまの柔道界は石井に勝てなかったヤツしかいないんだし、次のオリンピックは無理としても、その次のブラジルで開催されるオリピックのときだって石井は29歳なんだから。「もう一回、金メダル獲ってこい！」って言いたいね。

――小川さんの今後はどうなりそうですか？

小川　今後はのんびりしてますよ。来年から筑波大の大学院に入って学生生活も始まるし。自分の道場で後継者作りもしたいし、もしかしたら格闘技界を再建する人材が俺のところから出るかもしれないしね。人生何があるかわからない。師匠の言葉を借りれば「一寸先はハプニング」だな！　そんなとこだよ。

【10年9月5日／神奈川県茅ヶ崎市・小川道場にて収録】

あの日、あの号のインタビューもまだまだハッスルしてます!

kamipro & kamipro Special

バックナンバー絶賛通販中!

kamipro No.150



ゲームで燃えろ! ゲームを通じてプロレス&格闘技に昇竜拳!!

■ゲーム界最強最後の"プロレスラー"の極意 高橋名人インタビュー ■ゲームで萌えろ!! "ツヨカワガール" RENAが、あの春麗に変身!「コスプレは今回が最初で最後ですよ(笑)」■マット界一離解な男・中邑真輔が語る『ファイプロ』の変態的楽しみ方 ■『ファイプロ』開発者・須田剛一が語るプロレスゲーム黄金期 ■ファイヤー原田が語る「魅惑の恋愛シミュレーションゲーム」■元ひきこもり女子レスラー真琴が語るゲーム更生録 ほか

kamipro No.149



格闘技のロマンは映画として昇華した! 特集・闘う映画

■ブルース・リーは強かったのか? ■ショー・コスギ「撮影で何度死にかけたか、わからない」■宇梶剛士が語る映画『お父さんのバックドロップ』壮絶舞台裏! ■いま最もエッジが効いた映画評論家RHYMESTER 宇多丸が「闘う映画」を熱弁! ■上映中止騒動とはなんだったのか?「一水会」最高顧問・鈴木邦男が語る『ザ・コーヴ』■最強の映画&アクションスターを大槻ケンヂが分析!?「スティーブン・セガール格闘映画最狂列伝」ほか

kamipro Special 2010 AUGUST



ヒョードル敗れる! 世界規模のヘビー級戦国時代に突入!!

■ブロック・レスナー「最強幻想強奪」■ダナ・ホワイト UFC代表 独占インタビュー「よくわかっただろう? これが現実だ」■エメリヤーエンコ・ヒョードル「ファブリシオとのリマッチを実現させてほしい」■ファブリシオ・ヴェウドゥム「いまでも、まだヒョードルが世界最強だ」■スコット・コーカー ストライクフォースCEO「契約更新するかどうかはヒョードル次第」■浅草キッドの玉ちゃんと語る俺たちの皇帝ヒョードル変態座談会、ほか

kamipro No.148



マンガみたいなホントがほしい!「闘うマンガ!!」大特集

■ハロルド作石「やっぱり『何が一番強いのか』に興味があるんです」■車田正美「創作の疲労度は肉体的にも精神的にもプロ格闘家と変わらない」■ゆでたまご嶋田隆司「マンガも格闘技も一番大事なのは"闘う理由・動機づけ"です」■宮下あきら「マンガの醍醐味とは荒唐無稽にあり!!」■みのもけんじ『MMAスターウォーズ』■浅草キッドの玉ちゃんと語る『あしたのジョー』変態座談会」■つの丸「"ファン気質"と作品の関係性」ほか

kamipro No.147



特集!! リングか、ケージか。鎖国か、開国か。幕末のマット界!

■川尻達也 インタビュー「青木くんが負けたいま、とにかくケージで闘いたい」■桜井"マッハ"速人 インタビュー「日本人みんな負けちゃって、俺がやるしかないでしょう」■榊原信行 元PRIDE運営会社DSE代表「日本の格闘技は一度ぶっ壊したほうがいい」■JJサニー千葉「日本人が勝つには"忍者の手"しかない」■ビビる大木 インタビュー「幕末浪漫ごもっとも〜!」■三又又三インタビュー「竜馬とたけしと猪木と前田」ほか

kamipro Special 2010 JUNE



青木完敗 この現実にどう向き合うべきか?

■青木真也 ロングインタビュー「もう少しだけ格闘技がやりたくなった」■川尻達也 インタビュー「俺がメレンデスをブッ倒すしかないでしょ!」■ギルバート・メレンデス 独占インタビュー「ズバ抜けた武器を一つ持っていてもここアメリカで王者にはなれない!」■ニック・ディアス「なぜアオキが俺たちに勝てないのか教えてやろう」■北岡悟「青木は日本でぶっちぎりに強いわけで、それが勝てなかったのがすべてです」ほか

kamipro No.146



特集・破壊と建設のエンターテインメント1990年代!!

■北斗晶「アタシがデンジャラス・クイーンと呼ばれていた頃」■福澤朗 アナウンサー「プ、プ、プ、プロレスニュースの秘密を全部語る!」■武藤敬司 インタビュー「ファンがUWFの"地味プロ"に飽きてたんだよ」■馳浩 インタビュー「脱ストロングスタイルを図ったこの男はA級戦犯なのか?」■小島聡 インタビュー「本当は恐ろしい佐々木健介」■ザ・グレート・サスケ×ウルティモ・ドラゴン「ジュニア黄金期のルーツはユニバにあり!」ほか

kamipro Special 2010 MAY



五味隆典UFCで完敗! まだ日本には青木真也がいる!!

■五味隆典「逃げ場がなくなった"流れ者"」■"俺たちの"五味座談会■ジョルジュ・サンピエール「その底知れぬ強さ」■全米進出直前インタビュー!青木真也■スコット・コーカー ストライクフォースCEO「アオキの次の相手はもう決まっている」■川尻達也 くそったれインタビュー「青木vsメレンデス戦? 答えたくもない」■菊野克紀「今回の勝ちで喜んでいられない」■KJ.ヌーン「DREAMとSF両方のライト級、ウェルター級を制覇する」ほか

kamipro No.145



140字のつぶやきでマット界が変わる!? ツイッター大特集!!

■水道橋博士×谷川貞治「谷川さんは日本初の100万人フォロワーを目指すべき!」■津田大介インタビュー「ツイッターで飲み会が5倍楽しくなります」■噂の「しるこサンド」工場に独占潜入! ■プロレス界のツイッター第一人者が語る活用術!高木三四郎インタビュー■船木誠勝 インタビュー「自分がツイッターをできない理由は、ヒクソン戦にあるんです」■菊地成孔が語る"20世紀最強最後のドラッグ"インターネット中毒論、ほか

kamipro Special 2010 APRIL



五味隆典もデビュー! UFCついに日本上陸か!?

■ダナ・ホワイト「ここ数カ月で驚くべきことを発表してやる」■ケニー・フロリアン インタビュー「五味は憧れの存在だった」■トップファイター & 関係者が徹底分析!五味隆典は本当にケニー・フロリアンに勝てるのか?■先取り、裏ネタ満載座談会UFC日本上陸 噂の真相■ヘンゾ・グレイシー インタビュー「ボクとアブダビ王子の関係を話そう」■明石家さんまも大注目! オクタゴンガールのグラビア & インタビュー、ほか

eb! enterbrain
おかげさまで10周年 エンターブレイン ANNIVERSARY 10th
発行／株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売／株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

――今日はマサさんに猪木さんについての話をうかがいたいですけど、その前に、山本小鉄さんがお亡くなりになってしまったので、そのお話から。

マサ　ビックリしたよ。新日本プロレスの関連会社の人から昨日の昼くらいに連絡があって、そのあとチャコちゃん（北斗晶）から連絡があってね。「健介オフィスの興行で追悼10カウントをやるから、遺影を持ってほしい」って言われて、短パン穿いてたんだけどあわててスーツを用意したんだよ。

――ホントに突然のことでしたもんね。

マサ　コテッちゃんは俺より一級古い（1歳上）んだよな。なんで亡くなっちゃったの？

――死因は低酸素性脳症ということですけど。

マサ　脳か。

――なんでものどが詰まって、脳に酸素がいかない状況だったらしいですけどね。

マサ　コテッちゃんはね、昔からのどの通りがあんまりよくなかったようなんだよね。だからかメシもゆっくり食べてたよ。

――へえ、そうだったんですか。でも、夏のG1にも会場に来てるくらい元気で、（亡くなられた場所である）軽井沢に行く前も道場に寄ってたらしいですけどね。マサさんは小鉄さんにどういった印象がありますか？

マサ　俺が日本プロレスに新弟子で入ったとき、彼は入って3年目ぐらいだったんだよね。

――小鉄さんのほうが少し先輩なんか？

マサ　そうだね。そのあとにできた

ですね。

マサ　とにかくよく練習やってる印象が残ってるよ。あの頃は力道山が亡くなったあとで、日プロ（日本プロレス）がゴタゴタしててね、練習なんかもマジメにやってないのが多かったんだよ。

――当時は日本プロレスがあまりいい状態じゃないときですよね。

マサ　そう。猪木さんはアメリカにいて、会社全体があんまりよくなかった。でも、コテッちゃんは周りに惑わされずリキパレスの地下でずっと練習やってて、帰りはリキマンションの合宿所までバイシクルで通ってたよ。

――バイシクル。自転車ですね（笑）。

マサ　でも、レスラーは早く逝っちゃうね。70歳までもたないもんな。馬場さんも60歳ぐらいだったし、（ヒロ・）マツダさんなんて、あれだけ食うものにも気をつけて、トレーニングも欠かさなかったのに、60代で逝っちゃったもんな。

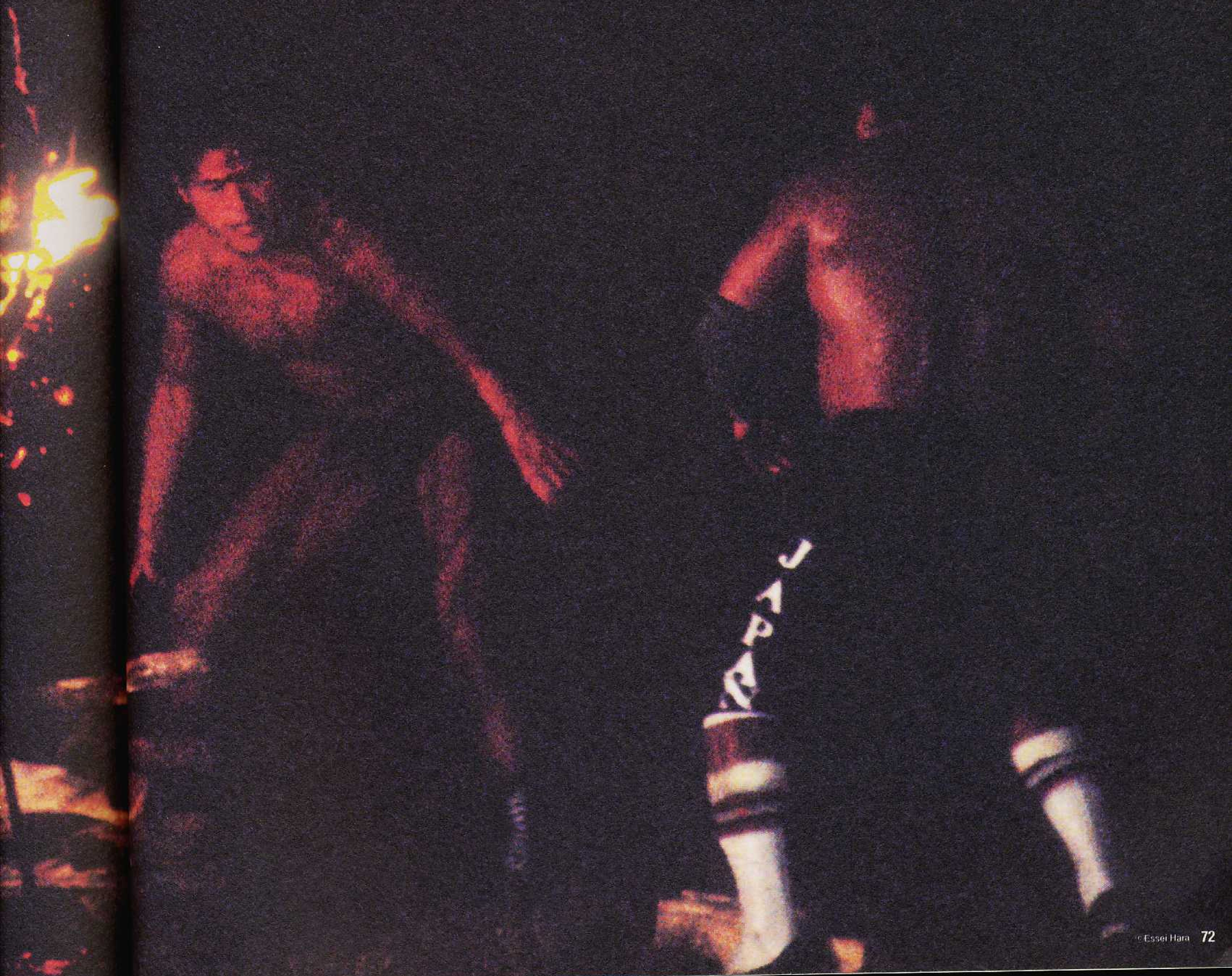
――馬場さんやマツダさんはガンでしたけどね。

マサ　でも、コテッちゃんも68歳でしょ？　68歳ぐらいがレスラーの寿命なのかな。レスラーの寿命は短いよ。なんでよ？

――いや、わかりません（笑）。

マサ　俺もそろそろヤバいかな？

――マサさんは、ますます元気でいてください！　小鉄さんの話に戻りますけど、やはり練習熱心な小鉄さんや猪木さんが新日本の道場を作ったことで、「新日本プロレス」という世界のなかでも独特な団体ができあがった部分はあったんじゃないです



© Essei Hara

か？

マサ　そうだね。そのあとにできた団体っていうのは、みんな猪木さんとコテッちゃんが作った流れを汲んでるんだよ。

――UWF系とかはみんなそうですよね。

マサ　ここ（健介オフィス）だってそうだしね。

――長州さんの作ったジャパンプロレスの流れですもんね。この道場至上主義、そしてレスラーは強くなくちゃならないという精神は、猪木さんの考えだったんでしょうか？

マサ　猪木さんの考えをコテッちゃんが実践したんじゃない？　あとカール・ゴッチの考えも入ってるだろうし。やっぱり新日本の流れを汲む団体はそういうのを持ってるよ。トレーニングして、厳しい試合をするというね。

――そしてスパーリングでのシュートの強さも必要ってことですよね。マサさんも道場でスパーリングはけっこうやられたんですか？

マサ　俺はアマチュアの流れがあるから、よくやったよ。

――猪木さんともやられたんですよね？

マサ　いや、猪木さんとは日本プロレスのときは入れ違いだったし、新日本ができてからは俺がアメリカに行ってたから、そんなにやってない。でも、新日本ができる前、ハワイで一緒にやったのが最初だったかな。

――マサさんや猪木さんが日プロを離脱して、東京プロレスを旗揚げする前のハワイ合宿ですよね。

マサ　最初に会ったとき、「ターザン

闇に浮かんだアントニオ猪木

ロスでの出会いから巌流島まで
獄門鬼が生涯のライバルを語る

マサ斎藤



アントニオ猪木のライバルといえば、故ジャイアント馬場さんの名が真っ先に挙がるだろうが、実際に闘った相手となると、やはり最大の好敵手はマサ斎藤。80年代後半にさまざまなかたちで抗争を行ない、とくに87年10月4日に行なわれた「巌流島の決闘」は語り草だ。そんなマサさんにいまあらためて生涯のライバル、アントニオ猪木を語ってもらった。

聞き手　堀江ガンツ　試合写真　原悦生、新大阪新聞社

みたいだな」って思ったよ。

——ターザンですか？

マサ　映画『ターザン』ってあったでしょ？　あれみたいな男だと思った。

——野生的で動きが速くて、みたいな。

マサ　そうそう。力も強かったし、身体が柔らかいんだよ。寝技もうまかったよ。そのときレスリングマットがなかったから、コンクリートの上にマット敷いてスパーリングやったんだけど、マットが小さかったから、いつのまにかコンクリートの上でやってたよ。

——コンクリートの上でスパーリングですか。

マサ　いやにいてえな、と思って。

——それぐらいスパーリングに没頭してたんですね（笑）。

マサ　あとロサンゼルスのオリンピックセンターでもやったな。あの頃、俺はサンフランシスコで仕事してたんだけど、猪木さんがロスにいて「来い」っていうからロスに行って、一緒にスパーリングしたよ。

——でも、アマチュアレスリングの経験がない猪木さんが、よくオリンピックレスラーのマサさんと自ら進んでスパーリングやりますね。

マサ　アマチュアはテイクダウンして、両肩をマットにつければ終わりじゃん。でも、プロの場合は極めないとダメだから、全然違うよ。

——猪木さんは極めは強かったんですか？

マサ　強かったね。極められなかったよ。身体がグニャグニャで凄かったよ。

——マサさんは逆に極められたんですか？

マサ　極められたね。俺はプロの極めを知らなかったから。猪木さんは腕を極めるのうまかったよ。

——猪木さんはパキスタンでアクラム・ペールワンとやって、腕極めて折っちゃった人ですからね。

マサ　ねえ。バック取られたら、腕を差して極めるの得意なんだよ。あれを知ってる人はあんまり取られなかったけど、相手は知らなかったんじゃないの？

——マサさんは猪木vsペールワンみたいな試合はどう思いますか？

マサ　写真しか見てないから内容はわからない。でも、あの頃の「やってやろうじゃないか」っていう気持ちは出てたよね。相手は向こうの英雄でしょ？　何万人もいるなかで、周りはみんな敵なんだから、そこでヒーローをやっつけちゃったら、殺されてもおかしくない。でも、ちゃんと無事帰ってきたんだから凄いよ。



試合の途中からリングのロープを外し、両者の左手を手錠でつなぎ闘った猪木とマサ斎藤。このような状況でも観客を魅了する闘いをできるのは、この二人ならではであろう。80年代後半の猪木の最大の好敵手は間違いなくマサ斎藤だ。

——勝ったこと以上に「生還したこと」が凄い、と。

マサ　やっぱり敵の国でやるっていうのは危ないよ。俺もフロリダでやってるとき、プエルトリコやバハマに遠征したけど、あっちは観客がカッとなって頭に血がのぼりやすいんだよな。すぐに石を投げたり、いろんなもの投げてくる。俺、観客が投げた傘が顔面に当たって、顔がザックリ切れたことあるからね。

——へぇ～、傘が飛んできますか！

マサ　試合中に傘がくるくる回って飛んできて、それが当たってパックリ割れちゃったんだよ。だからプエルトリコは食い物はうまいけど、あんまり好きじゃねえな。

——そんな目に遭ってたらそりゃそうですね（笑）。

マサ　プエルトリコは野球場で試合をするんだよ。でも、危ないからグラウンドには観客入れないんだけど、それでも柵を乗り越えて客が雪崩れ込んでくるからね。

ペールワン戦は勝ったことより生きて帰ってきたことが凄いよ

——そういう安全が保障されてない場へ、自ら飛び込んで試合をするって相当肝が据わってないとできませんよね。

マサ　そういう肝が据わってるのがホントのレスラーよ。あとはボストンで試合すると、会場がすり鉢状になってて、お客が上から下に見下ろして観るんだけど、あそこはモノが投げやすい作りになってるのよ。

——なるほど、客席からモノを投げると下にあるリングに吸い込まれるように落ちていく構造になっている、と（笑）。

マサ　そうそう（笑）。簡単に届いちゃうんだよ。だからウィスキーやビール瓶が飛んでくるのよ。

——メチャクチャ危ないじゃないですか！

マサ　でも、それを嫌がって頭をガードしたりすると、お客がおもしろがってもっと投げてくるんだよ。パートナーのミスター・フジは頭抱えてるから、お客がおもしろがってどんどんモノを投げてきたからね。でも、俺は内心ビクつきながらも平気な顔してたら投げてこないのよ。そういうお客の心理を読むのもレスラーの技術よ。

——なるほど。お客を盛り上げるだけじゃなく、ときには興奮したお客を落ち着かせるのもプロレスラーの能力だ、と。

マサ　ビール瓶やウィスキーの瓶でケガするのバカらしいからね。観客をヒートさせるのが仕事だけど、ヒートさせすぎないことも大事なんだよ。

——でもマサさん、日本でも一度、観客をヒートさせすぎたことがありますよね？　たけしプロレス軍団（TPG）のとき（笑）。

マサ　そうよ（笑）。でも、それだけじゃなく、海賊が出てきた大阪城ホールも大暴動だったから二回だな。

——大暴動を二度も経験してるんですよね（笑）。両国のときなんか、試合中ずっとモノが飛び交うなかで試合してましたもんね。あのときは、開き直ってました？

マサ　どうやってこの場を抑えようかと思ったよ。両国のときは、とにかく早く試合を終わらせようってことだけだったけど、大阪城ホールは海賊が俺に手錠かけちゃったじゃない？

——クロネコさん扮する海賊男が間違えて、猪木さんとマサさんを手錠でつなぐはずが、海賊自身とマサさんをつないじゃったんですよね（笑）。

マサ　あれじゃアントニオ猪木と闘えないし、どうしようかと思ってさ。

両国と大阪城の暴動後、新日本の社員が俺に対して怒ってたのよ

マサ斎藤

時間もないし、急なことでアイデアもないし。しょうがないから、そのまま控室に戻ったんだけど、しばらくしたらコテッちゃんが控室にすっ飛んできてね。「お客が暴れだしてるから、もう一度、リングに上がってくれ」って言うんだよ。でも、ヒールであり客のヒートを買ってる俺がもう一度出て行ったら、よけい荒れるからイヤだったんだよな。

——マサさんとしては、ヒートした観客を鎮めるセオリーとして、ヒールが出ていくべきじゃない、と。

マサ でも、コテッちゃんが「どうしてもう一回やってくれ」って言うから、しょうがないからもう一回リングに上がったんだけど、案の定、よけいお客が怒っちゃってね。「もうダメだな」と思ったね。

——あきらめましたか（笑）。

マサ 両国も大阪城も火ぃつけられて、会場が使えなくなったんだよ。でも、たけしにしても、海賊にしても、ああいうことをやるには時代がまだ早すぎたな。

——当時のプロレスファンは、まじめでしたからね。

マサ だから暴動の翌日は新日本の社員連中も怒っちゃってさ。

——猪木さんに対してですか？

マサ 俺に対してよ。

——マサさんに対して怒りましたか！（笑）。

マサ 猪木さんはベビーフェイスじゃん。俺はベイダー連れてきたり、海賊と組んでたりして、それで暴動になったから、俺のせいになってんだよ。

——ちょっと待ってください。TPGの参謀役も、海賊との件もマサさんはプロとして言われたことをやっただけじゃないですか！（笑）。

マサ そういう時代なのよ。翌日、シラーッとした顔で見てんだよ。



87年3月27日、大阪城ホールで行なわれた猪木vsマサ斎藤。その試合途中に海賊男が乱入し、自分とマサさんを手錠でつないでしまい、試合続行不可能に。これに観客が激怒し、大暴動となってしまったのだ。

——社員もリングで何が起こるか知らされてない、凄い時代ですね（笑）。

マサ 社員でそれなんだから、お客は怒るよな。時代が早すぎてついていけてなかったよ。でも、いまの連中があああいうことやってもお客はあそこまで本気にならないだろうな。やっぱりアントニオ猪木だから、できたんだよ。

——良くも悪くもですよね。ホントに観客の心をもてあそびますからね。

マサ そう。観客を手のひらに乗せるのよ。

——たまに手のひらから落としたりしますからね（笑）。その猪木さんにマサさんはあうんの呼吸で合わせて。

マサ あうんの呼吸がどうかはわからないけど、そうなっちゃうんだから。なんとかするしかないじゃん。

——何が起こるかわからないことが多すぎる（笑）。

マサ 猪木さんの試合は、極端な試合が多いよ。観客が喜んだり怒ったり。

——モハメド・アリ戦では世界中を怒らせたりしましたからね（笑）。逆に巌流島という、観客のいない試合をやったり。

マサ あの巌流島は、お客もいないなか、どうやって闘ったらいいんだと思ったよ。でも、いまはああいうアイデアを考えるヤツがいないね。それがプロレスが下がってきちゃった原因でもあるよ。

——やっぱりプロは話題になってナンボですもんね。巌流島ではお客を沸かせる必要がないなかで、どういう試合にしようと思いましたか？

マサ わかんなかった。いつ始まるのかも、どのくらいの時間やるのかも、どうやって終わるかもわからなかったから。だから最初はそんなことできるのかな、と思ったよね。でも、おもしろそうだなって。猪木さんもわかってなかったんじゃない？ 巌流島でやるってアイデアだけで、あとどうするか考えてないから（笑）。

——きっとそうなんでしょうね（笑）。

マサ 全部、その場よ。俺たちレスラーっていうのは、観客を沸かせるってことが一番の仕事なのよ。でも、巌流島はその必要がないわけ。じゃあ、そのなかでどんな試合ができるのかっていうのを試されたんだよな。だから試合時間が2時間超えてたなんて、試合やってるこっちとしたらわかってなかった。気がついたら日が暮れてて、どうやったら試合が終わるかも決まってないんだから。あんなバカな試合は俺とアントニオ猪木にしかできなかっただろうな。

——ホントに猪木さんとマサさんがプロとして培った感性だけで闘った、と。でも、マサさんが一番思い入れの深い試合は巌流島じゃなくて、もっと若いときにやった猪木さんとの試合なんですよね？

マサ そう。新日本ができたばかりの頃、猪木さんと鳥取でやったワールドリーグ戦の試合。

——その試合はなんで特別なんですか？

マサ それまで、自分が考えてたプロレスができる相手っていなかったんだよ。大木金太郎とやってもしっくりいかないし、ほかのレスラーとやってもしっくりいかない。でも、猪木さんと闘って、初めて自分がやりたいプロレスができたんだよ。猪木さんの反応がよかったんだよね。初めて試合に没頭できた。

——大げさに言えば〝プロレスラー開眼〟できたというか。

マサ あの頃のアントニオ猪木は30歳くらいでしょ？

——74年ですからね。32歳ですかね。もう36年前の話になりますけど。

マサ もう36年か。ずいぶん歳とったな（笑）。

——でも、猪木さんとマサさんには、昭和プロレスの英雄としてまだまだ頑張ってもらわないといけませんからね。

マサ みんな亡くなっちゃったもんね。俺も68歳だから。できれば親の年齢よりも長く生きたいけど。

——おいくつになられたんですか？

マサ 97歳と94歳でピンピンしてる。

——まだ30年もあるじゃないですか！（笑）。

マサ グフフフ。

——じゃあ、マサさんは100歳まで頑張ってください！ 今日はありがとうございました！

【10年8月30日／埼玉県吉川市・健介オフィスにて収録】



まさ・さいとう■1942年8月7日、東京都出身。フリースタイルレスリングで東京オリンピック日本代表。65年に日本プロレス入門。その後、フリーとして全米でトップレスラーの地位を築く。87年から本格的に日本復帰、猪木との巌流島の闘いなどで名を馳せる。99年に現役引退。現在は健介オフィスのアドバイザーを務める。

――今回はアントニオ猪木デビュー50周
道場に来るようになったんですけど、忙
――しかも現役を引退してすでに10年以
堀辺　そうなんです。で、一方で「私」を



浴びせ蹴りを伝授したかつてのブレーンが語る素顔の猪木

アントニオ猪木最大の武器は“笑顔”である！

日本武道傳骨法創始師範
堀辺正史

レオン・スピンクスとの異種格闘技戦を前に、アントニオ猪木に骨法の浴びせ蹴りを伝授。そこから交流が始まり、80年代後半は漫画家・永井豪先生とともに猪木さんの個人的なブレーン的存在でもあった堀辺師範。そんな猪木の素顔を知る堀辺師範が考える猪木の魅力とはなんなのか？ 80年代後半の猪木のエピソードとともに語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／タイコウクニヨシ

アントニオ猪木は「私」を捨てながら
ある意味で「私」を追求してもいる。
それは大物の条件でもあるんですよ

――今回はアントニオ猪木デビュー50周年ということで、とくに80年代後半に猪木さんと親交が深かった堀辺先生に、素顔の猪木についてうかがいたいんですよ。

堀辺　わかりました。

――そもそも、先生が猪木さんと知り合うきっかけはなんだったんですか？

堀辺　もともと私はアントニオ猪木の後援者と知り合いだったんですよ。で、異種格闘技戦（vsレオン・スピンクス）をやる前に、猪木さんは何か目新しい技はないかと考えていたらしいんですけど、その後援者が私を紹介したかったらしく、いきなり道場に連れてきちゃったんです。

――ここ東中野の骨法道場に猪木さんがいきなり来ちゃったんですか？

堀辺　一応、「いまから行きます」みたいな電話が一本あったんですけど、そのあとすぐに来ましてね。その日は挨拶だけのつもりだったみたいなんですけど、稽古を見せたら、おもむろにシャツを脱ぎだして稽古に参加し始めたんですよ。

――いきなり来て、いきなり稽古に参加ですか！

堀辺　私もそんな展開になるとは思ってなかったんですけど、「じつはボクサーとの対戦を控えていて、何かいい蹴り技はないですか？」って聞かれたんですね。それで5つくらい骨法の蹴り技を見せたんですけど、そのなかで一番気に入ったのが浴びせ蹴りだったんです。

――浴びせ蹴りは、いまやすっかりプロレス技として定着してますけど、そのときが初めてだったんですね。要は見栄えがいいというか。

堀辺　そうですね。見栄えがよくて、プロレスファンが見たこともない技を使いたかったんでしょう。そのあと、猪木さんが道場に来るようになったんですけど、忙しい人なんでいつも突然一人で来るんですよ。

――お付きの人もなく一人ですか？

堀辺　そう。だから最初は骨法に通ってることを知ってるのは、紹介した後援者だけだったんじゃないでしょうか。

――へえ、ホントに秘密特訓だったんですね。

堀辺　やはり新日本プロレスのトップですから、骨法の道場生として指導を受ける姿というのは配下の選手には見せたくなかったんじゃないですかね。だから、試合直前になって、スパーリングパートナーというか、実験台が必要になってから、付き人の蝶野（正洋）なんかを連れてくるようになったんですよね。

――なるほど。先生と猪木さんというのは、そこからのお付き合いということですね。

堀辺　で、今年はその猪木のデビュー50周年ということですけど、これだけの長い期間、影響力を持ち続けているということがまず素晴らしいですよね。プロレスラーにかぎらず、数年間人気がある人はいるでしょうけど、何十年ものあいだ人々の心を支配しているということが特別だと思います。

――しかも現役を引退してすでに10年以上経っているわけですもんね。

堀辺　それでいながら、いまだに猪木はテレビに出たり、CMに出たりしてますよね。そこにはやっぱり理由があるんですよ。

――どのような理由ですかね？

堀辺　私が一人の男として素晴らしいなと思うところは、プロレスラーというプロフェッショナルな仕事を通すとき、彼は自分の「私」というものをある意味で捨ててるんです。で、またその反面、「私」を追求してもいるんですよ。そこが猪木がいまなお強い影響力を持っている理由だと思います。

――「私」を捨てながら、「私」を追求している、ですか。

堀辺　「私」を捨てている一つの例を挙げると、彼はメディアにどれだけ叩かれても、メディアに対して噛みつかないんですよ。とくにモハメド・アリ戦なんて、ボロクソに言われたわけですね。でも、報道陣に直接怒ることも、「いや、こうなんだ」と言い訳や反論をすることもない。すべて黙っているんですね。これは「私」を捨てているんですよ。

――評価はすべて大衆にゆだねて、自分の個人的な感情を入れない、と。

堀辺　そうなんです。で、一方で「私」を追求してるというのは、リングに上がったとき、どうやったら「アントニオ猪木」を一番輝かせられるかを常に考えている。サービス精神旺盛なんですね。だから、個人的な誹謗中傷に対して一切関知せず、その一方で常に大衆のことを考えている。これは政治家でも同じことが言えますけど、大物の条件なんですよ。ここがほかのレスラーと猪木が圧倒的に違うところですよ。

――確かに猪木さんはマスコミに対しても愛想がいいし、サービス精神も旺盛だから、必然的に記者も猪木さんの記事を大きく書いちゃうんですよね。

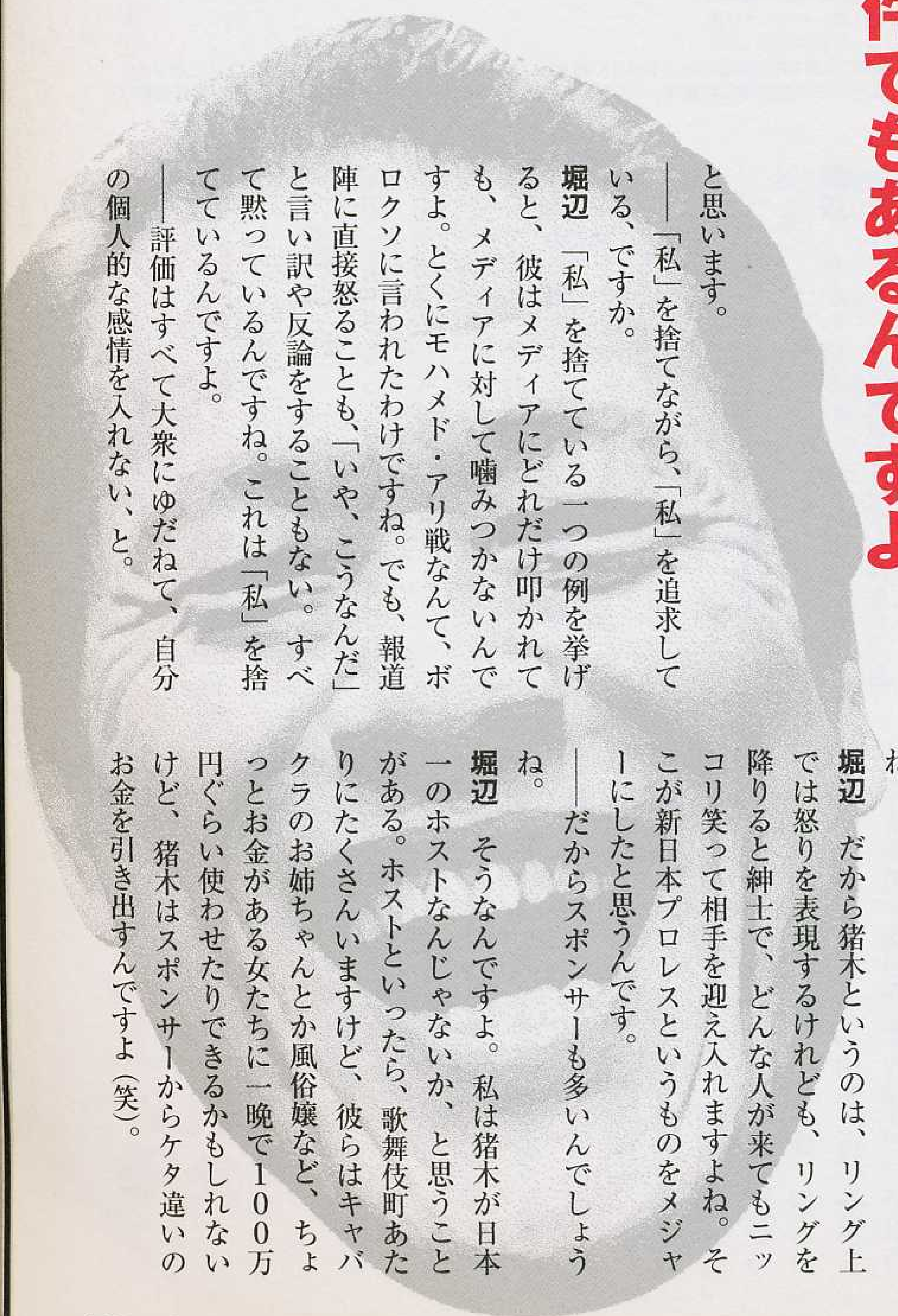
堀辺　そのとき、猪木に対して批判的なことを書いた記者に対しても「おまえか、あの記事を書いたのは」なんてすごんだりしないでしょ？

――そういう姿は見たことがないですね。

堀辺　だから猪木というのは、リング上では怒りを表現するけれども、リングを降りると紳士で、どんな人が来てもニッコリ笑って相手を迎え入れますよね。そこが新日本プロレスというものをメジャーにしたと思うんです。

――だからスポンサーも多いんでしょうね。

堀辺　そうなんですよ。私は猪木が日本一のホストなんじゃないか、と思うことがある。ホストといったら、歌舞伎町あたりにたくさんいますけど、彼らはキャバクラのお姉ちゃんとか風俗嬢など、ちょっとお金がある女たちに一晩で１００万円ぐらい使わせたりできるかもしれないけど、猪木はスポンサーからケタ違いのお金を引き出すんですよ（笑）。





徐々に縮小されて、あのベイダーになったんですけどね。

り神となり、会場をすべて支配しようとするわけですね。

を大事にしてないわけじゃなくて猪木はそういう人に対して、ファンが見てない

——そうなんですよ。

堀辺 ヤクザの世界だってそうですよ。



86年10月9日に行なわれた『INOKI闘魂LIVE PART1』で、元プロボクシング世界王者レオン・スピンクスと対戦した猪木。その試合の秘密兵器が骨法の浴びせ蹴りだった（写真は延髄斬り）。

3メートルの大男をリングに上げるという発想からベイダーが生まれた

——確かに（笑）。

堀辺 猪木がもらうお金は100万や200万じゃないですよ。金額一つとっても何千万単位で提供してもらうわけじゃないですか。それも何十年間もたくさんの人から提供してもらってる。また大きな事業をやるのに大金を借りるときだって、猪木は担保も何もないんですよ。あるのは笑顔だけです。

——笑顔一つで億単位のお金を借りれる男（笑）。

堀辺 だから猪木の一番の武器はあの笑顔なんです。あの笑顔を見せられると、お金を貸す方が「借りてくれてありがとう」みたいな気持ちになっちゃうんですよ。これはホストとしての能力では最高のものがありますよ。

——しかも、その借りた大金は、見果てぬ夢のような事業にすべて注ぎ、あっという間に消えちゃうわけですからね（笑）。

堀辺 猪木はね、そういう夢みたいなことが大好きなんですよ。それはプロレスに対してもそう。私とよく会っていた頃、「マジシャンが巨大な飛行機を一瞬にして消しちゃうんだ」とか、興奮気味に話してくるんですよ。

——デビッド・カッパーフィールドの有名なマジックですよね。

堀辺 あれを見た猪木は「（プロレスの）試合中にリングを一瞬にして消したりすることはできねえだろうか」とか言うんですよ（笑）。

——ダハハハ！　アントニオ猪木とカッパーフィールドのコラボ（笑）。

堀辺 とにかく、少年じゃないと飛びつかないような突飛な話があると、猪木は目を輝かせて聞いてるんですよね。しかも、それを自分の手で実現しようとするわけ。

——永久電機とかですよね（笑）。

堀辺 あとは私と漫画家の永井豪先生と猪木さんで集まって、よく突拍子もない話をしてたんですよ。3人とも常識から外れた人間だから（笑）。その頃、猪木さんが「中国やブラジルの山奥には、身長3メートル近い大男がいるはずだ。それをリングに上げられないか」って言ってたんです。でも、そんなのなかなかいないんですよね。

——3メートルの野人がいたらホントに大ニュースですよね（笑）。

堀辺 で、「いないなら作っちゃえばいいんじゃないか」って話になって、そこから始まったのがベイダー計画なんですよ。ベイダーって甲冑を被ってましたけど、永井豪先生が描いた最初のデザインでは、全身が覆われてたんです。

——巨大ロボットみたいな感じですか（笑）。

堀辺 そう。巨大ロボットみたいなのがガシャーン、ガシャーンと入ってきて、その鎧を脱ぐと中から怪物的なレスラーが出現する。そういうのがあったら、プロレス界が変わるんじゃないか、と。

——そう猪木さんは思っていた（笑）。

堀辺 それが予算の関係なのか、計画が

プロレスラーも武将もヤクザの親分も男に惚れられる能力が必要とされるんです

徐々に縮小されて、あのベイダーになったんですけどね。

──海賊男も猪木さんのアイデアなんですよね？

堀辺　そうです。当時、猪木さんがどこかの海域に片足がない海賊の亡霊が出るっていう話を聞いてきて、それを興奮気味に我々に話すわけですよ。その話の最中に電話が鳴ったんですけど、離れたデスクの上にある受話器を取ろうとしたとき、猪木さんは海賊に入り込んじゃってるのか、片足でヒョコヒョコ歩いて電話を取ってたの（笑）。

──ダハハハ！　完全に自分が海賊になりきってて（笑）。

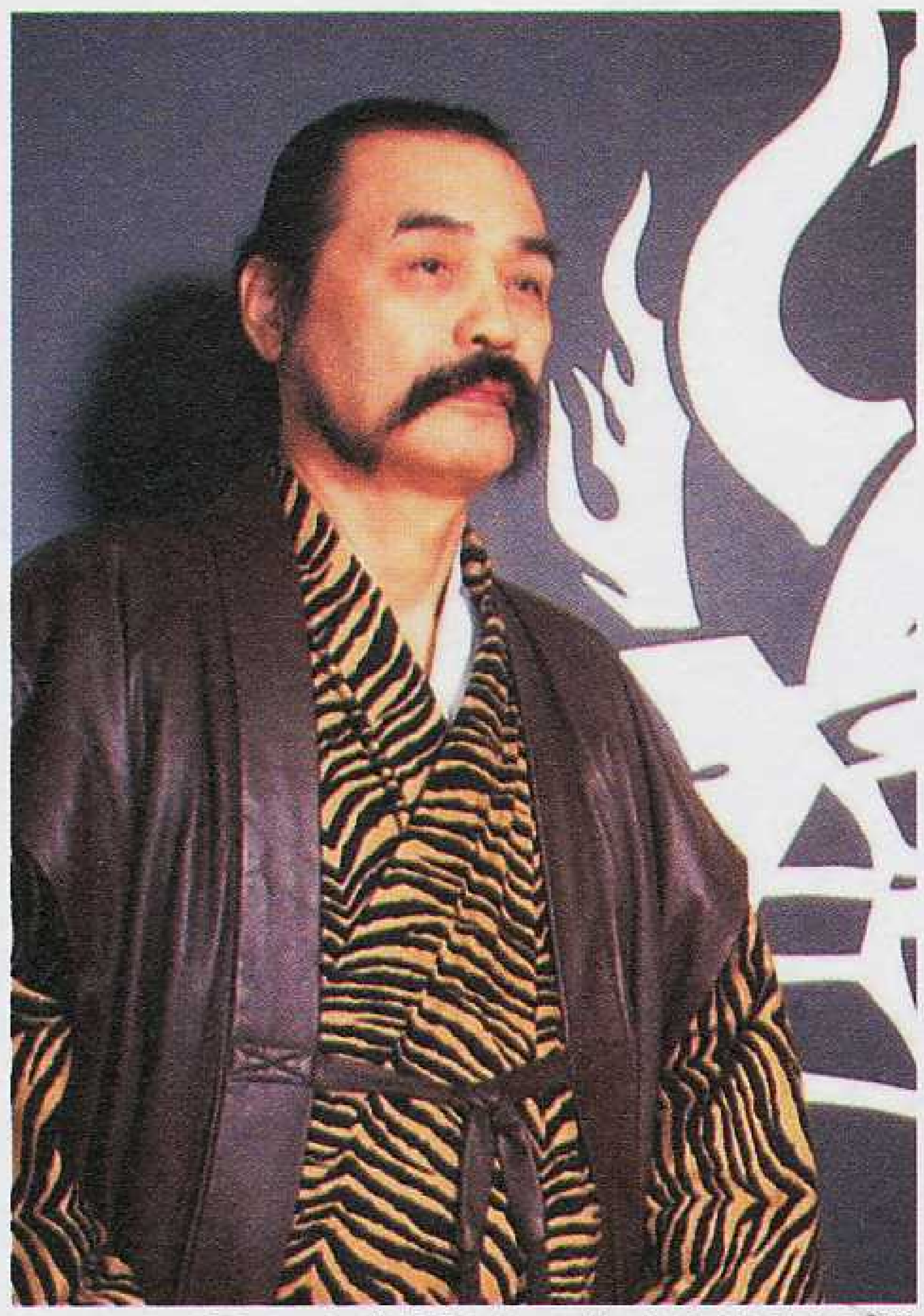
堀辺　ホントに夢のなかにすーっと入っていっちゃうんですよね。そういう能力がプロレスラーに向いていたんだと思います。

──「アントニオ猪木」になりきっちゃうわけですね。

堀辺　だから私を含めた知人と外で会ったら、猪木はもちろん挨拶しますけど、「アントニオ猪木」としてプロレス会場に入ったら、知人だろうがお世話になってる人だろうが、お客の前では完全に無視します。そこも素晴らしいなって思うんですよ。プロレス会場では、自分が主であり神となり、会場をすべて支配しようとするわけですね。

──そういえば、猪木さんがファンの前でスポンサーに頭を下げたりしてるところは、見たことないですね。

堀辺　そうでしょ？　リングサイドにスポンサーやお世話になってる人がいて、たとえ目が合ってもお客の前では無視する。猪木にとってプロレス会場では、一番大事なのがファンの目であり、スポンサーなんかは二番目三番目なんですね。これは夢を売る商売として、きわめて真っ当な考えですよ。プロレス会場では猪木は王様であり、ファンはその姿を観に行ってるわけだから、その猪木がスポンサーを特別扱いして長話をしているところを見せたら、ブチ壊しになるってことがわかってるんですよ。だけどスポンサーを大事にしてないわけじゃなくて猪木はそういう人に対して、ファンが見てないバックステージで挨拶するんです。



ほりべ・せいし■1941年、茨城県出身。50年にわたる命懸けの求道の末、喧嘩芸骨法、さらに全局面打撃制koppoを創始。格闘技・武道評論の第一人者でもあり、現在は月に一回のペースで漫画家・小林よりのり氏らとともに『ゴー宣道場』も開催している。

──大事なことですよね。総合格闘技なんかでも、スター選手が勝ったあと、リングサイドのスポンサーや偉い人にペコペコしてる姿を見ると、残念な気持ちになりますからね。

堀辺　でも、猪木は人の目があるところでは、常にリングの王者アントニオ猪木であり続けようとする。そこが男の生き様だと思うんですよね。

──プライベートというか素顔の猪木さんというのは、リングと全然違うわけですか？

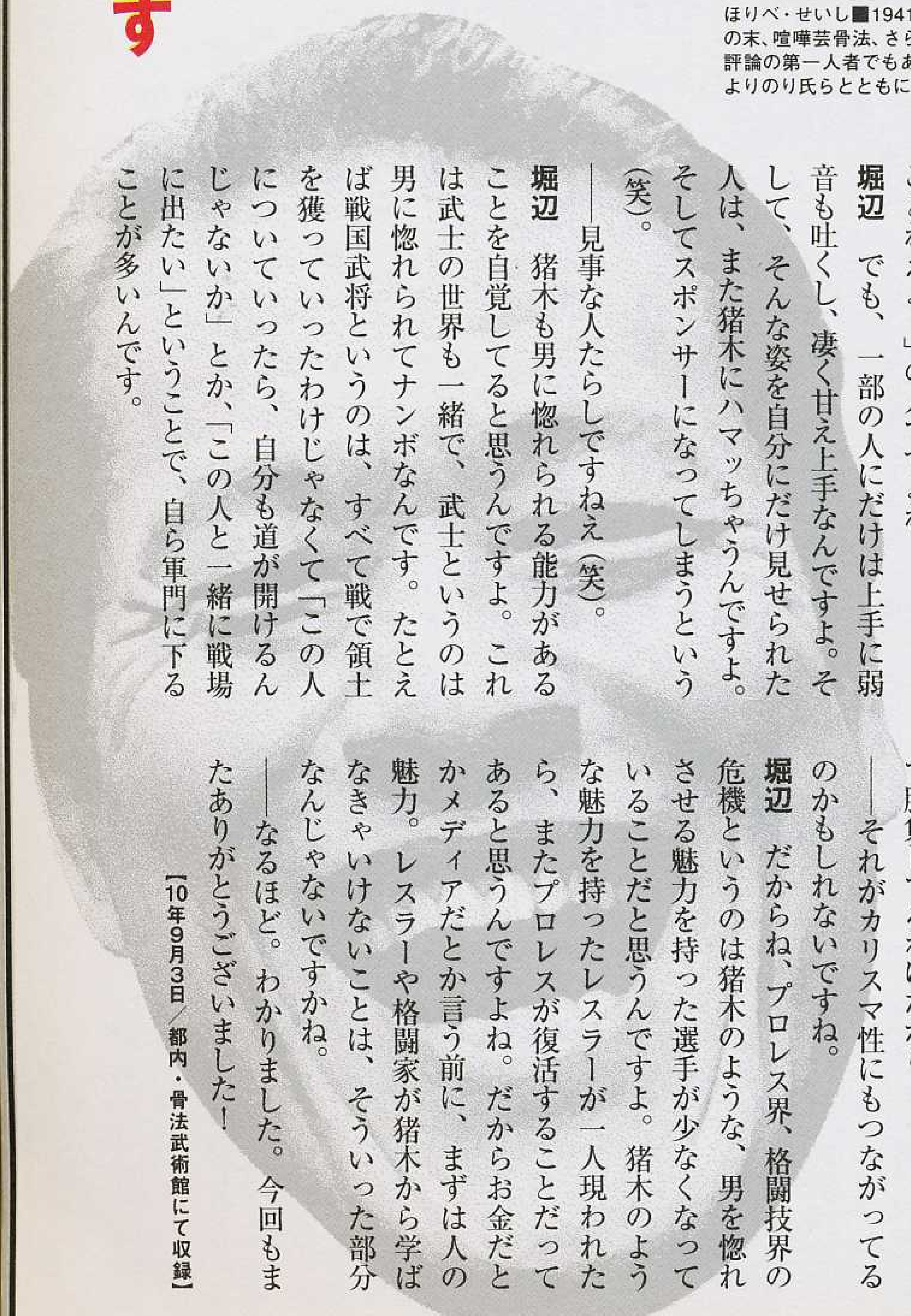
堀辺　違いますね。素顔の猪木さんが魅力的なのは、自分が信頼した親しい人にだけ、自分の弱さを自然と出してくるんです。

──僕らが見てる猪木さんは「どうってことねえよ！」の人ですよね。

堀辺　でも、一部の人にだけは上手に弱音も吐くし、凄く甘え上手なんですよ。そして、そんな姿を自分にだけ見せられた人は、また猪木にハマッちゃうんですよ。そしてスポンサーになってしまうという（笑）。

──見事な人たらしですねえ（笑）。

堀辺　猪木も男に惚れられる能力があることを自覚してると思うんですよ。これは武士の世界も一緒で、武士というのは男に惚れられてナンボなんです。たとえば戦国武将というのは、すべて戦で領土を獲っていったわけじゃなくて「この人についていったら、自分も道が開けるんじゃないか」とか、「この人と一緒に戦場に出たい」ということで、自ら軍門に下ることが多いんです。



──そうなんですよ。

堀辺　ヤクザの世界だってそうですよ。ヤクザの親分は必ずしも力でねじ伏せて子分を作ってるんじゃない。魅力がある親分は「あの人の子分になりたい」って、喜んで軍門に下るわけです。そういう、男を惚れさせる能力を猪木も持ってるんですよ。そして、猪木がジャイアント馬場以上にメジャーになれた要因の一つもそこにあると思う。

──馬場さんにはそういう魅力がありませんかね？　確かに馬場信者ってあまり聞きませんけど（笑）。

堀辺　企業のトップが馬場に惚れて、凄い大金を融資したとか聞いたことがないでしょ？　本人ももらおうとしなかったのかもしれないけど、あげようとする人もいなかった。で、どちらがプロレス的かといったら、圧倒的に猪木のほうなんですよ。猪木はプロレスラーとしての色気で勝負してるわけだから。

──それがカリスマ性にもつながってるのかもしれないですね。

堀辺　だからね、プロレス界、格闘技界の危機というのは猪木のような、男を惚れさせる魅力を持った選手が少なくなっていることだと思うんですよ。猪木のような魅力を持ったレスラーが一人現われたら、またプロレスが復活することだってあると思うんですよね。だからお金だとかメディアだとか言う前に、まずは人の魅力。レスラーや格闘家が猪木から学ばなきゃいけないことは、そういった部分なんじゃないですかね。

──なるほど。わかりました。今回もまたありがとうございました！

【10年9月3日／都内・骨法武術館にて収録】

おかげさまで10周年 エンタープレイン ANNIVERSARY 10th

創立10周年記念企画14誌合同

年間定期購読キャンペーン開始!

エンターブレインは今年で10周年を迎えました。日ごろから読者の皆さまにはご愛顧いただき、厚く御礼申し上げます。
なお、このたび創立10周年記念企画といたしまして、エンターブレインが刊行している14誌合同での年間定期購読キャンペーンを実施いたします。
下記のとおり4つの特典をご用意いたしました。これを機会にぜひとも年間定期購読をお申し込みいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

kamiproではもれなく、ノベルティーグッズの特製Tシャツがもらえます!

kamiproの年間購読料は10,340円(送料込み)
特別定価が何回あっても、追加代金はいただきません!



※この画像はイメージです。実際の特製Tシャツはデザインが変わる場合があります。



ここがスゴイ! キャンペーンで得する4つのポイント。

1. 年間定期購読で1ヵ月分サービス
   (※週刊ファミ通、コミックビーズログ キュン!、Fellows!は除く)
2. 特別定価と送料はサービス
3. 各誌ノベルティーグッズ付き
4. 申し込み2誌ごとに図書カード(500円分)をプレゼント



創立10周年記念特設サイトURL → http://www.enterbrain.co.jp/10th/

ケータイで購入 →

定期購読に関する注意事項

- 当キャンペーンは、2011年3月31日のお申し込み分までが対象です。
- お申し込みは、弊社通販サイト【エビテン(ebten)】で受け付けております。http://ebten.jp/eb-store/
- お届け開始号は、エビテンのお申し込みページをご確認ください。
- 商品のお届けは発売日から2～3日ほど遅れる場合がございます。
- 商品のお届け先は、日本国内に限らせていただきます。
- クレジットカードでのお支払いの場合、お届けを開始する月に決済を行ないます。
- 代金引換でのお支払いの場合、商品お届け開始号のみ佐川急便の宅配便にて発送を行ないますので1年分の代金を配達員にお支払い下さい。
- 年間定期購読をご契約いただきますと、中途解約に応じることはできません。
- 当キャンペーンのお問い合わせは、祝日を除く毎週月曜日から金曜日までの正午から午後5時のあいだに弊社カスタマーサポートで受け付けております。 ☎0570-060-555
- その他の注意事項は、申し込みサイトをご確認ください。

年間定期購読ができるエンターブレインの14誌&ノベルティーグッズ

※各ノベルティーグッズは変更になる場合がございます。 ※表示価格は、すべて消費税込みで掲載しています。

週刊ファミ通 毎週木曜日発売／定価370円 年間購読料＝18,000円 — Tシャツ

ファミ通DS+Wii 毎月21日発売／定価690円 年間購読料＝7,590円 — 図書カード

ファミ通Xbox 360 毎月30日発売／定価690円 年間購読料＝7,590円 — Tシャツ

ファミ通WAVE 毎月30日発売／定価990円 年間購読料＝10,890円 — DVDケース

アルカディア 毎月30日発売／定価980円 年間購読料＝10,780円 — Tシャツ

サラブレ 毎月13日発売／定価720円 年間購読料＝7,920円 — トートバッグ

コミックビーム 毎月12日発売／定価540円 年間購読料＝5940円 — 手ぬぐい



B's-LOG 毎月20日発売／定価880円 年間購読料＝9,680円 — ポストカードホルダー

GOLF mechanic 毎月4日発売／定価990円 年間購読料＝10,890円 — タオル

ファミ通Connect!On 毎月27日発売／定価800円 年間購読料＝8,800円 — Web Money カード

Kamipro 毎月23日頃発売／定価940円 年間購読料＝10,340円 — Tシャツ

オトナファミ 11月から毎月20日発売／定価580円 年間購読料＝6,380円 — ポーチ

キュン! 偶数月15日発売／定価680円 年間購読料＝4,080円 — ミラー

Fellows! 偶数月15日頃発売／定価680円 年間購読料＝4,080円 — フローティングペン



アントンとも熱唱!
ゴキゲン姉弟ユニットがついに登場ダーッ!



ALICE & SHUM
TRIPLE-Pの
ミスター猪木に
チェケラッチョ!な
インタビュー



ファンキーでゴキゲンな二人がついに『kamipro』初登場! 猪木さんとともにシングルCD『道』をリリースして以降、猪木さんとの交友が一部で大注目されているTRIPLE-Pだが、今回あらためてアントニオ猪木との出会いから現在までをチェケラッチョな感じで語ってもらった。え!? 猪木さんとパラオまで行ったんだってぇ!?

聞き手／松下ミワ　写真協力／CEクリエイティブセクション

――このたびはアントニオ猪木デビュー50周年記念ということで、猪木さんとたいへん親交の深いTRIPLE-Pのお二人にお話をお聞きしたいと思います！

ALICE&SHUM　ありがとうございまーす。楽しみにしてました！

――いえいえ、こちらこそ。お二人にインタビューしようという話はホントに前々からあがっていたのでたいへん光栄です！

SHUM　マジで!?　うれしいっす！

――さっそくなんですが、そもそもお二人と猪木さんはどちらで出会われたんですか？

SHUM　出会いはやっぱり沖縄でだったんですけども、沖縄に猪木酒場という居酒屋がありまして、そのオープンのときに僕たちにゲスト出演のオファーがあったんですよ。

ALICE　そうそう。オープンパーティのときに歌わせていただくことになって、ゲストで出たのがきっかけで猪木さんと交流が始まったんですね。

――なるほど。出会いは猪木酒場だったんですね。

ALICE　そのときはゲストとして歌っただけで終わったんですけども、帰るときにマネージャーに「猪木さんが打ち上げに来てくださいって言ってます」ってことで呼ばれたんですよ。そうしたら猪木さんが私たちのことを凄く気に入ってくださって。

SHUM　カラオケで意気投合したんだよね、たしか。

ALICE　……えーっ！　違うんじゃない？　そのときの打ち上げは沖縄の料理屋さんだったよ。

SHUM　違うって！　そのあとにカラオケ屋に行ったんだよ。写真もあるもん、そのときの。

ALICE　そうだっけ？

――ワハハハ！　お二人は仲がいいんですねえ。

SHUM　いや、ホントにカラオケに行ったんですよ。そのときに僕たちのTRIPLE-Pの曲を3人で歌ったんですよ。

――それは猪木さんも一緒にということですか!?

SHUM　そうなんです！　僕とALICEが歌ってたときに、猪木さんがあいだに入ってきたんですよね（笑）。

――凄い。アグレッシブですねえ。

SHUM　そこで仲良くなって、そのあとにまた猪木さんの誕生会に招待していただいたんですよ。

――それはお二人が東京までいらっしゃったってことですか？

SHUM　そうです。そのときは東京のホテルの会場で開催されたんですけど、1000名くらい会場にいるところでやってたんですよ。で、じつはその誕生会の前々日ぐらいに猪木さんのスタッフの方から「猪木さんに誕生日プレゼントで曲を作ってくれませんか？」って言われたんですよね。

――また急なお願いでしたね。

SHUM　そうなんですよ。東京に行く二日前に言われて、もう二日でパッパッっと作ったんです。その曲があの『道』って曲だったんですけど。

――ええーっ!?　『道』ってTRIPLE-PさんがIGFの会場で熱唱されてる、あの曲ですよね。あれをたった二日で作ったんですか？

SHUM　あれを誕生会で披露したのが初めてで、「曲、作ってくれたのかい」ってことで猪木さんも凄く喜んでくださったんですよ。それからいろんなところに連れていってくれるようになったんですよね。

ALICE　だから、それから2週間に一回くらいのペースで会うようになったよね～。

――そんなに頻繁に。

ALICE　もう1ヵ月も間隔が空くことはなかったです。猪木さんも猪木さんで私たちが東京に行ったら「もしよかったらごはんでも食べない？」って連絡してくれて、中華に連れてってもらったり。あと、福岡かどっかのサファリパークにも連れてってもらったんですよ。

――猪木さんとサファリパーク（笑）。

ALICE　猪木さんからしたら私たち沖縄から出たことがないと思ってたかもしれないんですけどね（笑）。

――いろいろ連れ回して楽しませてあげよう、と。

SHUM　あ、あと山奥の焼肉のおいしい店も行ったよね。山奥に味噌煮込み肉みたいのが有名な店があって、そこで一緒にごはん食べたんですよ。あれはどこだったんだろう？　熊本かな～？

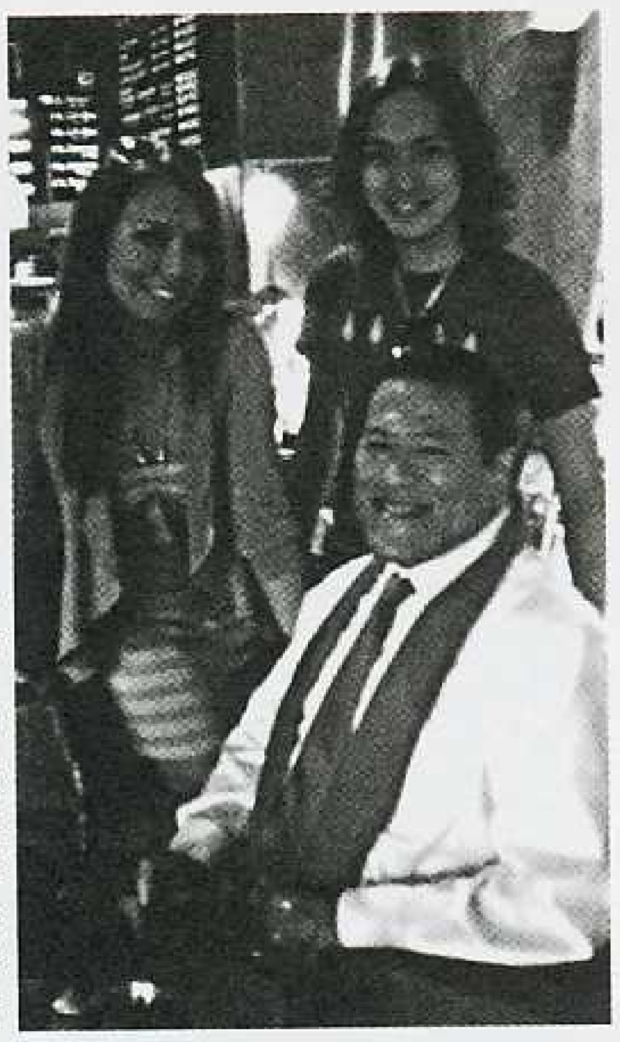
ALICE　そうだ、パラオにも連れてってもらったこともあるんですよ！

――それはもしかしてあのイノキアイランドのことですか？

ALICE　そうです、そうです！　アハハハ！　猪木さんが大統領からもらったパラオの島なんですけど、どのぐらいの大きさだったかな？

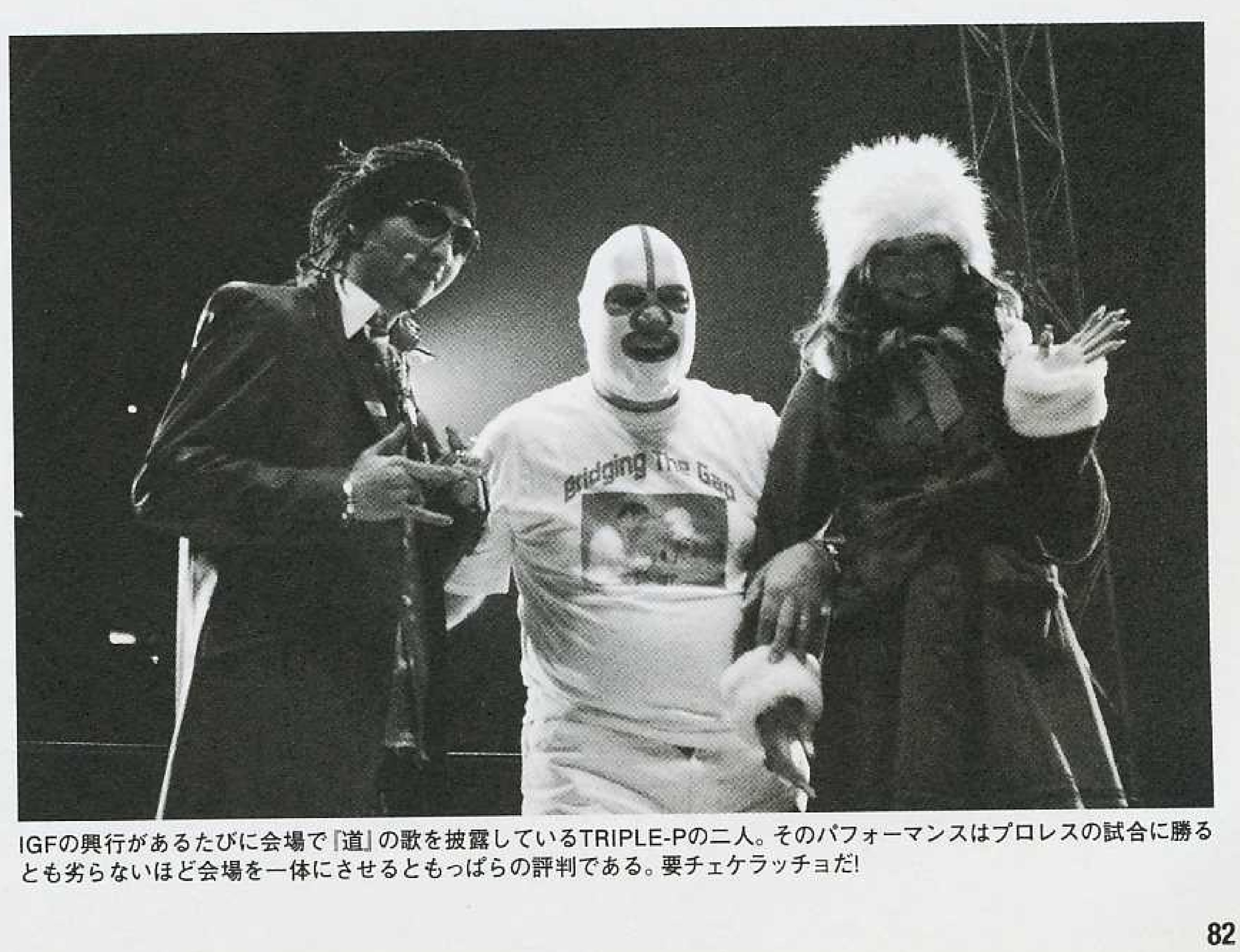
SHUM　たぶん東京ドーム3つぶんくらいだったよ。

ALICE　ウソでしょ？　そんなにないよ！



IGFにはほぼ毎回参加している二人。そのたびに二人のブログには猪木さんとのショットがアップされており、世界中で一番猪木さんの登場回数が多いのが、とりわけALICEさんのブログではないかと一部マニアで予想されている。

そうだ！ 私たちイノキアイランドにも連れてってもらったことがあるんですよ！



IGFの興行があるたびに会場で『道』の歌を披露しているTRIPLE-Pの二人。そのパフォーマンスはプロレスの試合に勝るとも劣らないほど会場を一体にさせるともっぱらの評判である。要チェケラッチョだ！

SHUM いや、東京ドーム3個ぶんは絶対あるって。おまえはずっと寝てたからわかんないかもしれないけど、森とか歩いたら面積広かったんだって。

ALICE あ、そうなんだ。あそこだけだと思った。

――東京ドーム3つぶんということでよろしいでしょうか（笑）。

ALICE はい。で、そこでみんなで野宿をしたんですよ。

――ちょっと待ってください。なぜわざわざ野宿なんですか？

SHUM いや、ホテルもあったんですけど、1週間行ったなかで、もともと「二日間はキャンプするぞ」という話だったんですよ。

ALICE そこで猪木さんが火を一生懸命焚いてくれて、島が燃えそうなくらい燃やしたんだよね？

――島が燃えるほど!!

ALICE そのキャンプファイヤーの周りで私は寝てたんです！

――危ないですよ！　しかし、自由の島なんですね。

ALICE 本当に何にもない島で。SHUMと猪木さんは夜中遊びに行ったんだよね？　海を裸で泳いでたんですよ。

SHUM 猪木さんに「おいSHUM、海に行くぞ」って言われたんで、ついていったら猪木さんがパンツも脱ぎだしてそのまま泳いでいったんですよね！　ククククク。だから僕も全裸になって、うしろからずっとついていったんですよ。パラオって月の明かりが凄くきれいなんで、いろいろ丸見えなんですよね。

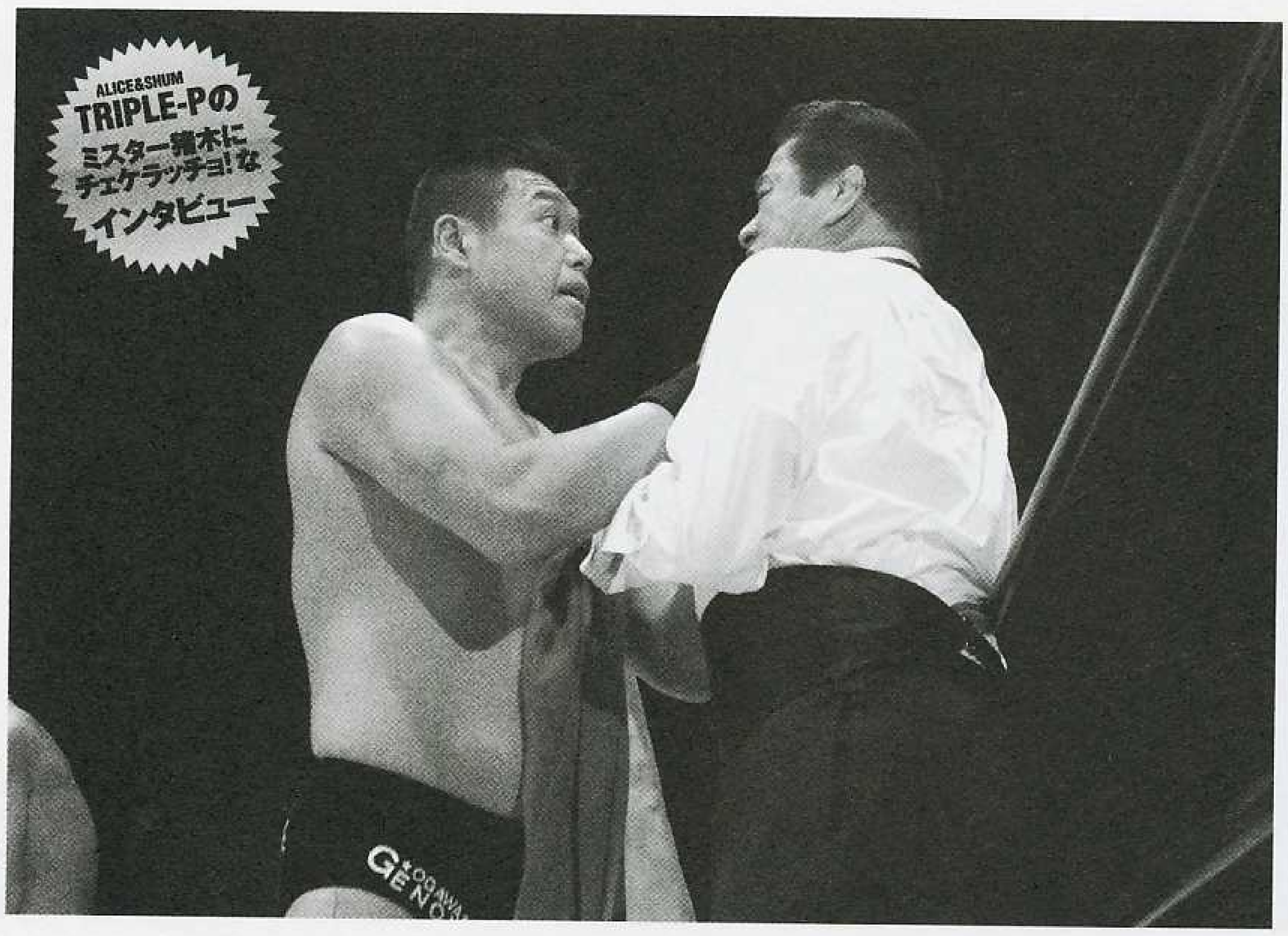
――見えたらヤバいじゃないですか（笑）。

ALICE でも、海の中にワニとかサメも泳いでて、凄い危ないところでしたね（アッサリ）。

――よく野宿できましたね（笑）。でも、国内外問わずいろんなところに連れていってもらってるんですね。

SHUM そうなんです。で、さっき言った僕たちのCDの『道』ってあるじゃないですか。それを出す前に、じつは猪木さんにはCDジャケットに出ていただいてたりするんですよ。

ALICE そうそう。じつは隠れキャラでね。それは『TRIPLE-P SEASON2』というアルバムなんですけど、そのリリースパーティのときに渋谷の109の前でゲリラライブしたんですけど、



リング上でこんないがみ合いをしている猪木さんとオーちゃんも、TRIPLE-Pと写真を撮るときは非常にはっちゃけたキャラになるから不思議だ。最近の仲違いもTRIPLE-Pを仲介役にすればうまくいくかもしれない。

シークレットで猪木さんも来てくれたんですよお。

SHUM なんか「やるならハプニングを起こそうぜ！」みたいなことを猪木さんが言ってくれて、オープンカーで渋谷をジャックして走り回って。

――なんかお二人と一緒にいる猪木さんは若いですね（笑）。

ALICE で、猪木さんが一生懸命マイクで宣伝してくれたんですよ。渋谷とか原宿とか、あちこち回って。そのとき春一番さんも来てくれたよね。

SHUM そうそう。そのあとに『道』を出そうみたいな話になったんですよ。

――ということは、一番初めのパーティで歌われたときには、まだ『道』をリリースしようというのは決まってなかったってことですか？

SHUM そこまで決まってなかったんですよ。でも109の前で『道』を歌ったときに「この曲いい感じだな」みたいなことを猪木さんが言ってくれて。で、「一緒にやろうか」みたいな話になりまして。

――そういう流れだったんですね。

SHUM で、誕生日パーティのときは本当にショートバージョンだったんですけど「CD出そう！」ってことでどんどん作り込んでいったんですよ。

ALICE そのレコーディングは猪木さんに沖縄に来ていただいて、一緒に歌っていただいたんですよ。

――なるほど、なるほど。それにしてもあの『道』という曲は歌詞が刺激的でした。

SHUM ありがとうございます！

――いろいろ素晴らしいところがあるんですけど、やっぱり一番キャッチーだったのは「歩く神様」というフレーズですよね！

SHUM あ、うれしいですね。やっぱり猪木信者からしたら「神様」ですから。僕はリアルタイムではもちろん知らなくて、でも話を聞いていたら猪木信者の方にとっては本当に「神様」だろうなって。だからそれはちょっと入れたいなと思ったんですよ。

――これはインスピレーションでパッと思いついた感じなんですか？

SHUM そうです、本当に歩く神様なんでね（真剣に）。

ALICE そうそう。もう内面的な部分も素晴らしい人だなと思うんですよお。言うこととかもやっぱ凄いですし。話がポジティブで、ホント私が考えてることは小さいなって思うんですよね、猪木さんが言うことを聞いていると。

――猪木さんの話は大きすぎますけどねぇ（笑）。

SHUM 会ったら元気になりますよ。もう『ONE PIECE』でいうと白ひげ海賊団のキャプテンですね！　知ってます『ONE PIECE』？

――ええっと、そんなに詳しくないですけど……。

SHUM （聞かずに）もう、イメージ的にいったら絶対猪木さんは白ひげだと思うんですよ！　体型とか、そっくりですからね！　エース脱獄したときとか見ました？　もう白ひげぐらい偉大だなって！

――帰って研究してみます（笑）。そして、もう一つ気になる歌詞があるんですけど、「ミスター猪木がチェケラッチョ　大好物は島らっきょ」って部分なんですよ。

ALICE ああ、猪木さんって島らっきょしか頼まないくらい絶対島らっきょ食べるんですよ！

――あ、そのまんま（笑）。

ALICE　かならずどこでも注文するんですよ。私たちもお土産でかならず島らっきょを持っていきますから。
――じゃあこの歌詞はなんとか入れないといけない、と。
SHUM　知る人ぞ知るって感じにしたかったんでね。それに「ミスター猪木がチェケラッチョ」という歌詞は、PVでヒップホップ系の服とか着てラップに参加しているってことで「チェケラッチョ！」みたいなイメージなんですよ。
――猪木さんもチェケラッチョ、と。
ALICE　だって珍しいですよね。猪木さんがそういう格好をしてるって。あ、それに猪木さんってDJブースでトラブってたんですよ。
――どういうことですか？
ALICE　ライブで一緒に出てくるときに、アドリブでDJを触ってたんですけど、触ったら音が止まっちゃって（笑）。
――アドリブで壊すって、凄く恥ずかしいですね。
ALICE　アハハハハ！　いろいろおもしろいアクシデントがありましたよ。
――でも、そんなに猪木さんと意気統合しちゃったというのはやっぱりお二人とは何か運命的なものがあったんですかね？
ALICE　不思議ですよねえ。でも、その一番最初の沖縄のパーティで会ったときに、凄く私のことを気に入ってくれたんですよ。
――なるほどお。それは猪木さんがALICEさんを狙ってたということなんじゃないんですか？
ALICE　アハハハハ！　そういうのじゃなくて、ただ単に背の高い人が好きみたいで。で、SHUMが弟って知って「おまえも来い」みたいな感じになって。で、打ち上げのときも「隣に来い」って呼ばれて隣でしゃべってたんですよね。
――やっぱり狙われてたんですねえ。
ALICE　（聞かずに）ちなみに私たち、猪木さんと同じAB型なんですよ。だから、それで気が合ったんじゃないかなーって。
SHUM　そう。だから僕たちTRIPLE-ABだなって（笑）。
――むむっ！　ダジャレも猪木さん流というわけですね。
ALICE　（スルーして）前世でもつながってたんじゃないかなっていうくらい深いつながりがある気がしてるんですよ。あのー、『誕生日占い』って本、わかりますか？　辞書みたいに分厚い本があるですけど。

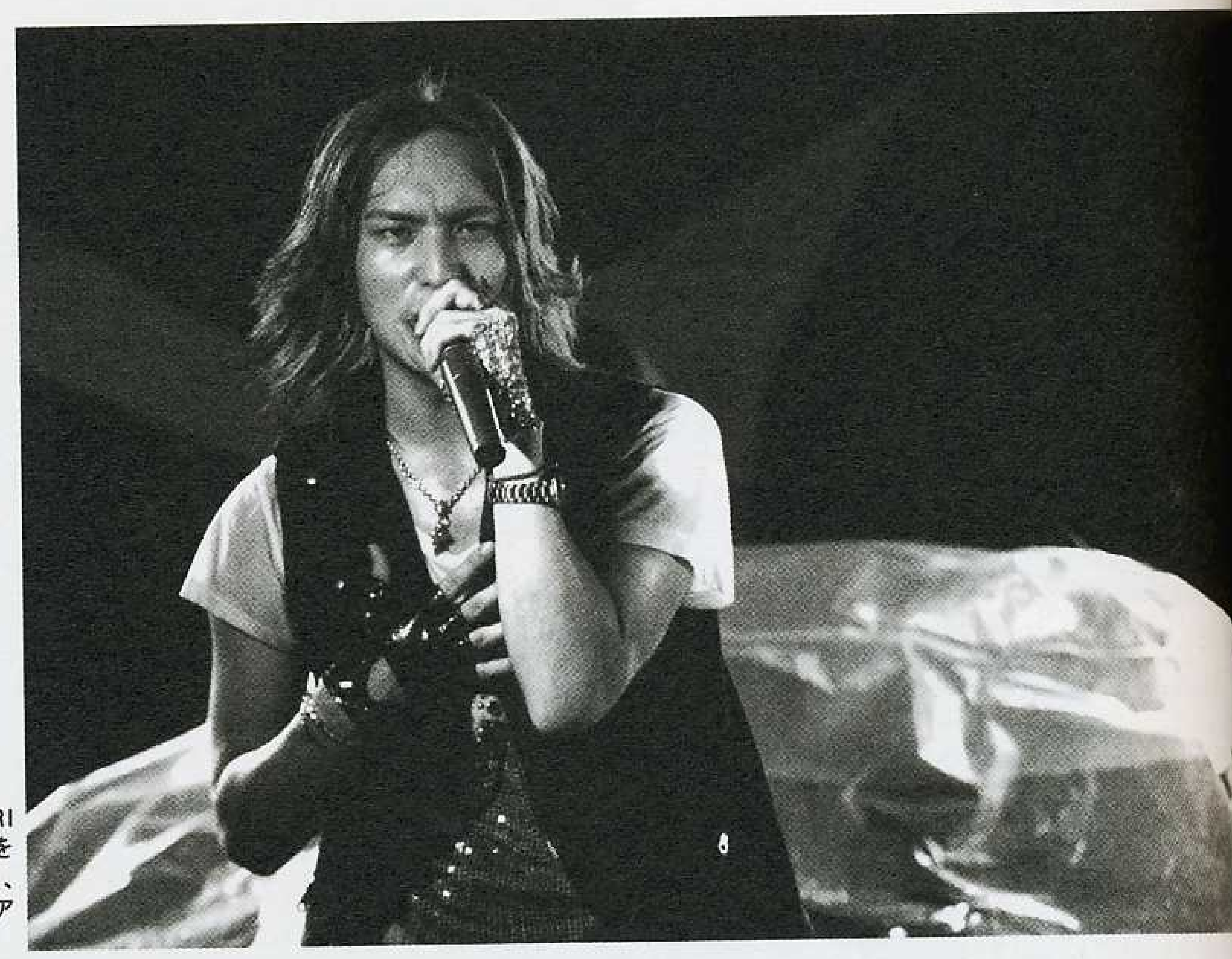


ありす■1986年11月18日、沖縄県出身。04年12月に結成されたTRIPLE-Pのメンバー。沖縄の猪木酒場でアントニオ猪木に極度に気に入られたことがきっかけで、その後シングルCD『道』でユニットを組むことに。またIGFではリングサイドなどでの写メ撮影がすさまじく、IGFの舞台裏はALICEのブログがどの専門誌よりも詳しいと定評がある。

ネクロ・ブッチャーさんはいつもモジモジしてかわいいんですよお

――ああ、見たことあります。365日を見開きずつ解説している誕生日占いの本ですよね。
ALICE　そうそう。あれは当たるって有名なんで持ってるんですけど、そこに恋人とか友だちとして相性のいい人の誕生日が載ってるんですけど、SHUMのところに私が載ってて、私のところに猪木さん載ってて、猪木さんのところにSHUMが載ってたんですよ。365日も誕生日あるのに、みんな入ってるんです！
――確かにそれは凄い。
ALICE　ですよね!!　それで凄いって盛り上がって。そういう神秘的な話も猪木さんとよくしますね。そういう占い系は猪木さんも好きらしくて。
――やっぱり猪木さんと出会ったことで、つながりも広がりました？
SHUM　それはあります。もともと僕は格闘技は大好きで、ALICEもね、けっこう好きだったんですけど、ちゃんとプロレスを観たことはなかったんですよ。でも猪木さんと出会ってプロレスが好きになっていって、毎回IGFにも参加させてもらってるんで、レスラーの方とお話しさせてもらったりして。
ALICE　選手の方がね、みんな優しい方ばかりなんですよ。澤田（敦士）さんも仲良しだし、ネクロ・ブッチャーさんもおもしろいですよね。
――あ、聞くところによると、ネクロ・ブッチャーさんはALICEさんのことが凄く好きなんだそうですね。
ALICE　なんで知ってるんですかあ？　アハハハハ！　でも試合のあとのアフターパーティでいつもお会いするんですけど、ホントに一緒に写真を撮るのも恥ずかしいらしくって、モジモジしてかわいいんですよお。
――ネ、ネクロ・ブッチャーがモジモジですか（笑）。
SHUM　ビールばっかり飲んでるしね。クックックック。
ALICE　水代わりにビールをバーッて飲んで（笑）。いい方ですよ。
SHUM　あとシウバ選手。ブラジルの大きい、身長が2メートル以上の選手がいるんですよ。
――モンターニャ・シウバですね。
ALICE　そうそう。モンターニャ選手はブラジルの道場に、私たちと一緒に写ってる写真を飾ってくれてるらしくって。あと曲とかも好きで『YouTube』で観てくれてるらしくって。私たちのDVDあげたら凄く喜んでくれて。
――皆さんお二人に凄く優しいですね。
ALICE　優しい！
SHUM　リングではね、激しく闘ってますけど、みんな心が優しいんだなって思って、なんかバックステージの様子が見られるっていうのは凄い大きい、しかも無料ですしね。
――確かに無料ですね（笑）。
SHUM　あとはボブ・サップさんと仲良くさせてもらってて。
ALICE　そうそう。去年、猪木さんと

4人で『サマーソニック』に出たんですよ。
――また凄いメンバーですね。
SHUM　僕の夢が『サマーソニック』に出ることだったんで、猪木さんと出られるなんて、本当うれしかったんですよ。
ALICE　ボブ・サップさんは急に前日に出るって決まって、リハーサルも何もなしで本人は本番前に初めて曲を聴かされたみたいなんですけどね（笑）。
――いきなりすぎますよ！（笑）。ボブ・サップも何か歌ったりしたんですか？
ALICE　いや、ボブ・サップさんはダンスでメインで盛り上げてくれて、Tシャツを破いて客席に投げてました。
SHUM　投げたのはいいんですけど客席に届いてなかったんですよね。それをサイモンさんが一生懸命拾って楽屋に持って帰ってました。アハハハハ！
――サイモンさんもたいへんですねえ。そして、ALICEさんのブログを見ると、小川（直也）選手までノリノリで一緒に写真を撮られてました。
ALICE　ああ、小川選手もおもしろくっていい方でした！
SHUM　一度、楽屋が一緒になったんですよ。で、試合前だとしゃべっちゃいけないオーラ出てるじゃないですか。
ALICE　ね。けっこう気を使って黙ってたんですけど、逆に小川選手がしゃべってきてくれて。
SHUM　試合では「オラー！」とか言ってるじゃないですか。でも楽屋では「俺は『ファインディング・ニモ』が好きなんだ」とか言って（笑）。アハハハハ！
――小川さんがそんなことを！
ALICE　試合終わって打ち上げにも小川選手来てくれたんですけど、ファンがいっぱい追いかけてきてたんですよ。もう動物園状態で。あのときは凄かったですね。
SHUM　でもIGFといえば、やっぱり僕は一回目のIGFが一番覚えてますね。なんか凄く高いところに登らされて歌ったんですよ。
ALICE　落ちたら死ぬっていうところで歌わされたんです（笑）。本当に一歩踏み外したら、とんでもないって感じで。もうジェットコースターの頂上で歌ってるぐらいのステージだったんですよ。「落ちないでね～」って言われてリハーサルした記憶があります。


しゅん■1989年2月8日、沖縄県出身。ALICEの弟であり、同じくTRIPLE-Pのメンバー。アントニオ猪木とはサメやワニが潜むパラオの海を素っ裸で泳いだ経験も。『道』の名フレーズ「歩く神様」は、何を隠そう、このSHUMが生み出した歌詞であり、名作詞家としても腕を鳴らすアーティストである。

50周年のなかで出会えて凄くうれしい気持ちでいっぱいです

――あと、たびたびお二人は解説席にも座られてますよね？
SHUM　ああ、あんときのALICEのコメントがね「痛そー」だったよね（笑）。
ALICE　しかもあれだけ近いと血とか飛んでくるんですよ。でも写メもバシバシ撮ったんですよ！
SHUM　一番近い場所で撮れますから。だから猪木さんのファンの方も僕たちのブログを見ていただいて、ALICEのブログが一番更新が早いから。
――確かに、凄い更新頻度ですもんね。
ALICE　ありがとうございます。裏の様子とかも見れるのでおもしろいと言ってくれるんですよ。でも、どれもこれも本当に猪木さんのおかげなんですよ。
――そんな猪木さんがこのたびデビュー50周年を迎えられますね。
SHUM　本当に50周年おめでとうございます。50周年って長いようで短い、短いようで長い……って言いたかっただけなんですけど。アッハッハッハ！（爆笑）。
――なんか、しゃべり方も猪木さんに似てきてますよ。
SHUM　でも、長く続けられる人ほど偉大だなって思いますので、これからも元気な猪木さんでいてほしいですね。
ALICE　私も50周年のなかで猪木さんに出会えて凄くうれしいという気持ちでいっぱいで、いつか恩返しをしたいなと思っているので。なのでテレビとかに出れる日を楽しみに待っているので、頑張りたいと思います。
――近々また猪木さんとお会いになる機会はあるんですか？
SHUM　来月に会いますね、IGFで。
――パラオに行く計画も？
SHUM　とりあえず猪木さんは毎年行ってますよね。タイミングが合わなくて、僕たちも行けないときがあるんですけど。
ALICE　誘ってはいただいてるんですよ。
SHUM　だから同級生と行ってるみたいですよ、猪木さん。
――そうなんですか（笑）。
ALICE　でも、また行きたいですね。よかったら一緒に行きませんか？
――えっ!?　私も行っていいんですか？
SHUM　たぶんいいと思いますよ（アッサリ）。一応、猪木さんに聞いてみますね！
――あ、ありがとうございます（笑）。では、次回はパラオでお会いしましょう！　ということで。
ALICE　アハハハハ！　それおもしろそー！

【10年8月1日／電話取材にて収録】



俺こそが、猪木イズム最後の継承者だ！

自称・アントンの〝ファイナルスチューデント〟

澤田敦士

アントン特集ラストを飾るのはやっぱりこの男！自称・猪木の〝ファイナルスチューデント〟澤田敦士である。門前払いを恐れず、新日本プロレスやノアにどんどん挑戦状を叩きつける澤田の姿はまさに猪木イズムそのもの（？）。とにかくこの男の魂の叫びを聞いてみようではないか！

聞き手／松下ミワ　構成／永久電機調査委員会　撮影／堀江ガンツ

マット界よ！澤田敦士から逃げるな！

――いまや『東京スポーツ』プロレス欄の

プロレスも闘ってくれませんよぉぉ！

経験も少ないいんでね。

わかんないっす。

日本の団体に闘いを求めにいっても誰も闘ってくれないこの現状！

――いまや『東京スポーツ』プロレス欄のエース的存在に登りつめた澤田選手は、今年の6月からはしばらく海外遠征に行っていらっしゃったんですよね？

澤田　今回が2回目の遠征でしたね。

――そしてNWAヘリテージ王座を獲って帰っていらっしゃったということなんですが、手応えのほうはいかがでした？

澤田　……いやその前に、正直なぜ今回海外遠征に行ったかという話ですよ!!（ドンッ）。

――どうされたんですか。

澤田　いま日本の団体に闘いを求めにいっても、誰一人と闘ってくれないこの現状！

――冒頭から辛口ですね。みんな澤田選手から逃げてますか？

澤田　辛口も何も、そんな日本のプロレス界に嫌気がさしたんですよ！　だったらグローバルに、ワールドワイドに闘っていくしかない、と。だからこそ去年に続いて闘いの場と求めてアメリカに行ったわけです。

――補足すると、澤田さんは新日本プロレスやノアといった団体の会場や事務所に自ら足を運んで、ある意味襲撃ようなかたちで挑戦を表明されているという状況があるんですよね。でも、そういった団体は全然相手にしてくれない、と。

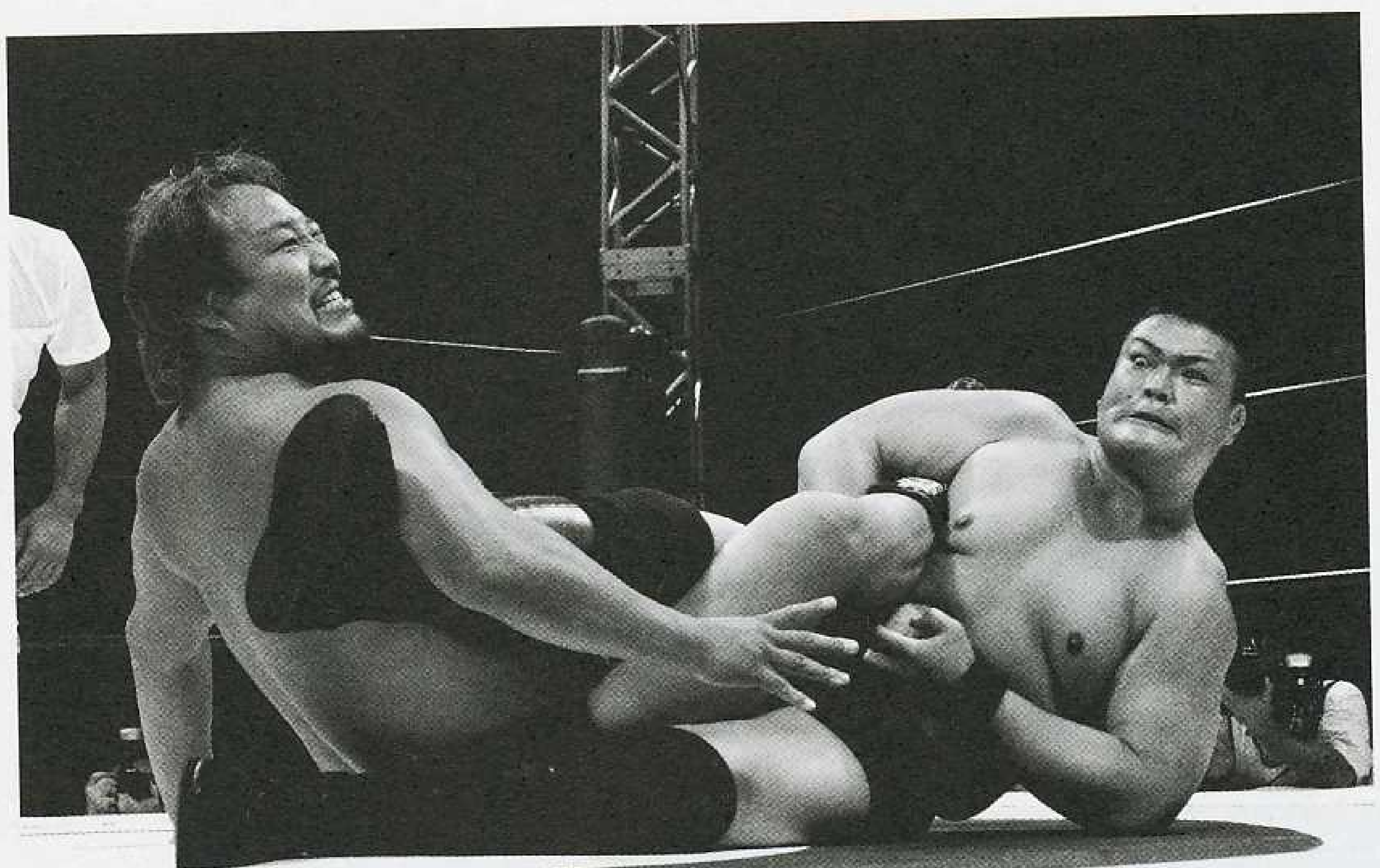
澤田　……闘えないんでしょうね、みんなボクを恐れて（しみじみと）。「団体がどうのこうの～」って訳のわかんないことばっかり言って。でもそんなの関係ないじゃないですか。「いつ何時、誰の挑戦でも受ける」という言葉は新日本プロレスで猪木さんが提唱したものであるにもかかわらず、その新日本でさえ……。王道プロレスから派生した、いまは亡き三沢プロレスも闘ってくれませんよぉぉ！

――なぜ闘ってくれないと思いますか？

澤田　なんでしょうかねぇ。向こうからしたら俺に「何がしたいんだ!?」って言うかもしれないですけど、俺は闘いたいだけだって。だったら海外に行こうって。かといって、まだまだ僕は日本の強いヤツらに対して追っかけていきますけどね。

――執念深いんですね。

澤田　そうですよ！　実際、俺は世界最強のジョシュ・バーネットとかとも闘ってきたんでね！　だから今回海外に行ったのは本場のプロレスを学ばないといけないという思いもあったんですよ。試合数、経験も少ないんでね。



殺気みなぎるこの顔を見よ！ 本人いわく「作ってるつもりは全然ないんですよ。その時々の自然な表情なんです」とのこと。それならば、表情だけでこんなにも魅せる才能を持ったプロレスラーは澤田と永田さんぐらいであろう。

――ただ今回はNWAヘリテージ王座のベルトを日本に持って帰ってこられて大健闘でした。

澤田　いやいや。結局、最初はNWAという団体に上がっててプロモーターに最初はどうしようもない弱いヤツばかり当てられてたんで「もっとまともなヤツ連れてこい！」と言ってやったんですよ。

――言ってやりましたか。

澤田　「仮にも俺はIGFでエースを張ってた男なんだぞ、俺はイノキのスチューデントなんだ、ファイナルスチューデントだ！」と言ったわけです。

――ファイナルスチューデント！　いい言葉ですね。

澤田　そしたら「ナイス！　ナイス！」って。「じゃ、タイトルマッチ組むよ」って言われてベルトを獲ったという感じですね。

――そんな簡単に澤田選手の要望が通ったんですね。

澤田　だって、いままでのプロレスラーと同じことやってたら同じことの繰り返しじゃないですか。いまの現役のヤツらは正直元気のないヤツらばっかりですから。そいつらと同じことしてもそれ以下にしかならないんでね。

――ちなみに……たいへん恐縮なんですが、NWAヘリテージ王座というのはNWAのなかでどういった位置づけのベルトになるんでしょうか？

澤田　ヘリテージですか？　なんすかね。わかんないっす。

――わかんないっすか。

澤田　ヘリテージって「遺産」って意味ですよね？　まあNWAの管轄ですから、そのベルトを向こうの人から「おまえに託した」って言われたわけですからね。

――遺産を託されましたか。

澤田　ただね、ベルトは凄くないんですよ。獲った人が凄いんです！

――そんな澤田選手からすると、いまの日本プロレス界の現状はやはりのれんに腕押し的な感じになっちゃいますね。

澤田　……だから僕もなんかバカバカしいのかなって。でも人生ムダはないなというふうに思ってたんで、何かしらこれから返ってくるんじゃないかなとは思いますね。ただ俺がもどかしいくらいなんで、猪木さんなんかはもっとものたりないと思ってると思いますよ。

――そういう考え方は、やはり澤田さんが猪木さんや小川さんの近くにいるから生まれてくるものなんでしょうか？

澤田　うーん、どうですかねぇ。でもやっぱり人間って挑戦するために生きてるわけじゃないですか。だったら猪木さんが常に言ってるように「一歩踏み出す勇気」が必要なんですよ。来月で3年目、それでプロレスというものが恐縮ですけどなんとなくわかってきたんじゃないかな、と。

――デビュー3年目で早くも！

澤田　まあ、わかったと言ったら失礼ですけどね。でも、やっぱり猪木さんは世間と闘ってたじゃないですか。北朝鮮で興行を

やったり、イラクで人質解放とかね。猪木さんは本当に大きな人間なんだなって近くにいて感じますよね。一緒にWWEの殿堂入り式典に行ったときに時間がないって言って飛行機止めてましたし（笑）。

——そんなことがあったんですか？

澤田　「間に合わないですよ！」って言って僕らはバーっと走ったんですけど、猪木さんゆうゆうと歩いて「乗れなかったら、今日は泊まればいいんだ」って。

——そういえば、そのWWEのアントニオ猪木殿堂入り会見のときに澤田さんの姿がチラチラと映ってて凄く目立ってたらしいですね。

澤田　僕も胸張って歩いてましたからね（笑）。あえて猪木会長のうしろを歩いてたんですよ。

——猪木さんのそばにいるということは、海外の関係者も「日本のトップレスラーなんだな」って目で見てたでしょうね。

澤田　フフフ、いかにこの顔と名前を知らしめるか。それしか考えてないですよ。

——いい意味で猪木さんを利用しているというか。

澤田　あ、でも猪木さんが言うんですよ。「おまえ、デカくなるなら俺をどんどん利用しろ」って。そのWWEの会場に来てた人たちは本当に凄かったですよ。そのなかでも猪木さんはVIP扱いでしたからねえ。

——いや、猪木さんはもちろんですけど、師匠である小川直也さんや石井慧さんら、澤田さんの周りには本当に凄い人たちがたくさんいます。

澤田　ありがたいことに人との付き合いだけでここまで来たって自負してるんですよ。

——いやいや、そんなご謙遜を。

澤田　アメリカ遠征に行ったときにも、サイモン・イノキさんにお世話になったんですけど、その関係でロン・バードという超能力者に会ったんですよね。

——あ、もしかしてマイク・タイソンの代理人をやってて伝説のイベント『LEGEND』で急きょ実現したチャイナvs中村千香戦で中村選手のセコンドについていた超能力者の方ですか！

澤田　あ、そうなんですか。ロン・バートは猪木さんともテレビ出てるし。その人は僕の顔見ただけで家の間取りとか全部わかるんですよ。僕の過去も現在も全部当てられる人がいるんですよ。

——どんなこと当てられてたんですか？

澤田　過去は「3歳のときに水難事故に遭ったな」って。で、「マザーとファーザーはいまこんな仕事をしてるだろう」とか全部当てられて。その人に言われたのが「おまえは守られてる」と。「人との付き合いでのし上がっていくんだ」って言われましたね。

——ほう。それは当たってそうですね。

澤田　だから僕は運がいいのかなって思いますね。石井にしても、僕がロサンゼルスにいるって言ったら、その1週間後くらいかな？　「先輩、僕も行きます」って言って本当に次の日来たんですよ。その関係で一緒にリョート・マチダとか、アンデウソンとかと練習しましたね。

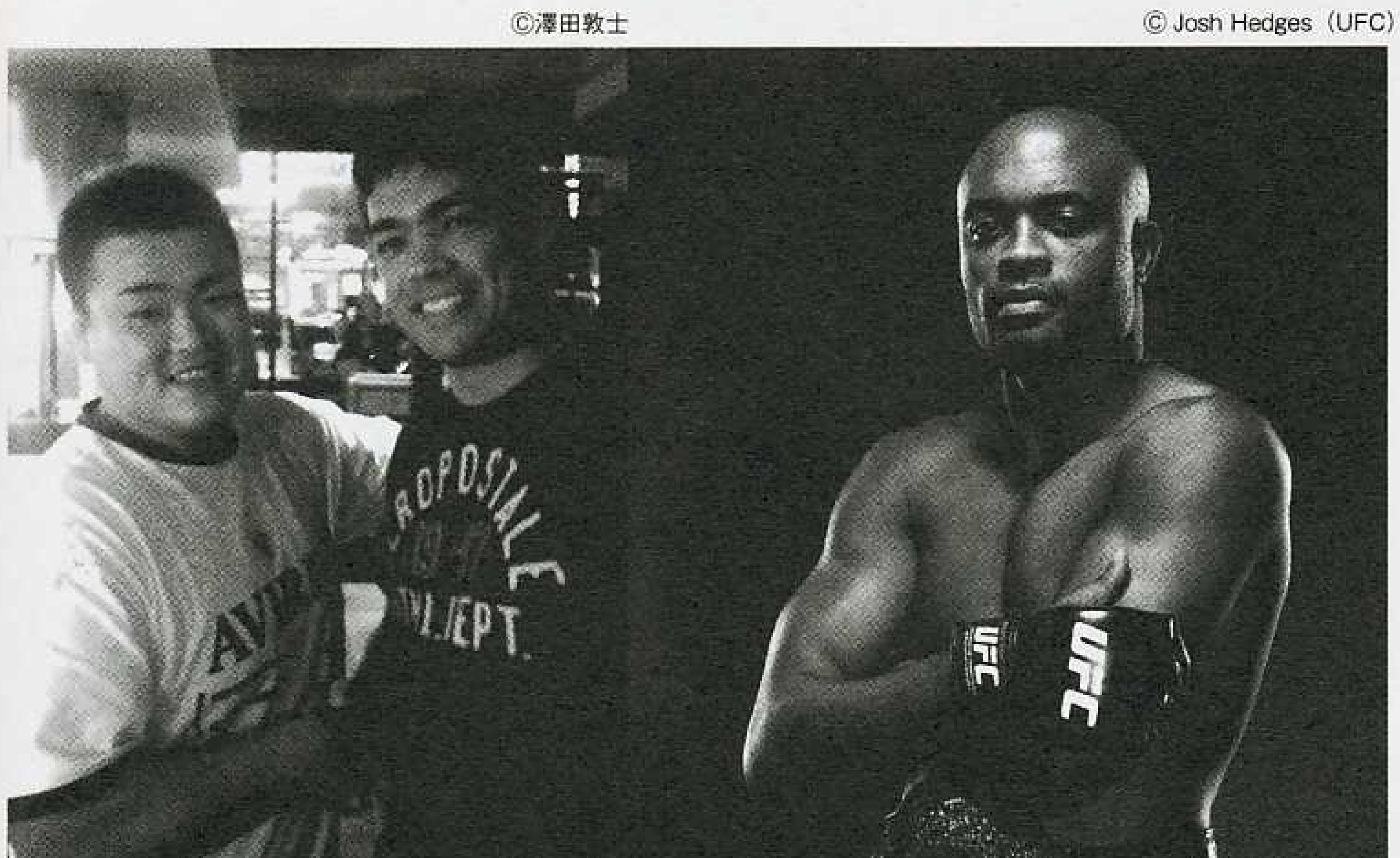
——ほほう、澤田さんがアンデウソンと。

澤田　ええ。いいヤツでしたよ。写真見ます？　（ケータイを突き出して）ほら！

——ちゃんと映ってますね。ちなみにアンデウソンとはどんな練習をするんですか？

澤田　そりゃあスパーリングですよ、総合の。おかげでアンデウソンともすぐ仲

©澤田敦士　　© Josh Hedges（UFC）



アントニオ猪木をはじめ、小川直也、石井慧など、本当に澤田はド凄い人物とめぐり会う才能を持っている。UFCのトップファイターであるアンデウソンやリョートとも親交を深める澤田がダナ・ホワイトとツーカーの仲になる日もそう遠くはないかもしれない。くれぐれも「ジョークだ!」と言われないことを祈る!

ありがたいことに人との付き合いだけでここまで来たって自負しているんですよ

良くなっちゃいましたよ。で、「新日本プロレスを一緒に倒そう！」って言ったら、「オーケー！　ノープログレム!!」とか言ってましたからね。

——いずれアンデウソンvs真壁刀義が実現するわけですね。

澤田　あと、リョートにはいまの新日本プロレスの現状を話したんですよ。そしたら「ハッハッハ！　そんなんなっちゃたのか。中邑なんかも全然闘えないのか？」って。リョートさんもあきれてましたね。リョートとも写真撮りましたよ。（ケータイを突き出して）ほら！

——これもしっかり写ってますね。

澤田　でも、まあ僕はあきらめてないですけどね。あれだけ猪木さんのことを挑発しといて、結局自分で引っ込んじゃってね。

——一時期、中邑選手は猪木さんのことを凄く挑発していましたけど、結局対決というかたちにはならなかったんでしたよね。

澤田　相手は僕に対して「あいつは何がしたいんだ？」と言ってるらしいですけど、逆におまえに返してやるよって感じですよ。それはやっぱりファンは求めてるんだから、僕がこの前大阪に乱入したときにファンはコールを送りますからね。帰れコールとか腰ぬけコールだとか言いますけど、それは僕に対しての期待だとしか受け止めてないですから。それなのにアイツらは……。猪木さんじゃないけど天下を獲る気ないのかって話ですよ！

——やはりお話をうかがっていると、どうしてもそっちのお話になっちゃいますねえ。

澤田　ああ、ホントですね。あと、……トリプルエイチだっけ？　って知ってます？

——HHHはもちろん知ってますよ。

澤田　HHHとも写真撮ったんですよ。（ケータイを突き出して）ほらほら！

——澤田さんはけっこう撮りますねぇ。

澤田　ええ。HHHはね『レッスルマニア』のときに凄くよくしてくれて。部屋が

澤田敦士

沈没船の引き上げに「ぜひお供させてください」って言ったんですけどね

隣だったんですよ。これもすべて猪木さんのおかげですよ。

――澤田さんは猪木さんと一緒にいる時間が凄く長いと思うんですけど、普段の猪木さんってどうなんですか？

澤田　う～ん。猪木会長の催眠術が凄いというのは思いますけどね。

――猪木さんは伝説の発明王、政木和三氏に催眠術を習ったという話がありますね。

澤田　これは本当なんですよ。だって僕かかったんですもん。「ちょっとおまえ立ってみろ」って言われて、で、猪木さんがクッってやるんですよ。そのとき僕、ボコンッて倒れたんですよ。これ本当なんです！

――さすが猪木さんです！

澤田　そうです、そうです。もっと凄いのが、テキーラが入ったグラスが二つあったんです。そのうち一つに手を当ててグーッってやるんですよ。飲み比べると、手をかざしたほうが味がマイルドになってるんですよね！

――凄い（笑）。

澤田　「会長、これはじめから違うんじゃないですか？」って言ったら、「じゃ店員に聞いてこい」なんて言われて。でも店員も「同じものを入れました」。

――へえ～。ミステリアスですね。

澤田　だから「歩く神様」というのも、あながち間違いではないですよね（しみじみと）。このあいだなんか、キューバの財宝ですっけ？

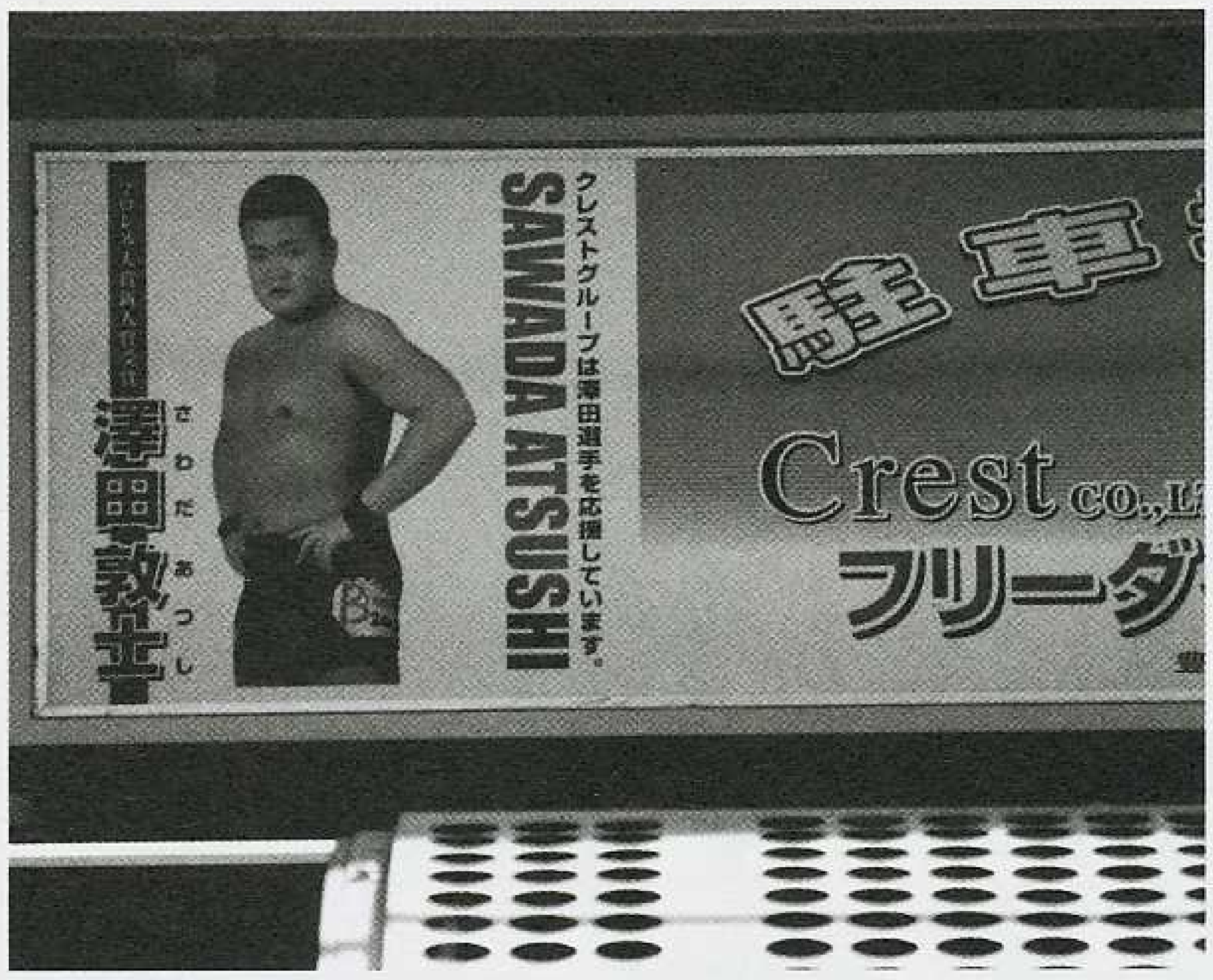
――キューバのカストロ議長からプレゼントされた小島、イスラ・アミーゴ・デ・イノキですね。1000億円相当の銀貨が眠ってるとか。

澤田　そこから「沈没船を引き上げるというプロジェクトがあるから」って言ってましたから。だから僕も「ぜひお供させてください」って言ったんですけどね。

――そう言える澤田さんも凄いです！

澤田　それが社会ってもんじゃないですか？　だけど、サイモンさんが言ってましたけど、WWE殿堂入り式典のときに凄く困ったって。リハーサルと全然違うこと言ってたから、通訳したサイモンさんは大変だったって言ってましたよ。

――猪木さんはどんなことを言われたんですか？



さわだ・あつし■1983年8月20日、北海道出身。小学校1年生より柔道を始め、中学校から講堂学舎に入門。世田谷学園で高校日本一となり、大学1年生で全日本ジュニア柔道選手権で優勝。その後、小川直也のもとでプロレス活動を開始。07年9月、IGFでデビュー。今年NWAヘリテージ王座に君臨し、ますます調子に乗りまくるマット界のある意味エース的存在。180cm、95kg。

澤田　いや、リハーサルのときは普通のことを言ってたらしいんですけど、本番ではいきなり「南極で興行やるから力を貸してくれ」とか言ったらしいですね。

――WWEの式典で（笑）。そういえば、噂になっている中国の興行はどこまで本当なんですか？

澤田　あれも凄いですよね。投資家集めてもうサインしましたから年内にはやるんじゃないですか？　そのとき僕もIGFのエースとしてやっていかないとって思ってるんでね。

――IGFのエースは澤田さんですもんね。でも、澤田さんも凄い人生ですね。柔道時代は猪木さんとこんな関係になるとは思ってもみなかったんじゃないですか？

澤田　ないと思ってました。プロレス入って小川さんは猪木さんの愛弟子だったじゃないですか。ひょっとしたらこれ俺近づけるんじゃないかなって。そういう勘が働いたんですよ。

――これはおいしい、と。

澤田　はい（笑）。でも本当にIGFでデビューするときに小川さんが猪木さんにあいさつさせてくれて。そのときはオーラがあって近寄れない感じでしたけどね。ま、いまでも睨まれると動けないんですよ。この前僕誕生日だったんで、六本木のとある店で猪木さんと会ったときに「僕、誕生日なんです！」って言ったら、「おおー、おまえ誕生日か……」ってクッて睨まれて、「……す、すいません、なんでもないっす」って感じで（笑）。

――誕生日を主張するなんて、澤田さんも勇気があります。

澤田　ヘビに睨まれたカエルですよ。だからNWAのベルトの報告も結局できなかったんですよね。

――でも、お話をうかがっていると、猪木さんも澤田さんのようなお弟子さんがいてうれしいでしょうね。

澤田　結局ね、普通が嫌だったんです。みんな柔道やってる人は公務員やって会社員やって、30半ばすぎたら柔道引退して普通の仕事戻って。それは俺には向いてないなって。人と同じことやってもダメだなって。だったら最初は苦しくてもそうやって自分のやりたい道に行きたいなと思ってプロレスに行ったわけです。

――じゃあ、そのときから闘魂が染みついてた、と。

澤田　フフフ、親に感謝ですよ。だから必要とされれば出るし、そこに闘いがあるなら自分からいくし、それだけですよ。僕はリングにこだわりはないんで。たとえ本当に小さな田舎の田んぼの真ん中にあるようなリングでも闘いがあるならば全然やりますし。猪木さんみたいに金なんかあとからついてくるから、そんなの全然気にしてないし。

――気にならないんですか、お金のことは？


澤田　そんなのは二の次ですからね。夢を追いかけるのが人間のロマンであってレスラーのロマンですから、それがプロですよ。

――カッコいいです！　よっ、澤田敦士！

澤田　いえいえ。これからのプロレス界変えていかないといけないし、俺が背負っていくぞ！　って、そういう気持ち満々なんでね。新日本にもノアにもまだまだ乗り込んでいきますから！

――財宝船引き上げもよろしくお願いします！

【10年7月23日／都内・秋葉原某所にて収録】



被写体としてのアントニオ猪木

原 悦生

［スポーツフォトグラファー］

アントニオ猪木といえば、プロレスラーのなかでも飛び抜けて
“絵になる男”。そんな猪木を40年近くにわたって撮り続けてきたのが
スポーツフォトグラファーの原悦生さん。
今回の特集でも多くの写真を提供していただいた原さんに、
被写体としての猪木の魅力について語ってもらった。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／原 悦生

猪木とマラドーナの持つ被写体としての意外性に惹かれますね

―原さんはどういったきっかけでプロレスの写真を撮られるようになったんですか？

原　高校生のときに猪木が新日本プロレスを旗揚げして、そのオープニングシリーズの水戸大会を観に行ったんですよ。そこから撮り始めたんです。

―え!?　単に観戦に行った高校生がですか？

原　そう、いきなりリングサイドで（笑）。「リングサイドで写真撮りたいんですけど」って関係者の人に言ったら、「気をつけて撮ってね」みたいに言われて。

―いい時代ですね（笑）。その頃からプロのスポーツフォトグラファーになるつもりだったんですか？

原　写真自体は高校のときから本格的に撮り始めたんですけど、当初はいろんなものを撮っていて、そのなかの一つがプロレスだったんです。でも、一つ転機があって、大学生のときに猪木vsアリ戦があったんですよね。これは撮りたいなって思って。

―歴史に残る一戦ですからね、それを写真に残しておこう、と。

原　さすがにアリ戦はリングサイドじゃ撮らせてもらえないから、客席から撮ったんですけど。2階席から写真を撮るのってけっこう難しいから、アリ戦の前に何回かプロレス観戦に行って、2階席から写真を撮る練習をしましたよ。鶴田vsテリー・ファンクとかね（笑）。

―それが〝練習試合〟でしたか（笑）。

原　で、アリ戦の次の年から本格的に撮りたくなって、新日本プロレスに行って「写真を撮りたいんですけど」って言ったら、リングサイドで撮らせてもらえるようになったんですよ。

―まだ、プロになってるわけじゃないんですよね？

原　うん。でも、腕章とかリボンを貸してくれましたよ（笑）。

―いい時代ですね。プロレスの写真が仕事になり始めたのはいつからなんですか？

原　最初に媒体に載ったのは、大学3年のときだったかな。『東スポ』のカラー版というのがあって、当時、藤波がメキシコ遠征に行ったとき、僕もメキシコを旅行してそれを撮影して、『東スポ』に載せてもらったんです。それがプロレスの写真で初めてギャラが出た試合かな。

―デビューはメキシコでの試合でしたか。

原　そのあと『スポーツニッポン』に入社したんですよ。でも、当時の朝刊スポーツ新聞でプロレスを扱ってるのは『デイリー』だけだったんで、あくまで個人的に休みを取って、プロレスの写真を撮りに行ってたんですよね。



「どこから撮ってもアントニオ猪木」というように、原さんはあえてリングサイドではなく、2階席などから撮影することも多いという。写真は両国国技館の2階上段、しかも角からのショット。猪木が会場の隅々にまで自分を届けているからこそ絵になるのだろう

―それほど新日本プロレスにハマッていた、と。

原　新日本というか、猪木さんから。もちろん藤波辰巳、長州力、タイガーマスクと、魅力ある被写体がたくさんいましたよね。

―原さんが考える被写体としての猪木さんの魅力とはなんですか？

原　意外性（キッパリ）。

―意外性ですか。

原　いつも同じようにやってるように見えるけど、サービス精神旺盛で、いつも何かを考えてるから「やられたな」って思うんですよ。

―シン、ハンセン、長州、ラッシャーとか何度もやってますけど、一つ一つ違いますもんね。では、70年代で印象に残ってる試合はなんですか？

原　70年代だとボブ・バックランドとフルタイムやった試合。これは60分間、いろんな猪木が観られたことですね。また逆に短い試合のグレート・アントニオ戦も印象に残っています。

―猪木の狂気が爆発した試合ですよね。

原　あと、どの試合ということじゃないけど、血が出てるアントニオ猪木のほうが野性味があっていいですよね。ただ血が出てるわけじゃなくて、血の量以上にアドレナリンが出てるのが伝わるんですよ。

―80年代以降の猪木さんはどうですか？

原　もちろん70年代に比べて体力的に衰えてきてるんだけど、その衰えをさらけ出し、武器にし始めた猪木のほうが、僕はどっちかというと魅力的でしたね。

―あ、そうなんですか。

原　そこからいろんなことをやり始め、巌流島があったり、これまでやらなかったことをやりましたから。

―原さんは北朝鮮にも行かれてるんですよね？

原　そうですね。金日成スタジアムは凄かったですよ。発表で19万人、実数でも15万人は間違いなくいましたから。私はブラジルのマラカナンとか10万人規模のスタジアムもサッカーで取材してますけど、一番大きかったですね。

―そのなかで猪木vsフレアー戦を観て。

原　あれが私のなかでは猪木の二回目の引退試合だと思ってますね。

―一回目はなんですか？

原　私のなかでは負けた（ショータ・）チョチョシビリ戦。

―初めてのドーム大会での試合ですね。

原　あれは負け方が猪木らしく、猪木が凝縮された試合だと思います。ノーロープという特殊な状況を作って、腕をケガしているなか、相手にではなく柔道着に噛みついて闘うという発想。どこまで考えていて、どこまでがアドリブかわからない。そんな猪木が凝縮されていたと思います。

―それが冒頭に言われていた「意外性」でもあるわけですね。

原　だから、高校時代に最初の被写体に選んだレスラーがアントニオ猪木じゃなかったら、アリ戦も撮らなかっただろうし、その後、プロレスの写真を撮り続けることもなかったんじゃないかと思います。私はサッカーも撮ってるんですけど、本格的にサッカーを撮り始めたのはマラドーナを撮ってからなんですよ。マラドーナと猪木を追い続けていたというのは、やはり二人とも被写体としてスキャンダル性があって、そこに惹かれたのかなって思いますね。

―その二人の共通点というのは、なんとなくわかりますね。まさに「一寸先はハプニング」というか（笑）。

原　どっちも奇想天外。このあいだのワールドカップでも、やっぱり選手よりも監督のマラドーナを見ちゃうんですよ。アントニオ猪木にもそういう部分があるし、それだけの魅力があるんでしょうね。プロレスラーでいえば、ジャイアント馬場さんも被写体として魅力的ではあるんですよ。でも、アントニオ猪木のように、フォトグラファーを過激に興奮させるような被写体ではなかったんですよね。

―やっぱり猪木さんには事件性がありますもんね。

原　そう。スキャンダルの匂いがないとおもしろくないですからね。あと、猪木さんはどこから撮っても「アントニオ猪木」なんです。うしろから撮っても、服を着ていても顔が見えなくても「アントニオ猪木」なんですよ。だから30年以上撮り続けてるのに飽きないんでしょうね（笑）。

【10年8月23日／都内・某喫茶店にて収録】

1976年12月12日、新日本プロレスのパ
キスタン遠征において、アントニオ猪木は現

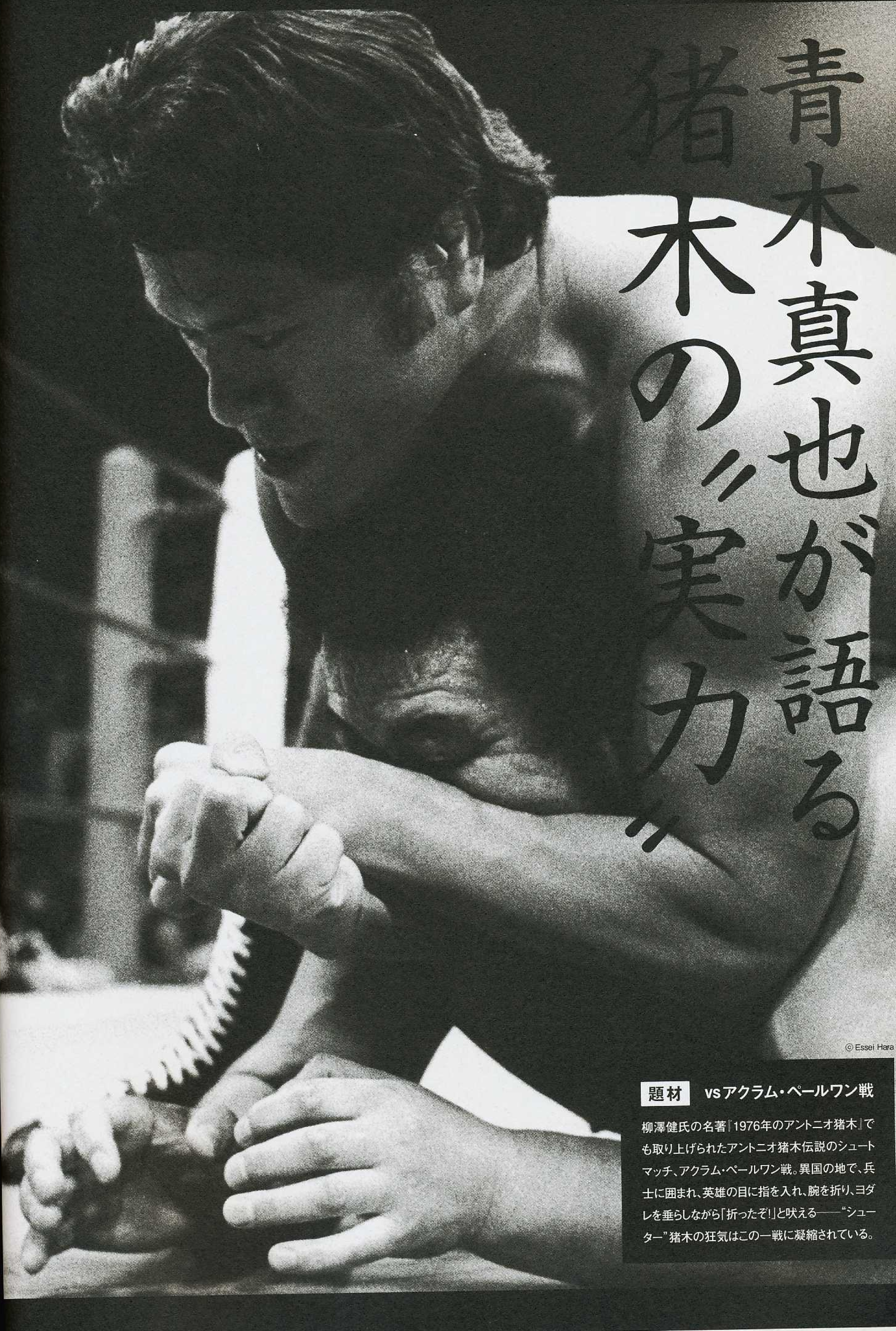
青木　なるほど。でも、そうなったらやるし
かないでしょうね。やらなきゃやられるわけ

ないですけど、動きを見るかぎり使う気配は
ないですね。あとは三角絞めがあるかどうか。

――しかし、ちょっと観ただけでよくわかる
もんですね（笑）。

せてない。あれはバックを取らせてないん
ですよ、桜庭さんのなかで。

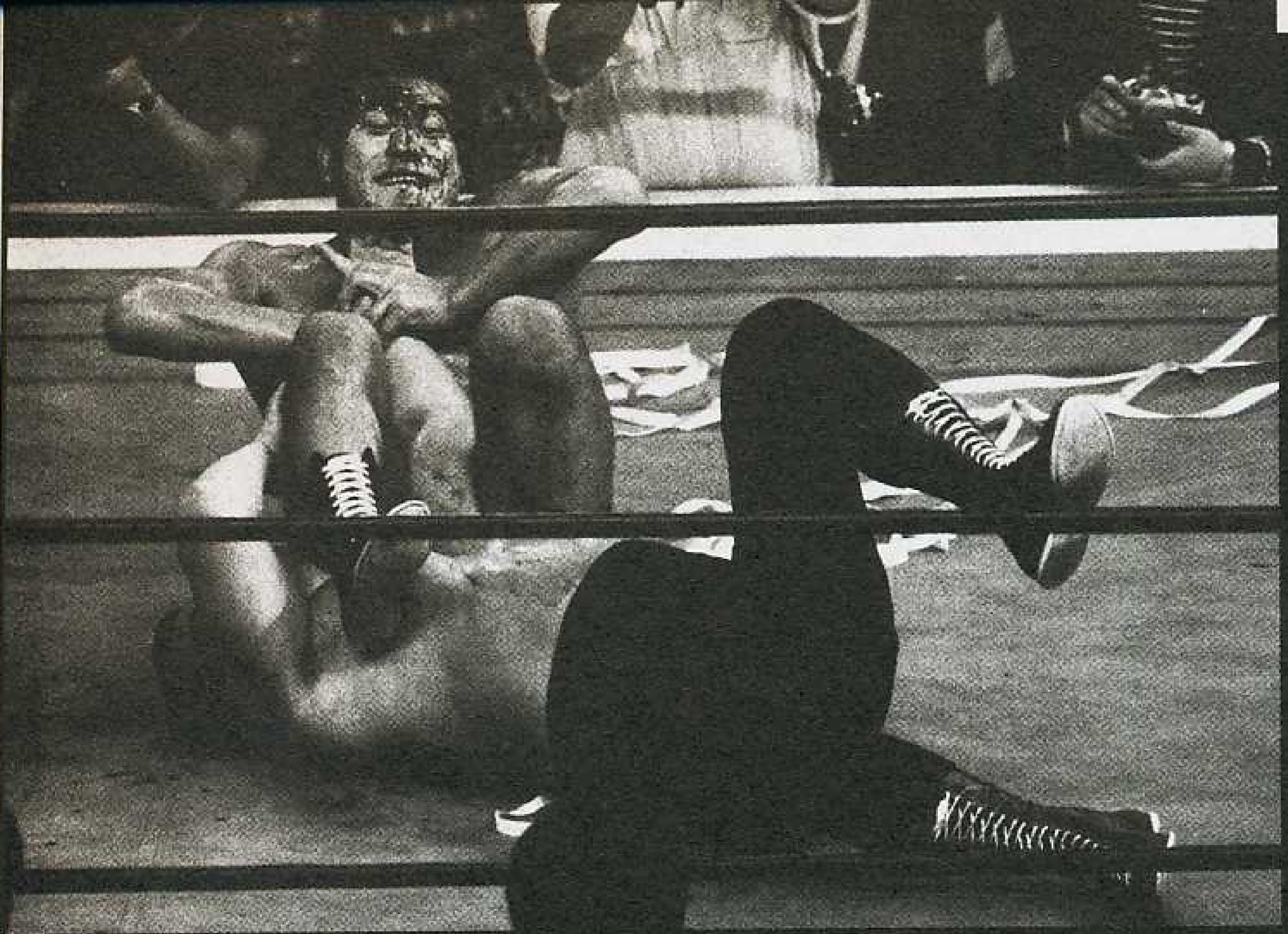
青木真也が語る猪木の〝実力〟



© Essei Hara

題材　vsアクラム・ペールワン戦

柳澤健氏の名著『1976年のアントニオ猪木』でも取り上げられたアントニオ猪木伝説のシュートマッチ、アクラム・ペールワン戦。異国の地で、兵士に囲まれ、英雄の目に指を入れ、腕を折り、ヨダレを垂らしながら「折ったぞ!」と吠える――〝シューター〟猪木の狂気はこの一戦に凝縮されている。


猪木の動きを見た奇才・青木真也はストロングスタイルの特色を言い当てていく。青木いわく「アントニオ猪木はパワーファイターの部類に入る」そうだ。

１９７６年12月12日、新日本プロレスのパキスタン遠征においてアントニオ猪木は現地の英雄アクラム・ペールワンと対戦した。当初はプロレスの試合として行なわれるはずが、ペールワン陣営は真剣勝負を要求。やむなくリングに上がった猪木は息詰まる攻防の末、アームロックでペールワンの腕を脱臼させた。いわゆる〝猪木腕折り事件〟である。

今回の取材では〝狂気の腕折り魔〟青木真也に、このシュートマッチの映像を観ながら、猪木の実力に迫ってみた。

――青木さんは「アントニオ猪木vsアクラム・ペールワン」の話を耳にしたことはありますか？

青木　あります。

――かなり特殊なシチュエーションで行なわれたんです。簡単に説明すると、プロレスの試合をやるという前提で会場入りしたら、相手側の要求でガチンコをやらなきゃいけなくなった。

青木　なるほど。でも、そうなったらやるしかないでしょうね。やらなきゃやられるわけですから。相手がやる気ならボクも覚悟は決まりますね。「わかった。俺もやる！」って。

――なるほど（笑）。試合映像を観ながら思ったことをしゃべっていただきたいんですけど。

青木　猪木さんはなんの技で折るんですか？　十字？

――アームロックですね。

青木　（映像を観ながら）……猪木さんは相手にバックを取られてからのサクラバ（バックを取らせてからのアームロックの名称）が多いですね。

――それはどうして多くなるんですか？

青木　単純にバックを取られることが怖くない。寝技としては正直、そんなにレベルの高い攻防ではないですね。チョークの技術が高ければ、もっと早く終わってます。

――猪木さんもペールワンも柔術は知らないようですね。

青木　柔術のエッセンスがないんですよ。だからどうしてもバックからのサクラバが増える。この試合はどんなルールなんですか？

――ルールは顔面パンチがなくて、サブミッションレスリングに近いルールだと思われます。

青木　なるほど。顔面パンチがないから動きが少ないし、やっぱり寝技で殴りがないとアグレッシブな内容にはならないでしょうね、正直。

――映像を観て気になったポイントはありますか？

青木　猪木さんは基本技術に忠実ですね。腕十字かサクラバ。バックチョークやギロチンの技術はあったのかもしれないですけど、動きを見るかぎり使う気配はないですね。あとは三角絞めがあるかどうか。

――猪木さんが三角絞めを使うイメージないですね。

青木　そもそも〝ノーギ〟（裸体のグラップリング）になっちゃうとアームロックが爆発的に多くなるんですけどね。これ、言い方は悪いんですけど、アームロックって初級者のレベルでも簡単に極まる技ですし、上級者でも凄く有効で軸になる技だからどうしても多くなるんですよ。（映像を観ながら）猪木さん、身体がかなり強かったんだと思いますね。

――身体が強かったといいますと？

青木　猪木さんのつかむ力、挟む力、これは相当、強いですね。

猪木さんには単純に身体の強さを感じました。脚で挟む力も強い

――へぇ〜。青木さんもつかむ力が強いっていうじゃないですか？

青木　ボクは力が強いんじゃなくて〝つかむ技術〟なんですよ。猪木さんには単純に身体の強さを感じました。とにかく力が強い、脚で挟む力も強いんだろうな。動きは道場のスパーリングで培った感じですよね。先輩レスラーにイジメられて覚えた技術。あと……猪木さんのアームロックは片方しかできないですね。

――どういうことですか？

青木　要は相手の左腕を極めるのが得意な人でしょう。映像を観てるとその繰り返しです。それと猪木さんは力が強いから基本的な技術が得意だろうし、下からの選手じゃないので、アームロック以外に、ギロチンやバックチョークもスタイルに合うと思うんですけどね。

――しかし、ちょっと観ただけでよくわかるもんですね（笑）。

青木　テクニック的なことを言うと、猪木さんは相手の手首をつかんでサクラバを極めてる。でも、ホントは相手の手の甲を押さえないといけないんですよ。猪木さんはテクニック的には甘いのかもしれないけど、やっぱり力が強いからこれで極まっちゃうんでしょう。これは相当、力が強いっすね。そしてこのアームロックはなんていうか、ヒジを狙うんじゃなくて、肩とヒジを壊すというか。

――肩とヒジを壊す！

青木　肩とヒジの両方を狙ってる。アームロックいろいろ種類があるんですけど、これは桜庭さんがよく狙うかたちに近いですね。

――そこは新日本プロレスからの流れなのかもしれませんね。

青木　（上からアームロックを極めるシーンを観て）この姿勢だと、相手が起き上がってきてしまうはずなんですよね。それを抑えられているということは力が相当、強い。

――逆に言うと、ポジショニングの甘さが目につくわけですか？

青木　はい。正直、何度かバックを取られている時点であると思いますね。

――それはわざと取らせてるわけじゃなくて？

青木　ですね。猪木さんはグレイシーの影響がないから、バックを取らせていけないという考えがなかったと思うんですよ。逆に言うと、ペールワンのバックチョークが強かったら取られていたかもしれないし……。ちょっと話はずれますけど、桜庭さんの場合は相手にしっかりとバックを取らせてない。あれはバックを取らせてないんですよ、桜庭さんのなかで。

――さすがこの一連の技の流れが〝サクラバ〟と呼ばれるだけありますね（笑）。この時代から柔術が入ってくるまで時間はかかるわけですが、いまのMMAって、こういうサブミッションレスリングというか、猪木さんやUWFの影響って残ってると思います？

青木　ないでしょうねぇ。このスタイルはかなりサブミッションが強くないと。ある意味で絶滅危惧種ですよね。

――青木さんも極めは強いですけど……。

青木　やっぱりボクはグレイシー主観。柔術の中での強さというか中井祐樹的エッセンスが凄く強いというか、柔術ですからね、ボクの場合は。

――いまのMMAの土壌で言うと、この流れを引き継いでるのは中村大介選手くらいですよね。

青木　そうですね。でも、なんていうか、中村選手の成績を見てもらうと一番わかりやすいんですけが、凄い勝ち方をする試合もあるんですけど、打率がよくない。すんごく強くてすんごくおもしろいファイターなんですけど、封じ込まれてしまうパターンが多い。いまのMMAで求められているべき点では打率がちょっと低いんですよね。

――いまのMMAに通じないとなると、サブミッションレスリング志向の若手も減っていきそうですし。

青木　そうですね。キャッチレスリング自体は素晴らしいと思うけど、なんていうか、俗に言う「取って取られてのファイター」は少なくなっていくでしょうね。ボクが知るかぎり、桜庭さん、所英男選手、中村選手の３人くらいじゃないですか。ボクも流れは違いますけど、自分のやり方で極めのおもしろさは伝えていきたいですね。

【10年8月某日／都内・DEEPジムにて収録】



今号はガールたちがたくさん出ていてなんだか楽しい誌面になっているじゃないか。クックックック。しかし、何かとんでもない写真のファニーガールもいるが……、これはユーたちも見て見ぬふりをするって感じかい？　アッハッハッハ！　でも、女子格はこれから盛り上がりそうだからみんな応援しようぜ！

150号へのお便り紹介

五味隆典変態座談会がおもしろかった。やっと五味が勝って安心していたのですが、自分以上に玉ちゃんたちが大喜びしているのがおかしかった。二人の変態座談会はいつまでも続いてほしいと思います。

【東京都・葛飾さん・会社員・40歳】

D タマちゃんとシーナってボーイたちは、いつもいつもいったい何を騒いでるんだい？　しかも、前回の『kamipro』を読むかぎり、2回も登場していたように思うが……。二人のヘンタイにそんなにページを割くんだったら、もっと俺にもペイジをくれよお。あいかわらず左下のツイッター情報は消えないよお。まったくトホホだぜ。

北岡悟のインタビューがおもしろかった。『kamipro』では「キモ強」とか言われてたけど、なんだかんだいっていろいろ格闘技のことを考えていることがわかった。それにしても北岡自身はSRCには上がっていないが、何か裏があるのんだろうか？

【埼玉県・ノンキホーテさん・自営業・35歳】

D おっと、サトル・キタオカは10月のパンクラスに登場するっていうのはもっぱらの注目ポイントになっているらしいが、そのあとはどうするのか、確かにミステリーだよな。もしかして、人生の転機ってヤツを演出してるんじゃないのかい？　クックックック。



高橋名人のインタビューがおもしろかったです。「うまいだけじゃなく、魅せないと！」というのは名言だと思いました。僕も会社役職「名人」を目指します。

【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・45歳】

D おいおい、会社役職「名人」っていったいどういうことなんだい？　しかし、ちょっと前に『kamipro』編集部にもパトロールの名人ってヤツがいたような気がするんだが、トラック乗車中に迂闊に目撃なんかされないでくれよな！

PUJIショックの話をしていた若林史江さんがキレイだった。PUJI問題のことはまあ、サダハルンバが話していたよりわかってきたが、それよりも『kamipro』にこういうキレイな人が出ることに大賛成。次は沢尻エリカさんあたりを出してほしいと思います。

【千葉県・ジョウタロー さん・会社員・42歳】

D おいおい、プリンス・エリカなんかを出しちゃうと、あとで「あの話はウソだったの」なんて言われちゃうんじゃないのかい？　クックックック。しかし、FEGとジャパニーズMMAはこれで本当に救われるのかい？　今回もサダハルンバのインタビューに注目だな！

特集「ゲームで燃えろ！」がおもしろかった。最近はまったくゲームをやりませんが、昔、スーパーファミコンぐらいまではプロレスゲームをやってました（いまは息子がDSやWiiをやってます）。昔のことを思い出しながら読めました。ゲームの世界もプロレス同様に歴史があってスター（人気ソフト）が生まれ国民を夢中にさせてるので、読むだけで刺激を受けました。

【香川県・国方伸二さん・会社員・47歳】

D ユーみたいなレターをくれると、ゲーム特集もやった甲斐があるってもんだな、編集部さんよお。しかし、俺が言っていた「さんまの名探偵」はこれっぽちも特集されてなかったようだが……。こうなったら勝手にヤッさんとボートに行っちゃうぜい。



中邑真輔のインタビューがおもしろかった。中邑真輔は新世代のプロレスラーというか、プロレスオタクなんだなと思った。コンピューターモードの映像を見て楽しめるなんて、本当にマニアにしかできないことだと思う。

【大阪府・「邑」の字は難しいさん・会社員・35歳】

D ひょっとして、コンピューターモードってヤツは、自分では何もしないってことかい？　それじゃゲームの意味がまったくないな。シンスケってヤツの気が知れないぜ。アッハッハッハ！　しかし、映画でもないのにコンピューターモード用の映像をバッチリ作ってあるなんて、ゲームクリエイターもなかなかたいへんな仕事だぜ。

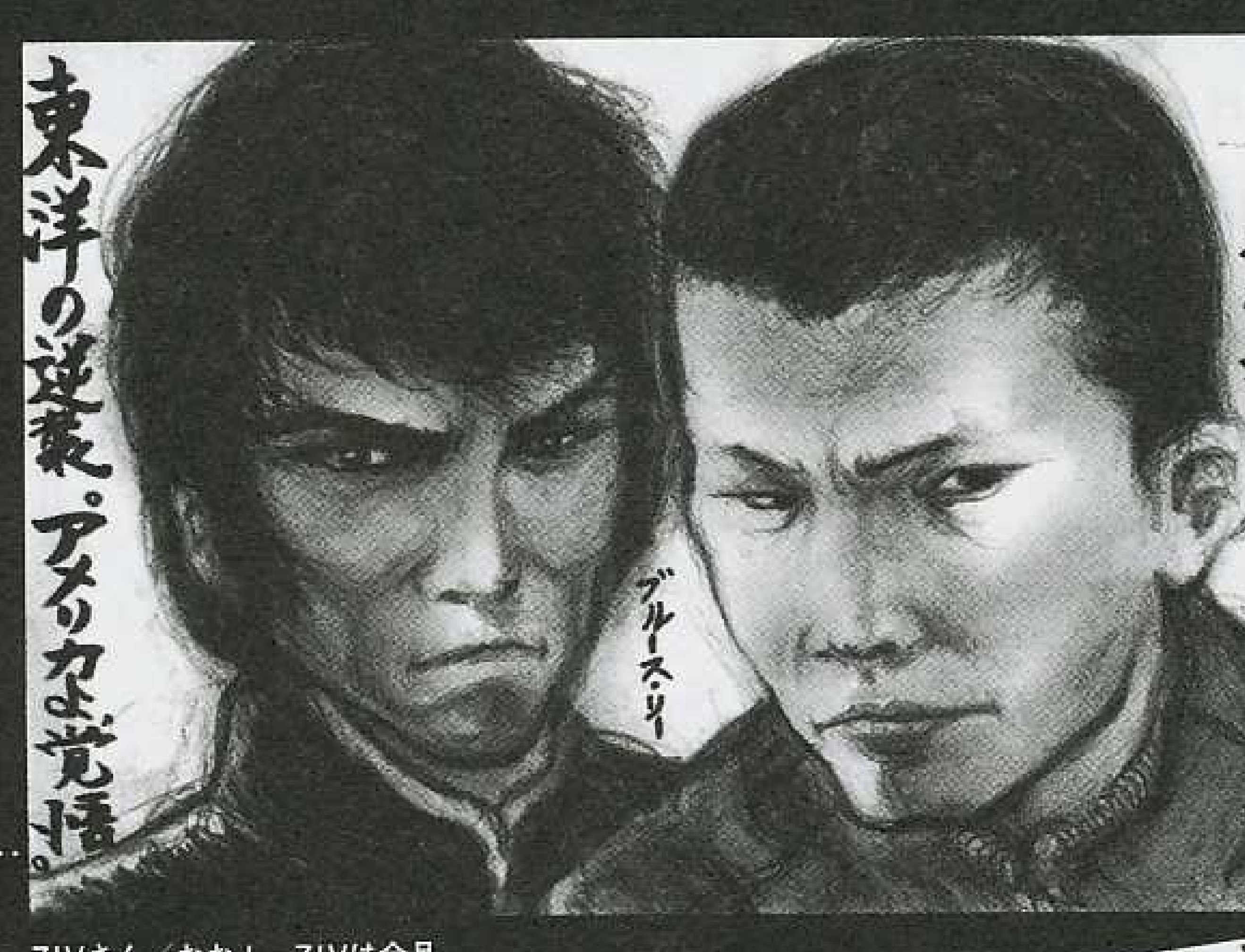
RENAさんのページがよかった。理由はNGのコスプレが『kamipro』さんの力でギリギリOKになったことと、インタビューでRENAさんの性格や好きな食べ物などを知ったので、とてもおもしろかったです!!

【京都府・筒居芳治さん・会社員・35歳】

kamipro150号
おもしろかった記事
RANKING

NO.1	RENA
NO.2	ブル中野
NO.3	五味隆典座談会
NO.4	高橋名人
NO.5	ハッスル・レクイエム

オレの予想どおり、RENAが1位か。ユーたちもなかなかわかってるじゃないか。今号でも表紙になってるぜ。"レナおじ"たちにとっては永久保存版だな。アッハッハッハ！　そして、これまたオレのタイプのブルちゃんもランクインしているじゃないか。ここにきて、オレはやっとユーたちと趣味が合ってきたぜ！



ZIVさん／おお！　ZIVは今月は二つも送ってきてくれたんだな。これは青木とブルース・リーか。今度はRENAあたりも描いて送ってくれよな！



ZIVさん／『ファイプロ』とかけて一鉄イラストを描いてくれたってわけか。ユーもなかなかシャレが効いているな。これはヘブンの小鉄さんも喜んでくれるだろうよ！

ペイントマンも
遠慮せずに
どんどん写真を
送ってくれよ！



ファンキーでクレイジーなアイツが
読者のメッセージを
Check it out!!
"読者ペイジ"
ジャクソン

D……ハッキリ言って、オレもユーの意見に大賛成だぜ！『kami-pro』編集部は今年で一番いい仕事をしたんじゃないのかい？ 本人がイヤがってたというのは、それは申し訳ないが、そこも含めてサイコーだ。え？ おまえもやっぱり〝レナおじ〟だって？

ファイプロの開発者のインタビューがおもしろかった。非常に熱い人だということがわかっておもしろかった。「プロレス愛に関しては10本の指に入るんじゃないかな？」というコメントは名言！ 全国のプロレスファンが黙っちゃいないと思うが、もうそんなに熱い人はいないのかなあとも思う。
【高知県・一鉄さん・公務員・37歳】

D「プロレス愛に関して10本の指に入る」って、いったいどんなヘンタイなんだい？ こうなったらヘンタイ座談会主宰者である堀江ガンツと対決してほしいよな。しかし、対決というより、前田日明信者としては意気投合って話もありえるぜ！

谷川さんのインタビューが興味深かった。ホント、谷川さんには日本の格闘技を救ってもらいたいです。
【広島県・廣川徹さん・会社員・41歳】

Dおいおい、サダハルンバにジャパニーズMMAを救ってもらおうだなんて、ユーたちもずいぶん変わったなあ。一時期はヒールだったはずじゃなかったか？ まあ、仲良きことは美しきかなってことだが、それならもっとオレとも仲良くしてくれよお！



真琴の話がおもしろかった。まさか『真・三國無双』が真琴の人生にこんなに影響していたなんて……。それにしても、引きこもったりストーカーに遭ったり、素晴らしい人生を送っているのだなと思った。
【東京都・レッスルさん・会社員・33歳】

Dた、確かに、今回のマコトってガールのページはまったく意味がわからなかったぜ。「オカマが好きってわけじゃないけど、オカマが好き」ってどういうことだい？ 日本語には相当自信を持っているオレだが、さすがに意味がわからないぜ。

掟ポルシェの『突撃！ 俺の晩ごはん』ブル中野編がおもしろかった。ブル中野さんの元気な姿が見れてうれしかったです。メニューもおいしそうです。
【大阪府・塩田充さん・会社員・36歳】

Dこの店は飲食店がひしめく中野にあるって話じゃないか？ まったくたいへんなところに店を出したもんだぜ。ミツルも「メニューもおいしそう」っていうくらいだから、足繁く通ってくれよな！

ブル中野さんの前田日明へのプレゼント話に笑ってしまった。雑誌を見て声を出して笑うのは、やはり恥ずかしい。
【山口県・松江巧さん・自衛官・32歳】

Dおいおい、ここでもブルちゃん人気が炸裂じゃないか。しかし、〝ブル様〟のときとは打って変わって優しい表情になっているのにビックリだぜ。RENAもいいが、ブルちゃんも、オレは意外と……。クックックック。

ファイヤー原田さんの記事がおもしろかった。ファイヤーさんの恋愛ゲームに対する思いがひしひしと伝わってきたので。でも、また才賀選手にバカにされそう。「雫」「痕」の読者プレゼントを希望します。ラブプラス最高〜！
【大阪府・ヒラパー兄さんさん・幕末藩士・27歳】

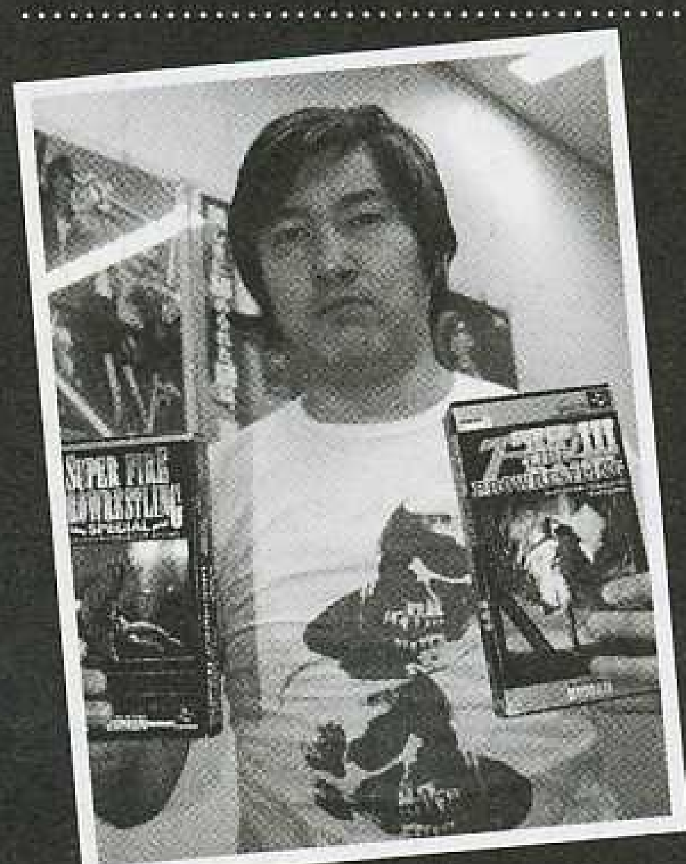
Dファイヤー原田は恋愛ゲームでモテまくりだそうじゃないか。しかし、オレとしてはリアルの世界でファイヤーがどんなガールを選ぶのかが非常に興味深いぜ。え？ 興味深くない？そうか。そう言われると、そうかもな！ アッハッハッハー！

ハッスル・レクイエムのページがよかった。う〜ん、なんかバブリーでも好きでしたが、やっぱり途中から暗いですね……。
【神奈川県・大内和彦さん・会社員・30歳】

Dあの特集だけ読むと、いい時代があったのを忘れてしまうくらい悲しい気持ちになるよな。ちなみに、いまも『ハッスル』は続いているようだぜ。

つまらなかったのは〝読者ペイジ〟ジャクソンのページです。ひさしぶりに『kami-pro』を購入したら、ペイジ兄やんが昔と芸風が変わっていなかったので。
【大阪府・ヒラパー兄さんさん・幕末藩士・27歳】

Dおっと、ここにきてまたもやオレ批判かい？ ユーたちもまったくヒマでしょうがないなあ。ま、このペイジをやってきて、オレもずいぶんハートが強くなったからよお、ユーたちのそんな攻撃ではもうなんともなくなったぜ。アッハッハッハー！（涙）。



おハガキ募集!!

おハガキ、どんどん送ってくれよ!
ケータイからでもOKだぜ!!
どんな意見、感想、苦情、抗議、
お悩み、ダメだしでも、ぜーんぜんキャッチするから安心しろって! 待ってるぜ!

こんな情報も24時間どんとこい!
ってヤツだ。
- ●譲ってほしいもの
- ●タレコミ情報
- ●選手に対するコメント、試合の感想
- ●その他、オールOKだ!!

以上、すべてのお便り・
イラストのあて先は

〒162-0805
東京都新宿区矢来町41-1
ザ・フタガミハウスNo.1
kamipro編集部「探偵」係まで。

携帯サイト『kamipro Move』
からの投稿もできます。



神奈川県・下口純さん／おいおい、ユーはまたとんでもない4コマ漫画を描いてきたな。まったく意味がわからないから、もう横転させてやったぜ。今度こそ解説つきで送ってくれよお。

団体オフィシャルおよび関係者のツイッターアカウント

※オフィシャルや代表者のアカウントを集めたんだが、載ってないものがあったらぜひ教えてくれよな!

谷川貞治 FEG代表「K1_Tany」
FEG宣伝熊「K1_Kuma」
DREAM「dreamPR」
笹原圭一 DREAM EP「sasaharakeiichi」
SRC「SRC_mobile」
向井徹 SRC代表「SRCbyWVR」
DEEP「deep_official」
佐伯繁 DEEP代表「sigeru_saeki」
パンクラス「_PANCRASE_」
UFC「ufc」

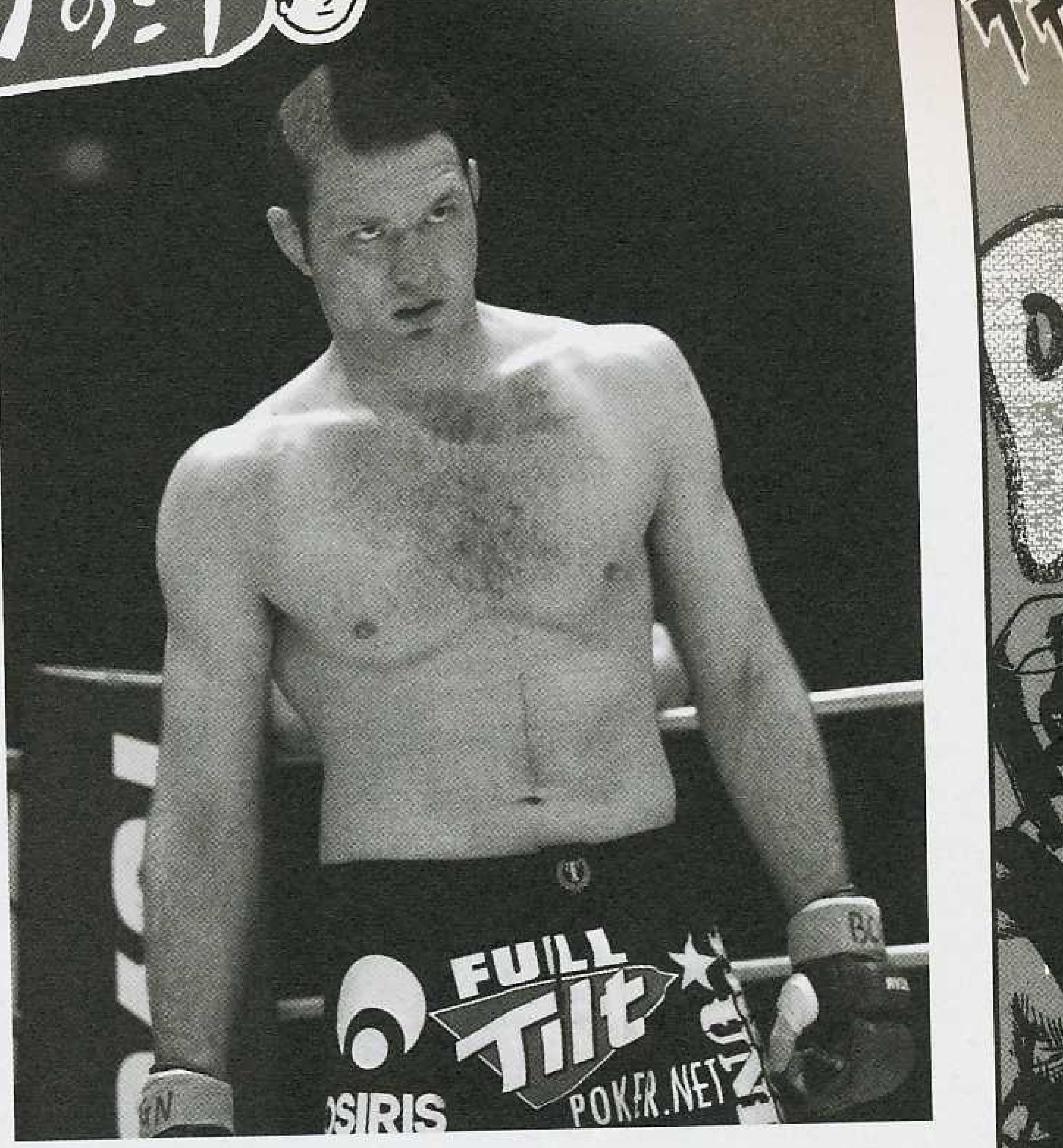
ダナ・ホワイト「danawhite」
ジュエルス「JEWELS_info」
ヴァルキリー「valkyrie_cf」
久保豊喜 GCM代表「kubotoyoki」
WWE「WWE」
新日本「njpw1972」
菅林直樹 新日本プロレス代表「NJPWSUGABAYASHI」
武藤敬司「muto_keiji」
DDT「ddtpro」
高木三四郎「t346fire」

マッスル坂井「musclesakai」
ゼロワン「zero1_fos」
ハッスル「321hustlehustle」
山口日昇「noboru_yama」
SMASH「SMASH_2010」
酒井正和 SMASH代表「SMASH_Sakai」
アイスリボン「ice_ribbon」
さくらえみ「sakuraemi」
19時女子プロレス「19pro」
アントニオ猪木「Inoki_Kanji」

第58回

これから観たいもの

花くまゆうさくの豆リングの汁



『キックの鬼』（サムライTV）でおなじみ天才・須藤が、こないだ上半身ハダカで試合してたけど、そのボディにびっくりした。太り具合がルチャドールみたいで、セントーンとかする姿が似合いそうだと思いました。

びっくりといえば、ひさびさに驚いたカード発表が北岡vs弘中戦。これはいいですね～、興味シンシンです。『SRC』のバンタム級トーナメントもシード選手（井上学、田村彰敏、中原太陽、清水俊一）が発表されて、俄然興味が出てきましたよ。

DREAMの桜庭vsメイヘムとハンセンvs所も、じつに興味シンシン。サブミッションで一本取れる選手と桜庭がやるのは、いまだずっと興味あって楽しみ。どちらが一本取っても衝撃的じゃないの、このカード。リオンvs宮田もあるのか、リングサイドで叫ぶ岸本加世子さんの姿をテレビで観れるかしら。

でもいま一番観たいのは、男だけ映画『エクスペンダブルズ』のスティーブ・オースチンvsランディ・クートゥアーだったりします。



Hanakuma Yusaku
◎アニメDVD『メカアフロくん』発売中です、よろしく。



金ちゃんのどこまでやるの？

●第50回● 山本小鉄さんの教えの巻

山本小鉄さんが突然お亡くなりになって、ビックリしたよ。

俺はUWFインターに入門する前、新日本プロレスがレスラー志願者のために道場を開放していた「プロレス学校」出身で、小鉄さんは俺たちプロレス学校生の恩師だからね。

あの日、朝起きたら元プロレス学校生だった友人からケータイメールで「小鉄さんが亡くなったらしい」という知らせが入ってさ。あわてて天山（広吉）に電話したら、本当に亡くなったって聞いてね、凄くショックだったよ。

ホント、小鉄さんは俺にとって最初のプロレスの先生だから。俺は新日本のレスラーになりたくて、「山田恵一は身体が小さくても小鉄さんに認められてレスラーになれた」とかそういう逸話も知ってたから、なんとか小鉄さんに認められたくて、プロレス学校に入ったんだよね。

そしてプロレス学校では小鉄さんにプロレスの基礎をちゃんと教えてもらったから。基礎体力運動に始まり、ロックアップ→ヘッドロック→ロープに振ってショルダータックル→そしてうしろ受け身っていう、プロレスの流れ。あと最後に「極めっこやるぞ！」って言われて、寝技のスパーリングやってね。

小鉄さんは関節技もよく知っててさ、サイドから首を極める技とか、相手が亀の状態で足を極める技とか、いまの総合の選手が知らない技を教えてくれたんだよ。だから俺はいまでも若い選手とスパーリングするとき、小鉄さんに教わった技をかけるとけっこう極まってね、「金原さん、その技なんですか？」なんて聞かれるんだけど、じつは小鉄さんに教わった新日本プロレス道場の技なんだよね。

あとキツかったけど、一番身についたのが受け身の練習。プロレスの受け身って難しいし、凄くキツいんだよね。だからUインターの練習生時代、新弟子は受け身の練習に苦労してたけど、俺は小鉄さんに教わってたから、なんとかできたんだよ。Uインター一期生のあのキツい道場でのトレーニングを俺がやり遂げられたのも、小鉄さんにプロレスの道場での練習を一通り教わってたからだと思う。ホントに感謝しかないよね。

あと小鉄さんは練習後にプロレス学校生をメシやスナックに連れていってくれてさ、そこでいろんな話をしてもらうのが楽しかったよ。そのときよく言われたのは「プロレスラーは怪物じゃなきゃいけないんだぞ」っていうこと。誰よりも練習して強くなって、酒をたらふく飲んで、メシも人一倍食えって。みんなで焼肉屋に行ったときなんか「店にある肉が全部なくなるくらい食わなきゃダメだ！」って言われたからね。

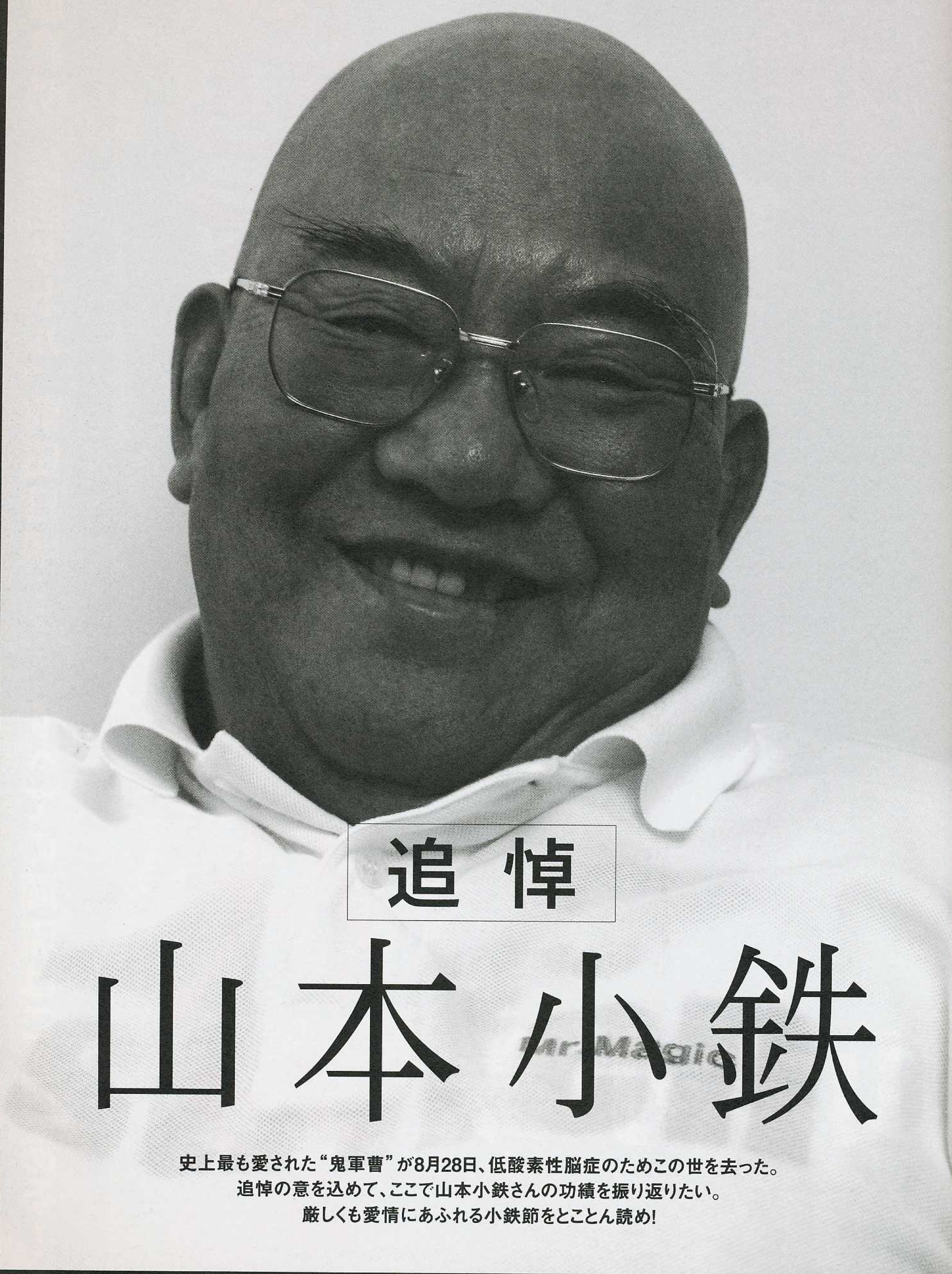
でも、この小鉄さんの教えっていうのは、そのままUインターの道場にも受け継がれててさ、髙田さんを筆頭にみんなとにかく練習して、メシ食って、酒を飲んで、すべての面で強くなろうとしてたよね。

やっぱり髙田さんが小鉄さんの愛弟子だったから、その影響が強かったんだと思う。「プロレスラーは強くなきゃいけない」っていう小鉄さんの教えがあったからこそ、UWFやUインター、リングスが生まれたんだと思うし、それがいまの総合格闘技まで続いてるんだから、やっぱり小鉄さんの影響っていうのは大きかったんだと思うよ。

いまのプロレスラーは〝怪物〟からアスリートになってきているけど、俺自身も最初にプロレス学校で教わった小鉄さんの教え、その精神だけでもなんとか受け継いでいきたいと思うよね。

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中!
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

鬼軍曹のストロングスタイル魂、永遠なれ!



追悼

山本小鉄

史上最も愛された“鬼軍曹”が8月28日、低酸素性脳症のためこの世を去った。
追悼の意を込めて、ここで山本小鉄さんの功績を振り返りたい。
厳しくも愛情にあふれる小鉄節をとことん読め!


——小鉄さん！　今日はよろしくお
願いしま

の鉛が入ったクツで5キロ歩いてん
だから！

べさせてもらってるワケだからね。
お客様は高いお金でチケットを買っ

と乗り込んで、相手をブチのめして、
「どうだプロレスの強さは！」とアピ

も不正で金をごまかしたり、とんで
もない世の中さ。アイツらみんなプ



藤原喜明、佐山サトル、前田日明……。すべての源流はここにある！

鬼軍曹一代記

山本小鉄

プロレスはキング・オブ・スポーツなんですよ！

生ぬるい現代のプロレス&格闘技に喝ッ！ということで、想像を絶する超過酷な練習で知られた伝説の新日本プロレス道場コーチ・山本小鉄が修羅の人生を振り返る。いまもう一度、小鉄イズムをマット界に呼び戻せ！

※当インタビューは『kamipro』No.108に掲載したものを再録しております。

聞き手／堀江ガンツ　撮影／平工幸雄

新日本プロレスの練習は厳しかったっていうけど、あったりまえだよ！

——小鉄さん！　今日はよろしくお願いします！

小鉄　フフフフ。いまさら俺に何を聞こうっての？

——いやいや、いま隆盛の格闘技ブームの源流は、小鉄さん時代の新日本プロレス道場にあるんじゃないかと思ってまして、道場で〝鬼軍曹〟と言われた頃の話を含めてうかがいたいんです。

小鉄　俺は鬼じゃないよ！　いまは〝ホトケの小鉄〟だよ（笑）。

——いまはホトケでしたか！　確かにヘアスタイルは仏様というかお坊さんなんですが……（笑）。でも、当時の選手の誰に聞いても、小鉄さんは「鬼だった」と言いますよね？

小鉄　いや、だってさ、コーチが練習で竹刀を持つなんて当時はあたりまえのことだよ！　いまは相撲部屋でさえ「新人が逃げないように」と親方が竹刀を持たないでしょ！　そういう精神的な部分から鍛えるコーチがいなくなってしまったんだね。

——スパルタ的な練習を自粛する傾向ですよね。

小鉄　それじゃあ情けないよ！　昔の新日本プロレスの練習は厳しかったっていうけど、あれはあたりまえだったんだよ！　俺だって、いま65歳だけど、まだ練習してるよ！

——こんなゴツい身体の65歳はいませんよ。

小鉄　朝だって毎日、足に1・2キロの鉛が入ったクツで5キロ歩いてんだから！

——なぜにそこまで（笑）。

小鉄　それからフロに入って、食事して、少し家で休んで、道場に行って練習するのが日課ですよ。レスラーを辞めてからはテレビやラジオ、講演の仕事もするけど、俺が細い身体だったら、お客さんもガッカリするじゃない？　でも常に身体を鍛えていれば、言葉だって説得力が出る。そのくらい俺はこの職業に誇りを持ってるし〝プロレスラーは最強〟だと思ってるからね。

——……ただ、ここ数年は総合格闘技での敗北などが続いて〝プロレスラーは最強〟という看板が覆されてきてる現実もありますよね。

小鉄　だから情けないって言うんだよ！　レスラーは強くなかったらダメだろ？　強靭な身体で、スタミナがあって、重い体重で、打たれ強くて、殴られ強いのがプロレスラーなんだよ。これはあたりまえのことだよ！

——お客さんはそういう超人的な部分を見たくて、お金を払ってるわけですからね。

小鉄　そう！　俺らは〝お客様〟に食べさせてもらってるワケだからね。お客様は高いお金でチケットを買ってくれるんだから、それだけの気概を見せなくちゃいけないよな。俺の考え、間違ってる？

——いや、おっしゃるとおりです。

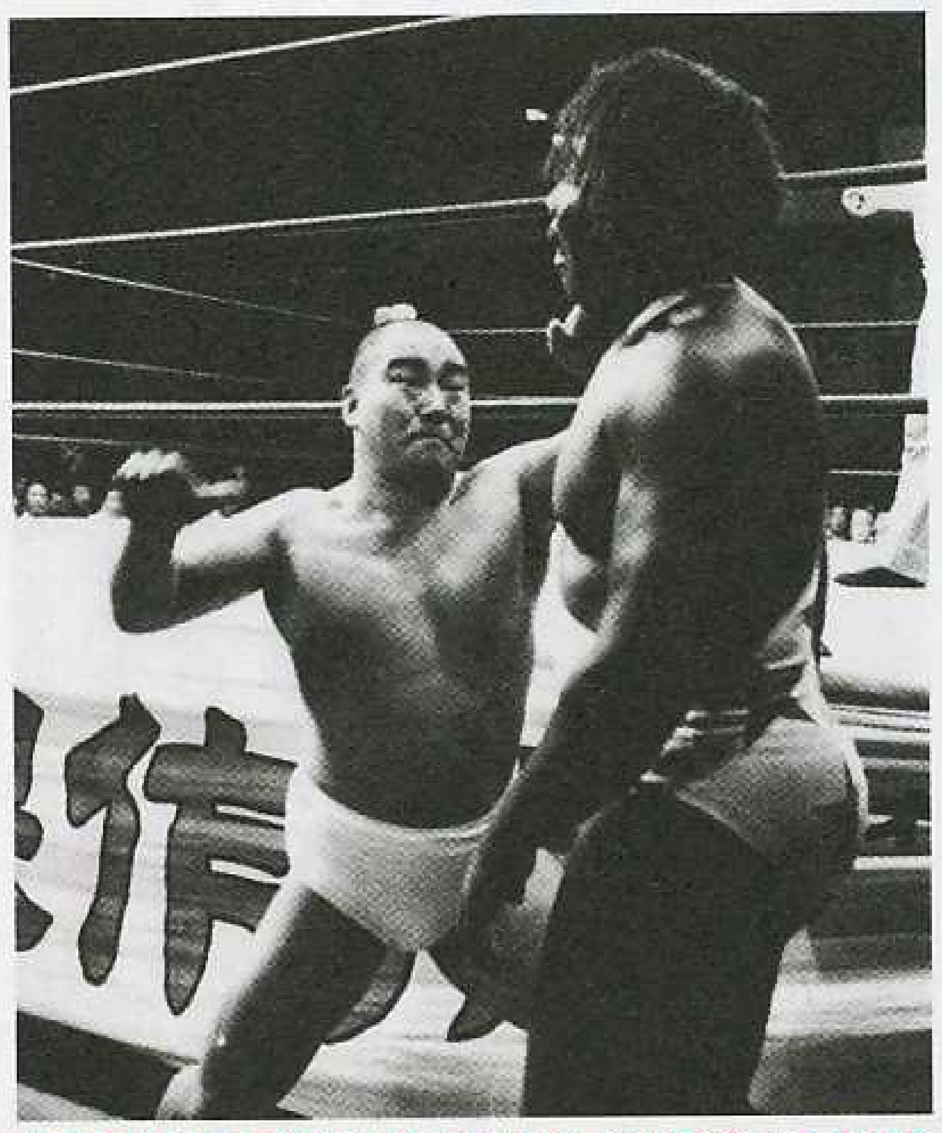
小鉄　そうでしょ！　いま野球選手でも高い年俸をもらっていながら、「練習がキツい」なんて言うヤツもいるけど、俺からしたら「じゃあヤメろ！」と言いたいよ、バカヤロー!!

——キツいならヤメろ！　と。

小鉄　でも、本当に一流の選手は、イチローや松井（秀喜）にしたって、プロの技術を見せるじゃない。阪神の金本（知憲）なんか怪我や骨を折っても、「負けるもんか」と強硬に出場する。俺が阪神のオーナーなら、ああいうプロ意識のある選手には10億円払ったっていいよ！

——プロレスラーにもそういった気概の選手は必要ですよね。

小鉄　そうでしょ？　この不景気なプロレス界で「俺が一世風靡してやる！」と奮い立ってさ！　PRIDEやK−1に「誰でもかかってこい！」と乗り込んで、相手をブチのめして、「どうだプロレスの強さは！」とアピールできる選手がいたら、10億円払ってもいいじゃない？　でも、いまの選手は試合で負けてたってマイクを持つじゃない？　俺からしたら「ふざけんな！」だよ。相撲の高見盛関じゃないけど、負けたらショボンと帰るのが普通だろ。



素晴らしきこの肉体を見よ! 引退後、60歳を超えてもなお「腹の出ているレスラーは信用できない!」という新日本プロレスのモットーを忠実に守っていた小鉄。情熱的で誠実な性格はこの肉体を見れば一目瞭然であろう。

——小鉄さんご自身は、そういった気概は、若い頃に徹底的に叩き込まれたんですか？

小鉄　そんなの普通のことさ！　ウチは貧乏だったから、俺は小学校5年生の頃から新聞配達をやってたんだよ。俺は10人兄弟の6番目だから両親にもかまわれなかった。小学校時代から月謝を払ったり、ズボンの用意をしたり、自分のことは自分でしてきたからね。

——それは精神的にもかなり鍛えられるでしょうね。

小鉄　新聞を配ってるときに、家からおばさんが出てきて、「お兄ちゃん、ご苦労さんだね」と声をかけてもらったり、当時、雨が降ったときに新聞包むナイロン袋なんてないから、配達した濡れた新聞を見て「ダメじゃない！」と頭ごなしに怒鳴る人もいたよ。そういう、うれしさも悔しさも知ってるから、「人をイジメてはいけない」とか、「助け合わなきゃいけない」なんて社会道徳は自然と覚えてきた。

——小さい頃から、社会経験を積んで礼儀や道徳を身につけてきた、と。

小鉄　俺は大学は出てないけど、そういう部分は身に染みて知ってるから。でも最近はエリートで賢い野郎が女子高生を盗撮したり、国会議員も不正で金をごまかしたり、とんでもない世の中さ。アイツらみんなブン殴りたくなるよ！

——確かにAVすら見ない小鉄さんからしたら、とんでもない話ですよね。

小鉄　あんな大人を見てたら、いい子が育つはずないだろ？　そんなニュースを見てたら、子どもだって「大人は年中インチキをやってるクセに、偉そうなことを言いやがって」とナメられちゃうだろ。だから、俺はいま全国の小学校を講演で行脚しようと思ってるんだよね。

——鬼軍曹の全国行脚ですか！

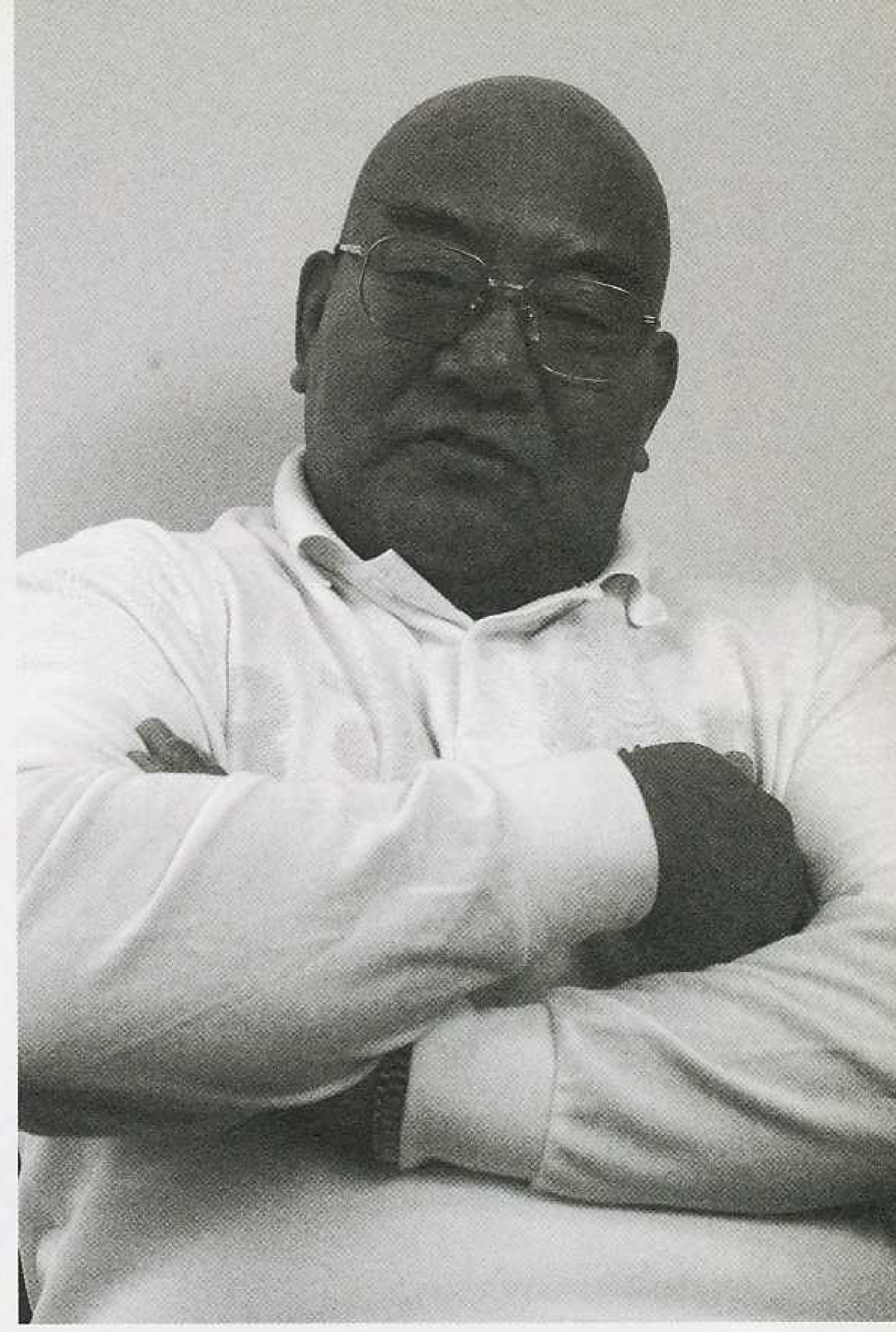
小鉄　いまの社会は小学生から正さなきゃ直らない。学校の先生も子どもにバカにされてるご時勢だから、俺みたいなコワモテのオヤジが一喝すればいいんだよ。俺みたいなオヤジが何百人といれば、この国は絶対に変わるよ！

——小鉄さんが何百人もいたら、凄い国になりますよ（笑）。ところで、小鉄さんはどうしてプロレスラーになったんですか？

小鉄　そんなの貧乏だからさ！　極論すれば、男は頭を使ってお金を稼ぐか、身体を使ってお金を稼ぐかじゃない？　俺はボディビルでも鍛えてたし、バスケットボールや新聞配達でも鍛えてたから、運動には自信があった。それで昭和28年頃、他人の家のテレビでプロレスを見せてもらったとき「ここから社会に入るのがいいかもしれない」と直感して、すぐに日本プロレスに入門したんだよ。

——当時の日本プロレスも、さぞや練習は厳しかったと思いますが。

鬼軍曹一代記



小鉄　あったりまえだよ！　初日からいきなりスクワットを1500回もやったし、大木金太郎さんとスパーリングやらされてメチャクチャにされたんだから。

——初日から、道場での強さには定評がある大木金太郎さんですか！

小鉄　でも俺は「いまに見てろ！」と思ったし、「この業界は身体を大きくして鍛えないと務まらないな」と実感したよね。だから、練習が厳しくても逃げなかったし、逆に身体が大きくなるたびに喜びを感じた。スクワットなんか最高で7000回はやったからね！

——な、7000回！

小鉄　回数をやればいいわけじゃないけど、そういうズバ抜けた身体能力を見せなかったらダメさ！　知り合いに、登山家でプロスキーヤーの三浦雄一郎さんという人がいるけど、いま74歳で4キロのクツを履いて、毎日山を歩いてるってんだから、俺も「チキショー、負けるもんか！」って思うよね。

——とんでもない人と張り合いますね（笑）。でも、「コイツがここまでやるなら俺もやる」という競争心は確かに大事ですよね。

小鉄　だから、何ごとにもライバルは必要さ。俺には星野（勘太郎）さんがいたし、昭和のプロレスラーはたいしたモノは食ってなかったけど、みんな凄い身体をしてたもん。

——星野さんも小鉄さんもはち切れんばかりの凄い身体でした。

小鉄　星野さんとアメリカ遠征に行ったときも、控室で二人で黙々と練習ばっかりしてたら、外人から「コイツら、狂ってる」って呆れられてたよ。

——星野さんと小鉄さんのヤマハブラザーズは海外でも一世を風靡しましたよね。

小鉄　練習も試合もガンガンやってたから、アメリカでもお金を稼いだし、一週間に1000ドル、2000ドルは稼いでたからね。

——アメリカ遠征のときはテキサス州のダラスを牛耳っていた、〝鉄の爪〟フリッツ・フォン・エリックの自宅にもよく行っていたそうですね。

小鉄　そうそう。毎週、日曜日になるとエリックの家に行って、俺が料理を作って、エリックの家族や選手たちに日本料理をふるまってたからね。

——エリック家でちゃんこ番をやってましたか（笑）。

小鉄　スキヤキやちゃんこ鍋をよく作ってね。みんな「うまい、うまい」って喜んでたよ。だから、エリック一家とは仲がよかったし、エリックの息子のケビン（・フォン・エリック）が、こんなブ厚い木の板を持ってきて「おい、マサ！（アメリカでのニックネーム）、この板をカラテで割ってくれ」ってお願いされたりして、見よう見まねで割ったりもしたよ。

——ダハハハ！　エリック家とは家族ぐるみの付き合いだったんですね。

小鉄　フリッツは日本プロレスに来日したときから、俺と星野さんに目をつけてたからねぇ。当時、フリッツが会社に「あの二人を俺のテリトリーに預けないか？」と話をしたんだけど、先輩レスラーたちがやっかみで文句をつけたことで、そのタイミングではアメリカに行けなかった。ま、そういう人たちは練習が嫌いだから、もう亡くなってるけどね。

——小鉄さんは昔から、日本プロレスが割れたあと「練習好きが新日本に集まり、練習嫌いが全日本に行った」って言ってましたよね（笑）。

小鉄　そう！　木戸（修）や藤波（辰爾）にしても、北沢（幹之）も、柴田（勝久）もみんな練習が好きだから、いまも元気な人が多いじゃない？　全日本のほうはどうなの!?

——元気じゃないというか、この世にいらっしゃらない方が多いですよね（笑）。その新日本に小鉄さんが行こうと思ったのは、どういうきっかけだったんですか？

小鉄　当時の日本プロレス社長は芳の里さん。経理の担当が遠藤幸吉で、現場担当は吉村（道明）さんだった。でも彼らは完全にドンブリ勘定だったのさ。

——それで「経理を改革しよう」という話が出てきた、と。

小鉄　ある人を仲介してね。当時、俺は猪木さんとも馬場さんとも仲がよかったんだけど、あるとき猪木さんにボウリングに誘われたんだよ。

——猪木さんとボウリングに！

小鉄　そこでメシを食ったりしながら、経理の不正の話を聞いたんだけど、猪木さんに「俺と馬場さんで改革するから、ついてこい」と言われたから「ついていきます」と即答したよ。

——そのあと、その話が新聞に出てしまったんですね。

小鉄　そう。改革をしようとしただけなのに、「猪木が日本プロレスを乗っ取り」とか「クーデター」と新聞がおもしろおかしく書き立てた。そこで俺は社長に呼ばれて、「おまえも加わってたのか？　自宅待機しろ！」と命令されたけど、俺は「いや、会社を辞めます！」と断って、裁判を起こしたんだよ。

——えっ！　小鉄さんが日本プロレス相手に裁判を？

小鉄　この話は知らないだろ？　そのときの裁判で、当時で退職金を1000万円もらったからねぇ。

選手&関係者の追悼コメント

アントニオ猪木「また一人、また一人と、我々の仲間を見送るのは非常に寂しいものです。選手の育成に尽力したことに感謝するとともに、故人のご冥福を心よりお祈りいたします」

グレート小鹿「訃報は突然・当たり前、分かっていながら無力感・これはどこから来るのか？　同じリングに上がりお互い戦った中の同僚だから尚更身に染みる。何ケ月前だっただろうか、控え室で隣に試合用のカバンを開けながら身体の調子はどうだ等と声を掛けあっていた。こんなに身近が次から次へと居なくなれば、変な意味ではないが次は俺？　なんて思いが脳裏を掠める。嫌な年齢・年回りだなぁーと思っていたら何もかもマイナス思考に考えてしまう（以下略）」

佐山サトル「新日本プロレス時代、山本小鉄さんは、道場では勿論のこと生活面全般と、公私共に、私の先生でありました。プロレスラー佐山サトル及び、初代タイガーマスクは、小鉄さんが全てを指導する野毛の新日本道場で生まれたのです。初代タイガーマスクの原点です。山本小鉄さんが生涯をかけて、真骨を注ぎ作り上げた『ストロングスタイルの火』を絶やすことなく燃やし続けることが、私達の使命です」

菅林直樹社長「山本小鉄さんは新日本プロレスリングにおける〝プロレスリング〟の部分を根から築き上げた方でした。我々はこれからもより一層、あなたが作ったライオンマークのロゴに記された〝キング・オブ・スポーツ〟をまい進してまいります。そしてストロングスタイルは絶対に死なせません」

小林邦昭「数日前に道場に来られまして家族で軽井沢に行くと言っていました。僕をこの世界に入れてくれたのは小鉄さんです。僕もメキシコより帰国してゴールデンで小林邦昭を世に出してくれたのも小鉄さんです。思い出したらきりがありませんが37年前に田舎より裸一貫で上京してきた小僧を一人前に飯が食える人間に育てていただきましてありがとうございました」

前田日明「今日ここにあるのはすべて山本さんのご指導のおかげです。常に真剣で、常に身体を張り、父のよう優しい心で私たちを育ててくれたことに感謝します」

髙田延彦「山本小鉄さんが亡くなった。30年前、一対一で入門テストをしてくれたのは小鉄さん、プロレス界に引き入れてくれたのは小鉄さん、プロの心構え、プロレスラーの誇りを教えてくれたのは小鉄さん、小鉄さんはいつまでも変わらぬかっこいいプロレスラーだった。あの独特な小鉄節がいつまでも頭から離れない。心からご冥福を祈り、感謝の思いで一杯です」

中邑真輔「強ければ誰も文句を言わない。と言ったのは小鉄さんだった」

ライオンマークは俺が作ったんだよ！ なぜあのマークにしたか知らないの？

――100万円！ 当時のお金としたら凄い金額でしょうね。

小鉄 そりゃそうさ！ 俺はクーデターの容疑がかかるなんてイヤだから「乗っ取りなんて企てていません」と裁判所で正々堂々と証言したよ。猪木さんはしなかったけど、俺は白黒ハッキリつけたかったからね。

――そういう部分でも、小鉄さんは道からハズれたことは許せない、と。

小鉄 そう。だから俺は今日の取材だって、キッチリと約束の時間を守るでしょ？ 時間と約束を守らない人は大嫌いなんだよ。でも時間や約束を一番守らないのは猪木さんね！

――ダハハハ！ 肝心のボスが守りませんか（笑）。

小鉄 猪木さんにはいつも俺が口うるさく言うから、いつもケンカしてるし、猪木さんには煙たいから、最後は仕事からホサれちゃうこともあるワケさ（笑）。

――猪木さんとはいろいろあったんでしょうね（笑）。しかし、そのあとの新日本プロレスでは、イチからの旗揚げでしたから、さぞや内情は大変だったでしょう。

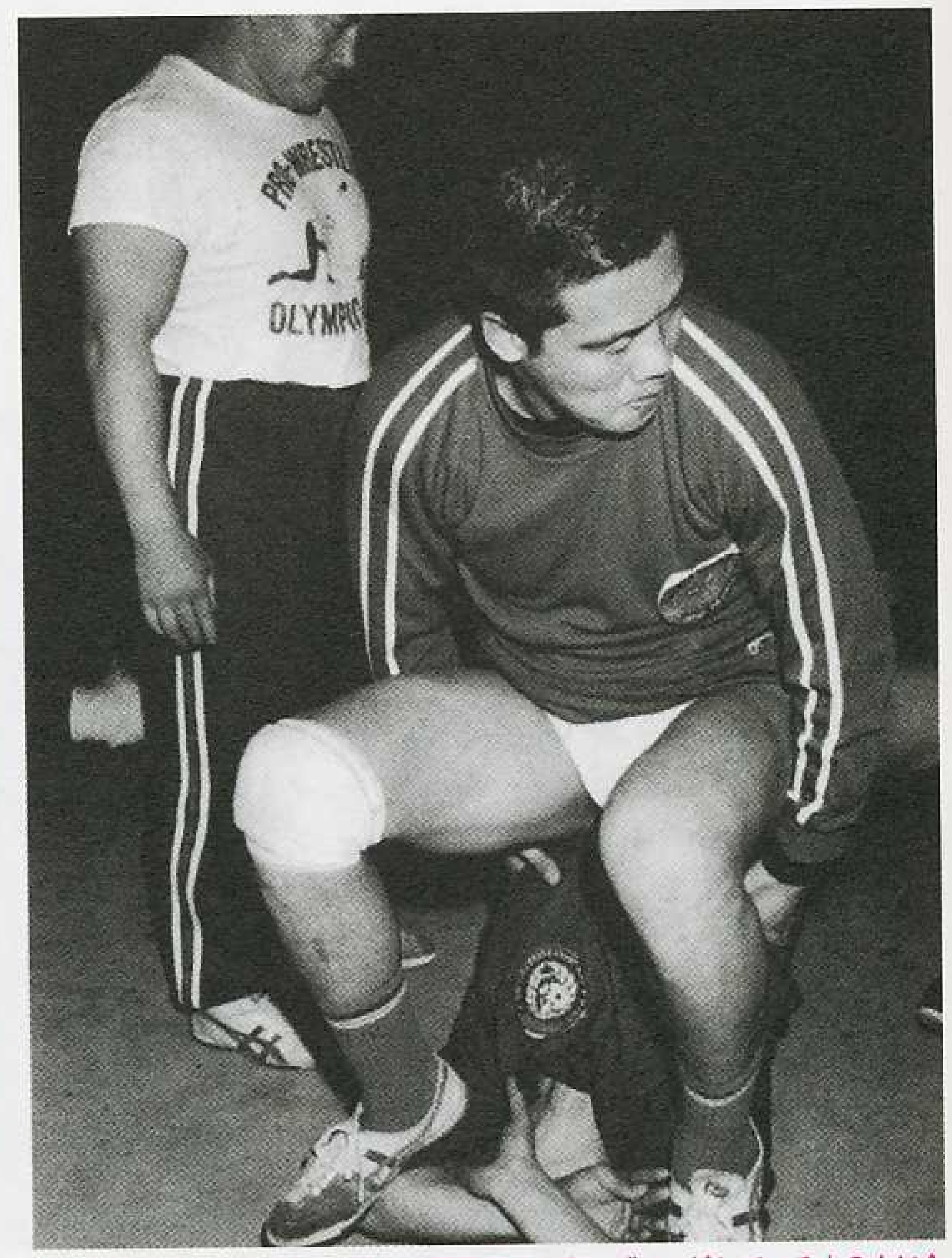
小鉄 そりゃあメチャクチャだよ！ 当時は興行のお金を払ってくれないプロモーターもいたからね。それに対抗するためにこっちも考えたよ。

――あ、お金を払ってくれない興行主がいましたか。

小鉄 そういうときは俺も一試合目にパッと試合をやっちゃって、すぐ会場入り口に行って、当日券を売りながら、イスの下に売上金を入れるダンボールを入れて金庫番をするわけ。それでプロモーターが来る前に、売り上げを全部持って出ちゃうんだから、ヒドかったよ。（声をひそめて）あんなの○○○と一緒だよ。

――ダハハハ！ そういう丁々発止の世界で生き抜いたわけですね。

小鉄 俺にそんなことをやらしたら、誰も勝てないよ。地方興行に行ったときに、○○○と喧嘩したこともあったけど、俺は○○○の事務所だってレスリングシューズとジャージ姿で行くからね。それで、たいていは「まぁまぁ」と、ことを荒立てないようにまずは酒飲んで乾杯するわけ。 普通なら、そこで和解金を払ったりするんだろうけど、俺は絶対に金は払わない。そこで一銭でも払ったらクセになるから、絶対に払っちゃダメさ。でも金は払わなくても、俺はそこで○○○に気に入られちゃうから、問題はないんだよ。



こちらは新日本プロレス地獄の練習風景の一部。ブリッジしている人の上に全体重をかけるという、たまらない鍛錬だ。「ヒザがイタけりゃスクワットしろ!」といった小鉄イズムが発揮され、数々の名レスラーが育っていった。

――昔の現場監督は、そこまで含めての仕事だったんですね。

小鉄 大変だったよ！ それに、外人レスラーが会場でお客さんを殴って血だらけにしたときも俺の出番さ。

――あ、そんなケアまで！

小鉄 お客さんをすぐ控室に連れていって、傷口を見て「あ〜、大丈夫、大丈夫！」とバンソウコウをバーッ！と貼って2万円くらい握らせて、「ハイ、おしまい」なんだから（笑）。

――ダハハハ！ いまだったら裁判を起こされたりして大変でしょうね。

小鉄 いまはそんなことないけどね。あの頃の俺の仕事なんて、7つくらいあったもん。レフェリーを育てる、選手を育てる、自分の練習と試合をする、現場監督にプロモーターとの交渉、ポスターやパンフレットまで考えなきゃいけなかった。

――ポスターにパンフレットまで！

小鉄 それから、新日本のライオンのマークも考えたのは俺だから！

――えっ！ あの有名なマークは小鉄さんが作られたんですか？

小鉄 あれは俺が作ったんですよ！ 知らないの？ じゃあ、アンタたち、なぜあんなマークにしたのかわからないでしょ？

――ぜひ、教えてください！

小鉄 当時の日本プロレスのマークは〝王冠〟のマークだったわけよ。だから俺は、「チキショー！ あの王冠に勝つのはなんだろう？」と考え抜いた。それで「ヨシ！ こっちは王様は王様でも〝百獣の王〟だ」とライオンにして、スポーツの王様という意味を込めてキャッチを入れたんだよ。

――有名な〝KING OF SPORTS〟ですね。

小鉄 最終的なデザインはもちろんデザイナーにやってもらったけど、アイデアを出したのは俺だから。

――そんな多忙をきわめる中で、道場のコーチもやられていたんですよね。

小鉄 やってたねぇ。あとから前田（日明）たちに聞いた話だけど、道場の練習のスタート時間は朝10時からなんだけど、9時30分くらいから選手は道場の中で待ってて、俺の車が道場の前で停まる音がすると、直立不動で立ってたらしいからね。

――小鉄さんのキャデラックが道場の前に停まる音だけで、震え上がっていたと聞きますからね（笑）。

小鉄 それで、俺は朝10時になった時点で、道場の鍵を全部かけちゃうんだよ。遅れてきたヤツは絶対に道場に入れさせない！ それで窓を全部閉めきって練習させたんだけど、夏場なんか50℃近くもあったからね。

――室温50℃！ 道場の中にいるだけで地獄ですね。

小鉄 それで水も飲ませず、3時間も練習させたんだから。よく脱水状態にならなかったと思うよ。

――いまの時代ならありえないです。

小鉄 だから、あのときの選手を支えていたのは精神力だけ。それに比べて、いまは道場の中に扇風機はあるし、暖房はあるんだから呆れちゃうよ！

――〝冬は寒くて、夏は熱い〟のがあたりまえだった、と。

小鉄 あったりまえさ！ ……それに一度、俺は（グラン・）浜田を殺そうとしちゃったから。

――ダハハハ！ 殺しちゃいけませんよ！（笑）。

小鉄 宮城県の気仙沼で合宿したとき、原っぱにリングを作って、集合したら、浜田がいなかったの。「浜田はどうした？」って聞いたら、「身体の調子が悪いって、布団でうなってます」と言うから、「アノヤロー！ さぼりやがって。すぐ呼んでこい！」と呼んだら、ホントに真っ青な顔してウンウンうなってた。さすがに「これはおかしいな」と救急車を呼んだら……急性盲腸炎だったよ（笑）。

――盲腸炎！ それはアブなかったですねぇ。

小鉄 もう少しで殺すところだったよ（笑）。

——前田さんなんかも、ことあるごとに「あの頃の道場の練習が自分のプライドになってる」と言ってますね。

小鉄　そういえば、去年、前田と食事をしたんだよ。前田が「山本さんの娘さんに会わせてください」ってしつこくて。

——まさか山本家のムコ入りを考えてるわけじゃないでしょうね（笑）。

小鉄　とんでもないよ！（笑）。そのときはウチの嫁さんと娘と俺と前田の4人でウチの近所のフランス料理屋に行ったんだけど、前田は時間もちゃんと守ったし、言葉使いも丁寧だったから、嫁さんが「凄く好青年じゃない？」と感心してたんだよ。でも俺は、「バーカ！　おまえらといるから好青年だけど、アイツは新聞記者には言葉も態度も横柄なヤツなんだ！」と言ってやったよ。

——ダハハハ！　前田日明も小鉄さんの前ではかたなしですか（笑）。話を戻すと、当時、ブラジルからイワン・ゴメスというバーリ・トゥードの選手も新日本に来てましたよね。

小鉄　ゴメスは79年に新日本がブラジル遠征したときに会場で挑戦してきたんだよ。でさ、俺は試合を終えたばかりの木戸と試合をやらせようとしたんだ。

——やっぱり木戸修は〝殺し〟を知ってる人ですからね（笑）。

小鉄　そのときはブラジルの政府からストップがかかって実現しなかったんだけどね。公開で果たし合いみたいなことはダメだってことで。でも、控室でゴメスに会って話を聞いたら、ブラジルで憲兵隊長をやって大統領の護衛官だったらしいじゃない。それでも「レスリングを覚えたい」って頼むから新日本に連れてきた。アイツは身体は硬かったけど、力も極めるのも強かったよね。

——ゴメスも新日本の道場で一緒に生活されてたんですか。

小鉄　巡業にも行ってたよ。……これは、ときどき思い出すんだけど、東北方面の巡業で旅館で泊まっていたとき、早朝4時半頃にゴメスが「タイヘンダ！　タイヘンダ！」ってカタコトの日本語で騒ぐんだよ。

——朝っぱらから迷惑ですね（笑）。

小鉄　みんなも「何ごとだ！」ってビックリして起きたら、「空から白いものが降ってる！」って言ってるんだけど……ま、雪だよね（笑）。

——ゴメスは東北巡業で初めて雪を見ましたか（笑）。ゴメスもそうですけど、当時は「誰の挑戦でも受ける」と猪木さんが公言してる手前、道場破りも来てたんですよね？

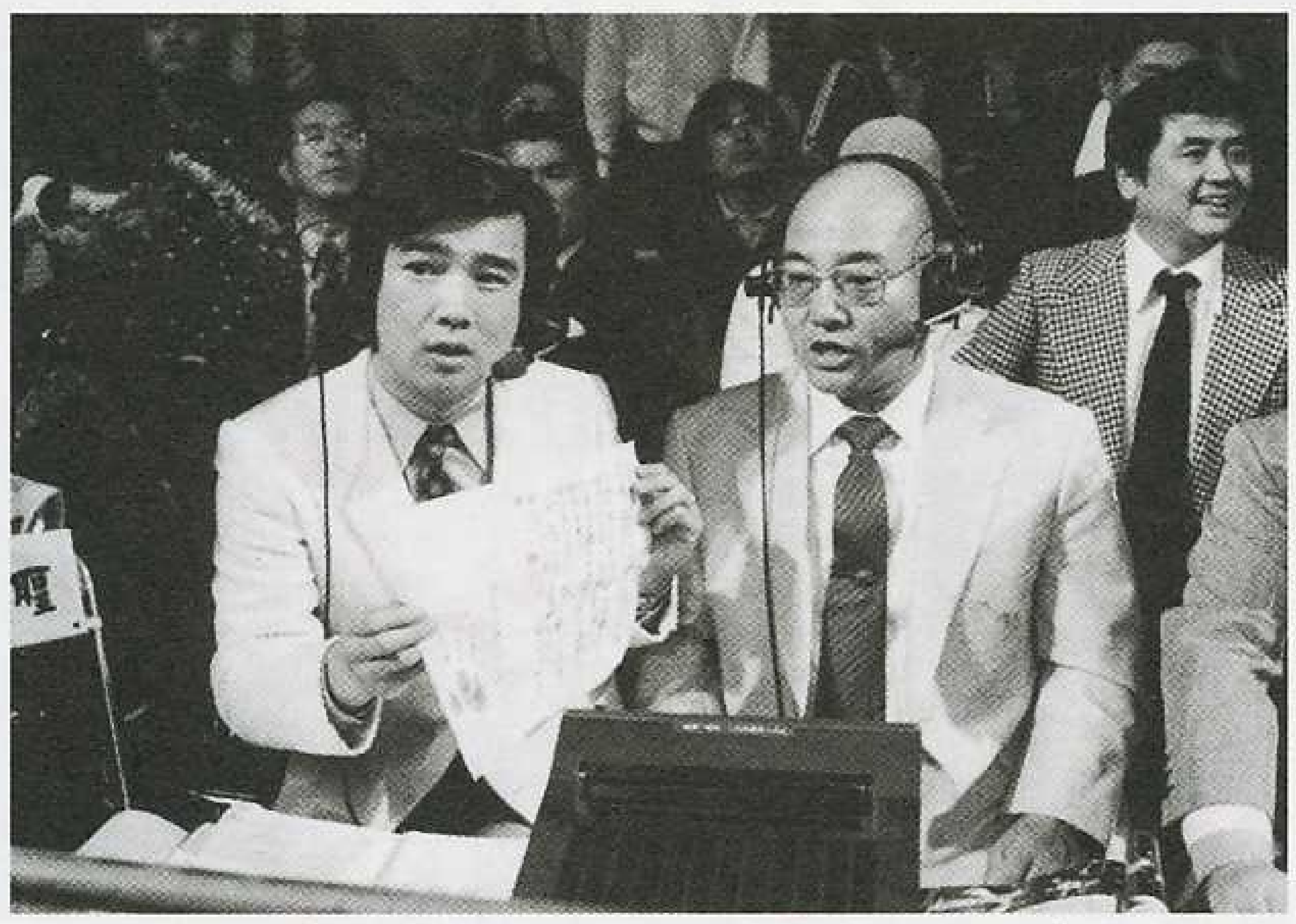
小鉄　来てたねぇ。ただ、道場破りなんてのは、相手に対して礼儀を欠いたことですよ！

——やっぱり道場破りが来たら、「ただでは返さない」って感じですか？

小鉄　あったりまえだよ！　俺は道場破りが来たら、紙きれを持ってきて「怪我をしようと、命がなくなろうと新日本プロレスは関知しません」と誓約書を書かせたから。ウチの顧問弁護士に電話したら、「あまり効力はないけど、書かないよりはいい」って言われたからさ。

——とんでもない誓約書ですね（笑）。

小鉄　でも、道場破りっていうのは、そういうことだからね。昔はそんな奴らが一年に3人くらいは来てた。そこで藤原や木戸が相手をするんだけど、アイツらは意外と人がいいんだよ。俺が「（相手の骨を）折れよ！」と言ってるのに、折らないから、「折れってんだ！　コノヤロー！」と逆に怒ったりもした。俺だったら絶対に折っちゃうよ！



1980年より、テレビ解説を担当した小鉄さん。古館伊知郎との名コンビぶりは誰もが知っているが、話し方教室にまで通って話術を磨いていたとは！ プロ魂みなぎる小鉄イズムは誰もが見習うべきである。

——小鉄さんなら折っていた！（笑）。

小鉄　だから、Uインターのときに安生（洋二）がヒクソン（・グレイシー）の道場破りに行ったでしょ？　あのあと安生と会ったときに、「おまえバカか！　道場破りってのはあっちの人間を3、4人倒したところで、絶対に返しちゃくれねぇんだ！」って説教したら、「……よくわかりました」って反省してたよ（笑）。

——道場破りとは違いますけど、あの当時、「（初代）タイガーマスクに挑戦」という企画もありましたよね。

小鉄　あったねぇ。昔の東京体育館で、素人がタイガーマスクに挑戦するという企画で、その予選で若手レスラーが素人の相手をしたんだよ。俺も遊び半分でわざと顔を殴らせたり、首を極めちゃったりしたけど、前田とか藤原なんかは、ムキになっちゃって困ったよ。

——素人相手にムキになっちゃいましたか。

小鉄　どう見ても素人なんだから、少しは持ち上げてやんなきゃいけないじゃない。でもアイツらはそんな余裕はなかったね。

——小鉄さんに見られてた緊張感もあったでしょうしね。その当時、印象に残ってる弟子というと、前田さんや藤原さんが筆頭ですか？

小鉄　あの頃は髙田（伸彦、現・延彦）や山崎（一夫）、（ドン・）荒川や栗栖（正伸）とか、どの選手も印象深いし、あんな変わりモンの集団をまとめるのは大変だよ！

——ま、そうでしょうね。しかし、当時の選手は「怖い、怖い」と言いながらも、小鉄さんを慕ってますから。

小鉄　そりゃあ、俺は選手の面倒を見たもの！　前田が「ウチのオヤジが倒れました」って言ってくれば、「すぐ帰れ、コノヤロー！」とポケットから10万円をパッと渡した。けっして会社の金じゃないよ？　選手を飲みに連れていくときも、今日はこのグループ、明日はこのグループとまんべんなく連れていったしね。……ま、選手もよく俺の無理強いの練習についてきてくれたよね。いまはアイツらに感謝してますよ。

——小鉄さんも〝無理強い〟と言えるようになってきましたか（笑）。しかし、いまは大学出のレスラーも多いから、いわゆるトンパチがいないですね。

小鉄　みんな賢くなっちゃったよな。俺の時代の選手なんか、給料が出ても、一週間もすればギャラを全部使っちゃうから。「すみません！　ちょっとハガミ（前借り）できないですか？」と毎月、頼みにきたもんだけど、いまの選手なんか、ギャラをもらったら3分の2は貯金するからね。

——そういう部分で、ちょっとさみしい気持ちもありますか。

小鉄　ちょっと、さみしいねぇ（しみじみと）。

——新日本は辞めちゃいましたけど、藤田（和之）や石沢（常光）はPRIDEや『HERO'S』にも上がってますよね。彼らの試合はご覧になってます？

小鉄　石沢は昨年の『Dynamite!!』で負けちゃったけど、……いまのままじゃダメだろう。もっと打撃の練習をしないとね。レスラーは腕が太いからパンチが遅いっていうけど、モハメド・アリなんか全盛期は腕周りが43センチもあったから！

——そんな太さでも速いパンチをくり出してたんですね。

小鉄　年中パンチの練習をやってた

俺の解説は辛口じゃないんだよ。すべてホントのことだからね

ら、違ってくるよ。レスラーももうタックルでマウントを取っただけじゃ勝てない！　プロレスには奥の手だっていろいろあるんだから、俺が総合に出るならもっと悪いことするよ！

――悪いことしますか！（笑）。

小鉄　レスラーにはいざというときの裏技ってもんがいくつもあるんだよ！　ここであなたに教えるわけにいかないけどね。

――一方の藤田に関してはいかがでしょう。

小鉄　藤田はいいモノを持ってるし、寝技をやらせたら強いからねぇ。藤田もタックルが得意だけど……もう、タックルも真正面から行ったら見破られちゃうよね。そういう部分でも俺なんか、次のことを考えてるから！

――タックルの打開策まで考えてましたか。

小鉄　あったりまえだよ！　俺は身体が小さかったから、現役時代に「デカい選手を倒すにはどうしたらいいか？」といつも考えてた。その昔、小沢（正志、のちのキラー・カーン）と道場で柔道をやったときなんか、アイツの柔道着と一緒に胸の肉をつかんでブン投げてやったよ！

――それはヒドい！

小鉄　小沢は「汚い！」と言ってたけど、勝負に汚いもクソもあるかってんだ。……だって俺たちだって悪いことしてたんだから。

――あれ、小鉄さんも反則してたんですか？

小鉄　（声をひそめて）これはいまだったら、やってはいけないことだよ……。でも当時の海外では試合に勝たなきゃ、金にならなかったんだから。だから俺なんかタイツの中に七味とうがらしを入れたり、コンドームの先に針で穴を開けて醤油を入れたり……。

――七味とうがらしに醤油まで！

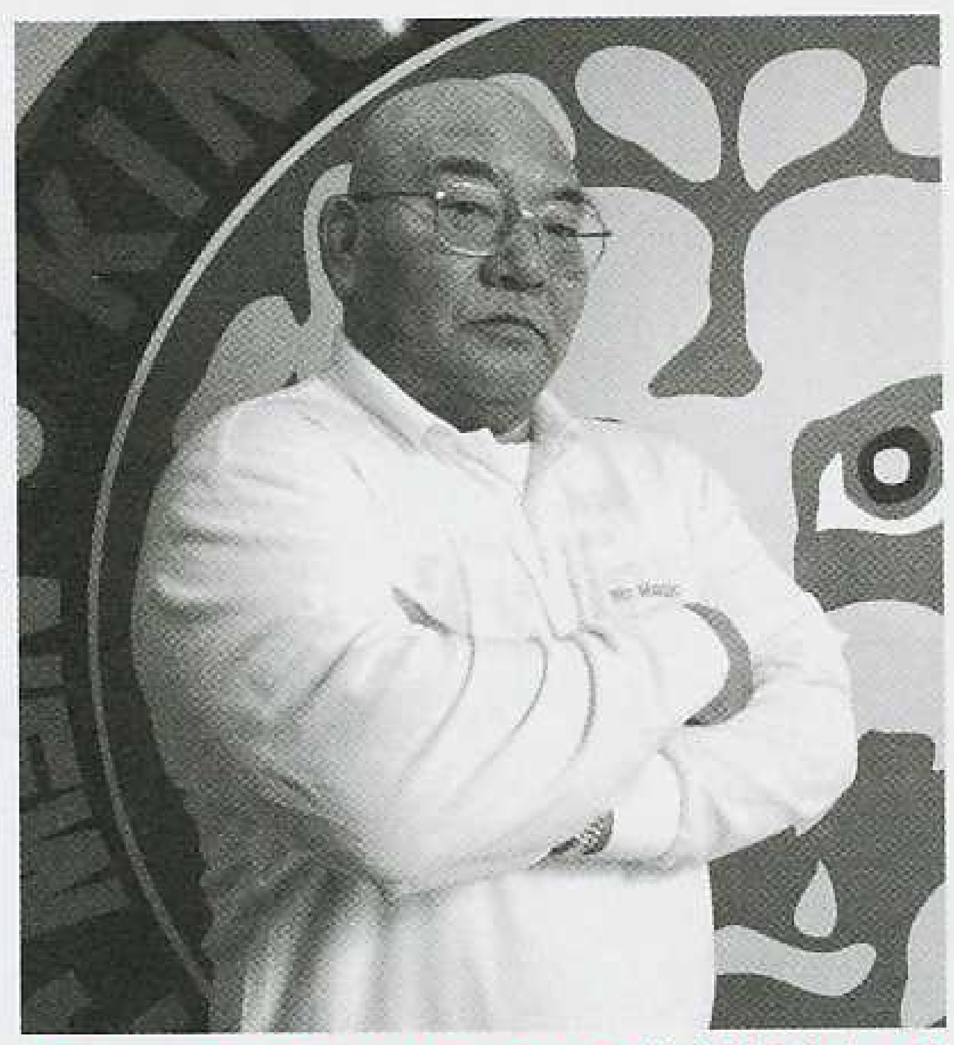
小鉄　コンドームの先にテープでフタをしておいて、相手のうしろに回ってシュッ！　と醤油を目にかけるんだ。それで相手が七転八倒してるところをフォールして勝っちゃう。そりゃあ、お客さんは怒るよね（笑）。

――それはまた、言語道断ですねぇ。

小鉄　でもね。それでお客さんが「汚いジャップをやっつけろ！」とヒートして、会場にガンガンお客さんが来るわけ。俺らは興行収益のパーセンテージでギャラをもらえるから、その反則のおかげでテリトリーの稼ぎ頭になれたんだよ。

――必要に迫られてやられたわけですね。

小鉄　普段は「技と技を競い合う姿こそプロレスだ！」なんて言ってても、昔はそんなこともやってたからねぇ（笑）。



やまもと・こてつ■1941年10月30日、神奈川県出身。63年に日本プロレスに入門、同年7月に北沢幹之戦でデビュー。アメリカ遠征時に星野勘太郎とヤマハ・ブラザーズを結成。帰国後、72年に新日本プロレスの旗揚げに参加し、現場監督や若手レスラーの育成に励む。80年4月、現役引退後は解説者として活躍。享年68。

――ダハハハ！　そんな小鉄さんが注目してる選手はいますか？

小鉄　中邑（真輔）だね。アイツは天性のモノを持ってるし、天狗にならなければいいよね。でもさ、中邑が4年前に入門してきたとき、体重が102キロだったから、俺が「もっと大きくしたほうがいいよ」と助言したけど、「この体重がコンディションがいいんです」と俺の話を聞かなかった。

――小鉄さんの助言を聞かなかった！

小鉄　いま頃、身体を115キロに増量してるでしょ？　もう丸3年も損しちゃってるワケ！　俺らはプロレスが商売なんだから、そういうことはわかるんだよ。テレビ解説してたときだってパッと観たら調子はわかっちゃうからね。

――小鉄さんは解説者としても有名ですけど、おしゃべりのほうは得意だったんでしょうか？

小鉄　いまはペラペラしゃべれるけど、もともとは口下手だったから大変だったさ。解説の仕事は猪木さんから「新聞社の人間が解説するだけじゃ説得力が足らない」ということで頼まれたから、これは本気でやらなきゃいけないと思って〝しゃべり方教室〟にも通ったしね。

――選手時代の小鉄さんを知らなくても、解説者としての小鉄さんを知らないプロレスファンはいませんからね。

小鉄　そりゃあ、一生懸命勉強したよ！　それに俺は解説が辛口だって言われたけど辛口じゃないんだよ。俺が言ってるのはすべてホントのことだからね。

――では最後に小鉄さんが、格闘技界全般で注目してる選手は誰かいますか？

小鉄　いまの日本にはいないねぇ。昔の日本人は勤勉とか真面目ってイメージがあったけど、変わってきちゃってるでしょ。最近は、公園でも運動しちゃいけないなんて、バカげた規則もあるけど、この飽食時代にそんなこと言ってたら子どもはドンドン太っちゃうし、骨も弱くなる！　日本人と外国人とは骨格から違うんだから、日本人には練習をするしか打開策はないんだよ！

――やっぱり日本人に必要なのは「練習！　練習！」ですか。

小鉄　そう。バレーボールにしたって日本人の平均身長はまだ低いし、外国人にはかなわないでしょ？　そこで体格差を補うには技術しかない。そして技術を養うには練習しかないんだよ！　日本のスポーツ界は選手の指導方法に悩んでると思うけど、もっともっと厳しさを加えないとダメさ！

――いまは甘すぎる、と。

小鉄　あったりまえだよ！　スポーツに携わるなら、まず練習！　練習！　それはどの分野だって同じだろ。「東大に行きたいなら、勉強しろ！」だよ！　違う？（と興奮して）。

――いえ、おっしゃるとおりです。

小鉄　会社だってそうだよ？　この前、事務所にレスラーが集まったとき、レスラーたちに「おまえたちは、気合いが足りねぇ！」と説教したんだよ。アイツら、会社に入ってきても〝ちわ～す〟なんて気の抜けた挨拶しやがって。だって、ウチは体育会系の会社だよ！？

――確かにそうですよね（笑）

小鉄　体育会系の会社なら、〝おはようございます！〟とか〝お疲れさまです！〟と堂々と言えってんだ！　「出前持ちの人や宅配便の人でも大きな声で挨拶してやれ！」って言ったよ。そういう部分から、元気を出していれば「新日本はプロレスの会社だけあって、気合いが入ってるなぁ」と感心するじゃない？　そこから始めないとお客さんだって、会場に来てくれないさ！　会社ってそんなもんだよ。違う？

――まったくもって、おっしゃるとおりです！　今日は大変にためになるお話をたっぷりとありがとうございました。

小鉄　ホントにためになった？　俺はまだまだしゃべれるよ！

――いやいやホントに大丈夫です。本当にありがとうございました！

【07年1月24日／都内・新日本プロレス事務所にて収録】

新日本プロレス最強のイメージは小鉄によって築かれた!

山本小鉄 解説伝説！

小鉄といえばやっぱり名解説! という人も多いのではないだろうか。そこで、以前『kamipro』の解説特集で取り上げた小鉄の素晴らしき解説の数々をもう一度クローズアップしてみた。あのね、古舘さんッ! やっぱり昭和新日本最強のイメージを作ったのは山本小鉄って気がします!

※当原稿は『kamipro Special 2009 JULY』に掲載した原稿を再録したものです。

文／井上崇宏

「ねえねえ、僕はお母さんのお腹から産まれたのに、どうして顔がちょっぴりお父さんに似ているの？」

ある日の昼下がり、人間もほかの動物と同じく交尾をしているのだということを知らなかった幼少期の僕は、こんな素朴な疑問を祖母にぶつけた。それに対し祖母は洗濯物をたたみながらしばし黙考したのち、こう答えた。

「うーん、お母さんがお父さんのことを好きすぎて、いつもお父さんのことばかり考えていたから、お腹の中にいたアナタにその気持ちが移っちゃったのかねえ？」

「そっ、そんなにも好きッ!?」

のちにこの祖母の立てた仮説が、完全なるファンタジートークだったことに気づくのにたいした年月はかからなかったが、確かに母は好きすぎて父と交尾をしていたのだろうから、「ファンタジーなれども真実は遠からず」といったところだろう。



80年から『ワールドプロレスリング』で実況&解説席に座っていた伝説のコンビ。神がかった古舘の実況と小鉄のファンタジーあふれる解説は、いま考えても奇跡だ!

「じゃ、じゃああれは？ 中国残留孤児の人たちはもともと日本人なのにどうして中国人っぽい顔立ちをしているの？」

「それもたぶん、自分を我が子のように育ててくれた中国人の人たちに対しての感謝の気持ちが強すぎて、似ちゃったんじゃないかしら？」

あると思います！ なぜなら僕も山本小鉄のファンタジートークが好きすぎて、のちに永遠の小鉄ボイス（クリソツの小鉄モノマネ芸）を手に入れた不思議体験の持ち主だからである。

顔は親父似で声は小鉄。一人の男の声帯にまで変調を与えた小鉄のファンタジートークとは何か？ たとえばこんなラブソングである。

猪木vsブロディ運命の対決・第6戦目。先にリングインをはたした猪木に対し、ブロディは一向に姿を現わす気配がない。

いたずらに時間だけが経過していき、ただただリング上で立ちつくすのみの猪木。そして実況の古舘伊知郎も「おお～っと、ブロディが一向に出てこない！ これは前代未聞のハプニングです！」とこの異常事態に動揺を隠せない様子だ。ざわめきから、ついには白々しい空気が流れ始めた東京体育館。こんな難局を誰よりも早く収束に努めたのが我らがファンタジスタ、放送席の小鉄だった。

「**あのね、古舘さん！** こ、これ、一流のレスラーがよくやる手なんですよッ！ アメリカに〝宮本武蔵を決め込む〟なんて言葉があるのかどうかわかりませんけどねッ、要は相手をじらす作戦なんですよ！ これに猪木選手がイライラしちゃうとちょっと危険ですよッ……！」

真相は試合直前までギャラのアップを画策していたブロディが、控室で入場をゴネまくっていただけである。一度、状況確認のため放送席を離れ、ブロディの控室へと走った小鉄がこの事実を知らなかったはずはない。

（適当な嘘をついて、その場を切り抜けて、誰一人傷つけない、金曜日よりの使者。シャララ！）

そう、小鉄はプロレスが好きすぎて、プロレスとプロレスラーを守るためなら咄嗟にファンタジートークがいくらでも口をついて出てしまう特異体質なのであった。

また、小鉄はディテール王でもあった。

僕の持論では、名解説者とはいかにいい〝小話〟を持っているかということにつきると思う。

元選手だったからこそわかる、試合に臨むファイターたちの心理状態や戦略、テクニックとコンディション。はたまた、プロモーターにし

かわからないであろう対戦実現に至るまでの背景秘話やファイターのモチベーションうんぬん。これらをマスに向けて伝えることが解説者のおもな役どころとなるのだろうが、ただそれだけではおよそ名解説とは言いがたい。

「ディテールを覚えろ。〝小話〟の売りはディテールだからだ」（クエンティン・タランティーノ監督・脚本『レザボア・ドッグス』より）

おとり捜査のため、宝石強盗を企てる名うての強盗団に仲間として潜入せんとする警察官（ティム・ロス）に、同僚の黒人刑事はこう仕込んだ。昔、マリファナの売人をやっていたという設定で、売人時代のこぼれ話を緻密なディテールを挟みながら強盗団の一味に語ることで、〝彼らに自分は同じ穴のムジナであるということをダメ押しで再認識させるためだ。

思えば、小鉄の解説もこの〝ディテール〟が最大の売りの一つであった。「鉄板の小話をたくさん持っている」から〝小鉄〟。

プロレスとはおそらく、いまも昔も世間からは八百長まじりのB級スポーツだと思われているのだろう。とかく世間は〝ガチンコ性〟を好む傾向にある。そこで小鉄は「プロレス＝ガチンコ」であることが前提の解説を心がけようと一計を案じた。

（ディテールを伝えよう。〝ガチンコ〟の売りはディテールかなって気がするからだ）

ディテール重視の解説でプロレスというジャンルが持つあらゆる側面を全面的に肯定する。それが小鉄の解説におけるテーゼだったに違いない。この妙案に気づいてからというもの、小鉄の解説はさらに加速した。

「**あのね、古舘さん！** まだまだ序盤ですけどねッ、睨み合ったあと藤原選手はタイツで両手を拭いたんですね。手の平に汗がにじんでるんですよッ！ それでですね、一方の猪木選手は右手だけを拭いたんですね。そのへんは（緊張の）差があるんじゃないかなって気がしますッ！」（アントニオ猪木vs藤原喜明／昭和61年2月6日より）

「**あのね、古舘さん！** 汗の量の違いで両者のスタミナの消耗具合やダメージを決めつけることはできませんよッ！ なぜなら猪木選手はもともと汗をかきにくいんですッ。それに対して一方の藤波はふだんから汗をかきやすいッ！ あまり参考になりませんよッ！」（猪木vs藤波がらみの試合で毎回力説）

「**あのね、古舘さん！** いま猪木選手の延髄斬りはかすったんじゃなくてね、あえてコツンと入れたわけですッ！ ドーンと当てるよりはコツンと当てたほうが逆に効きますよッ！」（猪木の目測を誤った延髄斬りがほぼ不発に終わったにもかかわらず、相手の選手が猛ダウンするシーンでしばしば力説）

「**あのね、古舘さん！** これはさっきの攻撃で間違いなくアバラが二本折れてますよッ！」（スタミナ切れか、突如失速し始めた選手の状態について診断）

「**あのね、古舘さん！** この選手は確実に体重をサバ読んでますよ！ 公称では130キロとなってますけどねッ、これ135キロあるでしょう！」（あきらかにコンディショニング不足でウェートオーバー気味の選手を、これも作戦の一つだと擁護する解説）

こうして昭和新日本、猪木プロレスの最強幻想は小鉄の解説によって保たれ続けた。ハッスル最大の功労者がインリン様なら、過激な猪木プロレス最大の功労者は間違いなく小鉄である。

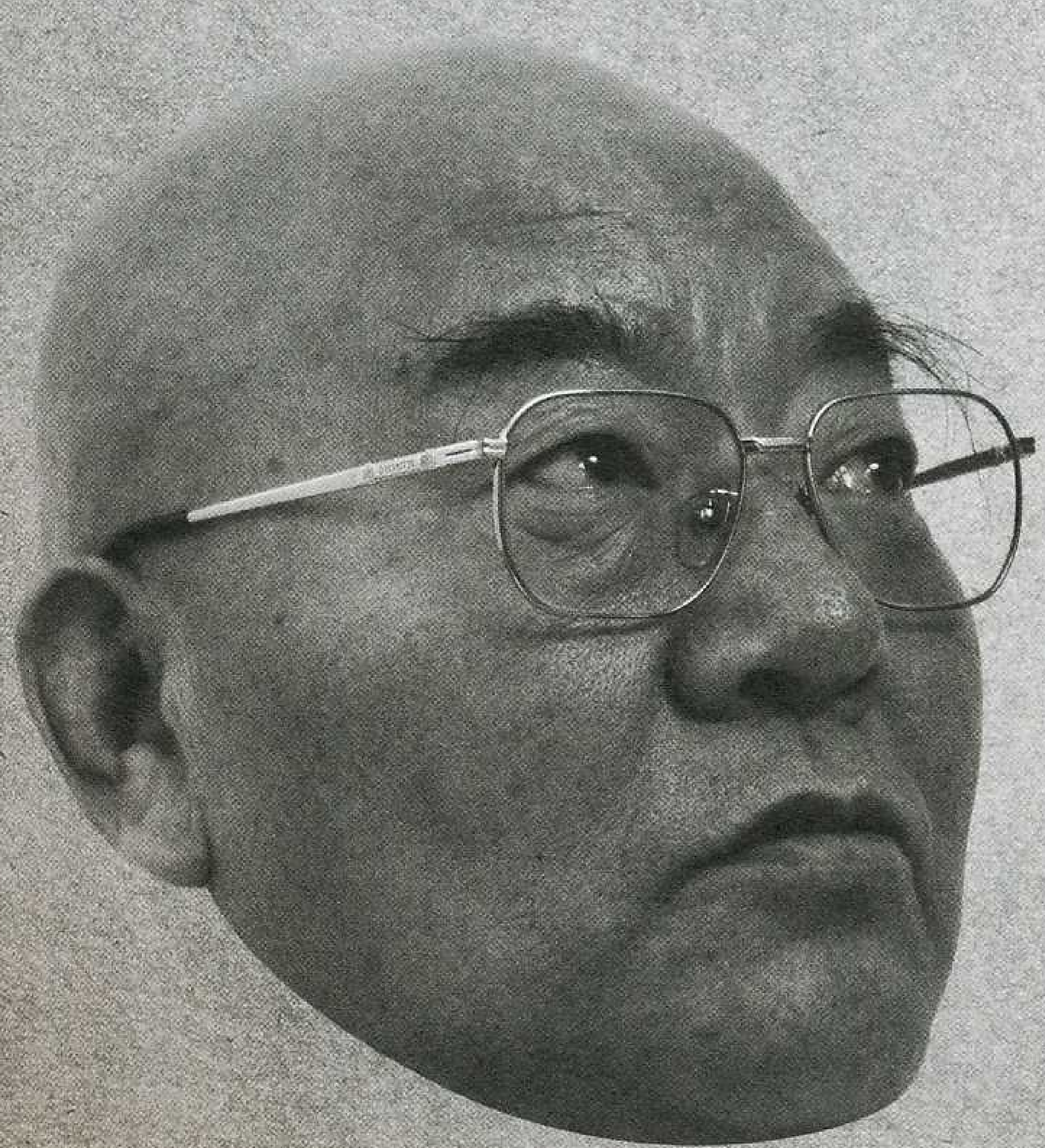
そして平成10年4月4日、東京ドーム。一つの時代が終わりを告げようとしていた。そう、史上最強のレスラー、アントニオ猪木がついに現役生活に幕を閉じる日である。猪木の引退試合の相手はなんと元UFC王者のドン・フライ。しかし、試合はわずか4分9秒、猪木のグラウンドコブラでフライがギブアップをするという意外な結末に終わった――。さあ、この局面ではどう出るのだ、ファンタジスタ小鉄よ！

「何か感づかれたときは……すべきことは一つだ。しゃべり続けろ。しゃべってしゃべりまくれ」（『レザボア・ドッグス』より）

「さてと……」。小鉄はやおら大きく深呼吸をしたあと、猪木プロレス最後の解説まとめに臨んだ。

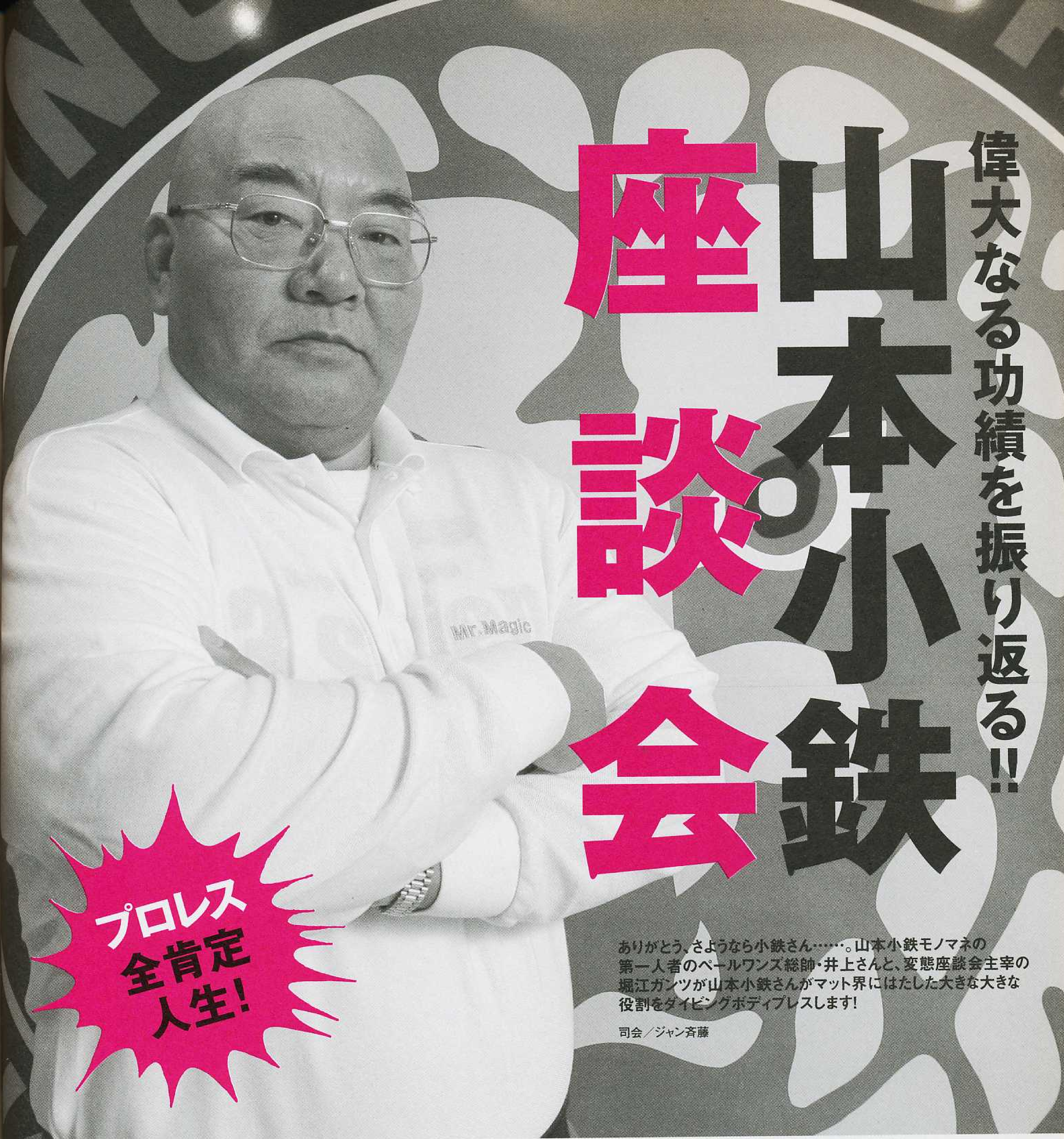
「古舘さんッ、ドン・フライはね、コブラツイストなんか食らったことがないんですよ！ 作戦成功ですねッ!!」（アントニオ猪木vsドン・フライ／平成10年4月4日より）

ファンタジーなれども真実は遠からず。小鉄最高！ シャララ！



あのね
古舘さんッ!

思ってさ。それで「なんのこと？　冗談で
――小鉄さんの死因はノドに何かを詰ま
とがあるんですか？
（笑）。



偉大なる功績を振り返る!!

山本小鉄座談会

プロレス全肯定人生！

ありがとう、さようなら小鉄さん……。山本小鉄モノマネの第一人者のペールワンズ総帥・井上さんと、変態座談会主宰の堀江ガンツが山本小鉄さんがマット界にはたした大きな大きな役割をダイビングボディプレスします！

司会／ジャン斉藤

この追悼座談会はkamipro USTで配信されたものを再構成したもの。冒頭で繰り広げられた〝井上小鉄〟と〝堀江日明〟の追悼モノマネ合戦は一見の価値あり！　本誌をお読みになってからアクセスだ！

――今日はあらためて、先日亡くなられた山本小鉄さんのお話をしていただきたいと思います。しかし、急な話で本当にビックリしましたね……。

井上　ビックリしましたよ……。

ガンツ　ビックリしましたねぇ……。きびさん（＝井上）はいつ知りました？

井上　俺は詳しく話すと、亡くなられたのが8月28日、土曜日の朝でしょ？

――そうでしたね。

井上　で、土曜日の夜中にツイッターを見ていたんだよね。そうしたら、ある人が「いま、アントニオ猪木vs国際軍団の1vs3のビデオを観てる」ってつぶやいてたの。で、その試合のレフェリーって、小鉄さんだよね？

ガンツ　そうですね。

井上　そのツイッターの人が、「小鉄さんが場外カウントをマイクで数えるのが斬新」っていうのをつぶやいていたんだよ。それで俺が、「それはマイクロフォンの中から頑張れって言っているんですよ！」って返したら、ほかの人が「『バウバウ』としか聞こえません」と。だから、今度は「優しさだけじゃ人を愛せないんですよ」と返したんですね。

ガンツ　つまり、小鉄さんネタで遊んでいたんですね（笑）。

井上　うん。そうしたらそこに某選手から、「今朝、山本小鉄さんが亡くなられたそうです」というメールが来たんだよ！　それが夜中の1時すぎ。もう、「はい？」と

思ってさ。それで「なんのこと？ 冗談でしょ？」って返したら、「かなり確実な情報が入ってきました」と返ってきてね。それでも信じられなくて、「嘘でしょう？」って思って。そんなの、どこにも報道が出てないし……っていう感じだね。

――第一報的となって広まったのはグレート小鹿さんのブログ『小鹿注意報！』なんですよね。

ガンツ ボクは日曜日の朝起きてからツイッターで、「小鉄さんが亡くなった」っていう未確認情報みたいなつぶやきを見たんですよ。それから、きびさんのツイッターを見たら、「信じ難いことが……」って出てたから、「あ、本当なんだ」と思ったんですよね。

井上 あれは願掛け的な、「んなわけねえじゃん！」って意味だったんですけどね。

――新日本プロレスも、本当は月曜日まで報道は差し控える方向だったみたいなんですよ。でも、表に出ちゃったから混乱を押さえるという意味もあって翌日に発表をしたみたいですけど。

井上 そうだよね。で、さらにさかのぼれば、俺、前日の金曜の夜にたまたま新日本のある人たちと食事をしていて、「これから小鉄さんと井上さんでいろいろとやっていきましょうよ。小鉄さんも乗り気ですよ」という話をしてたんだよね。「もう絶対やるやる!!」と。

――要は猪木さんと春一番みたいに（笑）。

井上 そうそう、一緒に営業に出ようと（笑）。そんな話で盛り上がっていた矢先の出来事だから、よけいに「嘘でしょう？」って思って。新日本の人たちも小鉄さんはあいかわらず元気だって言ってたんだもん。

――小鉄さんの死因はノドに何かを詰まらせてってことらしいですけど。

井上 そうだよね。だから、病死じゃないんだよね。言ってしまえば、事故死なんだよね。

ガンツ だって、家族と一緒に軽井沢へ遊びに行っていたんですもんね。

――だから、みんないまでも信じられないんですよね……。

井上 うん。最初は悲しいとかじゃなくて、驚くしかないんだよ。

――そうなんですよ。ところで、お二人は小鉄さんとは実際にお会いになられたことがあるんですか？



本文中でも触れられているが、かつて"井上小鉄"はご本人登場という鬼軍曹ドッキリを仕掛けられたことも。小鉄さんはノリがいい。ただの頑固オヤジなわけじゃない。

井上 俺はそれこそｍｉｍｉｐｒｏ（本誌ポッドキャスト）ですよ。小鉄さんのモノマネをしていたらご本人が登場するというドッキリを仕掛けられてね。お会いしたのはあれが最初で最後。もちろんファン時代は会場で会って、「握手してください！」とかはあったよ。でも、この仕事をやり始めて、小鉄さんと会ったのはあのドッキリが最初で最後だね。だから、あのドッキリには本当に『ｋａｍｉｐｒｏ』を恨んだけども、いまは心底感謝ですよ。

――うちは恨まれてたのか！（笑）。

井上 うん。でも、こう言っちゃなんだけど、あのｍｉｍｉｐｒｏが生涯のベストパフォーマンスというか、あの日が俺の人生のピークというか（笑）。

――なるほど（笑）。まあ、小鉄さんもモノマネを認めてくれたんですもんね。

井上 ただ、このあいだも追悼ということで、ずっと『ＹｏｕＴｕｂｅ』で小鉄さんの映像を探して観てたんだけど、よくよく観ると「なんか小鉄さんぽくねえな」なんて思ってさ。俺の脳内の記憶と実際の小鉄さんは全然違うんだよ（笑）。

ガンツ ガハハハハ！ きびさんの脳内で勝手に変換されていたわけだ。ちなみにボクは一度インタビューをさせてもらったことがありますね。それと、ＧＫ金沢克彦さんと松下ミワが先生と生徒という設定でやっていた「新日本凸凹大学校」という企画でお会いしました。

――あれは凄い伝説的な企画でしたよね（笑）。

ガンツ そうそう、プロレスど素人の松下ミワが、こともあろうに新日本の上野毛道場で永田裕志にプロレスを教わるという（笑）。

井上 なんちゅう企画だよ！

ガンツ いま考えても無謀な企画ですよね（笑）。それで松下が道場に入ったら、いるんですよ、小鉄さんが。

井上 うわ～、こええ！

ガンツ ムチャクチャ怖かったですよ（笑）。それで小鉄さんに「何してんの？」って聞かれたから、「プロレスを習いに来ました」って答えたんですけど。

井上 よくそんなことを言えるなぁ……。俺、ご本人の前でのモノマネでも相当、肝を冷やしたんだよ？

ガンツ 小鉄さんの顔色が途端に変わりましたからね。それで道場の床を指さして、「これ、黒くなってるでしょ？ なんでかわかる？ 全部汗なんだよ、スクワットで垂れた」って説明してくるんですよ。

井上 ああ。汗がシミになってるんだね。

ガンツ で、「私はね、指一本でキミを殺せるんだよ」って（笑）。

――ハハハハ！ 始まった（笑）。

ガンツ うん。松下がすっかりビビっちゃって（笑）。でも、一通り企画の主旨を説明したら、「終わったら、チャンコ食べていきなさい」って言ってくれたんですよ。最後は小鉄さんを囲んで、合宿所の中でチャンコをご馳走になりながら、「結婚生活はどうあるべきか」っていう話を聞いたん

「私はね、指一本でキミを殺せるんだよ」新日本の道場で小鉄さんはこう言った

ですけど。

井上　本当にひどい企画だね！　本当にひどいよ（笑）。

ガンツ　でも、驚きますよね。なんで小鉄さんが道場にいるんだろうって（笑）。

井上　小鉄さんは日頃からずっと道場にいたんだよね。コーチとかはもうやってなかったんだけど、自分の身体を鍛えるために。だから、小鉄さんっていうのは本当にプロレス界の守護神なんだよ。

——ちなみに今回の『kamipro』って猪木特集なんですけど、歴史上ストロングスタイルを作ったのは、猪木さんということになってるじゃないですか？

ガンツ　でも、前田日明は、「みんな勘違いしてんだけどね、猪木イズムとかね、ストロングスタイルっていうのは全部小鉄さんなんですよ」って言ってますからね。

井上　ただ、そこはそうとは言いきれないよね。やっぱり、猪木さんというスターがリング上にいてこそだから。みんなあの光り輝くスーパースターを目指して、裏で血のにじむようなリアルな練習が行なわれていたというか。

ガンツ　だから、Uインターのときの高田延彦と宮戸優光と同じ構造ですよね。エースと参謀および道場責任者。

井上　そうだね。猪木・小鉄ラインと高田・宮戸ラインは一緒だよね。Uインターに宮戸だけいれば良かったのかっていうと、それも違うし。

ガンツ　あきらかに違いますね（笑）。

井上　それじゃあ興行はできねえぜっていう（笑）。

——そりゃそうだ。それにしてもあの練習量がストロングスタイルを生んだわけですよね。日本プロレスイズムというか。

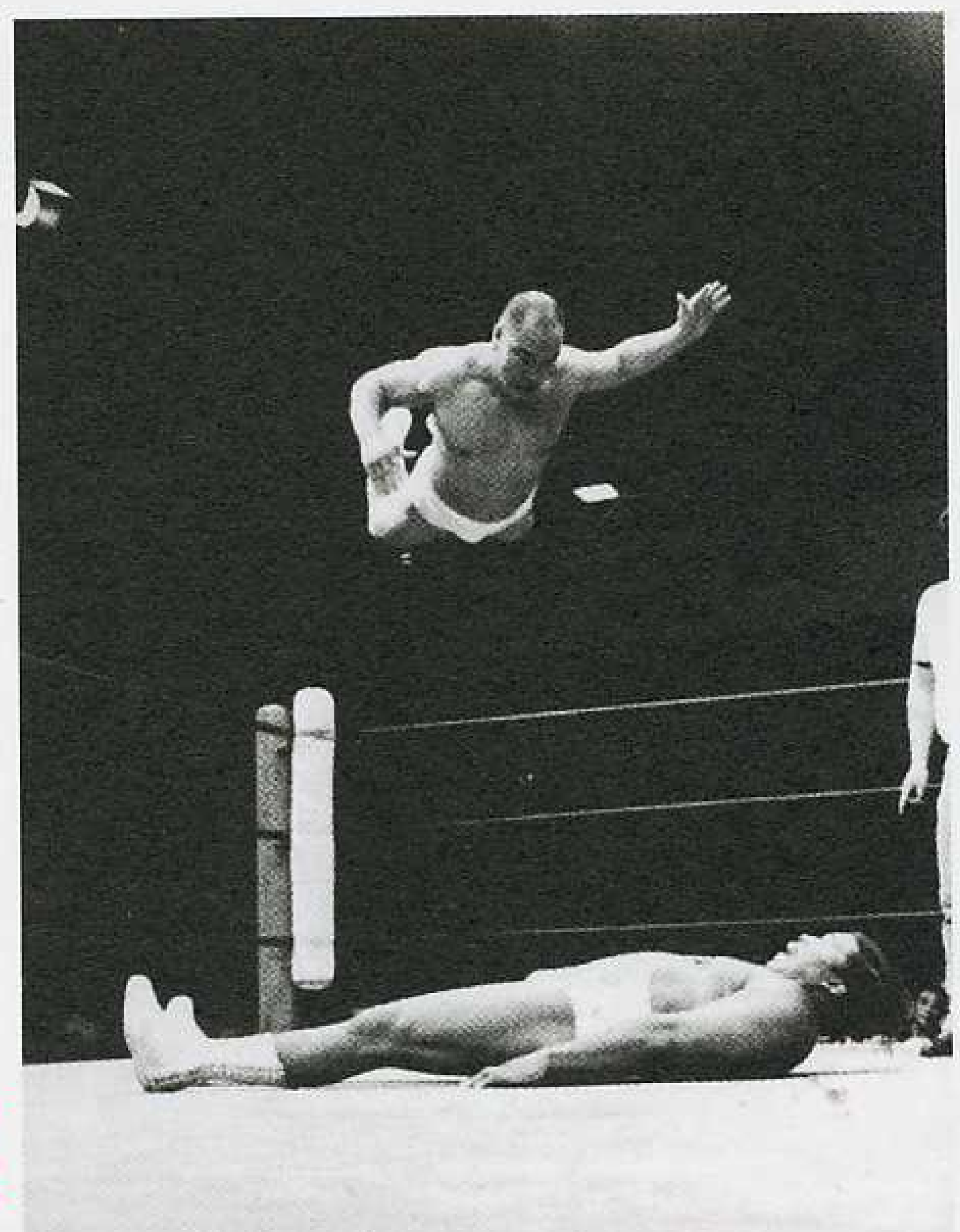
ガンツ　いや、日本プロレスって、小鉄さんが入ったときはすでに〝ダラ幹〟の時代だったからね。

——出た、梶原一騎責任発言の〝ダラ幹〟（笑）。

ガンツ　もう本当に練習とかしていない状況だったんだけど、小鉄さんだけは異常に練習していたっていう。だから、そのへんは小鉄イズムなんですよね。身体が小さいから他人よりもやらなきゃいけない。あの当時は相撲出身の人が多いじゃないですか？

——小鉄さんはボディビル出身でしたよね。

ガンツ　うん。しかも公称170センチの小柄でね。実際は170もないでしょう。それがプロレスラーとして生きていくには、誰よりも練習して強くなるしかないっていうことだったと思うんだよね。藤波にしても小さいし、スポーツ歴もとくにないし。そういう人間をプロレスラーとして一人前にするには、自分がやってきた方法で徹底的に鍛えるしかないっていう信念だったんでしょう。「俺たちは何もないんだから、練習するしかない‼」ってね。



ズバリ言って、小鉄さんの現役時代の活躍を知らないファンは多いだろう。しかし、小鉄さんは解説者、鬼軍曹、マッチメイカー、アイデアマンとしてあらゆる角度からプロレス界を支えてきたのだ。

道場の幻想を発生させプロレス中継では言葉によって説得力を持たせた

井上　だから、中邑真輔がツイッターで、「強ければ誰も文句を言わないって小鉄さんに言われた」って紹介していたけど、そういうことなんだよね。強くなるにはひたすら練習するしかない、と。そういえば、ある他団体のレスラーが新日本のリングに上がったときに、キックを打つ際に音を鳴らしたらしいんだよ。

——ああ、太ももを叩いて。ウチでも以前特集したことのある〝効果音プロレス〟ですね。

井上　うん。で、それを見た小鉄さんが、「おまえ、新日本のリングで何やってんだ！」って怒ったんだって。で、その選手が、「じゃあ、どうしたらいいんですか？」って聞いたら、「そんなの、入れちゃえばいいんだよ！」って答えたっていう。

——なるほどね（笑）。もしかしたら、いまの格闘技ファンにとって、小鉄さんのプロレス観って非常にわかりづらいモノかもしれないですね。だって、「入れちゃえばいいんだ」と言いつつ、小鉄さんはプロレスの領域を守るわけじゃないですか？

ガンツ　つまりリアリティを出すためにはそうしなきゃダメだっていうことなんだよね。

井上　そうそう。決してリアルじゃなくていいんだよね。リアリティを出せってことなんだよね。

——でも、結局、佐山サトルとか前田はリアルな格闘技方面に向かってしまうわけじゃないですか？　そこもやっぱり小鉄さんの影響があるんでしょうね。

ガンツ　絶対にあるでしょう。宗教のように「プロレスラーは誰よりも強くなきゃいけない」って洗脳されてトレーニングをしてきてたら、「俺たちは本当はできる人間なんだ」って思うでしょう。若いからプロレスラーであることにいろいろコンプレックスもあっただろうし。

井上　だから、総合格闘技なんてこの世の中になかった時代においては、新日本、全日本、国際プロレスの各道場が唯一総合的な格闘技の道場だったっていうことだよね。で、そこで死ぬような練習をしていれば、「俺ら、世界最強だろう！」って思っちゃうのも不思議ではないよね。しかも、親分の猪木さんはリング上でキックボクサーだの柔道家だのをビシビシ倒してるわけだし。

ガンツ　でも、上の人はハッキリ言って、そんなこと思ってなかったと思うんですよ。ちゃんとプロレスができればいい、と。それがあの道場の世界しか知らない若者たちを、小鉄さんが徹底的に鍛えて、徹底的に洗脳していたら、成長してそういう革命的な運動を起こし始めちゃったってことでしょう。

——話はおもいきり変わりますけど、解説者としてあれだけインパクトのあるキャラクターはいないですよね。

井上　完璧でしょう（笑）。

——いまでも解説者っていったら、小鉄さんの名前が出ますもんね。

井上　だから、道場の幻想を発生させた人でもあるし、プロレス中継では言葉によっ

てプロレスに説得力を持たせてたという。

——そんなバカな（笑）。

井上　もう、最高だよ！（笑）。

——いや、最近の総合格闘技の若手選手を

前田日明とか誰もが小鉄さんの練習を誇りにして、その後の人生を送っている

てプロレスに説得力を持たせてたという。会場でも道場でも一人でストロングスタイルを布教していたということですよ。

ガンツ　道場では若手に「プロレスとはこういうものだ！」って洗脳していたわけじゃないですか？　で、ボクらはテレビを通じて、小鉄さんの通信教育を受けていたんですよね（笑）。

井上　サテラインゼミだよね（笑）。

――そういえば、宮戸は解説も小鉄さんの影響を受けてましたよね？

ガンツ　もう完全にマネでしょう（笑）。

井上　だってさ、当時、たまにTBSでUインターの中継をやってたんだけど、宮戸はリング上で何か事件が起こると、小鉄さんばりに放送席を離れちゃうんだもん。

ガンツ　ねえ。しかも、あれたしかアフレコなんですよね（笑）。

井上　ええ……!?　嘘だろ！

ガンツ　本当ですって（笑）。

――わからない人もいると思うので、ちょっと詳しく説明してもらいましょう（笑）。

井上　要は古舘伊知郎さんの名ゼリフで、「山本小鉄が放送席を離れるとき、一つのドラマが生まれる！」っていうのがあったんだよね。小鉄さんは解説者であると同時に審判部長だったじゃん？　だから、リング上でアクシデントがあったりすると、その裁定を下すために、放送席からリングに向かうんだよ。そのムーブをUインターの中継で、宮戸が再現していたんだけど、それがいまガンツくんの話によると、アフレコだったという（笑）。

――そんなバカな（笑）。

井上　アフレコで放送席を離れるって……。どういうシチュエーションでやってるの？　超変態じゃん！　それ、ガンツくんの作り話だよね？

ガンツ　僕の記憶が正しければホントです（笑）。だって、リングサイドに放送席なんかなかったじゃないですか。

井上　ああ、そういえばいつも宮戸はセコンドについてたよね……。

――凄い話だなぁ（笑）。まあ、宮戸にもそれほど絶大な影響を与えた小鉄さんの解説なんですけど、一番印象深いものってなんですか？　有名なところではかすっただけの猪木さんの延髄斬りを絶妙な解説でフォローしたっていうのがありますけど。

井上　ああ、あれね。猪木さんがたまに延髄斬りを空振りしちゃってたことがあるんだよね。でも、延髄斬りはアントニオ猪木のスペシャルな技じゃん。だから、たとえ空振ったとしてもガイジンはおもいっきりダウンをするんですよ。それで古舘さんが、ソフトに「ああ、これはちょっと当たりが浅かったか……」って言うんだけど、小鉄さんがすかさず、「いや、ドーンと当てるよりもコツンと当たったほうが逆に効きますよ！」って完全フォローするの（笑）。要は猪木さんは失敗したんじゃなくて、あえてかすらせてんだよって言ってるんだよね。

ガンツ　だいたい失敗すると全部そうですよね（笑）。

山本小鉄座談会

井上　もう、最高だよ！（笑）。

――よく即座に出ますよね（笑）。しかも、迷いがないわけでしょ？

井上　ない。道場での鬼軍曹ぶりもそうだけど、とにかく人生がプロレス全肯定なんだよね。だから、いくら歳を取ってもバッキバキに身体を鍛えるということになるんだよ。だって、小鉄さんちの近所に事務所があるヤクザの子分たちが小鉄さんを見かけると、「お疲れさまです！」って挨拶するっていうんだから。アウトレイジたちも思わず頭を下げてしまうというそのリアリティ（笑）。凄いよね。

――というか、ボクが子どもの頃から全然風貌が変わらなかったんですよ。

井上　変わらない、変わらない！　身体の厚みがね！

――ずっと山本小鉄のまんまなんですよ。だから亡くなった実感がない。

井上　しかも、子どものときに見た、白ポロシャツ、白短パン、白靴下、白シューズのまんまでどこでも出てくるからね（笑）。

――もうミッキーマウスがずっとミッキーマウスであるように、山本小鉄もずっと変わらないんですもん。

井上　そうそう。不老なんだよね。でも、不死じゃなかった。そこが悲しいよ。

――そうなんですよねぇ……。

ガンツ　でも、小鉄さんの意志やイズムは確実に受け継がれていってますよ。だって、前田日明とかあの時代を生きた誰もがあの練習を誇りにして、その後の人生を送っているわけじゃないですか？

井上　そうだよね。前田が所英男や宮田和幸に同じ練習をやらせているわけでしょ？　本当に彼らにとってはあの新日本道場で練習をやったってことが誉れなんだろうね。

――いや、最近の総合格闘技の若手選手を見ていると、プロレスの道場のシステムがいかに重要だったかわかりますよ。自我を完全に崩壊されて、プロの在り方というモノを叩き込まれるじゃないですか？　あのシステムは凄いですよね。

井上　それをいまスネークピットでやろうとしているのが宮戸だよね。だから、鈴木秀樹とか、ちょっとおかしいもんね。目つきとか普通じゃないし（笑）。

――IGFの前座の試合とか危なそうですもんね（笑）。じゃあ、小鉄イズムはスネークピットに受け継がれている、と。

井上　うん。それと最近気づいたんだけど、山本“KID”徳郁のクレイジー・ビー。あそこにも最近小鉄イズムを感じるんだよね。

ガンツ　そんなバカな（笑）。

井上　いや、小鉄イズム継承の宮戸が、当時Uインターの道場にレスリングとムエタイのコーチを招き入れたじゃない？　いま、クレイジー・ビーもまったく同じ動きをしてるんだよ。当然レスリングのスペシャリスト揃いだし、タイ人のコーチも呼んでるっていう。だから、俺はあそこにも熱視線を送ってんだよね。

――ということで結論としては、小鉄イズムはスネークピットとクレイジー・ビーに受け継がれている、と（笑）。

井上　そういうことです！　同じ山本姓だし。だから、小鉄イズムというものをもっとよく理解するためにもガンツくん、一緒にクレイジー・ビー研究をしませんか？

ガンツ　けっこうです（笑）。

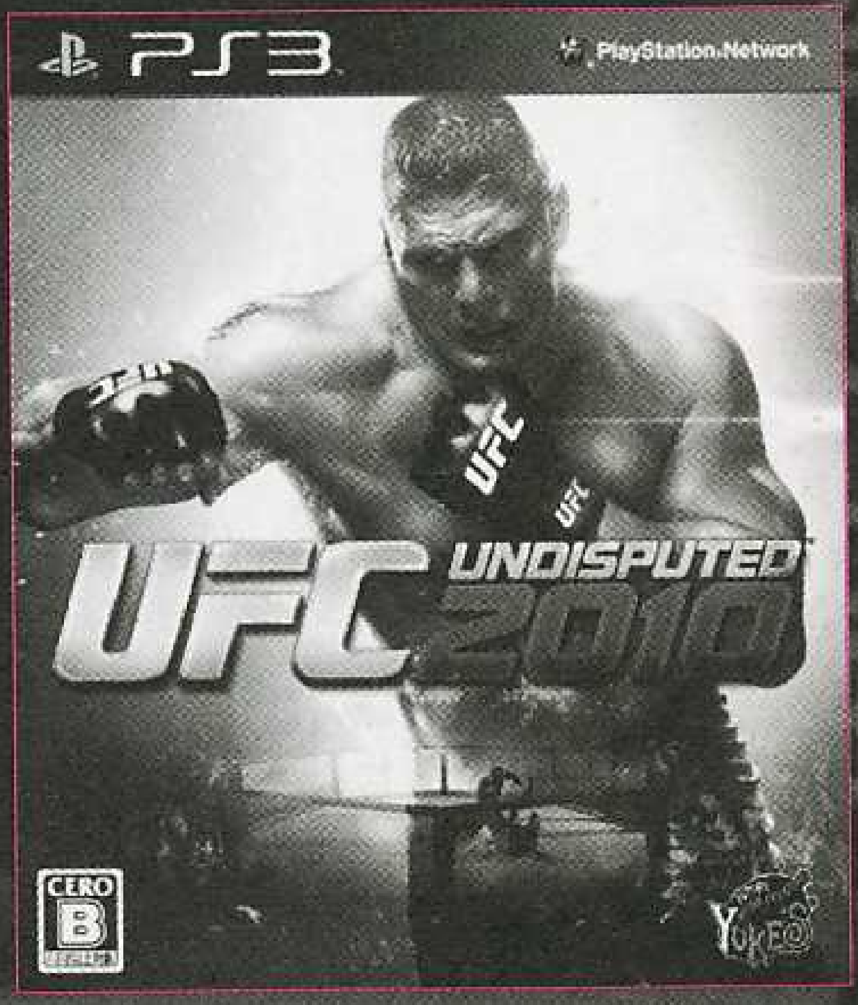
井上　山本小鉄さんのご冥福を心よりお祈りします。小鉄さん、本当にありがとうございました!!

【10年9月1日／UST配信したものを再構成】

圧倒的リアリティ、クオリティ!! 他の格闘技ゲームはジョークだ!

UFC UNDISPUTED 2010 制作秘話

作った人／大塚相



PS3、Xbox360用ゲームソフト『UFC Undisputed 2010』

登場ファイターが100名以上! 400万本を記録した前作を超えるクオリティ。UFCのすべてをゲームの世界で体現できる『UFC Undisputed 2010』――!! 4つのモードでユーザーを飽きさせない。ほかの格闘技ゲームはジョークにすぎない!

価格／7,329円（税込み）
発売元／株式会社ユークス
CERO／B（12歳以上対象）

――ユークス本社開発室チーフプランナーの大塚さんは、この『UFC® Undisputed™ 2010』（以下『UFC』）にどのように関わったんでしょうか。

大塚　簡単に言うと、このゲームをどういうものにするのかを決めて、そしてチームを動かしていくポジションです。開発自体は弊社でやっているのですが、クライアントはアメリカの会社ですので、そういう意味ではアメリカと日本の合作になりますね。

――大塚さんはWWEのゲームにも関わってきたそうですが、やっぱり『UFC』とは作り方が違ってきますよね。

大塚　へんな言い方なんですが、最初は何から手をつけていいかわからなかったんですよ（笑）。やっぱりプロレスゲームのやり方をそのまま持ってこられないんで、どこから手をつけていこうかとずいぶんと悩みましたね。総合格闘技ってプロレスと違ってある意味、型がない。型がないものを型にしていく。なので、アニメーションのデータにしても考え方をガラッと変えました。

――見せ方もぜんぜん違ってきますよね。

大塚　そうですね。プロレスであればポイント、ポイントで見栄えのするようなアニメーションを作るのですが、それを『UFC』でやってしまうと、格闘技のリアルさとかけ離れてしまう。なのでチーム全体で考え方をガラッと変えることから始めました。そうしないと進まない、と。

――じゃあ、チーム全体でUFCを勉強されたりしたんですね。

大塚　そうですね。もともとプロレスをやっていたチームなんでUFCも知ってはいたのですが、自分たちが作る題材としては観ていなかったので、ありとあらゆる動画を集めてイチから勉強しました。

――題材として見直した場合にあらためて気づいたことってありますか?

大塚　ちょっとこれはゲーム寄りの考えなんですが、総合格闘技って選手と選手が密着する状態が凄く多いんですね。プロレスにしても当然密着した状態はあるんですけど、格闘技のクリンチやグラウンドとはちょっと違うじゃないですか。選手と選手の距離がゼロになる。そういう状態でも両方のプレイヤーが自由に操作できることを目指して、そしてこの密着した状態でいかにおもしろく遊べるかという仕組みを作ることに苦労しましたね。

――逆に膠着を取っ払ってキャラクターだけで勝負する考えはなかったんですか?

大塚　それをしてしまうと、せっかくいただいた「UFCを再現したゲーム」というお題に対する答えをちゃんと出せてない気がして、そっちにはいかずに。それは茨な道でしたけど……（笑）。

――しかし、膠着の表現は難しそうですね。

大塚　このシリーズは実際に物理演算を使って、選手同士の肉と肉が当たれば、そこでちゃんと反発を起こすっていう仕組みになっていまして。

――へえ～、それは凄い!!

大塚　それが密着を表現するうえで一番のチャレンジでした。その物理計算を初めて格闘アクションゲームに取り入れることになったんですけど。

――それはプレイすると、その感触はわかるんですか?

大塚　いや、まったくわからないですね。

――わからない。わからないけど、そういうことをやっているぞ、と!（笑）。

大塚　そうですね（笑）。密着感もそうでしたが、UFCの再現とゲームとしてのおもしろさのバランスの取り方は大きなテーマでした。たとえば、膠着状態からのブレイクは入れたいんですけど、入れちゃうとゲームのテンポとしてどうなんだろう?と。遊びの部分での表現が難しくなるわけですからね。

――あと格闘技だと瞬間で勝負が決まってしまうケースもあるじゃないですか。パンチやキック一発で。

大塚　そうですねぇ。ゲームでも打撃一発で終わる可能性を入れているんですけど、そこは最後の最後まで調整して。当然、人によって意見が違うんですね。

――どこまでその頻度を増やすかってことですね。

大塚　そうです。一発のパンチやキックで倒されるのが総合格闘技、MMAの醍醐味でもあるから、そ

の頻度は少し高めのほうが常に緊張してもらえるん

したね。あとサウスポーの選手はゲームでもそうし

dress or





レスナー、アンデウソンらUFCの絶対王者たちはもちろんのこと、秋山成勲や岡見勇信もプレイできる!! つまりアンデウソンvsソネン戦やロイ・ネルソンのお腹を再現できるってことだよ!

の頻度は少し高めのほうが常に緊張してもらえるんじゃないか、と。でも、それぱっかりになっちゃうと、グラウンドの展開を楽しんでもらえないまま終わってしまうので。チーム内でも意見が割れて、最後まで調整は難しかったですね。

——そこが問われるのはゲームセンスですか？ それとも格闘技観ですか？

大塚 最後はゲームですね。実際、格闘技を観ている目で作ると、すべて納得がいくんですけども、自分がプレイヤーになっちゃうと納得がいかない部分がありますんで。

——ゲームとしてのおもしろさの部分ですね。

大塚 はい。最後の最後は「UFCをモチーフにしたテレビゲームのバランスはどうだろう？」というところで考えました。

——まあでも、プロレス格闘技ゲームって、ここ20年くらいでだいぶ進化というか実際の格闘技・プロレスで起こっているセオリーが取り込まれてきてますよね。

大塚 そうですねぇ。最近ヒョードルが負けたときに、たしか汗かいてないから相手の三角絞めから脱出できなかったという事実が出てしまったので、汗の量がサブミッションの極まりやすさに影響する、なんていうのも、今後、もしかしたらゲームに反映させるかもしれないですよね。

——でも、そこまでいくと一般の方はわからないですよね（笑）。

大塚 たぶん、こういうタイトルって格闘技を好きな方が買ってくださるので、そういう細かいポイントを盛り込んでいけば「ニヤッ」としてもらえるんじゃないかな、と（笑）。今回から導入した金網の使い方にしても、グラウンドの得意なファイター、たとえばノゲイラとかは金網のそばであれば、金網を使ってスイープできるようになっています。

——さまざまなファイターにそれぞれの特別なオプションがあるんですね。

大塚 そこは二作目なので力を入れまして、今回は金網を使った攻防と金網を使った特別な技を入れましたね。あとサウスポーの選手はゲームでもそうしたり。

——チラっと聞いたんですけど、実際のUFCと同じようにゲームでも関節が極まりにくくなってるんですか？

大塚 サブミッションはそうですね。

——最近はそうでもないですけど、いわゆるボクシング主体のゲームプランが多かったじゃないですか？ それが反映されていると？

大塚 一部あります。

——あるんですか（笑）。

大塚 全体の流れとして、サブミッションの決着は若干難しくしていますけど、ポイントさえ押さえればサクっと極められるようにもしています。

——打撃の場合はダメージの蓄積がありますけど、関節の場合は一瞬で終わっちゃいますもんね。

大塚 そうなんですよね、そういう意味でサブミッションは、KOと同じようにバランスがちょっと難しいところですね。ロープエスケープがあるわけではないので、ある程度プレイヤーには敷居が高いかもしれないのですけど、そこはチャレンジしてもらいたいな、と。そういうバランスにしてあります。

——あと、どのスポーツゲームにも言えることなんですけど、選手の能力値って誰がジャッジするんですか？

大塚 それはUFCですね。最初は僕らが設定するんですが、最終的にUFCがチェックします。このゲームって発売されたあともオンラインにつないでくれたら、アップデートされていくんですけど、それもUFCがチェックしてくれます。

——じゃあ直近の戦績に合わせて能力値も変わっていくんですね。凄いな（笑）。

大塚 実際のゲームのメニューのなかに選手の能力が表示されますのでアップデートされるたびに確認するのもおもしろいですよ。

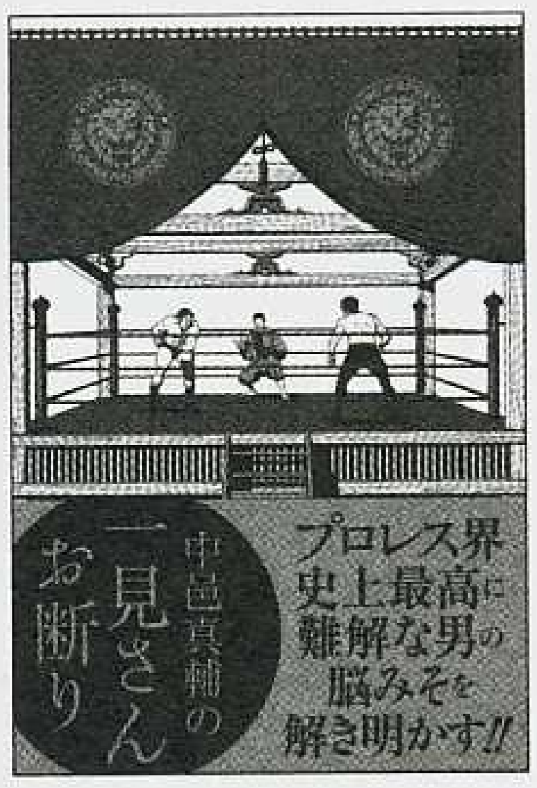
——わかりました。やり込み度満点のゲームということで読者の皆さんもぜひ楽しんでください！

【10年8月某日 エンタープレインにて収録】

kamipro books

驚ガク! 衝ゲキ!! kamipro booksシリーズ!
死闘インタビューの歴史的目撃者になれ!!

中邑真輔の一見さんお断り



プロレス界史上最高に難解な男の脳みそを解き明かす!!

昨年、唐突にアントニオ猪木への挑戦をリング上でブチ上げて物議をかもすなど、その行動と発言が刺激的な男・中邑真輔。そんな男が初の単行本をリリース。"プロレス界で最も難解な男"がつぶやく10万字!! その名も『中邑真輔の一見さんお断り』。タイトルとは裏腹に一見さんは大歓迎だったりする内容です!

B6変型判 224ページ
定価=1,890円(本体1,800+税)

悪役道 ヒールたちのブルース



悪の道を歩けるのは選ばしれ者のみ!

"悪の道"に精通する豪華16名が珠玉の"ヒール哲学"を激白! 反則攻撃、挑発行為、ラフファイト、モンスター、エゴイスト、アナーキスト、アンチヒーロー……。悪とは何か? 悪役とは何か? 本書は因縁の内藤大助戦に勝利を収めた亀田興毅をはじめ、『kamipro』誌上に掲載されたさまざまな悪役のインタビューを厳選収録。時代に憎まれし、ヒールたちのブルースを聴け!

B6変型 304ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

新日本プロレス学習帳



"業界の盟主"の魅力を凝縮したインタビュー12連発!

★鈴木みのる&獣神サンダー・ライガー★小林邦昭★平田淳嗣★金本浩二★山本小鉄★新倉史祐★田中秀和★中西学★天山広吉&金原弘光★マサ斎藤★永田裕志★中邑真輔

『kamipro』に掲載された新日育ちのレスラー&関係者のインタビューが一冊に! これを読めば老舗団体の過去・現在・未来がまるわかり!

B6変型判 320ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

魔王 秋山成勲 二つの祖国を持つ男



秋山成勲なのか チュ・ソンフンなのか——。

2006年12月31日大晦日、秋山成勲vs桜庭和志戦で発生したクリーム塗布事件。この一件以降、秋山は日本では悪質な反則選手、片や韓国では悲劇の元・在日韓国人と、評価が真っ二つに分かれた。本書籍は秋山成勲が、柔道界での挫折ののち、総合格闘技家としてデビューして"魔王"と呼ばれる怪物に至るまでを検証するノンフィクションだ。

B6変型判 264ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

生前追悼 ターザン山本!



え、ターザンが死んだ!? 90年代プロレスを徹底検証!

★浅草キッド★いしかわじゅん★堀辺正史★更級四郎★松本晴夫★杉山頴男★谷川貞治★山口日昇★金沢克彦★市瀬英俊★小島和宏★菊地成孔★Oka-Chang★原タコヤキ君★椎名基樹 ほか

『週刊プロレス』編集長として辣腕を振るった山本さんの人生を通して、90年代プロレスブーム、はたまたプロレスという生き様を振り返る!

B6変型判 304ページ
定価=1,470円(本体1,400円+税)

PRIDE機密ファイル 封印された30の計画



ついにその秘密のベールを解禁!! PRIDE幻の超極秘プロジェクト!!

★高田vsヒクソンの前座に前田日明登場!?★長州力、橋本真也、船木誠勝の参戦計画★ホイスvsケアー消滅の計画★PRIDEが小錦獲得に動いた!?★"皇帝"ヒョードルを二度破った男 ほか

その消滅から早2年——世界最高峰のリングに封印された30の計画を発掘! さらに青木真也、三崎和雄ら6大インタビューも同時収録!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

U.W.F.変態新書



ダメな大人たちへ捧げる "変態"とUWFの晩餐!

★UWF★前田日明★船木誠勝★高田延彦★桜庭和志★ターザン山本!★キン肉マン★PRIDE★プロレス★変態とは何か?(菊地成孔スペシャルインタビュー)★変態解説

プロレス界の一大潮流となったUWF。そのUWFに人生を学び、人生を狂わされた変態的プロレスファンたちが、UWF神話を語り倒す!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本隊1,600円+税)

八百長★野郎



ミスター高橋本から7年…… "呪いなき"時代のプロレス再入門書!!

★マッスル坂井★大槻ケンヂ★菊地成孔★森達也★杉作J太郎★ミスター高橋★菊池孝★高木三四郎★ハチミツ二郎★鶴見亜門★プロレス業界初"台本"全文掲載!

カミングアウト当事者から元ファンの知識人まで総動員してプロレスを再考! "プロレスの向こう側、『マッスル』"の世界に迫る!

B6変型判 296ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

PRIDEはもう忘れろ!



フジテレビショックから始まった日本マット界激動の歴史を追う!

フジテレビショックは日本格闘技界に何をもたらしたのか? 本誌でおなじみのライター橋本宗洋が送るMMAクロニクル。本書は、本誌携帯サイト『kamipro Move』で好評連載中の週刊コラムを厳選収録したものである。PRIDE凋落の時期からスタートした連載は、あらためてPRIDEの存在意義、役割を見つめ直し、そしてPRIDE消滅後、それでも生き続ける格闘技のおもしろさを綴っている!

B6変型判 336ページ
定価=1,680円(本体1,600円+税)

吉田豪のセメント!! スーパースター列伝 パート1



吉田豪インタビュー11連発!! インタビュー本の最濃傑作!

★ストロング小林★阿修羅原★康芳夫★倉持隆夫★サムソン・クツワダ★猪木快守★イーデス・ハンソン★田中健一★小川宏★鶴見五郎★田代まさし

プロインタビュアーの吉田豪が、『紙のプロレスRADICAL』誌上で聞き手を務めたロングインタビューの一部を完全徹底再録!!

B6変型判 344ページ
定価=1,890円(本体1,800円+税)

おかげさまで10周年 エンタープレイン
ANNIVERSARY 10th

発行/株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)
発売/株式会社角川グループパブリッシング
[エンターブレイン総合サイト] http://www.enterbrain.co.jp/

命懸けの年間最高試合

8・22『SRC14』両国国技館
ジョルジ・サンチアゴVS三崎和雄

三崎和雄の生き様を見よ！



死闘から生還した男が次なる闘いを語る

三崎和雄





——ジョルジ・サンチアゴ戦から一週間が経ちましたけど、まだ目は真

ているからこそ、リング上でそういう腹が決まるんじゃないですか？

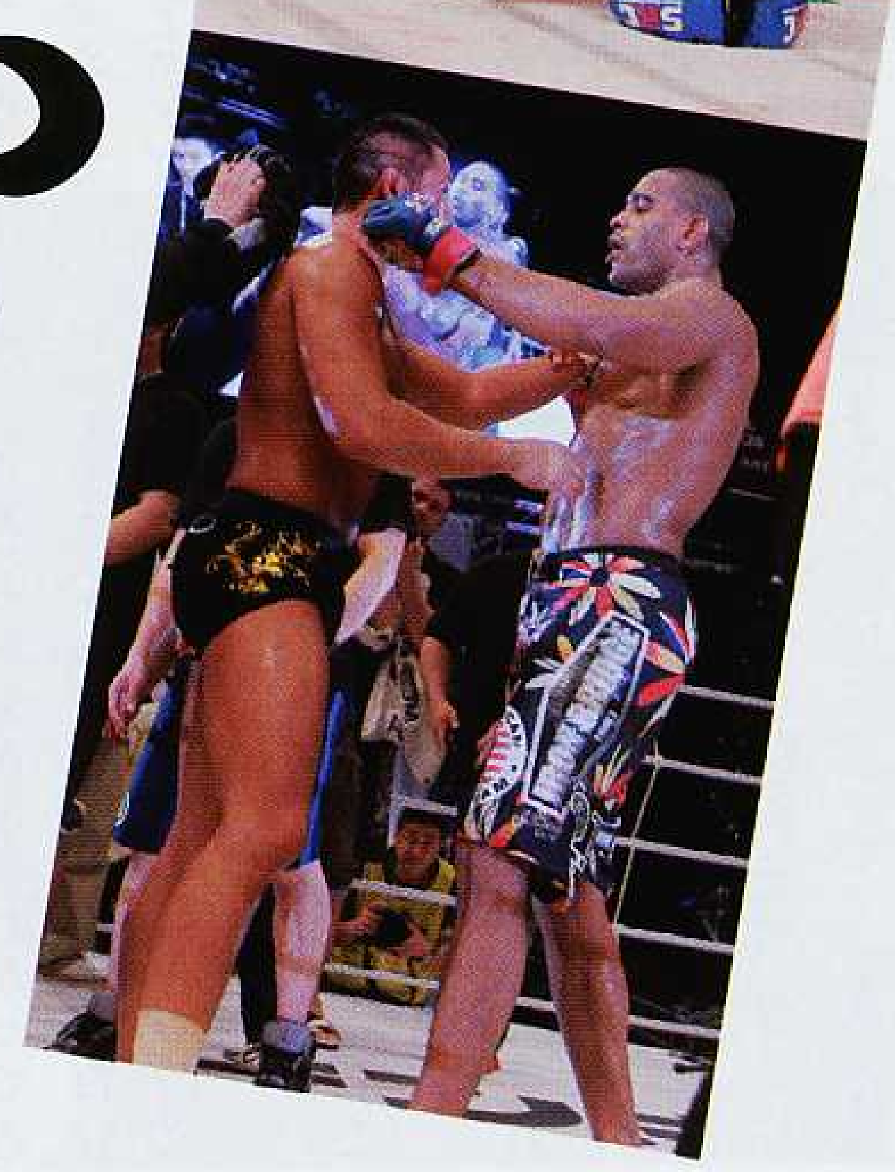
サンチアゴや秋山成勲のような男とはもう一度闘いたい

お互いの命を削り合うような、まさに〝死闘〟となったサンチアゴvs三崎和雄。試合前、足首とヒザを負傷し、まったく練習ができなかったにもかかわらず決して勝負をあきらめない闘いぶりで、敗れたもののファンだけでなく選手、関係者にも感動を与えた三崎和雄。あれだけの命を張った闘いを見せられる原動力はどこにあるのか。死闘の一週間後、三崎に話を聞いた。

聞き手&撮影／堀江ガンツ　試合写真／今村陽子







―ジョルジ・サンチアゴ戦から一週間が経ちましたけど、まだ目は真っ赤だし、顔のアザも消えてないし、激戦の傷痕が生々しいですね……。

三崎　でも、大きなダメージはなかったんですよ。試合が終わったあと一日入院して精密検査したんですけど、致命的なダメージはなくて、いつものように顔の打撲や脳の膨張ぐらいなものでしたから。

―顔の打撲や脳の膨張が〝いつものこと〟なのが凄いですよ！（笑）。

三崎　だからダメージはありますけど、骨折とかがなかったんで、いつもどおりと言えばいつもどおりということで（笑）。

―「いつもどおり」の基準がほかの人と違うわけですね。

三崎　自分の場合は、だいたい回復するのに毎回一カ月くらいかかりますからね。いまも脳があまり動いてないのかちょっとボーッとしてるし、眠くてしょうがないんですよ。

―そんな状態なのに取材を受けていただき、すいません！　でも、三崎選手にとって試合をするというのは、そこまで自分を懸けるものだということですか？

三崎　もちろん覚悟を持ってリングに向うんですけど、本当のところはリングに上がったら勝手にそうなっちゃうんですよね。応援してくれる人や、待っていてくれる人がいるかぎり、「自分は絶対に生きて帰ってこなきゃいけないんだ」と思ってリングに向かうんですけど、リングに上がった瞬間、全部吹っ飛んで、死ぬ気でいっちゃうんですよ。

―でも、そこまでの気持ちを作っているからこそ、リング上でそういう腹が決まるんじゃないですか？

三崎　格闘技をやってる以上、生きて帰れる保証はないと常々思ってるんですよ。だからこそ「必ず生きて帰ってくるぞ」と思う反面、何があってもいいように、試合前には身辺の整理をして、あとに残された人間にちゃんと受け渡しができる状況を作って家を出るので。そういった覚悟を持っていつも試合をするんですけど、このあいだはその気持ちがより強かったのかもしれませんね。

―なぜいつも以上の気持ちになったんだと思いますか？

三崎　やはり、いつものような練習ができなかったので、リング上は生易しい場所ではないし、相手も命懸けて向かってきますから。そういう危機感もあったと思います。

―いつものような練習ができなかったというのは、やはり足のケガがあったためですか？

三崎　そうですね。ケガなんて勝ち負けの理由にまったくならないし、自分も「ケガをしたから負けた」なんてカッコ悪くて言いたくもないし、思ってもないし。でも、試合前の実戦的な練習というのは選手の自信、そして命を守ることに直結するものだと思うんですよ。でも、今回はほとんど実戦練習ができなかった。だから、いつも以上の覚悟を決めてリングに上がりましたね。

―万全じゃないことは自分が一番よくわかっていて、それでもリングに上がらなければいけないわけですからね。

三崎　身体のコンディションもそう



三崎和雄

生きて帰らなきゃいけないけれど リングに上がると命を懸けてしまう

ですけど、一番重要なのは精神的なコンディションだと思うんですよ。今回は練習ができないことで、その精神的コンディションを作るのが非常に難しくて。ただ、逆に考えればまったく練習ができないなかで、どうやったら勝てるのか。思うように身体が動かせないなかで、どう闘い、どう命を守るのか。追い込まれた極限状態の人間には何ができるのかっていうことを考えることができたんで、逆に自信につながったというか、見えなかったものが見えてきた気がしますね。

——精神的にも肉体的には初めての経験が積めた、と。

三崎　そうですね。実戦練習をしてなかったことで、いざ相手と組み合ったら一気にスタミナを消耗してしまって。もう酸欠状態で2ラウンド以降の記憶がまったくないんですよ。

——2ラウンドからもう記憶がないんですか!

三崎　だからもうそれ以降は無意識ですよね。そういう状態になったのも初めてだし、こういう経験ができたことは自分の人生の肥やしにもなると思うんで。今回の試合のなかでいろんなことが学べたことを神様に感謝してますね。

——そこまでの気持ちになれたというのは、ケガがあったこと以外に、サンチアゴが相手だったからということもありますか?

三崎　もちろん、一度敗れた相手に二度負けるわけにはいかないっていう思いはあるし、もともと負けず嫌いな性格なので絶対に勝ちたいと思ってましたけど、それ以上に今回もがき苦しむなかで新しく見えてきたものは、やはり支えてくれる仲間の存在ですね。

——彼らがいたから、気持ちを作ることができた、と。

三崎　GRABAKAを退団してフリーというかたちで練習環境も変わり、苦しいなかで助けてくれたのが新しい仲間たちであり、それもあってあらためて仲間のありがたさが身にしみたんですね。（パワー・オブ・ドリームの）古川会長には以前から自分を見ていただいてるんですけど、それ以外は高瀬（大樹）をはじめ、大山（峻護）さん、吉田（善行）さんたちには本当に助けられてリングに上げてもらうことができたんで。そういった人たちへの感謝の気持ちのほうが対戦相手に対する自分のちっぽけな思いよりも、非常に大きな思いがありましたね。

——会場でもセコンドたちの必死な姿が見て取れましたよ。

三崎　だからホントに感謝ですよね。高瀬なんか自分がフリーになってすぐ「一緒に練習やらせてください」って声をかけてくれて、こっちも本当にうれしかったし。それで二人で一緒に大山さんのところに行くようになって、大山さんには練習だけじゃなくて精神的にも助けられたんですよ。ケガでくじけそうになってる自分を励ましてくれて、リングに上がる直前も大山さんにかけてもらった言葉がうれしくて。「こんなに仲間に支えられて本当に幸せだな」っていう思いが満ちた状態でリングに上がることができたんです。それまでの不安な気持ちから迷いが消えて、ケガのことなんか忘れちゃいましたからね。

——そしてセコンドのヘッドを務めてもらった古川会長には命を預けた感じですか?

三崎　そうですね。僕は会長を100パーセント信用して、会長の目を見て自分の命を会長に託してリングに上がってるんで。今回は最後、会長がタオル投げてくれたことに関してあとからいろいろ言ってくる人もいたんですけど、自分のことを一番知ってるのは会長だし、あのタオルを投げるタイミングがあと5秒10秒遅かったら、いま自分はいなかったかもしれない。やっぱり会長は自分を極限状態まで引き上げてくれて、そして生還させてくれたわけですから、このうえないタイミングのタオル投入だったと僕は思ってます。

——古川会長は誰よりも三崎さんの試合に懸ける思いを知っていながらタオルを投げたわけですもんね。

三崎　だから会長も「ちゃんと練習ができていたら、俺はタオルは投げなかった」と言ってましたし、自分が朦朧としたなか闘ってるのはわかってたんで、3ラウンドくらいから止めようと思ってたらしいんですよ。そんな自分の気持ちや状態が全部わかってる会長のような人がいるからこそ、自分も命を預けられるし、そういう人間に出会えたことに感謝してますね。

——人の命を預かるって大変なことですもんね。

三崎　だから逆にいまの自分にそれができるかって言ったら、まだその器はないと思ってるし。これから選手としていろいろ勉強して、会長と同じような立場に立って、選手と関係を築けないと、人の命は預かれないですよね。まだまだ自分には勉強することがたくさんありますから。

——実際に闘ってみて、サンチアゴという選手は自分が命を張って闘うにふさわしい相手でしたか?

三崎　そうですね。彼も自分の気持ちに応えてくれる魂のある試合をしてくれたし、彼が相手じゃなきゃ、ああいう試合にならなかったと思いますから、彼に対しても感謝してますね。ただ、彼とのストーリーは自分のなかではまだ終わってないので、向こうはどう思ってるか知らないですけど、彼とはまだ長い付き合いになると思いますけどね（笑）。負けた自分が言うのもなんですけど、もう一度、闘うチャンスがほしいです。

——試合が終わったあと、放送席の武田幸三さんに歩み寄ってましたけど、武田さんとはどういった関係なんですか?

三崎　幸三さんは僕にとって昔から憧れの存在だったし、尊敬してたんですよ。それが古川会長のもとでボクシングをやってた川崎タツキさん、コウジ有沢さんとか、そのあたりのつながりで紹介してもらったんですよ。そこから長渕（剛）さんとのつながりだったりとか、いろんなところで幸三さんとの交流が増えてきたんです。

——いま武田さんは三崎選手にとってどんな存在ですか?

三崎　言葉ではうまく言えませんけど、僕が幸三さんの試合を観て学んだことや、直接教えてもらったことがたくさんあるので、やっぱり感謝ですよね。自分が悩んだとき幸三さんに相談することもあるんですけど、的確なアドバイスをくれるし、リングに上がった自分の決意も幸三さんから教えられたものだと思うので、幸三さんにはいろんな思いがあるんですよ。だから心の底から感謝しているので、放送席まで行って……握手したんでしたっけ?

——握手もしてましたし、声もかけられてましたね。

三崎　よく覚えてないんですけど（笑）、そういう気持ちだったんだと思いますね。

——三崎選手と武田さんは闘う姿勢において、相通ずるものがありますよね?

三崎　やっぱり闘う者として、格闘家というより侍として血肉を分け合う仲だったんだなと思いますね。

——三崎選手が身辺を整理してからリングに上がるように、武田さんも試合前に遺書をしたためていたりとか。

三崎　幸三さんは本来「自分たちは守るものがあるから、リングから生きて帰らないといけない」という思いがとても強い人なんですよ。それを僕にも教えてくれたんですけど、リングに上がった瞬間、自分の命と引き替えに闘ってしまう。やっぱりリングに上がってからも「生きて帰らなきゃ」と思ってると、どうしても逃げちゃうんですよね。だから、リングに上がる前は「自分には守るものがあるから生きて帰る」という決意を抱







[10.8.22 SRC14] 東京・両国国技館
SRCミドル級チャンピオンシップ
○ジョルジ・サンチアゴ vs 三崎和雄×
（5R 4分31秒 TKO）

09年1月以来のリマッチとなった一戦。三崎は2Rにギロチンチョークを極めかけるなど優位に勧めるが、3Rにはサンチアゴがダウンを奪い、4Rには三崎がダウンを奪い返す、両者一歩も譲らぬ死闘を展開。最終5R、精根尽きながら精神力だけで闘う三崎だったが、サンチアゴのパウンド連打にセコンドがタオルを投入。壮絶なTKO負けとなった。

き、リングに上がったら自分の命を懸けて闘う。矛盾してるんだけど、自分にはよくわかるし、そういう気持ちじゃないと、生きて帰るのもできないんじゃないか。そういうことを教わりましたね。

――三崎選手が武田さんの試合を観て感じるものがあったように、先日の三崎選手の試合を観たほかのファイターたちも凄く影響を受けてるようですよ。

三崎　だとしたらうれしいですね。やっぱり自分が闘う意味というのは、勝負の勝ち負け以上に生き方を伝えるために試合をしてるんで。格闘家として僕の勝つ姿を観てほしい気持ちはもちろんあるけど、僕が闘いを通じて勇気を与えられたのならそれだけでも僕は満足できるし、ある意味、自分の使命をやり遂げたと思いますから。

――青木真也選手や小見川道大選手も「来月は俺がやらなきゃ」的なことをツイッターで書いてましたよ。

三崎　まあ、自分はこういう試合しかできないんでね。青木とかミッチーにはしっかり勝ってもらえたらと思います。彼らには勝って、日本人が強いということを証明してもらいたいですね。

――8・27DEEP後楽園での福田力選手の激闘（vs桜井隆多）も、三崎vsサンチアゴに影響されたんじゃないと思うくらい壮絶でしたよね？

三崎　あれは、あいつの性格なんでしょうね。あいつも本当に気持ちのいい男で、いまはチームこそ違いますけど練習は（パワー・オブ・ドリームで）一緒にやってますし、大事な後輩の一人ですから。僕自身、ヤツからの影響も凄くもらってるし、あの試合はあれでよかったのかもしれないけど、試合後、僕がヤツに言ったのは「こういう試合は今日で封印しろ」ということでしたね。

――封印しろ、ですか？

三崎　あの試合によって、あいつの気持ちを受け取ったお客さんはたくさんいたと思うんですけど、やっぱり勝負は紙一重ですから、気持ちが前に出るぶん隙もできるし。ヤツはこれからもっと上のステージにいかなきゃいけない男ですから、あの闘い方がもっと上で通用するかといったら、正直難しいと思うんですよ。言い方は悪いですけど、いまだから通用しているわけで、これから自分より力のある世界の強豪とガチで闘ったら、結果は見えてしまう。だから、このまえの試合はヤツの闘う気持ちが凝縮した試合だったので、あれはあれでよかったですけど、ああいう闘いは今回で封印して、勝つための試合をしなきゃいけないってことを言ったんですけどね。



三崎vsサンチアゴのテレビ解説を務めた秋山成勲。三崎とは因縁浅からぬ関係であるが、熱の入った"応援解説"を行なうなど、三崎の激闘に感じるものがあったようだ。

「DEEP10周年大会に出たい」と佐伯代表にお願いしたんですよ

――福田力選手はもっと上にいかなきゃいけない選手ですからね。

三崎　彼は世界に出てもチャンスがある選手ですから。これからは自分だけじゃなく、家族だったり、国民の期待だったり、いろんなものを背負って闘ってほしいな、と思いますね。

――また、先日はテレビ解説を行なった秋山成勲選手も三崎選手の闘いに感じるものがあったようです。

三崎　僕は彼がどう思ってるのかわからないし、僕のなかでは拍子抜けした部分もありますけど、僕の試合を観て何かを感じてくれたのなら、やっぱりうれしいですね。今回の試合はいろんなことを初めて体験しましたけど、秋山選手に対しても初めて「うれしい」という感覚が芽生えました。

――そういった気持ちになりましたか。

三崎　やっぱり「俺はこいつと試合したからここにいるんだな」って思うし。本当は勝って秋山選手と言葉を交わしたかったけど、直接じゃなくても僕はエールをもらったと感じているので、秋山選手にも感謝してるし、うれしかったですね。

――いまは闘う舞台が違いますけど、『やれんのか！』以降も影響を受けている部分はありますか？

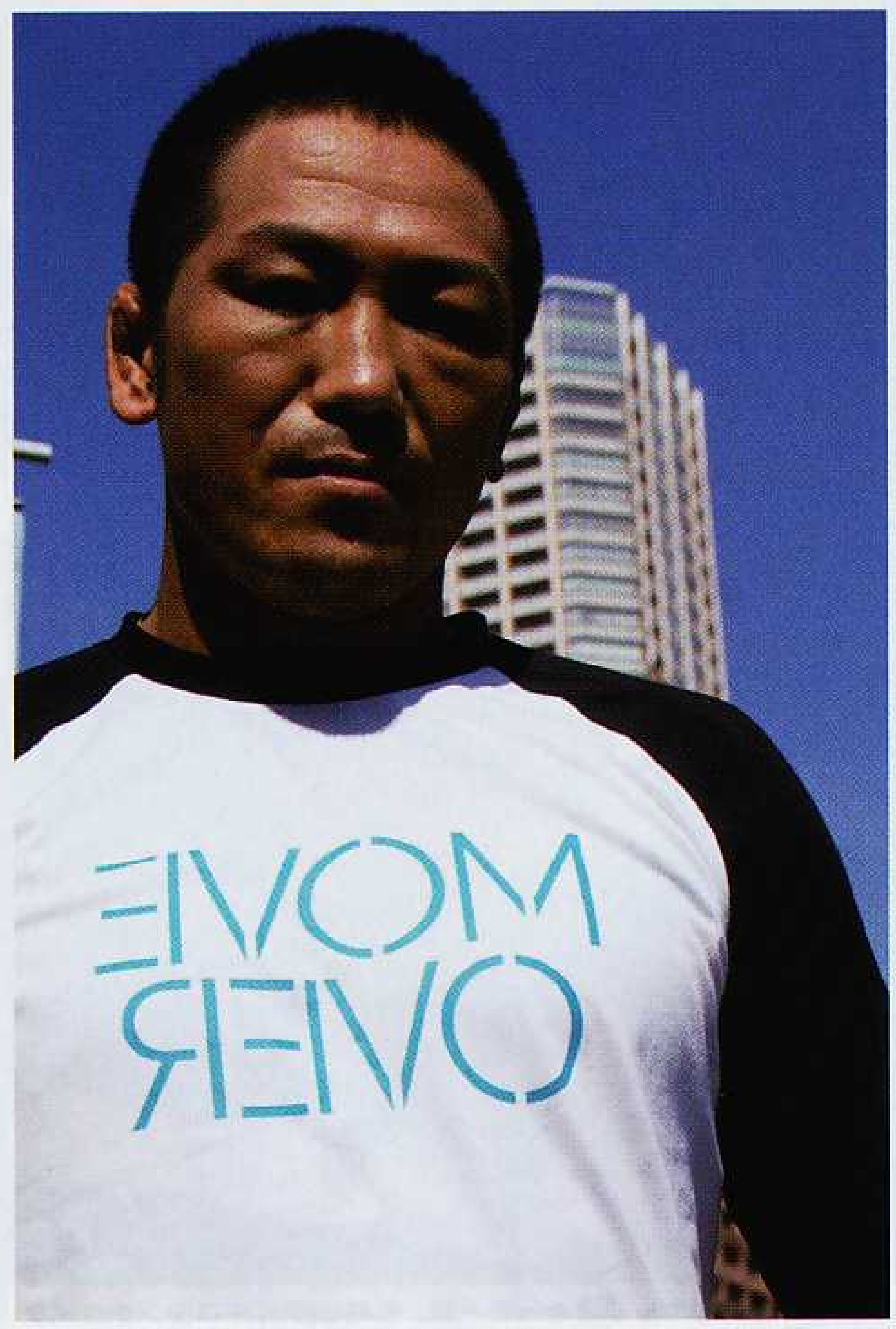
三崎　もちろんありますね。やっぱり秋山選手は日本人の期待を背負ってるし、韓国を含めたアジアの期待を背負っていて、僕もその一人だと思ってるし。ヴァンダレイ・シウバというのは僕が大好きな選手なんですけど、それでも秋山選手がやるなら、秋山選手に勝ってほしいという思いが強かったし。もし今回、自分の試合がなくて、秋山選手とヴァンダレイの試合が予定どおり行なわれていたら、ラスベガスまで観に行こうと思ってたんですよ。それくらい意識してるというか、やっぱり秋山選手に興味があるんでしょうね。

――いまもそれだけの気持ちがありますか。

三崎　だから、いまは舞台が違っても縁があればまた交わると思ってるし、そのときはまた違った気持ちでの闘いになると思うんで。またリングの中で、二人だけで向かい合う日をね、僕は待ってます。

――やはり『やれんのか！』での一戦は、それだけの思いを抱くだけの闘いでしたか？

三崎　前回、勝ち負けがつかず、お互い納得がいかないまま、むしゃくしゃした時間がすぎたと思うんですけど、あの結果自体はどうでもいいんですよね。でも、僕の格闘家人生もすでにカウントダウンが始まってると思うし、自分が死ぬ前に後悔を残さないためにもやりたい試合というのがあって、秋山戦というのもそこに入ってますからね。あの極限の緊張感を一度でも味わってしまうと、もう一回交わりたいと思うんですよ。それはサンチアゴもダンヘンもそうだし、時間が経てば経つほど強い思いに変わっていくんですよね。



みさき・かずお■1976年4月25日、千葉県出身。01年にパンクラスでプロデビューし、ネオブラッドトーナメント優勝。06年にはPRIDEウェルター級GPで優勝をはたす。PRIDE活動休止後は『戦極』に参戦。09年11月にグラバカを退団し現在はフリー。178cm、84kg。

三崎和雄

――ファンもそれは観たいですよ。三崎vs秋山、三崎vsサンチアゴみたいな試合が観たくて、格闘技を観続けてる部分がありますからね。そして三崎選手の試合は年内にもう一試合観られそうですか？

三崎　その気持ちはあるんですけど、この前の試合で足首をまた痛めてしまったので、これが一カ月で治るのか、二カ月なのかと考えると、ハッキリしたことは言えないんですよね。

――足首は靭帯もやってしまったんですよね？

三崎　靭帯はだいぶよくなってきたんですけどね。剥離骨折のほうがちょっとかんばしくなくて。そのケガの状況次第でしょうね。気持ちとしてはもちろんやりたいんですけど。

――やっぱり次は万全の体調で上がりたいという思いがありますか？

三崎　ありますね。勝敗うんぬんはどうだっていいんですよ。ただ、今回ケガをしたことで、リングに上がるまでにまともに練習ができなかったのは、応援してくれるたくさんの皆さんと、スポンサーの皆さんに対して本当に申し訳ない、心からお詫びしなければいけないという思いがあるんです。だから次にリングに上がるときは、しっかりとコンディションを作って、「これが自分の最高のコンディションです。これが自分の最高のパフォーマンスです」と言えるような試合をしないといけないので。それが12月に間に合うかどうかですね。

――それとは別に10月に行なわれるDEEPのJCBホール大会で、三崎選手の出場が検討されているという"未確認情報"が流出したという事件があるんですけど（笑）。

三崎　あ、そうなんですか？

――DEEP出場はさすがにないですよね？

三崎　いや、「DEEPの10周年大会には自分を出してください」って、僕のほうからお願いしてたんですよ。

――そうなんですか？

三崎　僕はDEEPに対してというか、佐伯さんに対する思いが強いですから。いま僕がここにいるのは、2006年にDEEPでやった小路（晃）さんとの試合があったからだと思うんですよね。

――たしかPRIDEウェルター級GP出場を懸けた査定試合だったんですよね。

三崎　そうなんです。その前に僕は『PRIDE武士道』で（ダニエル・）アカーシオに負けて、行き場を失っていたときに、小路さんとウェルター級GP最後の一枠を争う試合というチャンスをいただけて。それに運よく勝つことができ、GPでも優勝できて、秋山戦があり、いまがあるわけですけど、すべてはあのときのDEEPがターニングポイントだったと思うんですよね。その機会を作っていただいた佐伯さんと当時のPRIDE関係者には心から感謝しているし、だからこそ、「DEEPの10周年大会があるのなら、ぜひ僕を使ってください」と佐伯さんにお願いしてたんですよ。

――そういうことだったんですね。それに10周年はじつは来年だったというオチもあったんですけど（笑）。

三崎　だから今度のJCBホールは無理としても、来年の本当の10周年大会にはぜひ出していただきたいし。もし佐伯さんが受け入れてくれるのなら、ほかの大きなオファーを蹴ってでも、一番優先して出場したいと思いますね。

――わかりました。では、早くケガを治していただいて、次の試合も期待しております！

【10年8月31日／都内・某所にて収録】



〝侍〟が見た〝侍〟

命を削らなきゃ闘いで人を感動させることなんてできないですよ

元ラジャダムナンスタジアム・ウェルター級王者

武田幸三

ジョルジ・サンチアゴとの死闘の末、惜しくもタオル投入によるTKOで敗れた三崎和雄。その三崎がリングを降りたあと真っ先に向かったのが、武田幸三のいる放送席だった。現役時代、〝ラストサムライ〟と呼ばれ、自分の命を削りながら勝利を奪い取るような闘いぶりで観客の心を揺さぶり続けた武田幸三。そんな武田が見た三崎和雄の闘いぶりとはなんだったのか。

聞き手／橋本宗洋　試合写真／今村陽子　構成／堀江ガンツ

―武田さんは、もともと三崎選手とお知り合いなんですよね。

武田　2年前くらいから話をするようになって。あと、三崎選手が練習してるパワー・オブ・ドリームのある西新井は僕の地元、生まれたとこなんで、そこで練習してる格闘家とたまに集まったりしてますね。

―普段の三崎選手って、どんな人ですか？

武田　変わってますよ。しゃべることが全部〝四角〟です（笑）。

―超がつくほどマジメというか。

武田　冗談も言わないですしね。ずっと格闘技の話ばっかりで。筋が通ってるというか、だからサムライですよね。僕も「もうちょっと力を抜いたほうがいいんじゃないか？」って思いますから。

―武田さんがそう言うくらいだから相当ですね（笑）。

武田　（長渕）剛さんにも「おまえは馬鹿だなぁ」って言われてましたね（笑）。「ほんと固いな。そんなことばっか考えて生きてんのか」って。話してると「拙者は」とか言いだしそうなノリですからね（笑）。

―あの長渕剛も認める現代のサムライぶり（笑）。

武田　試合に対する考え方は、僕より固いんじゃないですかね。

―武田選手は、試合前に遺書をしたためるくらい命懸けでやってこられたわけですけど、それ以上ですか。

武田　僕も〝ラストサムライ〟っていうキャッチフレーズをつけていただいたことがあって、三崎くんも今回、同じだったんですけど、まさにそういう感じですね。

―今回、三崎選手は試合前に足首を負傷していたそうなんですが、武田さんはご存知だったんですか？

武田　そこは……僕も試合後に、解説で言っちゃったんですよね。あれだけ命を削った勝負を見せられたあとだったんで。言ってしまいましたね。

―普通であれば、試合前にケガをしていたことをあとから明かされるのは不本意なわけですよね。武田さんにしても三崎選手にしても。

武田　そうなんですよ。とくに三崎くんは言い訳をしたがらないタイプなので。なんですけど……。

―あれだけの試合のあとでは……という気持ちにもなっちゃいますよね。

武田　試合前に電話があったんですよ、三崎くんから。「正直、出場するかどうか迷ってます」と。

―それくらい重いケガだった、と。

武田　それで「武田さんだったらどうします？」って。僕は「俺なら出るよ」って答えました。多いときは年に8試合やってましたし、ケガしながら闘うのがあたりまえっていう現役生活を送ってきたので。



右足首のケガで試合前の練習がほとんどできないまま試合に挑みながら、まさに命懸けの闘いぶりで、最後まで勝負をあきらめなかった三崎和雄。現役時代の武田と相通ずるこの精神が観客の心を揺さぶる。

―確かにそうでした。

武田　僕に電話をしてきたってことは、そういう答えがほしかったんでしょうね。

―「俺なら出る」と言ってもらいたくて武田さんに電話した、と。

武田　練習もちゃんとできない状況でしたから、普通だったら「やめたほうがいい」ってなると思うんですよ。

―みんなそう言うでしょうね。

武田　でも、僕に電話をかけてきたってことは、彼のなかでは腹が決まってたんでしょうね。あとは背中をちょっと押されたかったのかなって。

―武田さんなら「出ろ」と言ってくれるだろう、と。実際、試合でもその覚悟が出てましたよね。

武田　「ラストサムライ」っていう言葉は、彼のためにある言葉だと思いましたね。僕なんかおこがましいな、と。ケガしながら闘うのって、やっぱり怖いことなんですよ。納得して死に場所に行くわけじゃないですから。

―全力を出しきれない怖さというか。

武田　相手と闘いながら、自分と闘いながらという状況だったと思います。ゴングが鳴っちゃえばいくしかないし、痛いのも忘れるんですけど、やっぱり追い込み不足だからスタミナの問題もあって「あれ？」って思ったりもするんですよね。

―そういう状況で5分5ラウンドを闘うっていうのは相当ですよね。

武田　僕、ルール聞いてビックリしましたよ（苦笑）。3分5ラウンドでもきついのに、5分ですからね。解説でも言いましたけど、5分5ラウンドは凄いですよ。そういう意味で、サンチアゴは王者としてうまさがありましたよね。攻められながら、休むところは休んでましたから。だから三崎くんがあれだけやったっていうのは、本当に凄いことだと思います。一回も弱気にならなかったですからね。

―5ラウンドに入った時点でポイントではリードしてたわけですから、〝流す〟試合もできなくはなかったのかなと思うんですよ。でも、それはしたくなかったんでしょうね。

武田　男ですよね、本当に。いまの時代に必要な人間だと思います、三崎くんは。救世主というか。あの試合を観て、SRCの選手にしても、ほかの団体の選手にしても凄く刺激を受けたと思いますし。一緒に解説してた秋山選手も凄く感動してて。

―お客さんも、三崎選手の試合はまた絶対観ようと思ったでしょうね。

武田　あれこそ「金の取れる試合」ですよね。メインイベントの試合でした。ああいう試合だったら、試合は年1回でいいですよ。1試合で1年分のファイトマネーも

らっていいと思います（笑）。
―最後は、試合時間終了直前でのタオ

で、止めないでください。覚悟はできてま
すから。ここで止められたら、僕は一生、

―角田さんや三崎選手は、そういう気
持ちが通じ合う仲というか。サンチアゴ

に寿命は縮まりますから。そういう意味で
もタオルを投げてもらってよかったです

三崎くんはいまの時代に必要な人間。プロが認める試合だったと思います

武田幸三

らっていいと思います（笑）。

――最後は、試合時間終了直前でのタオル投入でした。

武田　パワー・オブ・ドリームの古川会長が投げたんですよね。僕は大賛成です。セコンドの一番の役目は、選手を五体満足で家族に帰すことですから。あのままいったら判定で勝ってたかもしれないですけど、僕は古川さんに「ありがとうございました」って言いたい。最後、あれだけメタ打ちにされた状況で、もしものことがあったらどうするんだっていうのがありますから。古川さんも「まったくためらいはなかった」と言ってましたね。

――やっぱり、セコンドは選手に命を預けてるわけですからね。武田さんも、やっぱりそういう気持ちだったわけですよね。

武田　もちろん預けてるんですけど、僕の場合はセコンドの言うこと一切聞かないタイプなんで（笑）。「止めたら殺すぞ」って。とにかく倒れるまではタオルはいらないからって言ったんですけど。でも、タオルを投げるのがセコンドの仕事ですからね。投げられても納得できる人間だからセコンドを頼むというか。

――武田さんも、アルバート・クラウスとのラストマッチでは「もう止めてくれ」っていう内容になってしまいましたけど（ドクターストップによるTKO負け）、やっぱり自分ではやめられないわけですよね。

武田　あのときは試合前、レフェリーの角田さんに「止めないでください」って僕から言ったんですよ。「最後に命を懸けるんで、止めないでください。覚悟はできてますから。ここで止められたら、僕は一生、後悔してしまいます」と。それで角田さんには迷惑をかけちゃったんですけど……。

――ある種、競技とは別次元だったんですね。

武田　だから最後の試合は角田さんにレフェリーをお願いしたかったんですよ。選手の命を守るのはもちろんですけど、角田さんは男の威厳というか、そういうものも守ってくれるんですよね。あのとき、最初のダウンで止められてたら、僕の17年の格闘技人生の最後がヌルいものになっちゃうんで。



たけだ・こうぞう■1972年12月27日、東京都出身。元キックボクサー。95年に新日本キックでデビュー。01年にラジャダムナンスタジアム・ウェルター級王座を奪取。史上4人目の外国人ムエタイ王者となる。03年からK-1 MAXにも出場し、09年に現役を引退した。

――角田さんや三崎選手は、そういう気持ちが通じ合う仲というか。サンチアゴvs三崎戦では試合後、解説席で三崎さんとお話しされてましたよね。

武田　僕は「かっこいいよ！」って伝えました。三崎くんは「すいません」しか言わなかったですね。控室でも、みんなに「すいません、すいません」ってずっと言ってました。「いいから寝てろ」って言ったんですけど、すぐ起きようとして。

――あれだけの試合をして、でも出てくる言葉は「すいません」なんですね……。

武田　そういう部分でも、エースの資格があるなって思います。僕は、KO負けしたあとは、セコンドに「お客さんどうだった？」って聞くんですよ、記憶がないから。それで「沸いてました」って言われると安心するっていうか。でも、彼の場合は「勝たなきゃいけません」ってずっと言ってたんですよ。

――聞けば聞くほど凄まじいですね……。

武田　もちろん選手はお客さんのために闘うんですけど、あの試合は同業者、格闘家が勉強になる試合だったと思います。プロが認める試合っていうんですかね。格闘技の一番、大事なものを見せてもらった気がします。それは格闘技の危険なところでもあるんですけど、お客さんの心をつかむためには、どっちみち命を削るしかないんですよ。彼の寿命は、あの試合で確実に縮まりましたからね。リアルに命を削りましたから。

――リアルに、ですか。

武田　（机をパン、と叩いて）これくらいの衝撃で、人間の脳細胞って500個から1000個死ぬんですよ。あの試合だったら、もう億のレベルですよね。そのぶん、確実に寿命は縮まりますから。そういう意味でもタオルを投げてもらってよかったですよ。三崎くんは自分ではタップしないですから。腕が折れたってタップしなかったでしょうし。右目が潰れたら左目で見る。だから、周りが止めるしかないですよね。

――プロとしてそこまでの覚悟ができている、と。

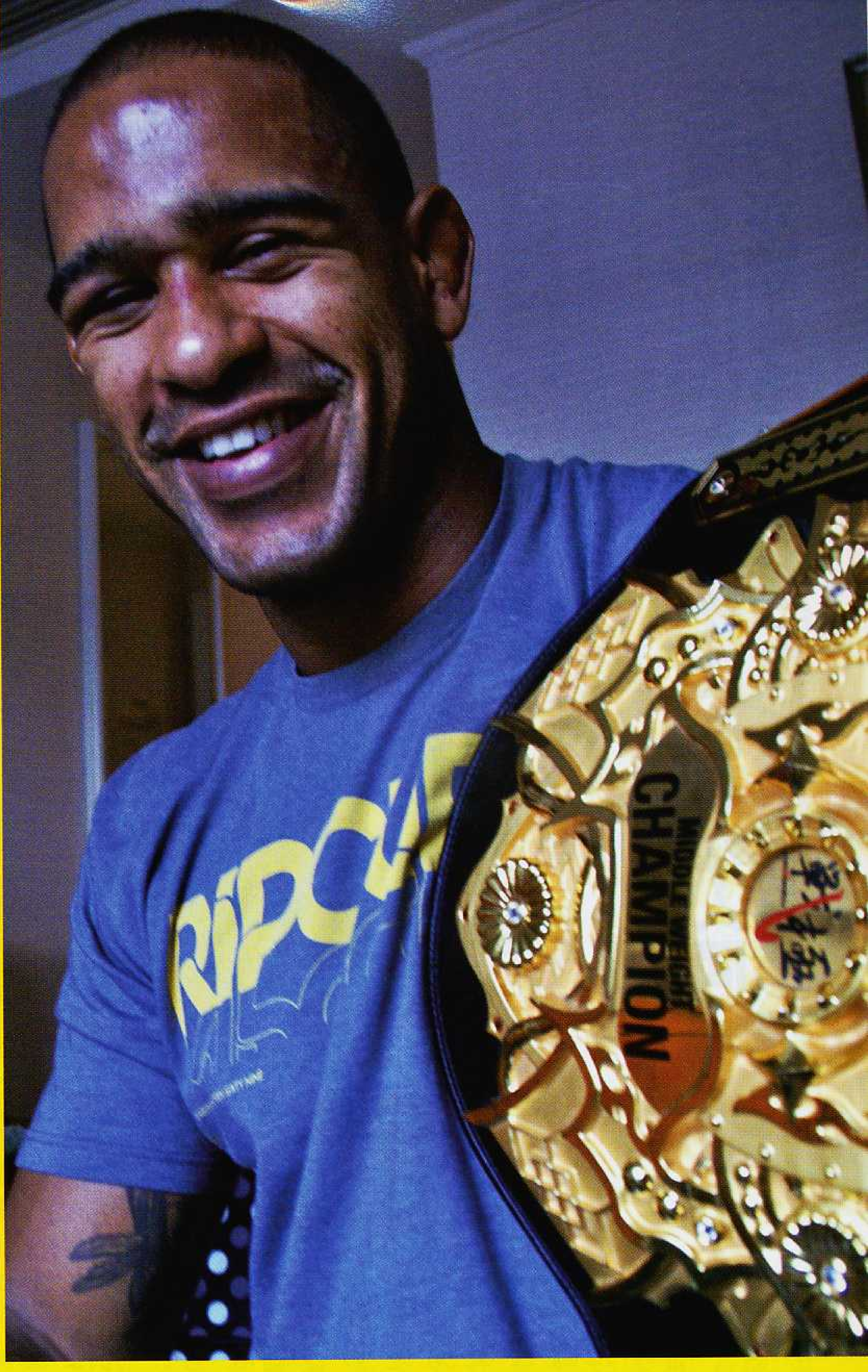
武田　ヌルいことやったり、あきらめちゃうのが自分で許せないんですよね。それやっちゃったら、一生後悔しますから。そういう気持ちを持ってるのがプロだと僕は思いますね。そして、それを実行できるのがもう一段階上のプロ。

――思うことと実行することのあいだに壁があるわけですね。

武田　三崎くんはそれができるんですよね。そして、本当のメインイベンターは、本人も言ってたように、そのうえで勝たなきゃいけないと思うんですよ。もう一段階、彼のなかでステージを上げなきゃいけないというか。もう、そういうモチベーションが湧いてると思うので、これからも三崎くんの試合が楽しみだし、凄く観たいですね。

【10年9月7日／都内・吉本興業東京本社にて収録】





死闘を制したSRC王者が 年内日本再来襲宣言！

Jorge Santiago

ジョルジ・サンチアゴ

「ミノタウロvsミルコのような ファンの記憶に残る 試合ができた」

8.22『SRC14』で三崎和雄に逆転KO勝ちし、SRCミドル級王座防衛に成功したサンチアゴ。その大激闘の翌日、宿泊先のホテルでインタビュー。年間最高試合との呼び声も高いあの一戦をサンチアゴ自身はどう感じているのか？ そして、SRCミドル級王者の今後のプランについても聞いてみた。

聞き手／堀江ガンツ　試合写真／今村陽子

――昨日の三崎和雄選手との試合はまさに死闘。凄まじい試合でしたね！

サンチアゴ　ありがとう。今朝、あらためて昨日の試合をビデオで観て、「俺はこんな凄い試合をしたのか」って自分自身ビックリしたくらいだよ。

――ファイト・オブ・ザ・ナイトどころかファイト・オブ・ザ・イヤー。年間最高試合の呼び声もありますからね。

サンチアゴ　実際、アメリカのファンもHDNet（ケーブルテレビ局）で昨日の試合を観て驚いて、俺のFacebookにメッセージが殺到しているんだけど、みんな絶賛してくれているんだ。（ATTのトップである）ヒカルド・リボーリオも「ファイト・オブ・ザ・イヤー」だと言ってくれてるしね。

――アメリカのファンのあいだでも早くも話題になってますか。

サンチアゴ　でも、この試合は俺だけじゃなく、ミサキも素晴らしかったからこそ、これだけの評価をしてもらえているんだろうと認識している。昨日の試合は、俺とミサキという二人のウォリアーが作り上げたものなんだ。

――本当に二人とも最後まで勝負をあきらめなかったからこそ、凄まじいシーソーゲームになりましたよね。

サンチアゴ　試合後、JZ（カルバン）に「おまえらピッドブル（闘犬）みたいだったよ」って言われたんだ。一方が攻めて一方が絶体絶命のなかゴングに救われ、次のラウンドではもう一方が逆襲する。その繰り返しだったからね。

――三崎選手はよく「一度ダウンを奪われると、さらにエンジンがかかって強くなる」と言われますけど、闘ってみてそういう感じはありましたか？

サンチアゴ　ああ、とんでもないリカバリー力だったよ。自分が仕留める寸前だったはずなのに、次の瞬間は逆に自分がピンチに陥っていたからね。それを一番感じたのが4ラウンド。俺は3ラウンドに三崎からダウンを奪って、次のラウンドで仕留めてやろうと思っていたのに、逆にダウンを奪い返されて、一瞬記憶が飛んでしまった。だから倒れてパウンドされながら、「もしかして、俺がダウンしたのか？」って、状況が理解できないくらいだったんだ。

――でも、そんな状況になりながら、サンチアゴ選手自身、5ラウンドに大逆転するわけですよね。

サンチアゴ　だから俺もミサキも追い込まれてから強くなるタイプなのかもしれないな（笑）。じつは2ラウンドにミサキにギロチンを極められたとき、落ちる寸前だったんだ。自分でもビジョン（視界）がどんどん狭まっていくのを感じていた。だから、昨日の試合はどちらの精神力が勝つかの勝負でもあったんだと思う。

――昨日はお互いを壊し合うような試合でしたが、そのわりにはサンチアゴ選手の顔がきれいですよね。やはり殴られながらも、冷静にガードしていたということなのでしょうか？

サンチアゴ　もちろんダウンを奪われたときは、必死に顔面のガードをしていたんだけど、それと同時にミサキのパウンドにも力がないことに気づいた。やはり4ラウンドになるとお互いかなり体力を消耗していたからね。ミサキも気力だけで闘っているような状態だったんだろう。だからダウンは奪われたけど、そのあとのパウンドがそれほど強いものじゃなかったからしのげたんだと思う。これが1～2ラウンドの力があるうちにもらっていたら、そのままKOされていたかもしれないね。

――逆に三崎選手はあの4ラウンドのラッシュで体力を使いはたした感がありましたが、それはサンチアゴ選手も感じましたか？

サンチアゴ　それは感じたけど、限界だったのは俺も同じだからね（笑）。だからお互い、限界なんだけどそれを悟られないようにしていたんだ。最後は俺のほうが、ほんの少しスタミナが残っていたから勝つことができたんだろうけど、俺はミサキの精神力をリスペクトしているし、彼の肉体と精神のタフさにあらためて驚かされたよ。

――三崎選手は5ラウンドにあれだけ殴られながらタップしませんでした。あのときはどう思っていましたか？

サンチアゴ　パウンドを落としながら、俺自身が限界だった。だから、もしミサキが攻め返してきたら、逆に俺がやられてしまうと思って必死だったよ。あのと

アンデウソンがもし負けたら俺がソネンを倒してやりたかった

きのミサキは、2ラウンドに俺がギロチンをかけられたときと同じだと思う。だから、精神力で切り抜けていたんだろう。これはもうミサキをチョークで落とすしかないと思って肩固めにもいったんだけど、それも返してきた。本当にギリギリの勝負だったし、試合が終わった直後、自分にはもはや何も残っていなかった。

——サンチアゴ選手自身、すべてを出しきった試合だったんですね。

サンチアゴ　だから俺は試合が終わったら必ず妻と娘に電話をするんだけど、今回は電話をする気力すらなかったんだ。本来ならタイトルを防衛したことを一番最初に伝えたかったんだけどね。とにかく身体をクールダウンさせなきゃいけないから、バスタブに大量の氷を入れて、しばらくそこに浸かっていたよ。

——そこまで体力を使いはたしてましたか。

サンチアゴ　試合前のインタビューで「三崎選手がいままで一番ハードな相手でしたか?」って聞かれたんだ。そのときは「まあ、そうだな。ハードな相手は何人かいたけど、そのなかの一人ではあるかな」みたいな感じで答えていたんだけど、いま同じ質問をされたら「間違いなくミサキとの試合が一番ハードだった」と答えるよ（笑）。

——では、SRCから3度目の三崎戦をやってほしいと言われたらどうしますか?（笑）。

サンチアゴ　もう少し時間をおいてほしいな（苦笑）。でも、俺とミサキの闘いはセンゴクの歴史のなかで一番の試合だと思うからね。ファンが望むなら、将来的にもう一度闘ってもいいと思う。前回の試合と今回の一番の違いは、お互いが進化し、フィジカル的にも技術的にも、そしてメンタル的にも前回を上回った状態で勝負したということなんだ。俺はまだまだ強くなるし、ミサキも俺を倒すためにさらに強くなるだろう。今回以上の闘いができるタイミングがきたら、またミサキと闘いたいね。

——三崎選手が試合前に足首をケガしていたのは知っていますか?

サンチアゴ　試合が終わったあと、関係者に聞いたよ。

——欠場を勧められたらしいんですけど、本人はタイトルマッチに穴を開けるわけにいかないというのと、どうしても前回負けているサンチアゴ選手に勝ちたいという気持ちから出場したようですね。

サンチアゴ　その気持ちはわかるよ。俺もナカムラ（中村和裕）との試合（戦極ミドル級GP決勝）で拳を骨折してしまったんだ。でも、どうしてもチャンピオンになりたかったから、その2カ月後にミサキとのタイトル戦に挑んだんだよ。またマメッド・ハリドヴ戦の前もケガしてしまったんだけど、俺はチャンピオンだから休むわけにいかないと思って出場したからね。ミサキもそういった気持ちだったんだろう。

——そういった強い気持ちが試合にも出るんでしょうね。

サンチアゴ　オフコース。SRCのミドル級タイトルを獲るという強い気持ちが、俺たち二人にあれだけの闘いをさせたんだと思うよ。

——それと同時に昨日のタイトルマッチによって、ベルトの価値が大きく上がりましたよね。

サンチアゴ　そう言ってもらえるとうれしいね。たぶん、昨日の俺たちの試合のことは、多くのファンがこれから先もずっと覚えていてくれると思うし、何年経ったあとも「サンチアゴとミサキの試合は凄かったな」って話し合ってくれると思う。ミノタウロ（ノゲイラ）とミルコ・クロコップの試合のようにね。そして俺たちにとっても一生の誇りとなるような試合が残せたと思うよ。

——ホントに歴史に残る試合だったと思いますよ。



JORGE SANTIAGO■1980年10月9日、ブラジル出身。ATT所属。UFC、ストライクフォースを経て、08年から戦極に参戦。戦極ミドル級GPに優勝し、09年には三崎和雄を下してSRCミドル級王者となった。185cm、84kg。

サンチアゴ　インターネットでのファンの意見や、俺のFacebookへのメッセージでは「（同じミドル級のタイトルマッチ）アンデウソン・シウバvsチェール・ソネンより凄かった」っていう声もたくさんもらったからね。

——アンデウソンvsソネンも5ラウンド大逆転の激闘でしたけど、試合内容でいえば、やはり三崎vsサンチアゴが上ですもんね。サンチアゴ選手はアンデウソンvsソネンを観てどう思いましたか?

サンチアゴ　アンデウソンがちょっと苦戦したけど、順当な結果だよ。チェールはレスリングしか知らないヤツだ。どんなに攻めてるように見えても、あれではアンデウソンには勝てない。チェールは口ではでかいことばかり言ってたくせに、テイクダウンして押さえ込んでもパウンドすることぐらいしかできないからね。俺はあの発言にも頭にきていたし、試合中もイライラしたから、俺がぶん殴りに行きたいくらいだったよ。

——チェール・ソネンは試合前、ブラジル人のことをかなり言ってましたからね。

サンチアゴ　ブラジル人だけじゃないよ。あいつはすべての人に対して失礼なことを言ってるんだ。あいつは自分の母親のこともボロクソに言うんじゃないか? キックアスしてやりたいよ。もしあのままアンデウソンが負けるようなことがあったら、試合直後に「俺とチェールを闘わせろ!」ってUFCに電話をしたかもしれない。4年前にUFCで闘ってたときといまの自分は、まったく違うファイターに成長しているしね。

——もう昔の自分とは違う、と。

サンチアゴ　俺はここ数年、ずっと厳しい相手と闘い続けてきたから、休む間もなかった。でも、そういった闘いが俺を強くしたんだと思うよ。

——今後、UFCにチャレンジしたい気持ちはありませんか?

サンチアゴ　もちろんオファーがあれば考えたいけど、いまはSRCとの契約があるし、現時点では何も考えてないよ。

——でも、昨日みたいな試合をしたら、UFCはほしがるでしょうね。ダナ・ホワイトはああいうエキサイティングな試合が大好きだし。

サンチアゴ　そうかもな（笑）。ただ、俺は日本が好きだし、ここで闘うのが好きだから、ずっとベルトを守りたいとは思ってるけどね。

——では、当面は日本で闘い続けてくれるわけですね。

サンチアゴ　ああ。俺はミサキをはじめ、日本のファイターをリスペクトしているし、ここで闘えることを光栄に思っている。だから、またすぐに戻ってきたと思ってるし、今年中にもう1試合やりたいね。できれば相手はまた日本のトップファイターがいい。

——具体的に闘いたい相手はいますか?

サンチアゴ　本当はアキヤマと闘いたいんだけどね。

——秋山成勲選手ですか!

サンチアゴ　でも彼と闘うためには、俺がUFCに行くか、彼が日本に戻ってこなければならないからね。日本の団体にいる選手ならサクラバと闘ってみたい。

——でも、桜庭和志選手はDREAMですけど。

サンチアゴ　去年の大晦日のようにDREAMとSRCの対抗戦があるなら実現できると思う。ただ、マネージャーに聞いたところによると、ミスター・タニカワ（谷川貞治FEG）はインタビューで俺のファイトマネーが高いと言ってるらしいんだよな。

——あ、それはたぶんウチのインタビューです（笑）。

サンチアゴ　だけど、少なくとも金額に見合うだけのファイトはしてるつもりだぜ。

——まさにそうでしょう。ノゲイラvsミルコのような試合をして、彼らよりはるかに安いでしょうからね（笑）。

サンチアゴ　ハハハハ、そのとおりだよ（笑）。まあ、誰と闘うことになってもベストファイトを心がけるよ。

——では、また最高の試合を期待してます!

【10年8月23日／都内・某ホテルにて収録】


——今日は試合前の忙しいなか、イ
ンタビューを受けていただきありが

ここがカリフォルニア州ロダイにある、ニ

シャツを作ってくれてありがとう」

ャレンジしてるんですよね？

「暴力柔術」Tシャツを着用するニック兄貴。やっぱり
本人が着るとカッコよさが違う！ すでに限定250



知的な暴力柔術

KJヌーン戦、メイヘム、五味、UFCを語る

NICK DIAZ

ニック・ディアス

「俺がUFCに行ったら 4階級制覇してやる」

本誌がプロデュースした「暴力柔術」Tシャツも大反響。人気上昇中のニック・ディアスの次戦が決定した。
10.9ストライクフォース・サンノゼ大会で、過去に流血TKO負けを喫した因縁のKJヌーンと対戦。
はたしてニックはこのリベンジマッチをどう闘うのか。
そのほか知的な不良、ニック兄貴がメイヘム、五味隆典、UFCを徹底的に斬ります!

聞き手&撮影／石井史彦　構成／堀江ガンツ

10月9日は「楽な給料日」になる。KJヌーンはタフな相手じゃない

――今日は試合前の忙しいなか、インタビューを受けていただきありがとうございます。

ニック　こちらこそ、ありがとう。俺の地元まで取材に来てくれるなんて、日本のメディアは熱心だな。

――ニック・ディアスにはそれだけの注目度がありますからね。こちらで作らせていただいたニック・ディアス"暴力柔術"Tシャツも好評で、限定250枚が即完売でしたから。

ニック　そうなのかい？　俺は日本で嫌われてるとばっかり思ってたんだけどな（笑）。

――いえいえ、何度も言ってるように人気急上昇中ですよ。このTシャツについてどう思いますか？

ニック　とても気に入ってるよ。バックの日本語は読めないけどクールだし、フロントには俺が子どもの頃から格闘家になるまで、どのように育ってきたのかを書いてあるだろう？　おかげで女の子や、彼女の両親たちに怖がられてるけどね（笑）。

――かつてワルだった遍歴が書かれてますからね（笑）。

ニック　これでまた俺の悪い評判が広まったら『kamipro』のせいだな（笑）。

――そ、そうですね（苦笑）。

ニック　まあ、昔ワルかったのは事実だからね。そんな時代を経て、いまはプロのMMAファイターとして成長したということだし、今後さらに成功するための励みにもなるよ。「Tシャツを作ってくれてありがとう」と、日本のスタッフにも伝えておいてくれ。

――わかりました。それにしても、今回初めてこのジムに来させていただきましたが、いいジムですね。

ニック　リングとケージが両方あって、どちらのトレーニングもできる。いい環境だろう？

――しかもケージが"ホワイトケージ"なのには驚きましたよ！　これはやはりDREAMのケージを意識したんですか？

ニック　いや、そうじゃないんだ。DREAMでケージをやる前から発注していたものだからね。そのあとDREAMが俺のジムと同じ白いケージで大会を開いたんで、こっちがビックリしたくらいさ。

――そうだったんですか。

ニック　俺自身はケージの色が白でも黒でもどうでもいいんだけどな。愛着が湧いてきているのも確かだけどね。

――では、10月9日のストライクフォース・サンノゼ大会でKJヌーン戦が決まりましたが、体調はいかがですか？

ニック　コンディションはいつでも最高だよ。ただし、試合に関してはコンディションも大切だけど、最近とても充実した内容のトレーニングができていることが大きい。このままの状態でトレーニングメニューをこなし、ケガなく試合を迎えられたら、すべての面で100パーセントになっているはずだよ。

――あなたはトレーニングも兼ねて、たびたびトライアスロンにもチャレンジしてるんですよね？

ニック　ああ、もう何度もチャレンジしているよ。俺はプロフェッショナルなMMAファイターとして、ファンの前でいい試合をするためにも常にベストのコンディションを作っておきたいんだよ。エネルギーやパワーだけがあったとしても、コンディショニングが万全でなければ、ベストのパフォーマンスを見せることなんかできないからね。トライアスロンはロングディスタンスのコンディショニングができると同時に、そのエネルギーやパワーを蓄えることができる最高のトレーニングなんだよ。

――MMAも格闘技のすべてが要求される、ある意味、格闘技のトライアスロンみたいなものですもんね。

ニック　そのとおり。試合で必要なのは15分闘える体力、タイトル戦でも25分だけど、消耗度はどのスポーツよりあると思っている。そのなかでベストのショーを見せるために、俺はトラアスロンのレースにも出ている。トライアスロンのシーズンでは毎週朝レースに出て、夜は柔術のトレーニングをしているんだ。

――トライアスロンをやったあと、柔術のトレーニングですか！　タフですね……。

ニック　俺はプロのファイターだからね。自分を向上させるためにも、柔術のトレーニングはいつでも欠かさないよ。

――今回はどんな点に重点を置いたトレーニングをしていますか？

ニック　KJ戦を意識したゲームプランに基づき、何をしたらいいのか、また何をしてはいけないのかを考えながらトレーニング、スパーリングを行なっているよ。

――そのゲームプランはどんなものになりますか？

ニック　「正しいゲームプラン」だよ（ニヤリ）。KJはグラウンドにいこうとしないだろうね。というより、「グラウンドゲームができない」と言ったほうが正しいかもしれない。事実、KJを知っている連中は、みんな彼の柔術スキルを問題視しているし、「練習もしてないんじゃないか」と言ってるんだよ。

――日本のDREAMで試合をしたときも、ほとんどボクシングだけのような闘い方でした。

ニック　俺との試合でもKJはスタンドでパンチを出してくるしかないだろうから、カウンター狙いのボクシングと、チャンスがあればテイクダウンしてグラウンドゲームでフィニッシュする。とにかくカギはボクシングゲーム、シンプルなものだよ。

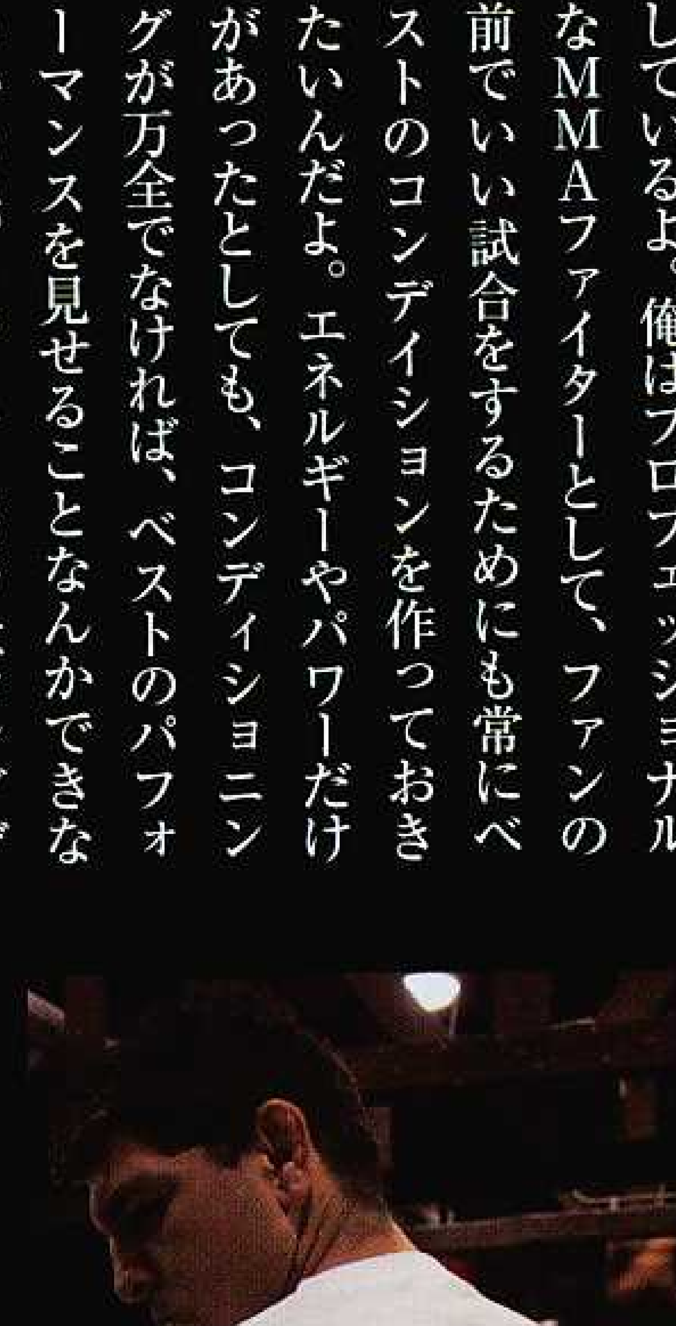
――KJはボクサーとしての実績もありますからね。

ニック　でも、彼は俺より身体が小さいからノックアウトするだけのパワーがあるとは思えないんだ。事実、





ここがカリフォルニア州ロダイにある、ニックが師範を務めるシーザー・グレイシー柔術のジム。自然に囲まれた美しい街並を抜けてジムに入ると、そこにはあのホワイトケージが！　DREAMが使用する前からここにあったというが、ニック兄貴と日本マット界の縁の深さを感じさせる。



「暴力柔術」Tシャツを着用するニック兄貴。やっぱり本人が着るとカッコよさが違う！　すでに限定250枚が完売しているが、さらに反響があれば新作が発売されるかも？

前回の試合でもKJのベストショットをもらってしまったものの、それほどのダメージは受けなかったからね。手数だって俺が上回っていたんだ。ただし、あいつはカットを狙うのだけはうまいから、俺も前回は左目の上をカットしてしまったけどね。

――今度のKJとの試合は「リベンジ」だとか、何か特別な感情はありますか？

ニック　いや、特別な感情なんて何もない、ただの試合の一つさ。10月9日は俺にとって「楽な給料日」になるんじゃないか？　KJはこれまで俺が闘ってきたファイターと比べてそんなにタフなファイターじゃないからね（笑）。

――前回のレフェリーストップ負けは、やはりアンラッキーだった？

ニック　ノー、あれは〝アンラッキー〟ではなく〝アンフェア〟だ。ブル○ットだよ。〝アンラッキー〟というのは予測不能な事象に関してだろう？　でも、あのときは単なるカットで止められてしまったんだ。あのカット自体深いものではなかったし、視界もちゃんとあり、何よりそれまでの試合をコントロールし、優位に進めていたんだぜ？　カットしたあとだって有効打を放っていたのは俺のほうで、グラウンドでも上を取っていた。あそこで止められなければ、間違いなくサブミッションで仕留めていたんだ。つまり、今度の試合でもKJが俺に勝つためには、KOするしかないということだよ。

――今回の試合が決まる前、メイヘム・ミラーが「ニックはフランク・シャムロックやスコット・スミスというミドル級ファイターとやってるのに、（同じくミドル級の）メイヘムとやらないのは逃げている」と挑発していたことについてどう思いますか？

ニック　挑発するのは勝手だけど、負け犬の遠吠えにしか聞こえないね。俺はストライクフォース世界ウェルター級チャンピオンなんだ。この階級で闘うのがあたりまえだろ？　ただし、もっと価値あるファイター、たとえばアンデウソン・シウバと闘えるのであれば喜んでミドル級の試合を受けるよ。でも、メイヘムにはそんな価値はないだろ。

――では、メイヘムとは因縁がありますが、今後も試合をするつもりはありませんか？

ニック　まったくやる気はないね。あいつは俺にとって価値のないファイターだ。事実、俺の弟（ネイト・ディアス）がスパーリングで何度もタップを奪っているし、チームメイトのジェイク（・シールズ）は、試合でメイヘムに完勝した。シーザー・グレイシーチームとしても闘う意味が何もないんだよ。それでもメイヘムが俺と闘いたいのなら、連勝を続けトップファイターであることを証明するか、俺が次の数試合を落としてしまったとき、メイヘムが試合をしたいのであれば受けてあげるよ。まあ、連敗するなんてことはありえないけどね。



ニック兄貴に対し、ミドル級契約での対戦をアピールしていたメイヘム。しかし、それはかなわず9.25『DREAM.16』での桜庭戦が決定。今後はDREAMが主戦場となることが予想される。

――いまのメイヘムには、階級を越えて闘う価値はない、と。

ニック　俺はファイターであると同時にウォリアーだぜ。強いヤツとしか試合はしたくないのさ。俺は（ナッシュビル大会メイン終了後の乱闘で）メイヘムの顔面にパンチをお見舞いしたけど、あいつはそれを返すこともなく、また俺に直接文句も言えなかったチキンだ。カメラの前だけでは強気になるけどな。とにかく、メイヘムが価値のあるファイターになったらいつでも闘ってやるということだよ。それはメイヘム自身だって知っていることさ。

――そのメイヘムは9月25日にDREAMで桜庭和志選手と闘うことになりましたが、何か感想はありますか？

ニック　馬鹿げた話だよ。だからこそ、そんなメイヘムとは試合をしたくないんだよ。

――どういうことですか？

メイヘムとやることに価値はない。アンデウソンなら階級上でもやるよ

ニック　サクラバは今日現在、トップで試合をできる状態にないことはファイターならみんなわかってるだろう。ダメージの蓄積は誰の目にもあきらかだし、その年齢からしても引退する時期にきてるんだよ。でも、俺はサクラバをレジェンドの一人として尊敬している。そのサクラバと試合なんてできないよ。これでメイヘムとの違いがわかるだろ？　あいつはそういう試合でも受けてしまうヤツなのさ。

――40歳を迎えた歴戦のダメージが残る桜庭選手と、20代でバリバリの人間がやるのはアンフェアだ、と。

ニック　あと以前DREAMで試合をしたときも、格下の相手は必死で闘っているのに、メイヘムはいつでも極められる状態だったにもかかわらず、ジョークのつもりかおかしなポーズをして笑わせていたのを覚えてるかい？

――柴田勝頼選手との試合で、マウントを取ったままピースサインを出したりしたんですよね。

ニック　必死で闘ってるルーキーを小馬鹿にしたんだよ。俺はそういうフリークなヤツは嫌いだし、許せないのさ。メイヘムは俺のことを〝ギャングスター〟だといっておもしろおかしく笑っているんだろ？　でも実際は、格下相手にもてあそぶ行為自体のほうが、よっぽど〝ギャングスター〟じゃないのか？　馬鹿げてるとしか言いようがないよ。

――では、メイヘムの話はこれくらいにして、先月末はネイト（・ディアス）のセコンドとしてUFCに行ってましたが、UFCの会場の雰囲気はどうでしたか？

ニック　最高の雰囲気だったよ。みんなが俺たちのことを嫌っていたからな（ニヤリ）。

――そんなにブーイングでしたか？

ニック　会場は（ネイトの相手である）マーカス・デイビスの地元だからね。客はみんな立ち上がって、俺たちに向かって「ファ○ク、ストックトン！」って騒いでいたんで、お返しに「ファ○ク、ユー！」って言ってやってたんだ。そして試合後は、観客みんなに向かって両手を挙げて「オールライト！　現実を見たかい？」って言ってやったけどね。

――そんなに観客を煽りましたか（笑）。ダナ・ホワイトは『kamipro』のインタビューで「ニックは生活態度をあらためてUFCに戻ってきてほしい」と言ってましたが、どう思いますか？

ニック　そんなこと、いつ言ってたんだい？

――2カ月前にやったインタビューですね。

ニック　「生活態度をあらためろ」だって？　俺は試合に関することしかしてないのにかい？　じゃあ、もうメディアに対して何も話さないっていうのはどうだい？（笑）。

――いや、それは困りますね（笑）。

KDIAZ

ニック　もうよけいなことは話さな

ニック　170ポンド（ウェルター

――GSPやアンデウソンは「絶対

同じサウスポーで同じ背丈、彼にと

な練習ができてなかったんじゃない

ヤムロックやスコット・スミスとい

ニック　もうよけいなことは話さないし、ミドルフィンガーを立てたりすることも控えるよ（笑）。試合後も、もうマイクなんて俺に向けないでくれ。ただケージに入って試合してロッカールームに引き上げればいいんだろう？　これでダナも満足するかい？　俺だって何も言う必要もなくなるしね。

——それだとニックの魅力が半減ですけどね。

ニック　ファイターのなかにはメイヘムのように試合よりも口ばっかりのヤツもいるけど、同時に話すことができないヤツもいるだろう？　俺はその話しかできないヤツになるよりは、話さないほうがノープロブレムだね。完全に口を閉ざして「シ○ト」って言わない代わりに、「サンキュー」とも言わないっていうのでいいんだろう？

——まあ、ダナもそういうことを要求してるんじゃないと思いますけどね（笑）。生活態度はともかく、UFCに参戦することには興味はありますか？

ニック　UFCのヤツらみんなを倒したいと思っているよ。まあ、俺がやる前に弟がそいつらを倒してしまうかもしれないけどね。トップレベルのファイターと対戦ができ、条件のいいオファーだったらUFCでもどこでも、すぐに行くよ。

——UFCでとくに対戦したい選手は誰ですか？

UFCライトヘビー級はデカいだけ。二階級上でも勝つ自信があるよ

ニック　170ポンド（ウェルター級）でGSP、185ポンド（ミドル級）でアンデウソン・シウバ、それに205ポンド（ライトヘビー級）のベルトにも挑戦したいんだ。

——一階級上のミドル級どころか、二階級上のライトヘビー級まで視野に入れてますか！

ニック　さっきも言ったとおり、俺のベストは170ポンドだけど、価値ある試合だったら階級は関係なく誰とでもやるよ。いいオファーだったら155ポンド（ライト級）に体重を落としたっていい。ゴミ（五味隆典）と試合をしたときは160ポンド契約だったけど、計量の時点では157ポンドしかなかったから、急きょ水を飲んで体重を合わせたくらいなんだ。とにかく、UFCに行ったら、ベルトを総なめにしてやるさ。





8.28『UFC118』でフランク・エドガーにリマッチを挑むも、判定負けで連敗となったBJペン。五味にとっては"天敵"ともいえる柔術系超実力者であるBJが陥落し、エドガーというレスリング出身者が王者である現状は好都合か？

——GSPやアンデウソンは「絶対王者」と呼ばれていますけど、そこまで自信がありますか？

ニック　アンデウソンは「絶対王者」なんかじゃないさ。レスリングだけに長けたチェール・ソネンや、柔術だけのデミアン・マイアに苦しんで勝ってるくらいだろ？　俺は柔術、レスリング、スタンドアップ、どれでも勝負できるし、アンデウソンを上回っていると思っている。また205ポンドクラス（ライトヘビー級）はデカいだけで、これといったファイターがいないんじゃないのかい？

——いや、強豪揃いだと思いますけど……。

ニック　リッチ・フランクリンはいいファイターだし、俺との試合が実現したらベストカードになるんじゃないか？　じつはチャック・リデルがリッチとの試合に備えて俺とスパーするはずだったんだけど、実現しなかったんだ。残念だったよ。俺とリッチは同じようなファイトスタイル。同じサウスポーで同じ背丈、彼にとっていいトレーニングになったはずなんだけどね。とにかく俺は意味がある試合だったら誰とでも闘うから、ちゃんといいオファーを出してほしいんだ。いまは稼いでもオーガニックな食事を摂り、トレーニングだけにしかお金と時間を費やしてないのに、税金を払うのにさえ頭が痛い状況で、彼女にも見放されてしまったんだよ。

——そうなんですか!?

ニック　俺がストックトンに住んでるのも、ユライヤ・フェイバーのいるサクラメント、ジェイク・シールズやギルバート・メレンデスのいるサンフランシスコ、シーザー・グレイシー柔術の本部があるプレザントンヒルの中心的な位置だからなんだ。ストックトンなら、どこに行くにも車で1時間から1時間半で着くからね。だからこそ、俺は常にベストのキャンプで練習することが可能なんだよ。その移動だけでも金がかかるっていうのに、外野連中からは「ギャングスター」とか「シ○ト」呼ばわりされ、テレビからも見放されて金を稼ぐチャンスを失なっているんだよ。

——あのナッシュビルでの乱闘も原因なんでしょうね（笑）。

ニック　とにかく金を稼ぐチャンスをくれ。いい相手だったら、減量でも増量でもなんでもしてやるよ。

——先日のUFCでは一階級下のライト級タイトルマッチが行なわれましたが、BJペンはなぜフランキー・エドガーに敗れたんだと思いますか？

ニック　BJは試合に備えたハードな練習ができてなかったんじゃないか？　ボクシングのいい練習はできていたと聞いているけど、エドガーの速い動きについていこうとしなかったのも敗因だと思う。試合後、「病院に行った」ということで会見に出てこなかったけど、ダメージもそんなになかったはずだから、それはウソだと思うよ。おそらく不甲斐ない自分自身に腹を立てて、みんなの前に姿を見せたくなかったんだろう。

NICK

——BJは衰えたと思いますか？

ニック　BJは素晴らしい経験を積んでいる男だよ。いまでも間違いなく「BJ is a MAN」さ。今回のBJにはモチベーションに原因があったんじゃないかと思う。

——「リベンジマッチ」ということでモチベーションは高かったように思いますが……。

ニック　BJは長らくライト級のトップに君臨してきた男だからね。リマッチとはいえ、以前のようなモチベーションを保つのは難しくなっているんだろう。かつてマイク・タイソンが連敗したときもそうだった。そういう意味で、今回の敗因はBJ自身ではなく、そのモチベーションが作れなかった、また勝つためのトレーニングをさせられなかったコーチ陣に問題があるんじゃないかと思う。まあ、もちろんこれは俺個人の意見だけどね。

——柔術家がエドガーのようなレスラーを倒すためにはどうしたらいいですか？

ニック　もっとパンチを出し、腰を落としてテイクダウンに入られないようにすることだよ、基本的にはね。

アオキvsトムソンが実現していたら アオキがフットロックで勝っていた

エドガーはよく知っている仲なんだよ。なので、彼の攻略法なんて俺に聞かないでくれ(笑)。

——では、エドガーを倒す可能性が一番高いのは誰だと思いますか?

ニック もちろん減量した俺さ、という答えじゃダメかい?(笑)。まあ、本当のことを言えば、グレイ・メイナードが一番可能性が高いと思うよ。

——五味隆典vsタイソン・グリフィン戦はご覧になりましたか?

ニック ああ、テレビで観たよ。俺の予想どおりの結果だ。

——五味選手のKO勝ちが予想どおりでしたか。

ニック あのボディショートからのKOパンチは、以前タイソンが俺たちと一緒に練習していた頃、俺がよく使っていたパターンで、当時からタイソンは反応できないでいたんだ。

——へえ、そうだったんですか。

ニック タイソンは俺たちのチームメンバーだったのに、いつも練習で俺たちにやられていたから、ランディ(・クートゥアー)のところに鞍替えしたヤツなんだ。どうやら向こうでの甘い環境がお似合いだったんだろうね。俺たちのところにいたときは、みんなにやられていたからネガティブなイメージばっかりだったけど、向こうではみんなに気を使ってもらって、ポジティブなイメージを作れたんだろう。それで自分の力を過信して、ゴミと真っ向から殴り合ったりしたんだ。

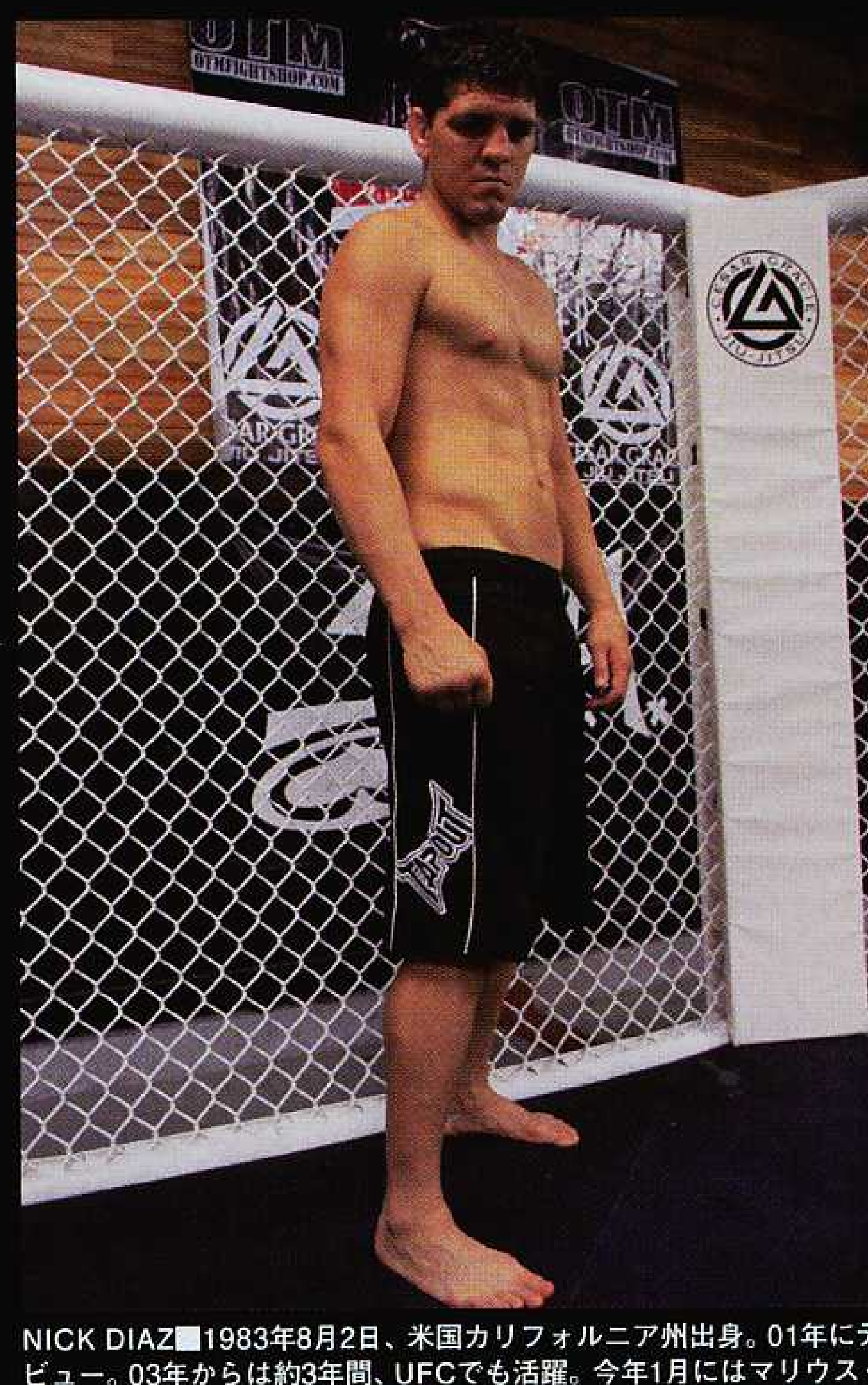
——あの闘い方はみんな首を傾げてましたよね。

ニック ゴミは素晴らしい経験を積んでいるし、ボクシングのタイミングを身につけている男だ。それに対してタイソンはそのタイミングを理解できてないんだから、ボクシングで勝てるわけがない。確かにタイソンの練習仲間や環境は素晴らしいけど、あそこは各自が好きなことしかやってないんじゃないかと思うよ。

——勝った五味選手は評価を上げましたが、彼が再びライト級トップになる可能性は?

ニック ゴミはいまのライト級トップファイターの誰と闘っても倒すだけのものは持っていると思うから、ハマればトップになれる可能性はあるよ。

——ほう、ありますか!



NICK DIAZ■1983年8月2日、米国カリフォルニア州出身。01年にデビュー。03年からは約3年間、UFCでも活躍。今年1月にはマリウス・ザロムスキーとの王座決定戦を制し、ストライクフォース世界ウェルター級王者となった。183cm、77kg。

ニック ゴミは現チャンピオンであるエドガーより間違いなくボクシングテクニックは上だし、レスリング能力だって劣っていない。ケニー・フロリアンには負けているけど、俺はケニーの実力を評価してないし、ゴミが負けたことが信じられないんだ。グレイ・メイナードと闘ってもゴミはKOで勝てると思うよ。ただ、みんなも知ってのとおり、ゴミにとって一番のネックは柔術の能力。だからBJがチャンピオンでなくなったことは、ゴミにとって好都合だろう。一番の〝天敵〟がトップじゃなくなったんだからね。

——逆に言えば、エドガーやメイナードは、五味選手にとって相性がいい相手だ、と。

ニック そうだね。だからいまのコンテンダーのなかでも、ゴミはチャンピオンに勝てる可能性がかなり高いファイターだということさ。あとはタイトルマッチの前に無駄な星を落とさないためにも、ギを着ての柔術の練習を徹底的に行なうことを勧めるよ。

——五味選手がUFC王者になれる可能性は高い、と。これはファンにとってうれしい分析ですね。

ニック ただし、俺の弟ネイトがゴミとやったら、確実に一本で勝つだろうけどね(笑)。

——やっぱり五味選手にとって〝暴力柔術〟は天敵だ、と(笑)。7月のDREAMで行なわれた青木真也vs川尻達也戦はご覧になりましたか?

ニック 俺自身はまだ観てないけど、アオキがフットロックで極めたことは友人に聞いたよ。

——川尻選手から秒殺一本勝ちした青木選手についてはどう評価しますか?

ニック いいんじゃないか? ただ、俺のほうが完璧なフットロックをかけることができるけどね。

——そこでも俺のほうが上だ、と(笑)。9月のDREAMでは、その青木選手とジョシュ・トムソンの対戦が噂されながら結局流れてしまいましたが、これが実現していたらどんな試合になっていたと思いますか?

ニック アオキがフットロック、もしくはレッグロックで試合を決めるだろうね。

——青木選手の一本勝ちですか!

ニック アオキがボディロックからレッグロックの流れを学べば、間違いなく勝てると思う。スタンドアップでのパンチのカウンターでボディロックに入り、テイクダウンを狙わずにそのままレッグロックへいくというトランジションでね。

——立ち技から一気に極めにいくべきですか。

NICK DIAZ

ニック もちろん、テイクダウンができたら、パスガードからコントロールすれば、よりアオキの勝ちは動かないだろう。ただし、ジョシュはトップレベルのレスラーだから、アオキのレスリングスキルでは対応できないだろう。そういう相手に無理矢理テイクダウンを狙うべきじゃないんだ。仮に俺がジョシュと対戦するとしても、彼のレスリングスキルを考慮し、テイクダウンを狙うことはしないと思うんだ。逆にジョシュにとっては、ボディロックに入らせない、または切ることができないと、苦しい試合を強いられることになるだろうね。

——そういう話を聞くと、なんとか青木vsトムソンが日本で実現してほしいですね。

ニック そんなことより俺を日本に呼んでくれよ(笑)。

——あ、そっちのほうが優先ですね(笑)。

ニック 俺はまた日本で、それもリングで闘うことができる日を楽しみにしているんだ。日本のプロモーターにいいオファーを出してくれるように言っておいてくれよ。

——誌面を通じてお伝えしておきます!

ニック ただ、俺は日本のファンに嫌われてるんじゃないかと心配なんだけどね(笑)。

——だから、それは心配ありません!(笑)。また日本で試合が観られる日を楽しみにしています!

【10年9月4日/米国カリフォルニア州ロダイ、シーザー・グレイシー柔術アカデミー・ロダイにて収録】

今月は“ジャイアン”が電話取材で高笑い！
五味、岡見、秋山の評価を語る

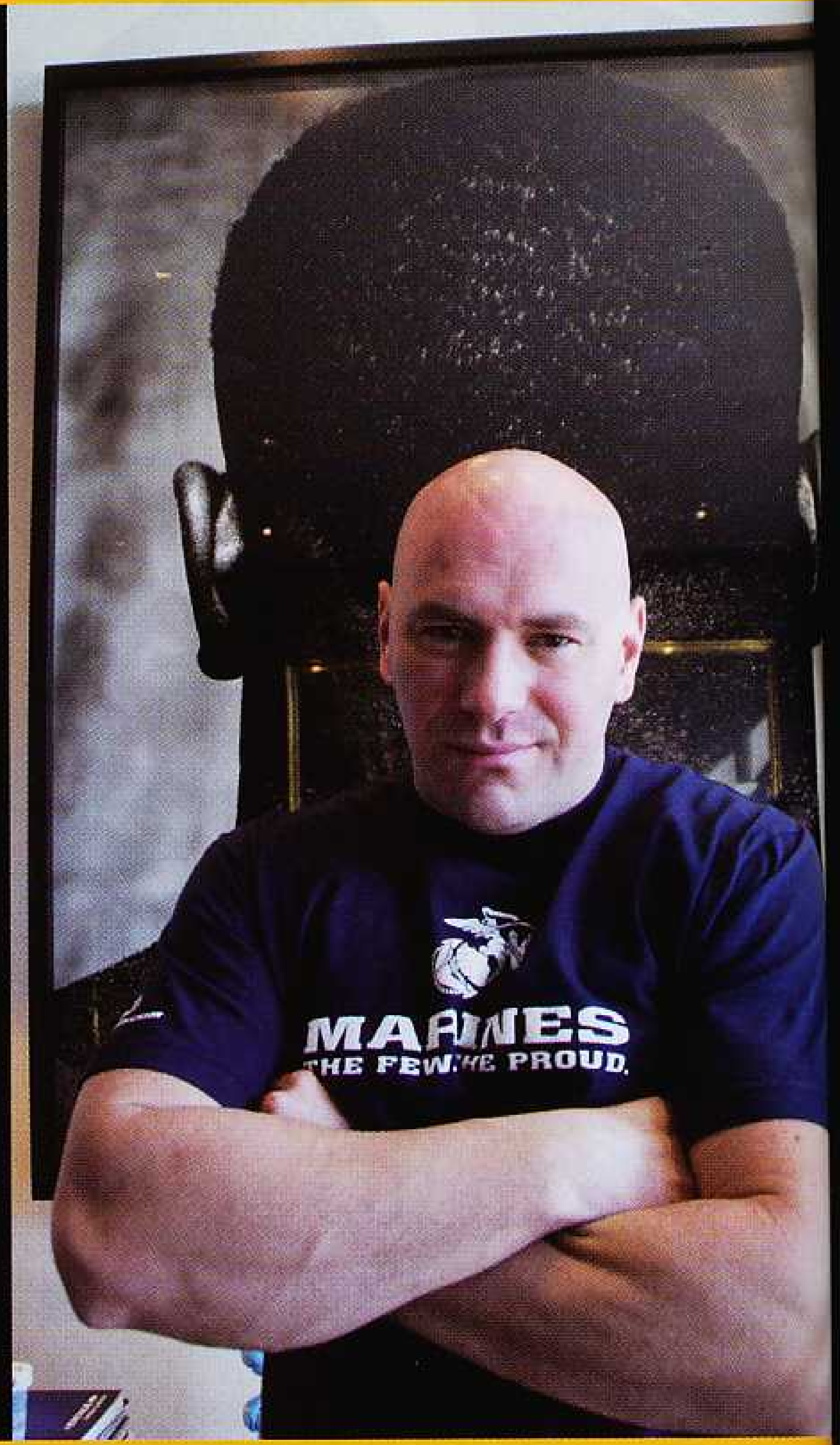
[UFC PRESIDENT]

ダナ・ホワイト

「五味の勝利はUFC日本進出のスピードアップにつながるだろう」

五味隆典が秒殺KO勝ち、岡見勇信はタイトル戦へ一歩前進するなど、ここにきて勢いを増してきた日本人UFCファイター。はたしてダナ・ホワイトは彼らをどう評価しているのか？

聞き手／石井史彦　構成／堀江ガンツ



—今回もお忙しいところ時間を作っていただき、ありがとうございます！

ダナ 寝る間もないほど忙しいことは確かだよ。でも、俺はこの仕事が好きだし、日本のファンが好きだし、おまえたちの雑誌も好きだから、さほど苦にもならないな（笑）。

—ありがとうございます（笑）。では時間もないのでさっそく本題に入りますが、先日、五味隆典選手がタイソン・グリフィンを見事にKOした試合の感想を聞かせてください。

ダナ やっと本来のゴミを見せてくれたよ。ゴミはあの劇的なKOによりUFCの155ポンド（ライト級）でトップクラスの仲間入りができたんだ。

—あの結果は驚きでしたか？

ダナ いや、俺はゴミを信じていたよ。じゃなかったら、そもそも契約をしていない。確かにUFCデビュー戦では、相手がタフなケニー・フロリアンということもあり苦戦していたが、UFCデビュー戦というのは、どんな大物でも苦労するもんなんだ。しかし、ゴミはデビュー戦での屈辱から立ち上がり、タイソン・グリフィンを初めてKOした男になったことで、真のファイターであることを証明したんだよ。

—前回のインタビューでは、五味選手のことを「ランキングベスト10圏外」と言っていましたが、グリフィンをKOしたことで評価は変わりましたか？

ダナ 評価が変わったというより、グリフィンを完全KOしたことにより、ゴミ自身がライト級ベスト10にランクする実力を証明したんだよ。ファンのみんなもそうだろうし、俺自身もゴミの次の試合がどんな内容になるか楽しみにしているんだ。

—五味選手の次の試合はいつ頃になりますか？　また、対戦相手候補もリストアップされていますか？

ダナ 現在、ゴミの次のステップを検討しているところだよ。いま言えることは、間違いなくファンに喜んでもらえるマッチアップを実現させるということだ。155ポンドクラスにはゴミと相性のいい選手がたくさんいるし、エキサイティングな試合になることは間違いないから、次の試合も楽しみにしていてくれ。

—次の試合に勝てば、一気にタイトルマッチとなる可能性もありますか？

ダナ ゴミはここUFCでまだ1勝をあげたばかりだよ。次の試合はもちろんのこと、彼のベストの試合内容で連勝を重ねていけば、自然とタイトル挑戦の話になるだろう。俺はぜひともそうなるように期待しているんだ。

—そのライト級タイトル戦線は、BJペンがフランキー・エドガーに連敗を喫しましたが、その試合の感想を聞かせてください。

ダナ エドガーが素晴らしい試合をしたってことにつきるよ。彼のオクタゴンでのパフォーマンスをみんなもっと評価するべきじゃないのかい？　この再戦に懸けてきたBJを相手に5ラウンドにわたり完全に試合を支配したんだからね。こんな芸当、ほかに誰ができるっていうんだ？　現在、彼は間違いなく世界でベストのライト級ファイターであり、BJとの連戦で勝利したことでその称号を手に入れたんだよ。

—次のライト級タイトル戦は誰が挑戦者になりそうですか？

ダナ グレイ・メイナードになる予定だ。メイナードはMMA無敗で、しかも過去に唯一エドガーを下した男でもある。ライト級のトップを争うにふさわしい闘いになるだろう。

—BJペンがフランキー・エドガーとのリマッチに敗れたことにより、今後、BJペンvs五味隆典戦が実現する可能性は？

ダナ そのカード自体はともかく、まずはBJが次に何をしたいかを確認することが先決だ。現時点では何も言えないよ。

—日本のスターである五味選手が勝ったことで、日本進出の可能性は高まりましたか？

ダナ 『kamipro』でもこれまで百万回ほど話しているとおり、UFCはアジアの格闘技市場に参入するために力を注いでいる。そのなかでも日本進出は数年前からの悲願だ。日本のファンの前で本物のUFCをお見せする機会をできるだけ早い時期に実現させたいし、ゴミやオカミといった選手が活躍すれば、ご指摘のとおり、そのプロセスはスピードアップにつながるだろうね。

—岡見選手の次の試合はどうなりそうですか？

ダナ 正式発表は先になるだろうが、トップクラスにランクされているファイターが相手になるよ（米国MMAサイトではビクトー・ベウフォート戦が濃厚とされている）。オカミはもうタイトルマッチ寸前のところまで来ている。次の試合は非常に重要な意味を持つだろうね。

—もう一人の日本人選手、秋山成勲は10月にマイケル・ビスピンと闘うことになりましたが、これは秋山選手にとってサバイバルマッチとなりますか？

ダナ サバイバルというのは、UFCに残留できるかどうかの瀬戸際という意味かい？　確かにアキヤマのUFCの戦績だけ見ると1勝1敗だけど、アラン・ベルチャー戦、クリス・リーベン戦はともにファイト・オブ・ザ・ナイトに選ばれていることを忘れているんじゃないか？　アキヤマは真のウォリアーであり、そのすべてをオクタゴンの中で見せてくれている。そういうファイターには常にUFCという“家”があるんだよ。

—では、ビスピン戦はイギリスのスーパースターとメインイベントで対戦というビッグチャンスが与えられたという認識でいいわけですね。

ダナ もちろんだ。ビスピンもアキヤマも下がることを知らないファイターだ。今回もベストファイトになるだろうと期待しているんだよ。

—五味選手、秋山選手、岡見選手と、いま日本人UFCファイターがみんないい状態ですが、もし日本進出が実現したらどんなカードが考えられますか？

ダナ 日本開催だからといって、UFCの方針が変わることはないよ。普段から我々が組んでいるカードと同じように、世界でベストのファイター同士のカードを組むことを約束しよう。

—UFCの日本進出はなんとか実現してほしいですね。ファンもみんな待ってますから。

ダナ 日本のファンのサポートには本当に感謝している。ここ何年もUFCを誠実に見守っていてくれているからね。その恩返しという意味でも、本当のUFCを楽しんでもらうために、できるだけ早い時期にUFC日本大会を実現させることを約束するよ。今日はここまでだ！

【10年9月10日／電話取材にて収録】

面!

ズ教室

対談 サスケ組名誉会長 ファイヤー原田

その類いまれなるキャラクターで人気沸騰中のK-1ファイター、ファイヤー原田。
このファイヤーがひきこもり時代、プロレスから生きる勇気を与えられたのは有名なエピソードだ。
そしてプロレスにハマるきっかけとなった人物こそ、ご存知、我らがザ・グレート・サスケ先生!
今回はファイヤーがこの“人生の恩人”と感動のご対面、そして話は思いもよらぬ方向に……!?

聞き手／鈴木佑　撮影／坂下高志　試合写真／今村陽子



みちのくプロレス

ザ・グレート・サスケ

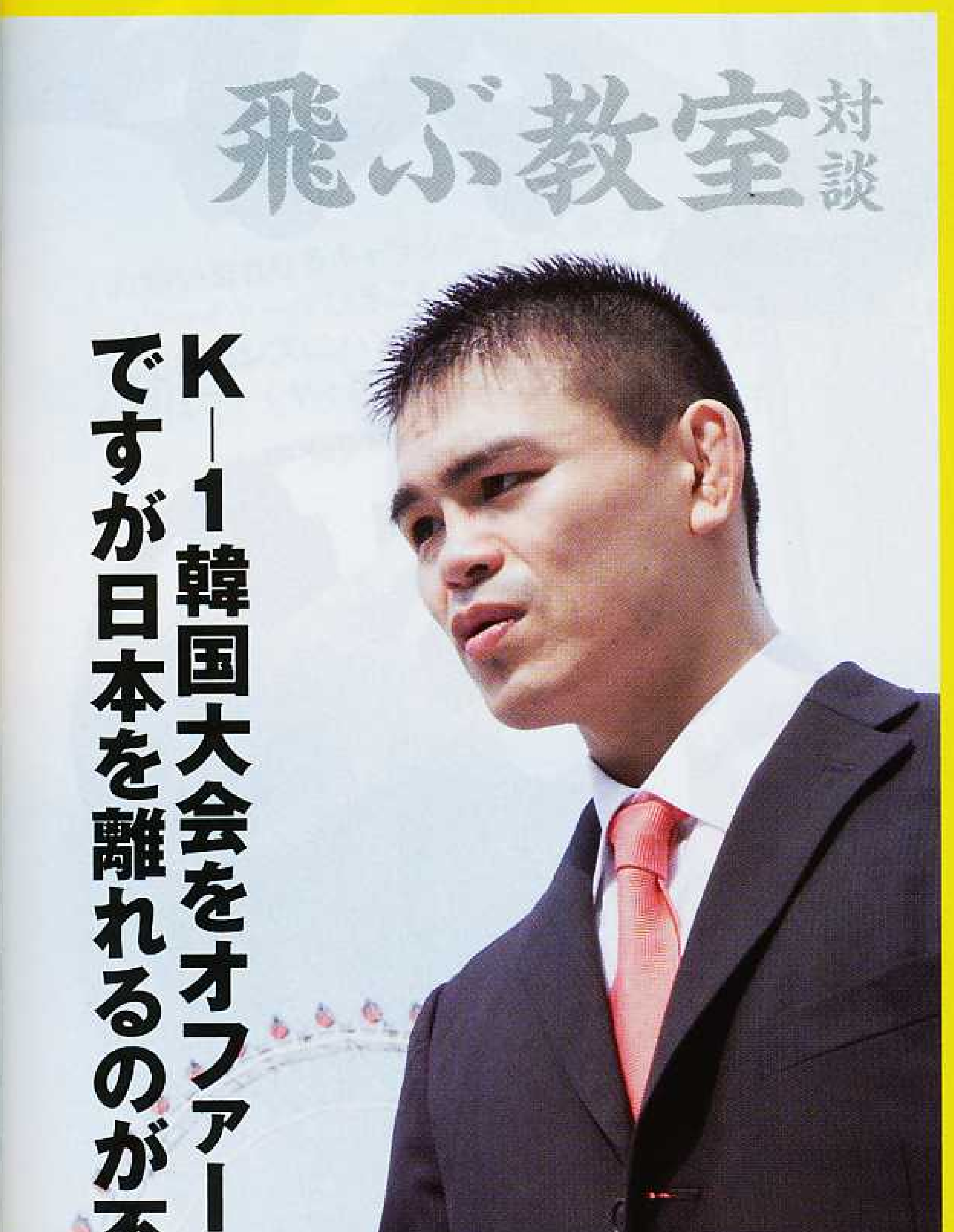
ついにファイヤーが憧れのスターとご対面!
東北の英雄がブッ飛び人生指南!?

飛ぶ



ファイヤー原田

飛ぶ教室 対談



K―1韓国大会をオファーされたのですが日本を離れるのが不安で……

——今回は夢の対談といいますか、原田さんが憧れの人であるサスケさんとご対面ということで、この場をセッティングさせていただきました！

原田 い、いやもう、サスケ選手、今日は、よ、よろしくお願いいたします！（緊張気味にお辞儀）。

サスケ いやいや、こちらこそよろしくお願いいたします（ニッコリ）。それで原田さん、さっそくで申し訳ないんですが、ここにサインしていただけませんか？（本誌前号のファイヤー原田のインタビューページを差し出しながら）。

原田 えぇ～!? いやもう、お、恐れ多いです、はい！ そんな自分みたいな、なんでもない人間のサインだなんて。ホント、憧れの人にそう言っていただけるなんて、そんなもう、はい……（しどろもどろになりながら）。

サスケ いえいえ、何をおっしゃいますやら。私なんか全然憧れてもらうような対象じゃないんで（笑）。

原田 いやもう、そんなとんでもないです！ あの、自分もたいへん恐縮なんですが、こちらにサインのほうをぜひ……（単行本『ザ・グレート・サスケの飛ぶ教室』を取り出して）。

サスケ あ、買っていただけたんですか？ うれしいなぁ、ありがとうございます！

原田 いえいえ、非常に興味深く拝読させていただきました！ いやもう、ホントに今日は身にあまる光栄でして、はい。

サスケ いえいえ、そんな、こちらこそ勘弁してくださいという感じですよ、ええ。

——え～、謙虚合戦がつきませんが（笑）。お二人はこれまでに面識はあるんですよね？

原田 はい、今年の6月にサスケ選手の20周年大会に足を運んだ際に、初めてちゃんとご挨拶させていただいて。あとはこれまでに会場とかで、一般のお客さんに混じってサインをいただいたことが何度かありまして。いつも優しく接していただいて、凄くうれしかったですね、はい。

サスケ へぇ～、じゃあこれまでに何度か面識はあったんですね。

原田 いやもう、こちらの一方的な面識ですけど（笑）。ホントに常に丁寧にしていただいて、なんだかその節はありがとうございました（深々とお辞儀）。

サスケ いやいや、もうホント困ります、困っちゃいますから（笑）。でも、ゆっくり話すのは初めてですよね。

原田 はい！ なんかもう、自分のような人間がここにいさせていただくのが、ホントに申し訳なくて……。

サスケ そんな、とんでもない、とんでもないです。今日はありがとうございます（深々とお辞儀）。

原田 いやいや、やめてください！ いやもう、ホントにはい、あの……。

——え～、なかなか話が進まないですが（笑）。そもそも原田さんがプロレスを好きになったのが、サスケさんの試合を観たことがきっかけということで。

原田 はい！ 『第1回スーパーJカップ』がテレビで深夜にやっていて、それをたまたま深夜に観させていただいて。自分もそれまでは正直、ほとんどプロレスは観たことがなかったんですけど、サスケ選手がライガー選手に逆転勝ちした試合を観ていたら、もうホントに涙が止まらなくなってしまって。

サスケ いやいや、ありがとうございます。

原田 それでそのすぐあとに、みちプロさんの大田区体育館大会を会場で観させていただいて、そこでもうホントに感動してハマってしまいまして……。そのあとはみちプロさんからプロレス全体を好きになり、基本的にみちプロさんが関東でやる大会はほとんど足を運ばせていただきました。

サスケ ああ、もうホントに恐縮です、はい。

原田 いやもう、『スーパーJカップ』でみちプロさんがブレイクしてから、その翌月の『ベスト・オブ・スーパー・ジュニア』にスペル・デルフィン選手やTAKAみちのく選手が参戦されて、さらに10月の『SGタッグリーグ』ではサスケさんがブラック・タイガー選手（二代目＝エディ・ゲレロ）と組まれて準優勝されて……（以下、延々とサスケとみちプロの歴史を興奮気味に語る）。

サスケ いや～、凄い！ 私より私のことに詳しいじゃないですか（笑）。

原田 いやもう、ホントに夢をたくさん与えていただいたので！ 昔は東北まで青春18きっぷで密航して、『第2回ふく面ワールドリーグ戦』を、日によっては野宿しながら追っかけたこともありますし（笑）。

サスケ え～、ホントですか!?

原田 はい（照）。あの、かつてサスケさんがヒールターンされたじゃないですか？ そのときは凄く残念に思ったんですけど、そのあとにベビーフェイスに戻ってくれた際に、ベビー時代のテーマ曲が流れた瞬間にはもう号泣でしたから（笑）。で、その頃に自分はひきこもりで95キロくらいあったんですけど、「サスケ選手があんなに頑張ってるんだから、自分も何かやらなきゃ」と思って、20キロ痩せられたんです。なんかホントにサスケ選手とプロレスのおかげで、自分のつまらない人生を救っていただいたといいますか、はい！

サスケ そんなにみちのくを愛していただいていたんですね～。ちなみにプロレスを観に行くときはお一人だったんですか？

原田 あ～、そうですね。もうほぼ一人で、はい。

サスケ あの、みちプロの会場で女性との出会いなんかはありませんでしたか？

原田 いやいや、もう、全然です、はい！（苦笑）。あの、お恥ずかしい話、当時の自分の夢は女性とプロレスを観に行くことだったんですけど……。

サスケ ハハハハ！ あのね、原田さん。けっこうみちプロの会場では男女の出会いがあるんですよ（笑）。

原田 えぇ～、ホ、ホントですか!? それは素晴らしいですね！ でも、



ファイヤーの次回K-1参戦は10.3韓国大会に決定！ そして早くも谷川EPは大好きな韓流ドラマを観るようファイヤーに強要？ 同大会には才賀紀左衛門も出場。ナイスキャラの二人は日韓戦で何を見せてくれるのか、その活躍に乞うご期待!

海外は一皮むける感覚になるので

ザ・グレート・サスケ

やっぱりまだ自分はこう、人間的に小さすぎてそういう出会いといったものが、もう、その、はい……(照)。

サスケ しかも、それをきっかけに結婚したカップルの例も少なくないんですよ。ですから、ぜひまた、みちプロの会場にいらしてください(笑)。

原田 あ、ありがとうございます！ いやもう、何かのきっかけになれば、ホントに、はい！(興奮気味に)。

――ダハハ！ サスケさんも、自分のファンがこうしてプロのファイターとして活躍してるのは感慨深いんじゃないですか？

サスケ いやぁ、まさにそうですよ。ホントうれしいかぎりですね。

原田 ああ、そう言っていただけるなんて、ホントありがとうございます！ いや、でも当時、プロレスラーの方々から教えていただいたことが、いまの自分の闘うハートになってるんです。あの、5月に自分がK−1に初出場する際、サスケさんから応援メッセージとサイン色紙をいただいたじゃないですか？ 恥ずかしながら、自分はあれを見て号泣してしまいまして(笑)。

サスケ ええ、ほんとですか？ その映像はまだ観てないんですよ～。

原田 しかもそれは会場でも流していただいて、お客さんもホントに盛り上がってくれたんですね。それがバックステージの自分にも伝わってきて、もの凄く力になったのでホントにうれしかったです、はい！

サスケ あのときはK−1のスタッフの方が、原田さんをサプライズで喜ばせたいということでいらっしゃったんですけど、まさか号泣されてるとは……。いやもう、色紙にも書かせていただきましたけど、原田さんはサスケ組の名誉会長ですから。ちなみに顧問はライガーさんです(笑)。

――原田さん、プロレスファンになるきっかけとなったお二人と名前を並べてるじゃないですか(笑)。

原田 いやもう、なんだかホントに夢のようです……(しみじみと)。最近、後楽園でひさびさにサスケ選手の試合を観させていただいたときも、あの頃と変わらず素晴らしかったので、なんかもう、また涙が止まらなくなってしまって。

サスケ いやいや、私なんてアンヴィルの格好してましたから(笑)。

原田 いやもう、なんかそういうのも含めてうれしいんです。そういう破天荒な部分も含めてサスケ選手の魅力なんで、はい(笑)。

サスケ ガハハハ！ ありがとうございます。

――せっかくの機会なんで、原田さんのほうからサスケさんに何か聞いてみたいことはありますか？

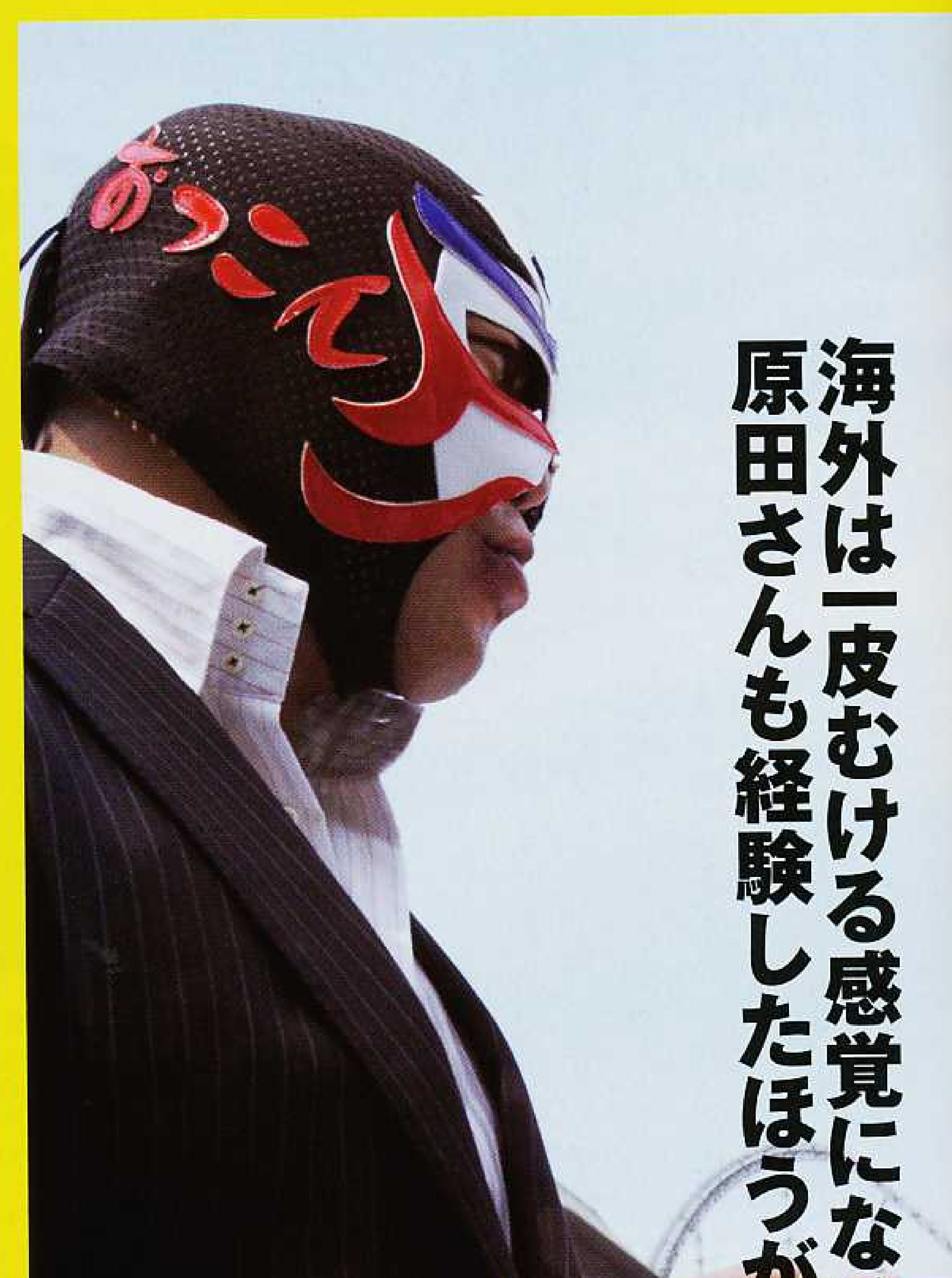
原田 はい！ あの、ちょっと自分ごとで申し訳ないんですけども、今度のK−1の韓国大会への出場オファーが急きょ入ったんですね(その後、10・3『K−1 MAX』ソウル大会でキム・テヒョンとの対戦が決定)。で、自分はジムの会長をやっていることもあり、日本を離れることにちょっと不安がありまして。でも、選手としてはまだ外国人と闘ったこともありませんし、海外で試合したこともないので、やりたい部分は凄く大きいんです。サスケ選手も海外で試合されることも多かったと思うのですが……。

サスケ なるほど。あの、そのお気持ちは凄くよくわかりますね。昔、私にWWEから長期契約で試合をしてほしいというオファーがあったんですね。でも、その当時は私もまだバリバリの社長でしたし、向こうに行ってしまったら、まだ組織として未熟なみちプロは潰れちゃうくらいの感じだったんです。いまのみちプロだったら問題ないんですけど、その当時は葛藤の末に断りまして。

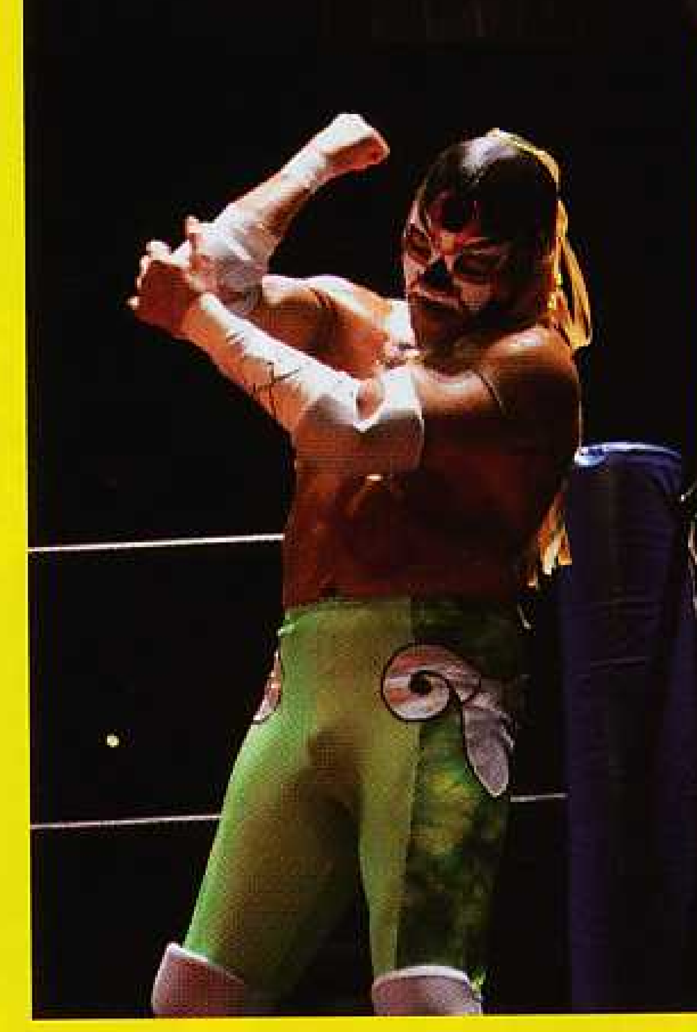
――組織の長としての責任感ですね。

サスケ そうですね。でも、私も長期滞在型じゃなければ、どんどん海外には行ってましたよ。メキシコマットをはじめ、ECWにも定期的に上がってましたし。やっぱり海外での試合のいいところは、国民性の違いというか、お客さんの反応がまた日本と違うという部分を実感できることですかね。それに海を越えると日本を俯瞰で見ることができて、自分が一皮むけるような感覚になるんです。ですから、原田さんもぜひ海外を経験されたほうがいいと思いますよ。

原田 ありがとうございます！ いやもう、そう言っていただけてうれしいです。やっぱり海外で得られるものってかけがいがないんだなって、いまのサスケ選手のお話を聞いていて思いました、はい！



海外は一皮むける感覚になるので原田さんも経験したほうがいいですよ



最近は『アンヴィル』化してるサスケだが、その前は『レスラー』バージョン。「『レスラー』はみちのくプロレスだ!」と語るサスケだけに、同作で号泣したというファイヤーに大きなシンパシーを抱いた模様。

サスケ ご参考になったのならよかったです(ニッコリ)。

原田 あの、もう一つおうかがいしてもよろしいですか？

サスケ どうぞどうぞ、なんなりと。

原田 あの、自分はいまこうして取り上げていただく機会が増えてるんですけど、正直戸惑う部分もあるんですね。ホントに自分みたいな人間がそれに値するのかどうか、と。サスケ選手はマスクもされてますし、普段から非常に注目を集めてしまうと思うんですが、そこに葛藤みたいなものはありませんか？

サスケ ああ、なるほど。いや、まあ、自分の場合はもともと目立ちたがり屋なんでね(笑)。でもね、原田さん。いまの原田さんみたいにスポットライトを浴びるというのは、選ばれた人間だからなんですよ。だから、これから人々に夢を与えるためにも、原田さんは堂々といまのまま、ありのままの自分を出せばいいと思いますよ。

原田 あぁ～、もったいないお言葉で恐縮です、ありがとうございます！(感きわまった様子で)。

サスケ ハハハハ、いえいえ。逆に私からご質問したいんですけど、やっぱりジムの会長という要職はたいへんだと思うんですが、一番のご苦労はどういった点ですか？

原田 そうですね……あの、うちのジムはけっこう間口が広いんですね。そういう部分でいろんな人との出会いがあっていいんですけど、やっぱり人間関係的な部分で、会長としてまと

飛ぶ教室 対談

ファイヤー原田 ザ・グレート・サスケ

めるのがたいへんなところは正直ありまして。やっぱり、会員さんたちみんなに楽しくやってほしいんですけど、そこでうまくルールを守ってもらうことが重要というか。もちろんそこには人とのつながりでしか得られない感動があるんですけど、はい。

サスケ なるほど。やっぱり原田さんは〝感動〟がキーワードなんですね。あとは常々おっしゃってる〝人との出会い〟ですよね。

原田 はい！ あの、自分なんかは選手としては正直たいして強い選手でもなくて、恥をかく前にホントに引退したほうがいいんじゃないかと思うときもあるんですけど、やっぱり闘うことでしか伝えられないものってあると思うんですね。それはサスケ選手から学ばせていただいたことで、生涯現役とはいかなくても、少しでも闘い続けて、リング上からいろんな人たちに感動を伝えられたらと思ってるんです、はい。

サスケ いやあ、いまの話をお聞きして思いましたけど、原田さんこそリアル版映画『レスラー』ですね！ あの主人公もリングでしか生きられない男ですから。

原田 ああ、そう言っていただいてうれしいです！ 自分もあの映画を観て、もう涙が止まらなくて止まらなくて！（興奮気味に）。

サスケ おお、ご覧になりましたか！ 私もあれは泣きましたよ～。映画館にも3回行きましたから。

原田 あれは闘う人間なら全員観なきゃいけないと思います、はい！

サスケ ホント、そうですよね！ もう、私が許せないのはプロレス業界人で、あれを観てなんとも思わなかったってヤツがいることなんですよ。「いやあ、とくに泣かなかったです」とか「なんとも思いませんでした」とか、平気な顔して言うんですよね。もうね、ホント蹴り殺してやろうかと思って！（身を乗り出して）。

——ダハハハ！ サスケさん、落ち着いてください（笑）。

サスケ選手を追い続けてきてホントによかったです、はい！



ざ・ぐれーと・さすけ■本名・非公表。1969年7月18日、岩手県出身。新日本プロレス学校を経て、90年3月にユニバーサル・プロレスでデビュー。現在はみちのくプロレス会長として、さまざまなリングで活躍中。また、小見川道大にも負けぬ愛猫家としても知られている。180cm、88kg。

ふぁいやー・はらだ■1974年8月14日、埼玉県出身。03年10月19日、J-NETWORKでプロデビュー。08年4月、自身が会長を務めるファイヤー高田馬場ジムをオープン。今年5月にK-1初参戦。「One for all,all for one」をモットーとし、そのまぶしいばかりのファイヤースマイルで人気を博す。170cm、60kg。

今度、ハリウッドデビューするので原田さんも一緒に出演しましょう

原田 いやもう、やっぱり闘って生き様を表現する人であれば、あれを観て感動してほしいですね！

サスケ おっしゃるとおり！ 男なら感動しますよね。で、またあの映画の凄いところはヒロイン役を通して、女性目線からも観れるんですよ。

原田 ああ、なるほど～。いや、なんか、ホントに一度は家族との幸せをつかみかけたのに、でもそこからまたリングに向かうシーンとか、もうホントに切なくもよくわかると言いますか。

サスケ 「わかる、わかるぞ～」の連続ですよね（笑）。あれはファイターだけじゃなく、それこそ日本のビジネスマンなんかも共感できると思うんですよ。いやあ、でもこれだけ話が合うとうれしいなぁ～。……あの、この対談が掲載される号の発売日はいつですか？

——え？ 9月24日ですけど？

サスケ そうですか。じゃあ、言ってもいいかな……。あの、あれなんですよ。じつは今度私、ハリウッドデビューするんですよ。

原田 エエェェ～～～!?

——なんだか凄い話になってきましたね（笑）。またそれはどういった経緯で？

サスケ えーと、以前、『Ｋａｍｉｐｉｒｏ』でアンヴィルと対談させてもらいましたけど、その映画『アンヴィル』を撮ったサーシャ・カバシ監督が、ＵＣＬＡの映画学科かなんかで講師もやってるんですね。で、そこの教え子さんで向こう在住の日本人映画監督志望の方がいて、まぁ実際に何本か映画を撮られてるらしいんですけど、その方から「サスケさんのドキュメントを撮りたい」ということでオファーをいただいて。

原田 そ、それはもうリアル版『レスラー』じゃないですか！ うわぁ、楽しみですね！ いやもう、ホントにはい！（興奮気味に）。

サスケ それでまもなく撮影に入るんですよ。

原田 いやあ、ホント楽しみです！ 絶対に観ます！

サスケ で、ぜひですね、よろしかったら原田さんもその映画に一緒に出てください（ニッコリ）。

——ダハハハ！ 原田さんもハリウッドデビュー（笑）。

原田 ぬぅあおぅうぉ!?（声にならない声で）。ホ、ホントですか!? いやもう、とんでもないです、はい！ いやもう、喜んで！

サスケ ドキュメンタリー映画なんですけど、いつかジムに遊びに行きますんで、私に蹴りを教えてください。

原田 いやいやいや！ でも、もし来ていただけることがあれば、ぜひそれはもう、はい！

——ちなみに撮影はどのくらいの期間なんですか？

サスケ 最低でも1年は追いかけるって言ってたんで、作品になるのはもうちょっと先になると思うんですけど。とにもかくにも、原田さんにはぜひ、重要人物として出演いただいて。

原田 とんでもないです、とんでもないです！ もう観客役でもどんな役でも、はい！（必要以上に恐縮しながら）。

サスケ ぜひ、私に蹴り殺せる蹴りを伝授してもらいたいですね（笑）。

——ダハハハ！ おなじみの「何年選手だと思ってるんだ、蹴り殺すぞ、コラ！」ですね（笑）。

サスケ やっぱりその監督さんも原田さんのことはご存知で、お会いしたいと言ってたんですよ。私は第二の渡辺謙になりますから、原田さんは第二のショー・コスギとして、一緒にハリウッドを目指しましょう（笑）。

原田 いやいやいや、もうとんでもないです！ いや～、こんな思いもよらないことになるなんて、さすがサスケ選手といいますか……いやもう、サスケ選手を追い続けてホントによかったです、はい！

サスケ いえいえ（ニッコリ）。これからもお互い、人に感動を与えられるように頑張りましょう！

原田 はい！ 今日はありがとうございました！ ホントにありがとうございました！

【10年8月30日／都内・某ホテルにて収録】

“プロレスの向こう側”に見えたものとは？



呪いなきプロレス団体が
10.6『マッスルハウス10』で衝撃のフィナーレ!?

緊急特集

なぜマッスル坂井は引退するのか？

ミスター高橋本以降のプロレス界のなかで、カミングアウトになんの恐れも持たず、
さまざまな手法で注目を集めた『マッスル』。その革新的なイベントを率いてきたマッスル坂井が、
なんと唐突に引退を宣言！　その真相について『マッスル』関係者に直撃!!

——いろいろ深読みしてるファンも
かしたら"新しいプロレス"だったん
でやった興行で、金網デスマッチを
にふいに行ったら内鍵がかかってた
とやって、その別事業として新潟で



『マッスル』生みの親が語るマッスル坂井

"新しいプロレス"を作った坂井はやっぱり天才なんだと思います

高木三四郎

［DDTプロレス大社長］

「行こうぜ！　プロレスの向こう側！」をテーマに誕生した『マッスル』。その生みの親こそDDTの大社長であり、マッスル坂井の上司にあたる高木三四郎だ。坂井を温かく、そして厳しく見つめてきた三四郎は坂井の引退をどうとらえているのだろうか？

聞き手／青柳直弥　試合写真／平工幸雄　構成／鈴木佑

——今回、マッスル坂井さんが「家業を継ぐために」引退されるということで、今日はそのへんの事情についてお話を聞かせてください。

高木　わかりました。

——武道館進出を宣言していたにもかかわらず、今回の坂井さんの引退に、けっこう唐突な感じがしてるファンも多いと思うんですけど。

高木　僕らのなかでは唐突な話でもないんですよね。アイツが、いずれは実家の金型工場を継がなきゃいけない"社長の息子"なのはわかってたことだし、基本的に御曹司ですからね。もう坂井財閥ぐらいの勢いですから。

——そんなにスゴいんですか！

高木　金型っていっても、ボールペンの金型とかじゃないですからね。もうちょっと、ちゃんとした……まあ、あんまり詳しいことは機密上言えないっていうぐらいのレベルの……。

——はあ～！　坂井さんのお父さんは、息子がやってることは知ってたんですか？

高木　もちろん。新潟大会とかには（お父さんが）来たりしてたんで。新潟大会では必ず『越乃寒梅』が3本ぐらい差し入れされるんですよ。誰も飲まないのに（苦笑）。いちばん最初の新潟大会は、スゴかったですよ。全員分の弁当と、越乃寒梅3本ぐらいが差し入れされましたから。で、誰かが坂井の家に泊まったんですけど、後日談で、『高木さん、スゴいっすよ。坂井の実家、トイレが5つあります！』って聞いて。

——え～!!　スゴすぎますね。

高木　トイレが5つって、『大御殿じゃん、それ!!』って。僕、いままで3つまではトイレのある家に行ったことがあるんですけど、5つはさすがにないですからね（苦笑）。書いちゃってください、これ。

——書いていいんですか？（笑）。

高木　はい。アイツ、自分では絶対言わないんですよね、そういうの。隠すんです。でも、もう最後だから、全部暴露します。

——アハハハ！　引退の意思は、どういうかたちで知ったんですか？

高木　もうハッキリ覚えてますよ。今年の7月4日にDDTの博多大会があって、その翌日、福岡空港のロビーにある喫茶店で、「じつは引退しようと思ってるんです」って言われたんですよ。「実家の家業がこういう状況で、どうしても自分が戻らないといけないっていうのがあって」と言うんで、「『マッスル』はどうするの？」って聞いたら、「僕もどうすればいいのかわからない」と。

——なるほど。

高木　そこで、「オマエが東京に戻ってきて、その都度、『マッスル』やればいいじゃん」って言ったら、「それも難しい」と。「じゃあ、なくすの？」って聞いたら、「そうなってしまうかもしれないですね」って言うから、「じゃあオマエ、『武道館に向けて』と言ってたのはどうすんだよ？」っていう話をしたんですけど、アイツは黙っちゃって。だから正直、今後、マッスル坂井は引退しますし、新潟の実家で家業の金型工場を継ぐんですけど、『マッスル』というものに関しては、じつはまだクエスチョンというか、いまこの時点で何も決まってないんですよ。

坂井には金型の世界で成功して DDTに金だけ出してほしい(笑)

Sanshiro Takagi

——いろいろ深読みしてるファンもいるんでしょうけど、実際はそれがすべてだ、と。

高木　はい。それで、アイツもずるいっていうか、「みんなには黙っててくれ」って言うんですよ。でも、一区切り的なかたちのものはやらなくちゃいけないだろって話をして、「そうですね。それはやらなくちゃいけないと僕も思ってます」って言ってて。「ほかのみんなにはどうすんの?」って聞いたら、「いずれは伝えなくちゃいけないと思うんですけども、僕もどうしたらいいのか、どう伝えたらいいのかまだわかんないんで、ちょっと考えさせてください」でストップしちゃったんですよ。結局、僕以外の内々の人間が、坂井が辞めることを知ったのも7月後半でしたからね。

——そうだったんですか。いまあらためてお聞きしたいんですが、高木さんから見て、『マッスル』とはなんだったんでしょうか?

高木　そうですねー、間違いなく世界にはない……結局、日本のプロレスも世界中にあるプロレスも基本をひも解くと、やっぱりアメリカにあるプロレスだったりするんですよ。ただ、『マッスル』というものは絶対にアメリカには持っていけないし、たぶん理解されないと思うんですよね。

——されないでしょうね(笑)。

高木　プロレスじゃないんですよ、たぶん。だから、そういう意味では、本当にこれこそが新しいもの、もしかしたら〝新しいプロレス〟だったんでしょうね。

——本当は。

高木　本当は。やっぱり演劇の手法をミックスさせて、アイツなりの持ってるサブカル的な要素だったりなんだったりの、基本オマージュで成り立ってたものだったので。

——では、それを創っていた「マッスル坂井」とはなんだったのでしょうか?

高木　やっぱり天才だと思いますよ。



当初は現場介入していた高木だが、05年の3.20『マッスル3』からは完全に坂井に任せるようになったとのこと。ちなみに高木の『マッスル』登場は07年の5.4『マッスルハウス4』。意外にもその誕生から3年近く経過してからだった。

発想力が豊かなんですよね。自分の観てきたもの、想像したものを具現化するということにおいては、やっぱりスゴい才能を持ってましたね。普通、「これがここに結びつくことないでしょ」みたいなものとかあるんですけど、そこをうまいことやるんですよ。たとえば、『マッスル』の新木場でやった興行で、金網デスマッチを表現するっていって、テレビカメラの前に魚焼くときの網を置いて、金網を表現したりしたとか(笑)。あれなんかは、もう唸らされましたね。

——それは実際、金網に見えたんですか?

高木　金網に見えるんですよ。それとか、DDTの両国の最後の演出なんかもアイツにしかできないですよね。いままで出てきた選手が生で出てきて、エンディング(エンドロール)をやるっていう発想は、僕にはなかったでしょうし。



06年になると、『QJ』や『SPA!』など一般誌でも取り上げられ始めた『マッスル』。07年の1.3後楽園大会では、『笑点』のパロディ『頂点』なる大喜利興行を敢行。その自由すぎる坂井の発想で着実に"プロレスの向こう側"に突き進んでいった。

——やっぱり希有な才能を持っていた方なんですね。そんな坂井さんとの印象深いエピソードとかって、何かありますか?

高木　エピソード……アイツの明るいエピソードがないんだよな〜(苦笑)。なんだろう……事務所に女連れ込んでた話とか。ダメかな〜。

——ぜひ聞かせてください!(笑)。

高木　前の事務所のときに、日曜日にふいに行ったら内鍵がかかってたんですよ。それで誰かいると思ったんで、「誰だ? 誰かいんのかよ?」って言ったら、坂井が「すいません、すいません! ちょっと、ちょっと……30分ぐらい出てきてもらえませんか?」って言うから、「ふざけんなよ、コノヤロー」っつって(笑)。「オマエ、いいから入れろ! 殺すぞコラー。入れろよ!」とか言ってたら、「わかりました! すいません、すいません!」って言って、内鍵がガチャって。

——最中だったんですかね? まさに(笑)。

高木　いやー、それはわかんないですけど、女性がちょこっといらっしゃって。だから、僕も「あ、そういうこと。事務所ではヤるなよ」って言って、そのまま解放しましたけど(笑)。

——でも、女のコもビックリしたでしょうね。ドアの向こうから「殺すぞ、コラー」とか聞こえてきたら。

高木　ビックリしたでしょうね(笑)。それをアイツとの印象深いエピソードにしましょう。

——わかりました。では、最後に、これからのマッスル坂井にメッセージというか、期待することをお聞かせください!

高木　べつにないっすけどね(苦笑)。

——いやいや(笑)。

高木　まあ、金型工場を大きくしろとしか言いようがないですよね。ただ、アイツが後を継いだら、潰しかねないですけどね。基本、経営には絶対に向いてないと思うんで。たとえば、金型工場は番頭さんとかがやって、アイツは数字周りの管理だけキチッとやって、その別事業として新潟でサブカル的なものをやるとか、そういう展開だったら成功する可能性は高いです。でも、金型工場をまんまアイツが経営すると、ホントに金型がどんどんおかしなことになっていくとは思うんで(笑)。経営能力はゼロだし、基本的にはプロデューサーじゃないんですよ。資質的にはアイデアマンなんですよね、完全に。アイデアマンとしては、優秀なのは間違いないですけど。

——じゃあ、もしかしたら、金型の世界でもなんか新しいことを……。

高木　やる可能性は高いです。だから、優れた番頭さんがいれば大丈夫でしょうね。まあ、期待することで言えば、金型の分野でトップは獲ってほしいなとは思いますけどね。

——いい話ですね。

高木　じゃなきゃ、辞めた意味がないし、それがお客さんに対しての、いちばんの恩返しなんじゃないですかね。僕はやっぱりファンありきで見ちゃうから。

——じゃあ、いずれは金型の世界でトップ獲って、DDTにもなんかしらのかたちで還元を……。

高木　(遮って)まあ、金だけ出してくれればいいです。内容はべつに噛まなくていいんで(笑)。

——アハハ(笑)。今日は、ありがとうございました!

【10年8月31日/都内・DDT事務所にて収録】

たかぎ・さんしろう■1970年1月13日、大阪府出身。95年にIWA格闘志塾でデビュー、96年にPWC、フリーを経て97年にDDTの旗揚げに参加。団体内別ブランドとして『マッスル』をはじめ、『ユニオンプロレス』や『新北京プロレス』なども率いる、DDTの舵取り役。ほかにも飲食店経営にも積極的に乗り出す業界屈指のアイデアマン。175センチ、95キロ。



同い年の
"友だち"が語る
マッスル坂井

アタシにとって『マッスル』は このまま未完だと思ってるの

男色ディーノ

［DDTプロレス／日本一のゲイレスラー］

04年の10月に産声をあげた『マッスル』。そのなかでマッスル坂井自身が「『マッスル』が大きくなるために一番必要な人材で、一番の相談相手」と語るのが、ゲイキャラを武器にプロレス界に確固たる地位を築いた男色ディーノだ。この盟友が等身大のマッスル坂井を語る!

聞き手／青柳直弥　試合写真／平工幸雄　構成／鈴木佑

——ディーノさんは、どのタイミングで、坂井さんから引退の意思を聞きましたか?

ディーノ　う〜ん、どうだったかしら。（坂井と）出会ったときから、いずれ家業を継ぐことは聞いてたし、常に「いつ辞めんの?」的な話はしてたんだけど……。

——聞いたときは、「ついに来るべきときが来たか」みたいな?

ディーノ　いや、そんな大げさなもんでもなくて、「あ〜、やっぱそうなんだ」って感じかしら。

——感傷的なものは何も?

ディーノ　ないわね。いまだに、ないし。

——そうですか（苦笑）。ディーノさんと坂井さんといえば、プロレスの会場なんかでも、よく二人で一緒にいるのをお見かけしてたんで、けっこうプライベートでも仲がよかったのかなって思ってたんですけど?

ディーノ　そう思われがちなんだけど、そこまでではないのよね。まあ、同い年だし、お互いの家も近かったんで、レスラーのなかでは一緒にいたほうだとは思うけど。だからといって、アタシ、彼のプライベートは何も知らないのよ。それこそ、家に行ったり来たりも一回たりともないし。

——あ、そうなんですか?

ディーノ　そうよ。アタシ、車があるから、よく迎えに行かされたりすることはあったけど、家に入ったことはないから。まあ、知ってることといえば、彼は一緒にいる女性によって、凄く変わるってことかしら（笑）。

——モロに交際している女性の影響を?

ディーノ　受けるのよ、あの人は。

——意外と乙女なところがあるというか（笑）。じゃあ、けっこういろいろなことを相談されましたか?

ディーノ　相談はあんまりないわね。「こうしようと思うんだ」っていう彼の意見に対して、こっちは聞くだけみたいな。『マッスル』でのアタシたちの関係性もそんな感じだったし。

——と、言いますと?

ディーノ　彼が『マッスル』のなかで「こうやろうと思う」って言ったことに対して、「それはこういうふうに見えると思う」っていうような、ちょっと一歩引いた意見を出す役っていうか。

——たとえば、止めるところは止めるみたいな?

ディーノ　そうね、「それはあまりにも伝わらないんじゃない?」とか、そういうことよね。基本的に『マッスル』に関しては、アタシが何かを変えようとしたことはあまりないの。アタシが気にしてたのはそれが「どう見えるか?」っていうことだけね。

——ぶっちゃけ、ディーノさん個人は、『マッスル』の世界観をどう思われてたんですか?

ディーノ　いや、もう坂井にしかできないんだろうなって。『マッスル』イコール坂井そのものかなという気はするわね。

——個人的に、好きか嫌いかで言ったら、どうなんでしょうか?

ディーノ　どっちでもないのよ。マッスル坂井に対する印象と、ホントにまったく一緒というか。

——好きでも嫌いでもない、と。

ディーノ　そうそう（笑）。

——意外といえば意外ですね。ディ

坂井とは互いに干渉はしないけどスタンスは似てた気がするわね

ーノさんって、けっこう坂井さんの盟友的なイメージがあったんで。

ディーノ　そういう部分もあったかもしれないけど、無理矢理に役割というものがあるとしたら、アタシの場合は一歩だけ引くことかなって。アタシ、坂井の世界観というのは「よくも悪くも」だと思ってたの。だから、それが見世物として成立してないときだけは言うけど、基本的に彼が表現したいものに対して、何か口を出すことはなかったわね。

――その坂井さんが表現するものに対して、坂井さんのことを簡単に言えば「あ、天才だな」とか思うことはありましたか?

ディーノ　アタシはあんまり思わないわね。彼は、度胸があるんだかないんだかわかんないところがあって……。たぶん、対話レベルではあんまり度胸がないんだけど、興行レベルではもの凄く度胸があるのよ。だから、天才とは思わないけど、その発進力と度胸は凄いと思う。結局「どこまでやるか?」って話になっちゃうのよね、『マッスル』に関しては。そういう意味では、『マッスル』は〝許されてた〟のか、〝許されてない〟のか、いまとなってはその答えすらもわからないのよね。

――それはどういう意味でですか?

ディーノ　プロレスという体をとってて許されるのかどうかの部分でいくと、どっちだったんだろうって。答えはわからないんだけど(苦笑)。

――ディーノさんも、わからないままやっていたというか。

ディーノ　でもじつは、そこは坂井と感覚が一緒で、「べつに誰に許されなくてもいいや」っていう部分もあったりはするのよ。だから、お互いに干渉はしないけど、それぞれスタンスの部分では似てるっていうか、カブってるところはあったような気がするわね。

――それこそ、『マッスル』の武道館進出なんてお話もあったワケですけど。

ディーノ　いや、アタシは武道館反対派だったから。

――え、そうなんですか!?

ディーノ　行ける、行けないは別にしてね。これは自分のことで恐縮なんだけど、アタシ、ちっちゃい頃から〝最終回恐怖症〟だったのね。マンガでもアニメでも、最終回を観てしまうと、もうその次はないワケじゃない? その状態が凄いコワかったのよ。

――じゃあ、小さい頃から最終回が近づくと、ディーノさん的にはソワソワしちゃうみたいな?

ディーノ　最終回が近づいてることにも気づいてないんだけど、「次回最終回」っていう予告が、もうコワくて仕方なかった。まあ結局、観るんだけどさ(笑)。で、観終わったあとはそうでもないんだけど、とにかく次で最終回だと思いながらも待つあいだがコワかった。



芸人から小学生までがリングに上がり、『ハッスル』のように完全にエンタメ路線を敷いたイベントまで出現。何が起こってもおかしくはないゼロゼロ年代のプロレス界に、ひょっこり誕生したのが『マッスル』だった。坂井は愉快な仲間たちとともに、その才能を開花させていった。



大仁田厚をはじめ、蝶野正洋に鈴木みのる、高山善廣など名だたる大物レスラーも、その怪しい磁力に引き込まれるように『マッスル』に登場。しかしディーノいわく、『マッスル』後期のこの大物登場路線が、マッスル坂井により産みの苦しみを与えたのではないかとのこと。

――それが『マッスル』にも当てはまった、と?

ディーノ　当てはまった。武道館反対は、たぶん最終回恐怖症ね。

――それって、深層心理では『マッスル』が凄く大好きだったってことじゃないですか?

ディーノ　……どうなのかしらね? ちょっとわかんないけど。だから、アタシ、『週刊少年ジャンプ』の未完システムとかも、じつは嫌いじゃなかったのよ。まだ含みがあるじゃない? 続くかもしれないと思うと。だから、『SLAM DUNK』の終わり方とか凄く好きなのよね。

――なるほど。今後、もし坂井さんが「もう一回、『マッスル』をやりたい」って言いだしたらどう思いますか?

ディーノ　うーん、それに関しては、どうだろう? みんなは気軽に戻ってこいって言うかもしれないけど、アタシはそうは思わないわね。辛らつな言い方だけど、「プロレスを投げ出して金型に戻るんだったら、金型を投げ出してプロレスに戻ってくんなよ」って思っちゃうから。そっちが軌道に乗って、ちゃんと一本筋が立ったんだったらともかくね。

――戻り方にもよるというか。

ディーノ　状況にもよるわよね。でも、アタシ個人は『マッスル』は未完だと思ってるの。

――今後、どうなるかわからない部分も含めて未完っていう感じなんですかね? ニュアンスとしては。

ディーノ　そう思うわ。ちょっとやってみないとわかんないけど。

――マッスル坂井という存在は一言で、ディーノさんにとってはどういう存在でしたか?

ディーノ　それを言うなら、友だちね。大仁田さんが出たときの『マッスル』で、最後に何人かリング上で座らされて、『なんでオマエらはこれやってんだ?』みたいなことを聞かれたことがあったのよ。アタシ、そのとき「なんで一緒にやってんだ?」みたいな質問に対して、「友だちだから」って言ったんだけど、それはホントにいまでもそう思うし。

――そのセリフは脚本とかじゃなく、本心だったワケですか?

ディーノ　そうね。自分のなかでは、それがすべてかなっていう気はしてるわね。いまにして思うと。

――坂井さんから影響を受けたことって、何かあります?

ディーノ　そうね~……一緒にいる機会は多かったけど何かあるかしら? そうだ、アレね、けっこうメシ食ってんのよ(笑)。

――常に(笑)。食べることが好きなんですね。

ディーノ　だから、彼に与えられた影響としては、うまい店を知れたこと?(笑)。あとは、おもしろいマンガを教えてもらったりかしら。

――メシとマンガ(笑)。プロレス的な部分では?

ディーノ　それはまったく!

――アハハハ。最後に、何か坂井さんに言っておきたいこととかありますか?

ディーノ　いや、何もないわよ。

――そんな、何かあるんじゃないですか?(笑)。

ディーノ　そうねぇ~……あ! アレのパーマ代、アタシが一回出したのよ! それを返せって言っておきたいわね。

――最後のメッセージは、「パーマ代を返せ」と(笑)。今日は、ありがとうございました。

【10年9月5日/都内・DDT事務所にて収録】

Danshoku Dieno

だんしょく・でぃーの■1977年5月18日、広島県出身。学生プロレスを経て、02年5月にプロデビュー。DDT以外にもプロレスリングノア、大日本プロレス、新日本プロレスなどにも登場。そのゲイキャラを武器に、プロレス界で異彩を放つ活躍を展開している。現10冠王者でもある。179センチ、105キロ。





いまばやし・ひさや■1972年9月1日、福岡県出身。鴻上尚史に憧れ、氏の出身校である早稲田大学に入学。その後、劇団『双数姉妹』に在籍して俳優として活躍中。2005年5月の『マッスル4』で、総合演出家・鶴見亜門として初登場。

舞台俳優が語るマッスル坂井

『マッスル』の存在が僕の役者生命を救ってくれました

今林久弥

Hisaya Imabayashi

“マッスル総合演出家”鶴見亜門として、2005年の5月から『マッスル』に参加している俳優・今林久弥。その話術で『マッスル』には欠かせない狂言回しであった今林が、マッスル坂井への思いを吐露してくれた。

聞き手／青柳直弥　写真／平工幸雄　構成／鈴木佑

――今林さんは、坂井さんの引退の意思をどういうかたちで知りました？

今林　本人からじゃなく、まずディーノから電話がかかってきたんですよ。今年の7月末かな。「坂井から聞いてますか？　なんか引退して、もう実家に帰るっつってるんですよ。それで、今後『マッスル』をどうしていくかをいま、高木さんとかと事務所で話してるんですけど、これから来れませんか？」と言われたので、「じゃあ、行きます」って。そこで初めて知りましたね。

――高木（三四郎）さんは、7月の頭に本人から聞いたそうですけど、坂井さんから「まだみんなには黙っててほしい」って言われてたみたいですからね。

今林　ええ。結局、僕が事務所に着いたあと、坂井本人も来たんですよ。で、「どうすんの？」みたいな話になって、「最終回ぐらいはやろうよ。どうなの？　やるの？」って聞いても、「いや、僕にもう決める権利はないですから」とか言うんですよ。それ聞いて「なんだよ、それ」って思って。しかも、「やれと言われればやりますし」みたいな感じだし。僕は、「なんだよ、『ゼヒ、最終回やりたいです』って言えよ！」って思ったんですけど。

――そうですよね。今林さんは坂井さんに誘われて『マッスル』に出るようになったワケじゃないですか。やっぱり、辞めるって聞かされたときはショックでしたか？

今林　そこは、そうでもなかったですね。坂井は、社長の息子なワケじゃないですか？　前に僕のバイト先のカフェに坂井と、坂井のお父さんが来たことあるんですけど、そのときにお父さんと話したりもして、やっぱり坂井に後を継いでほしいんだなっていうのは相当伝わってきたんで、いずれは……っていうのは、なんとなくわかってましたし。

――お父さんが来たときは、そういう進路の話をしに来られたんですか？

今林　いや、たぶん、坂井的には「一応、常識を持った先輩もいるんだよ」っていうことを……（笑）。

――証明したかったというか。

今林　僕が早稲田の先輩、っていうこともあったんですかね。そのとき、坂井のお父さんには、「でも、どうなんですかね？　こいつがいまやってることは？」みたいなことを聞かれて、「いやいや、いまやもう業界外からも注目されるカルチャースターなんで、まだまだもうちょっと東京にいてもらわないと」とか言っておいたんですけどね。

――それは、いつぐらいの時期ですか？

今林　レッドカーペット（『マッスルハウス6』／08年5月）のあととかですね。吉本で映画撮ったりもしてた時期ですから、坂井が。

――坂井さんが辞めることになったいま、あらためて、今林さんにとって『マッスル』、そしてマッスル坂井とはなんだったかを振り返っていただけますか？

今林　う～ん……『マッスル』に関していえば、ある時期はホントに僕にとって生き甲斐ぐらいのところがありましたよ。『マッスル』に誘ってもらった時期、僕はちょっと、もう役者をやっていくことに対して「どうしようかな」ぐらいに思ってた時期だったので。

――そうだったんですか。

今林　ええ。でも、『マッスル』をやれたことでモチベーションも上がりましたし、いまのところ、まだ役者を続けようという気になってますから。だから、「マッスル坂井とはなんだったのか？」という質問に関して言えば、僕にとっては恩人ですよね、ホントに。大好きなプロレスに関わらせてくれましたし。実際、関わるようになってからは、凄いムカついたこともいっぱいありますし、ホントにしんどい思いもさせられましたけど（苦笑）。

――坂井さんとの印象的なエピソードって、何かあります？

今林　そうですね。去年の秋ぐらいの坂井は、何かよくわかんないことばっかしゃべってて……。まあ、強いて挙げるなら、アイツが彼女と別れて同棲を解消するために引っ越しするのを手伝ったのが、一番印象深いな～ぐらいですかね（笑）。

――ハハハ！　では、これからのマッスル坂井にメッセージ、または期待することなんかはありますか？

今林　期待すること……金型工場を継ぐっていうけど、できるんですかね？　まあ、NHKの『プロフェッショナル（仕事の流儀）』みたいな番組あるじゃないですか？　いずれ、ああいうのに〝金型界の風雲児〟みたいに出ればいいんじゃないですか。坂井良宏さんが。

――そんな他人行儀な（笑）。ところで、今林さん扮する鶴見亜門は先日、『DDT』のGMに就任したじゃないですか？　ということは、『マッスル』うんぬんは抜きに鶴見亜門は、今後もまだ見られそうですね。

今林　でも坂井は、一緒にスッパリ辞めてほしかったみたいですよ。

（横にいた高木三四郎が思わず口を挟んで）

高木　え、そうなんですか!?（笑）。

今林　そうですよ。グチグチ嫌み言われますよ、会うたびに（苦笑）。

高木　凄い身勝手だな～、アイツ。

――身勝手といえば、身勝手ですよね。自分で引き入れたのに（笑）。

今林　いや、「そのほうがカッコイイですよ」みたいな感じっぽいですよ。

高木　気持ち悪い（笑）。そういうの持ってたんだな～。まあ、殉職的な感覚なんですかね、やっぱり。死なばもろともというか。

今林　まあ、鶴見亜門って坂井が創ったもんですからね。自分がいないところで、なんかやってるのは……。

――そういう気持ちもあるんですかね。今後はDDTの新GM、鶴見亜門氏の活躍にも期待してます！

【10年8月31日／都内・DDT事務所にて収録】



今林は05年8月の『マッスル5』では、当時の某老舗団体社長をネタにしたサイモン鶴見というキャラで登場。ツルティモ校長の娘御子としてDDTの新社長に就任をはたした。



ふじおか・のりかず■1978年12月29日、愛知県出身。04年にDDTテック入社。05年3月の『マッスル3』で、地底王国の王子という奇想天外な役回りで『マッスル』に初登場。今年2月に実家に戻るためDDTテックを退社するも、その後も『マッスル』には登場。

愛弟子が語るマッスル坂井

僕にとって『マッスル』は「遅れてきた青春」でした

藤岡典一

『マッスル』の世界ではその細身の身体を張って、独特の存在感を示してきた“藤岡メガネ”こと藤岡典一。実世界では坂井が代表を務めるDDTテックの社員であった藤岡は、この“上司”をどのように見つめていたのか？

聞き手／鈴木佑

Norikazu Fujioka

―藤岡さんにとってマッスル坂井さんは、直属の上司だったんですよね？

藤岡　そうですね。

―坂井さんの引退はどういうかたちで聞いたんですか？

藤岡　えっとですね、自分は今年の5月に実家に戻るためにDDTテック（DDT関連の映像を手がけている制作会社）を辞めたんですけど、7月のDDT両国大会に行くことは決めてたんですね。で、その少し前に電話で「10月中に何かしらやって引退する」っていうのは聞いてたんですよ。本人から。

―そのときの率直なお気持ちは？

藤岡　やっぱりビックリしましたし、ホントに残念というか、もったいないなっていう……。離れてしまった自分が言えるかわからないですけど（苦笑）。

―そもそも藤岡さんがDDTテックに関わるようになったキッカケは坂井さんなんですか？

藤岡　そうですね。そもそもマッスル坂井は大学のサークル（シネマ研究会）の一つ先輩なんです。で、高木（三四郎）さんと一緒に坂井さんがDDTの番組を作ってて、最初、僕はそれをそばで見てるだけだったんですけど、ときどき撮影クルーやら何やらの人手がいるからってことで手伝いに行ってたんですよ。それがいつのまにか、坂井良宏がプロレスラーになることになって、そこから撮影は僕が担当するみたいなかたちになって。

―なるほど。坂井さんとは、学生時代から気が合う感じだったんですか？

藤岡　気は……どうなんでしょうね（苦笑）。僕は、一方的に教えてもらう立場で。最初は怖い先輩かなと思ったんですけど、わりと面倒見がよかったんですよね、ごはんをおごってくれたりとか。まあ、10年間ぐらいずっとおごられっぱなしなんですけど。

―へぇ〜。なんかそばから見てると、普段の坂井さんはノラリクラリとしてるイメージがあるんですよね。

藤岡　まぁ、大学の頃から言ってることが本当かどうかよくわかんなかった部分はありましたね（笑）。

―アハハハ。でも、たまに坂井さんが「なんでやってほしいことができないんだろう、藤岡は」みたいなことをコラムで書いてたので、厳しい面もあるっていうのが意外だったんですよ。

藤岡　まあ実際、僕ができてなかったんですけど（笑）。

―藤岡さんは、『マッスル』にはいつから出られてるんでしたっけ？

藤岡　05年ですね。坂井さんから「出てくれ」って言われて上がるようになった感じです。

―『マッスル』に上がることに関してご自身的にはどうだったんですか？

藤岡　もともと、引っ込み思案ですし、基本的にはノリノリではなかったんですけど、そうですね……マッスル坂井プロデュース力のなせる業というか。

―『マッスル』での藤岡さんは、いろいろなことをやってましたよね。最近ではヨシヒコとやったり、李日韓さんとバチバチやったりとか（笑）。

藤岡　頭から落ちたり、口の中切ったりと（笑）。まあ、いまにして思えばこういう言葉はクサいかもしれないですけど、僕にとっての『マッスル』は「遅れて来た青春」ですかね。大学入るまでは、わりと勉強ばっかしてたので。

―じゃあ、ある意味でかけがえのない時間だったという感じですか？

藤岡　そうですね。なんか修行の場みたいなところもあったし、仕事の面でもいろんなことを学ばせてもらいましたね。一つのことをみんなで作ることの楽しさとか。

―では、いまあらためてマッスル坂井という存在は、藤岡さんにとってなんだったんでしょうか？

藤岡　う〜ん……先輩であって、師匠であって、上司であるみたいな方ですけど。基本的には、すべての面で尊敬してます。なんなんですかね？

―いやいや、僕に聞かれましても（苦笑）。坂井さんに、反抗したこととかないんですか？

藤岡　一度だけ、殴られたときに「ちょっとこれはついていけない」って思ったことはありましたね。たしか『ハッスル』の会見で芝の倉庫だったかな？　これは見てた人もいるんで話していいと思うんですけど、坂井さんに殴られて、血がポタポタ口から流れちゃって。

―うわ〜、それは藤岡さんのミスが原因で？

藤岡　そうですね、僕がちょっと気を使わない撮影をしてしまって。ただ、「口で言ってもらえればいいのに」っていうのがあったんでちょっと言いましたけど。

―昭和の新日みたいな光景があったんですね（笑）。

藤岡　体育会系ですよね。僕が言って説得力があるかわからないですけど。坂井さん自体、もともとは剣道をずっとやってて、たしかインターハイにも出てるのかな。

―文科系プロレスだったにもかかわらず、体育会系なところもあった、と。

藤岡　そうですね。いろいろありましたけど、自分が辞めるときに、坂井さんから「オマエと一緒にやってきたのは間違ってなかった」みたいなことを言ってもらえたのは、凄く印象に残ってますね。ちょっと離れてるから、いい思い出になってるだけかもしれないですけど（笑）。

【10年9月7日／電話取材にて収録】



今年5月の『マッスルハウス9』で藤岡はヨシヒコと対戦。巷で話題のリング・ケージ論争を持ち出し、「リングもケージも輸入したモノ」と一刀両断、「日本には網戸がある!」と網戸マッチを敢行した。実験的すぎるにもほどがある!

「古舘さん、ちょっと待ってください!」な読者プレゼント

kamipro PRESENTS

応募要項

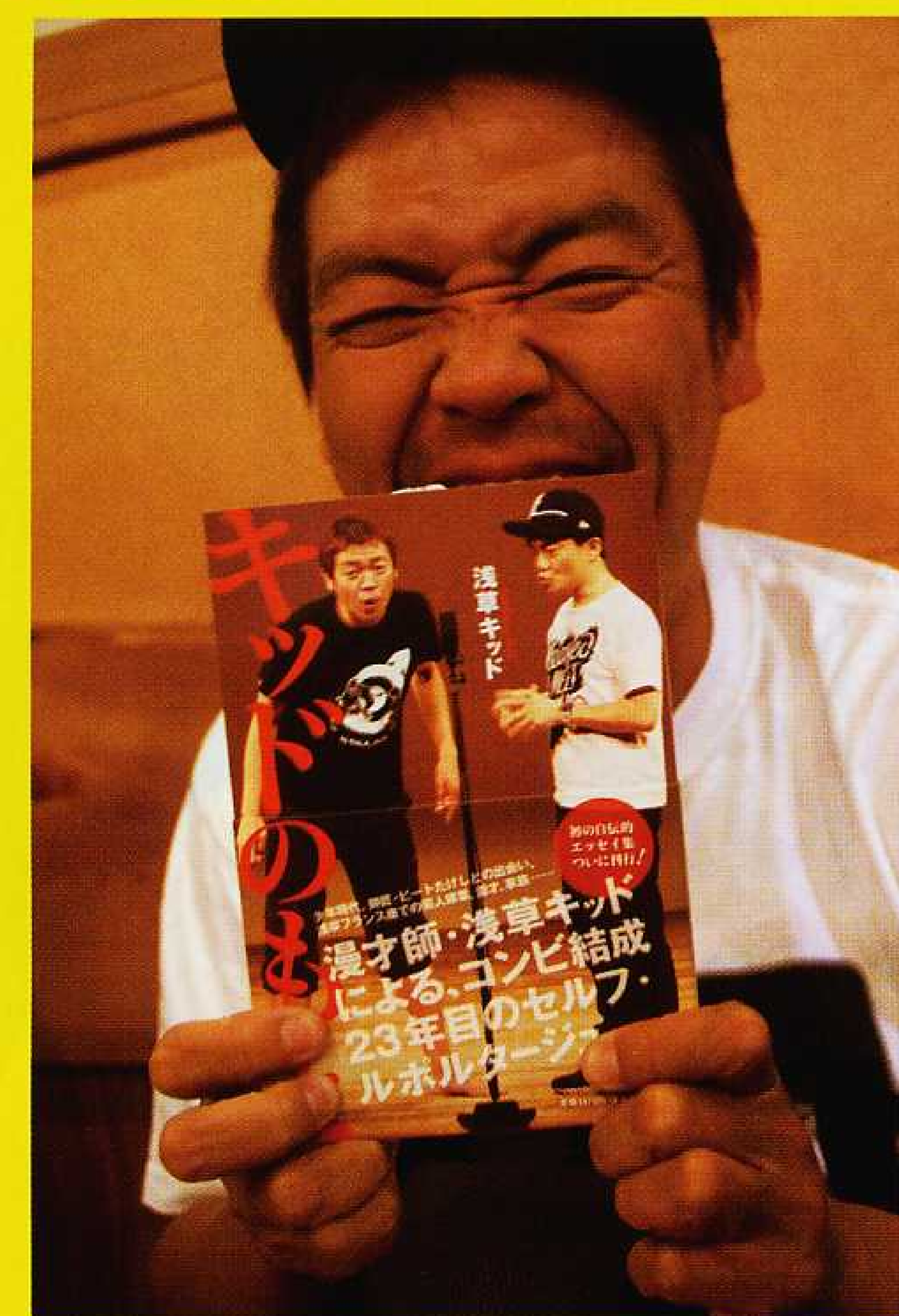
ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記のうえ、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定いたします。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますのでご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は2010年10月27日(水)頃発送予定です)。

【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦あなたが好きな「アントン名勝負」といえば?⑧あなたがkamiproに望むことは?

【宛先】〒162-0805 東京都新宿区矢来町41-1 ザ・フタガミハウスNo.1
(株)ツー・スリー内『kamipro』編集部 「夜のお供からリングのお供へ」係まで

※応募締切は2010年10月13日(水)当日消印有効

PRESENT 01 SPECIAL PRESENT 1名様



単行本『キッドのもと』

[学研パブリッシング/¥1470(税込)]

変態座談会でおなじみの玉ちゃんと水道橋博士の浅草キッドが、セルフ・ルポルタージュを刊行! 少年時代、師匠との出会い、芸人修業、……コンビ結成23年にわたる道程を振り返る! 約7年ぶりの共著にして初めての自伝的エッセイ集に刮目せよ!

キッドリターン■http://www.asakusakid.com/

PRESENT 02 1名様



白覆面

今回、闘道館が提供してくれたのは、アントン特集にふさわしくあの白覆面! もちろん被るときには柔道着を着用するのが正装です!

闘道館■http://www.toudoukan.com/

PRESENT 03 1名様



単行本『元・新日本プロレス「人生のリング」を追って』

[宝島社/¥1,500(税込)]

GK金沢氏が、かつて新日本プロレスに所属した男たち、大谷晋二郎、越中詩郎、小原道由、栗栖正伸、片山明、大矢剛功の生き様を描く!

宝島社■http://tkj.jp/

PRESENT 04 1名様



佐藤豪志 Tシャツ

[NO NEED NEW/¥3,675(税込)]

プロレス、格闘技の両方で活躍中の佐藤豪志とNNNのコラボT。胸にプリントされた「going my way」のロゴが渋い! サイズはM。

NO NEED NEW■http://www.no-need-new.com/index2.html

PRESENT 05 1名様



高橋藍直筆サイン入りパンフレット

[非売品]

今号で、ある意味先月のRENAを超えるコスプレ姿を見せてくれた高橋。世界2位に輝いた『Girl's S-cup』のパンフをサイン入りで。

シュートボクシングオフィシャルサイト■http://www.shootboxing.org/

PRESENT 06 1名様



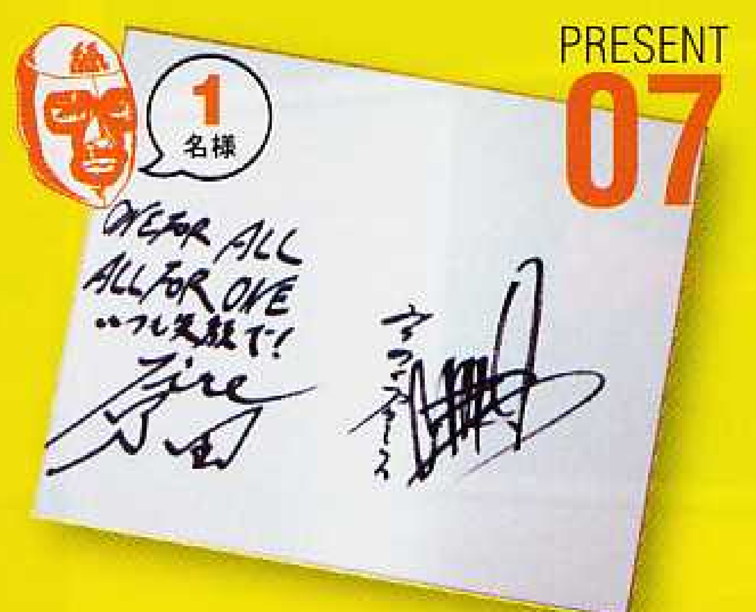
RENA直筆サイン入りパンフレット

[非売品]

2年続けて『Girl's S-cup』王者、そして2号続けて表紙となった、最強ツヨカワファイター、RENAのサイン入りパンフ!

RENAオフィシャルブログ■http://plus-u.jp/blog/sbreina/

PRESENT 07 1名様



ザ・グレート・サスケ&ファイヤー原田直筆サイン色紙

[非売品]

サスケ&原田のファイヤーでグレートなサイン色紙! もし二人のハリウッド進出が本当に実現したら、プレミア化は間違いなし!

ザ・グレート・サスケオフィシャルブログ■http://ameblo.jp/thegreatsasuke/

PRESENT 08 1名様



DVD『鳥居智男 インテリジェンス柔道 上巻 柔道上達のコツ』

[クエスト/¥5,880(税込)]

講道館杯日本体重別選手権を8度にわたり制し、いまなお世界の頂点を目指して闘い続ける柔道家、鳥居智男が柔道上達のコツを伝授!

PRESENT 09 1名様

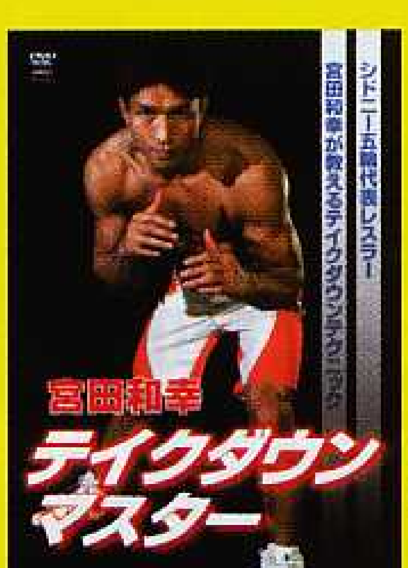


DVD『UNIBOS(ウニボス) ロシヤ マルチ戦闘システム3 自己防衛と攻撃Vol.1』

[クエスト/¥5,040(税込)]

旧ソ連邦の秘密警察として恐れられたKGBに伝わる実戦格闘術が初公開! 格闘技と武術を融合させたロシア独特の戦闘術を学べ!

PRESENT 10 1名様



DVD『宮田和幸 テイクダウンマスター』

[クエスト/¥5,880(税込)]

オリンピック日本代表選手として世界の強豪と闘った宮田和幸。彼が最も自信を持つテイクダウンの技術をあますところなく公開!

PRESENT 11 1名様



DVD『初代タイガーマスク 平成猛虎伝説』

[クエスト/¥10,500(税込)]

1980年代、タイガーマスクブームを巻き起こした初代タイガー、佐山サトルが、平成のリング、リアルジャパンプロレスでよみがえる!

クエスト■http://www.queststation.com/

kamipro151 応募券 ゆずポン

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

こちらでも毎週プレゼント実施中!! http://kamipro.com/

kamipro 紙のプロレス

No.151
2010年10月8日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一
青柳昌行

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
堀江ガンツ
松下ミワ
スズキィ
八木賢太郎（"旗揚げ大会"観戦のため非番）

終身名誉バイザー
吉田 豪

見つ人
ジャイ子

編集次長（グリーンバーディー）
松林 貴

デザインGM
出田 一（TwoThree）

デザイン隊長
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
鎌田やっちゃん
白木みのる（以上、TwoThree）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
吉場正和
山口比佐夫
戸成嘉則
タイコウクニヨシ
梅木麗子
金山フヒト
丸山剛史

会えませんでした
入江おしなりくん（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

業務部
樽本"クロコGA"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

編集チアガール
金川"ナツコ"奈津子
安部"クリン"悠子

タイムシェアマダム
廣橋久美子

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431
東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

発売元
株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177
東京都千代田区富士見2-13-3

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

■広告掲載のお問い合わせは下記まで
株式会社エンターブレイン
スポーツ企画編集部 ☎03-3265-7166

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00～17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL: http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。



NEXT ISSUE

9.25 DREAM.16 &『UFC119』、
10.2 & 3 K-1 2連戦徹底速報!

kamipro Special 2010 NOVEMBERは10月8日（金）発売予定!

特集テーマはズバリ未定なんですよ、ホントに。

No.152は10月23日（土）発売予定!

※地域によっては発売が多少遅れることもあるんだぜ。

kamipro 2010 151

19歳が格闘技界のセンターを奪取!! マット界総選挙2010! RENA☆大当選!!

2010年10月8日
発行人／浜村弘一　編集人／斉藤慎一、青柳昌行
発行所／株式会社エンターブレイン　〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
発売元／株式会社角川グループパブリッシング　〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3

enterbrain



特別定価：本体895円＋税

雑誌61972-15 Ⓗ2011.01

Printed in Japan 図書印刷株式会社

ISBN978-4-04-726784-8
C9476 ¥895E